

# 原田遺跡(4)

## 第1分冊

—旧石器時代の調査—

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12

2008年3月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会

# 原 田 遺 跡 (4)

## 第 1 分 冊

—旧石器時代の調査—

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12

2008年3月

国土交通省中国地方整備局  
島根県教育委員会



上空から見た原田遺跡



5層SK57完掘状況

## 序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画3点セットの一翼を担う事業として、斐伊川の上流において尾原ダムの建設事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意すべく、必要な調査の実施、記録保存に努めるものとし、島根県教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、平成11年度から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成14年度から着手した「原田遺跡」の平成16～19年度の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

国土交通省 中国地方整備局

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所

所長 八尋 裕

## 序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しております。本書は、このうち平成16～19年度に発掘調査を実施しました仁多郡奥出雲町佐白の原田遺跡の調査成果をまとめたものです。

尾原ダムが建設される斐伊川は中国山地に源を発し日本海に向け北流することから、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を担っていました。流域には、埋蔵文化財を含む数多くの文化遺産が残されています。

本書に掲載した原田遺跡では、旧石器時代から室町時代に至る数多くの遺構や遺物などから人々の営みの痕跡を明らかにすることができました。

中でも、平成17年度に発見された旧石器時代の石器や礫群は、これまでほとんど知られていなかった島根県での最初の人類の活動を明らかにする貴重な発見となりました。

また、翌18年度には、約2万年前の墓の可能性が指摘される土坑も発見され、人々的な報道とともに、全国的な注目を浴びました。

これらの調査成果は、この地域の歴史を解明していくうえで貴重な資料となるものと考えられます。本書が地域の歴史と文化に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成につきまして、地元の皆様をはじめ国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、奥出雲町教育委員会など関係の皆様より御指導、御協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

平成20年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原義光

## 例　　言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、島根県教育委員会が平成16～19年度に発掘調査を実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県仁多郡奥出雲町佐白948, 949, 950番地	原田遺跡
3 区	4,500m <sup>2</sup>
4 区	4,700m <sup>2</sup>
8 区	3,500m <sup>2</sup>
9 区	1,000m <sup>2</sup>
旧石器時代調査区 7,500m <sup>2</sup>	

3. 掘開中の北は測量法による平面直角第Ⅲ座標系X軸方向を指し、座標系XY座標は日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。

4. 第4図は、国土地理院発行の1/25,000図「湯村」を使用した。また、第2図、第3図、第130図は国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所が作成した1/1,000図を使用した。

5. 航空写真は株式会社ワールドが撮影した。

自然科学分析は下記に依頼及び委託し、その結果については第13章に掲載した。

- 年代測定(ルミネッセンス法)：下岡順直、長友恒人、小畠直也
  - テフラ分析(SI等)：早田 勉
  - 赤色顔料：柴崎晶子
  - テフラ分析等：古環境研究所
  - 花粉分析、プラントオバール、年代測定、SK57分析：文化財調査コンサルタント㈱
  - 年代測定(炭素年代)：燃加速器分析研究所
  - 石材产地分析：燃遺物材料研究所
6. 本書に掲載した実測図は、担当調査員、調査補助員がを行い、写真は伊藤、久保田、稻田が撮影した。
7. 本書の編集は伊藤が行い、執筆については目次に担当者を明示した。
8. 本書に掲載した遺跡の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地)で保管している。

## 凡　　例

- 遺構の略号は、下記のとおりである。

SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 SX：不明遺構

ただし、本報告書で使用する遺構略号や遺構番号は、現地調査時の名称を使用しているものが多いため、報告書作成の段階で欠番となったり、略号とは性格の異なる遺構も存在する。

- 遺物実測図のうち、石器・石製品には断面に斜線を入れた。

- 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。

- 遺物観察表の色調は「標準土色帖」を参考にした。

- 遺物観察表の括弧内の数字は以下のとおりである。

土器観察表の( )内数字は復元値である。

金属器観察表の( )内数字は残存長である。

- 本報告書で用いた土器や石器の分類および編年觀は基本的に下記の各論文、報告書を参考にした。

- (1) 縄文上器

柳浦俊一2000「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」「鳥根考古学会誌」第17集

柳浦俊一2001「山陰地方における縄文前期上器の地域編年」「鳥根考古学会誌」第18集

柳浦俊一2001「隠岐郡西郷町宮尾遺跡出土の前期縄文土器について－山陰地方中部の北白川下層式を中心に－」「鳥根考古学会誌」第18集

柳浦俊一2003「山陰地方中部域における縄文時代後期土器の地域性－とくに「中津式」の小小地域性について－」「立命館大学考古学論集」Ⅲ-1

山崎真治2003「縄帯文上器の編年的研究」「東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室研究紀要」18号

千葉 豊1989「縄帯文系上器群の成立と展開」「史林」72-6

千葉 豊2001「沖丈遺跡出土縄文後期土器の編年的意義」「沖丈遺跡」鳥根県邑智町教育委員会

千葉 豊2005「西日本縄文後期土器編年研究の現状と課題」「縄文時代」16号

濱田彦彦2005「山陰地方における縄文時代晚期上器について」「第16回中四国縄文研究会  
縄文時代晚期の山陰地方」

久保田一郎他2007「林原遺跡」鳥根県教育委員会

- (2) 弥生土器

松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」木耳社

- (3) 士師器、須恵器

大谷晃司1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根考古学会誌」第11集

- (4) 壺器系陶器、貿易陶磁、中世土器

広江耕史1992「鳥根県における中世土器について」「松江考古」第8号 松江考古談話会

山陰考古学研究集会1998「山陰における中世前半の貿易陶磁」「第26回山陰考古学研究集会」

国立歴史民俗博物館1993「日本出土の貿易陶磁」

- (5) 石器

加藤晋平・鶴丸俊明1994「図録・石器人門事典」〈先土器〉柏書房

旧石器文化談話会編2000「旧石器考古学辞典」学生社

# 本文目次

## 第1分冊

第1章 調査に至る経緯と調査経過(石橋) .....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査体制.....	2
第3節 既往の調査概要と調査経過.....	4
第4節 普及啓発.....	5
第2章 遺跡の位置と環境(石橋) .....	9
第3章 調査と整理の概要(伊藤) .....	14
第1節 調査の範囲と方法.....	14
第2節 基本層序.....	15
第3節 遺構の認定と観察.....	17
第4節 石器の分類と綴録.....	25
第4章 旧石器(2～4層)の調査(伊藤) .....	27
第1節 層位.....	27
第2節 地形.....	27
第3節 器種組成.....	27
第4節 遺構と遺物.....	29
第5章 旧石器(5層)の調査(伊藤) .....	64
第1節 層位.....	64
第2節 地形.....	64
第3節 器種組成.....	64
第4節 遺構と遺物.....	66
第6章 旧石器(7層)の調査(伊藤) .....	121
第1節 層位.....	121
第2節 地形.....	121
第3節 器種組成.....	121
第4節 遺構と遺物.....	124
第7章 まとめ(伊藤) .....	164
第1節 自然科学的分析の総括.....	164
第2節 2～4層のまとめ.....	166

第3節	5層のまとめ	169
第4節	7層のまとめ	175
	引用・参考文献	179

## 第2分冊

第8章	3区の調査(伊藤・久保田)	1
第1節	調査の概要	1
第2節	層序	1
第3節	1・2層の遺構と遺物	1
第4節	3層の遺構と遺物	11
第5節	4層の遺構と遺物	14
第6節	5・6層の遺構と遺物	31
第9章	4区の調査(伊藤・久保山)	37
第1節	調査の概要	37
第2節	層序	37
第3節	1・2層の遺構と遺物	38
第4節	3層の遺構と遺物	59
第5節	5～10層の遺構と遺物	67
第10章	8区の調査(伊藤・久保田)	69
第1節	調査の概要	69
第2節	層序	72
第3節	0層の遺構と遺物	75
第4節	1層の遺構と遺物	79
第11章	9区の調査(伊藤・久保田)	88
第1節	調査の概要	88
第2節	遺構と遺物	88
第12章	2区鍛冶関連遺構の調査(宮澤)	97
第1節	調査の概要	97
第2節	遺構と遺物	97
第3節	製鉄関連遺物観察表	118
第4節	原山遺跡(Ⅱ区)出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 (九州テクノリサーチ・TACセンター)	124
第5節	総括	149

第13章 原田遺跡各調査区出土の金属器(補遺)(伊藤) .....	153
第1節 2・5・6区の鉄製品.....	153
第2節 1区(原田古墳)の鉄製品.....	153
 第14章 自然科学的分析 .....	155
第1節 ルミネッセンス法を用いた原田遺跡堆積物の年代測定(下岡・長友・小畑).....	155
第2節 島根県奥出雲町原田遺跡で検出されたテフラと指標テフラとの同定の試み(早川) .....	162
第3節 原山遺跡ならびに北原本郷遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料について(柴崎) .....	170
第4節 原山遺跡の上層とテフラ(㈱古環境研究所).....	173
第5節 原山遺跡における植物珪酸体分析(㈱古環境研究所).....	180
第6節 原山遺跡7区調査における自然科学分析(渡辺).....	184
第7節 原山遺跡8区十坑(SK57)の自然科学的検討(渡辺) .....	192
第8節 放射性炭素年代測定結果報告書(AMS測定) -原田遺跡・北原本郷遺跡・林原遺跡・家の後II遺跡- (㈱加速器分析研究所).....	203
第9節 尾原ダム関連遺跡出土の黒曜石、安山岩製造物の原材料产地分析と水和層測定 ((有)遺物材料研究所).....	213
第10節 尾原ダム関連遺跡出土碧玉製造物の原材料产地分析((有)遺物材料研究所).....	231
 第15章 まとめ -縄文時代以降の原田遺跡- .....	245
第1節 各調査区のまとめ(伊藤).....	245
第2節 原田遺跡の縄文時代(福山).....	246

# 挿 図 目 次

第1回 原田遺跡の位置	1
第2回 原田遺跡発掘調査対象地(S=1/3,000)	7
第3回 原田遺跡トレンチ及び調査区配置図(S=1/2,000)	
	8
第4回 原田遺跡と周辺の遺跡(S=1/30,000)	10
第5回 山石器複合トレンチ(1)(S=1/1,000)	15
第6回 旧石器複合トレンチ(2)(S=1/1,000)	16
第7回 土層配置図(1=1/1,000)・16ライントレンチ	
(S=1/100)	18
第8回 Nライントレンチ図(S=1/100)	19
第9回 12-14・15ライントレンチ(S=1/100)	20
第10回 10ライントレンチ断面図(S=1/80)	21
第11回 北壁及びT15付近土層断面図 (S=1/120, S=1/80)	22
第12回 Pライントレンチ断面図(1)(S=1/80)	23
第13回 Tライントレンチ図(S=1/80)	24
第14回 原田遺跡での石器複合分類図(山石器時代)	26
第15回 2~4層遺物出土状況図(S=1/800)	30
第16回 2~4層複合層位置図(S=1/300)	31
第17回 2~4層複合層接合関係図(S=1/100)	32
第18回 2~4層複合層37~39実測図(S=1/20)	34
第19回 2~4層複合層53~56実測図(S=1/20)	35
第20回 2~4層複合層57~59実測図(S=1/20)	36
第21回 2~4層石器ブロック位置図(S=1/700)	37
第22回 2~4層石器ブロック49~51出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	38
第23回 2~4層出土石器実測図(1)(S=2/3)	39
第24回 2~4層石器ブロック53~56出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	41
第25回 2~4層出土石器実測図(2)(S=2/3)	42
第26回 2~4層出土石器実測図(3)(S=2/3)	44
第27回 2~4層出土石器実測図(4)(S=2/3)	45
第28回 2~4層出土石器実測図(5)(S=2/3)	46
第29回 2~4層石器ブロック52~57~60出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	47
第30回 2~4層出土石器実測図(6)(S=2/3)	48
第31回 2~4層出土石器実測図(7)(S=2/3)	49
第32回 2~4層出土石器実測図(8)(S=2/3)	50
第33回 2~4層石器ブロック53~56出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	52
第34回 2~4層出土石器実測図(9)(S=2/3)	53
第35回 2~4層出土石器実測図(10)(S=2/3)	54
第36回 2~4層出土石器実測図(11)(S=2/3)	55
第37回 2~4層石器ブロック66~68出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	56
第38回 2~4層出土石器実測図(12)(S=2/3)	57
第39回 2~4層出土石器接合関係図(S=1/300)	59
第40回 2~4層出土石器実測図(13)(S=2/3)	60
第41回 2~4層出土石器実測図(14)(S=2/3)	61
第42回 2~4層出土石器実測図(15)(S=2/3)	62
第43回 2~4層出土石器実測図(16)(S=2/3)	63
第44回 5層遺物出土状況図(S=1/800)	67
第45回 5層SK7米測定図(S=1/30)	68
第46回 5層SK57出土石器実測図(S=2/3)	68
第47回 5層複合位置図・接合関係図(S=1/500)	70
第48回 5層複合1~5実測図(S=1/20)	73
第49回 5層複合群8実測図(S=1/20)	74
第50回 5層複合9~11実測図(S=1/20)	76
第51回 5層複合12~17米測定図(S=1/20)	77
第52回 5層複合18~23米測定図(S=1/20)	78
第53回 5層複合24(1)実測図(S=1/20)	80
第54回 5層複合24(2)・25実測図(S=1/20)	81
第55回 5層複合26~29・31~35実測図(S=1/20)	83
第56回 5層複合30~32実測図(S=1/20)	84
第57回 5層複合33~34実測図(S=1/20)	85
第58回 5層複合36~40実測図(S=1/20)	86
第59回 5層複合41~42実測図(S=1/20)	87
第60回 5層複合43実測図(S=1/20)	89
第61回 5層複合44~45~47~50実測図(S=1/20)	90
第62回 5層複合46~48・51米測定図(S=1/20)	91
第63回 5層複合49~52実測図(S=1/20)	92
第64回 5層石器ブロック位置図(S=1/700)	93
第65回 5層石器ブロック26~29出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	94
第66回 5層出土石器実測図(1)(S=2/3)	95
第67回 5層出土石器実測図(2)(S=2/3)	97
第68回 5層石器ブロック30~34~38出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	98
第69回 5層出土石器実測図(3)(S=2/3)	100
第70回 5層出土石器実測図(4)(S=2/3)	101
第71回 5層石器ブロック35~37出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	103
第72回 5層出土石器実測図(5)(S=2/3)	105
第73回 5層石器ブロック39~41出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	106
第74回 5層出土石器実測図(6)(S=2/3)	107
第75回 5層石器ブロック42~47出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	109
第76回 5層出土石器実測図(7)(S=2/3)	110
第77回 5層出土石器実測図(8)(S=2/3)	111
第78回 5層出土石器実測図(9)(S=2/3)	112
第79回 5層石器ブロック48~52出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	113
第80回 5層出土石器実測図(10)(S=2/3)	114
第81回 5層出土石器接合関係図(S=1/400)	116
第82回 5層出土石器実測図(11)(S=2/3)	117
第83回 5層出土石器実測図(12)(S=2/3)	118
第84回 5層出土石器実測図(13)(S=2/3)	118
第85回 5層出土石器実測図(14)(S=2/3)	119
第86回 5層出土石器実測図(15)(S=2/3)	120
第87回 7層遺物出土状況図(S=1/800)	124
第88回 7層複合位置図(S=1/500)	125
第89回 7層複合6米測定図(S=1/20)	126
第90回 7層石器ブロック位置図(S=1/700)	128
第91回 7層石器ブロック1出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	128
第92回 7層石器ブロック2~5出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	129
第93回 7層出土石器実測図(1)(S=2/3)	130
第94回 7層出土石器実測図(2)(S=2/3)	131
第95回 7層出土石器実測図(3)(S=2/3)	132
第96回 7層石器ブロック6~10出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)	134
第97回 7層出土石器実測図(4)(S=2/3)	135
第98回 7層出土石器実測図(5)(S=2/3)	136
第99回 7層出土石器実測図(6)(S=2/3)	137

第100図	7層出土石器実測図(7) (S=2/3) .....	138
第101図	7層石器ブロック11~14出土石器平面・垂直分布 図(S=1/100) .....	139
第102図	7層出土石器実測図(8) (S=2/3) .....	140
第103図	7層出土石器実測図(9) (S=2/3) .....	141
第104図	7層出土石器実測図(10) (S=2/3) .....	142
第105図	7層石器ブロック15~23出土石器平面分布図 (S=1/100) .....	143
第106図	7層石器ブロック15~23出土石器平面分布図 (S=1/100) .....	144
第107図	7層石器ブロック15~23出土遺物分布図 24~25出土石器平面・垂直分布図(S=1/100) .....	145
第108図	7層出土石器実測図(11) (S=2/3) .....	146
第109図	7層出土石器実測図(12) (S=2/3) .....	148
第110図	7層出土石器実測図(13) (S=2/3) .....	149
第111図	7層出土石器実測図(14) (S=2/3) .....	150
第112図	7層出土石器実測図(15) (S=2/3) .....	151
第113図	7層出土石器実測図(16) (S=2/3) .....	152
第114図	7層出土石器実測図(17) (S=2/3) .....	154
第115図	7層出土石器実測図(18) (S=2/3) .....	155
第116図	7層出土石器実測図(19) (S=2/3) .....	156
第117図	7層出土石器接合関係図(S=1/400) .....	157
第118図	7層出土石器実測図(20) (S=2/3) .....	158
第119図	7層出土石器実測図(21) (S=2/3) .....	159
第120図	7層出土石器実測図(22) (S=2/3) .....	160
第121図	7層出土石器実測図(23) (S=2/3) .....	161
第122図	7層出土石器実測図(24) (S=2/3) .....	162
第123図	2~4層接合関係図・石材組成図 .....	168
第124図	2~4層接合関係図(S=1/300) .....	168
第125図	5層器種組成図・石材組成図 .....	170
第126図	5層接合関係図(S=1/500) .....	170
第127図	5層SK57出土石器及び7層出土石器位置図 (S=1/100) .....	172
第128図	7層器種組成図・石材組成図 .....	176
第129図	原田遺跡出土石器編年表 .....	178

## 表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧表 .....	11
表2	2~4層石器ブロック器種組成表 .....	28
表3	2~4層石器ブロック石材組成表 .....	28
表4	2~4層出土石器器種・石材組成表 .....	28
表5	2~4層縄群一覧表 .....	31
表6	5層石器ブロック器種組成表 .....	65
表7	5層石器ブロック石材組成表 .....	65
表8	5層出土石器器種・石材組成表 .....	66
表9	5層縄群一覧表 .....	71
表10	7層石器ブロック器種組成表 .....	122
表11	7層石器ブロック石材組成表 .....	122
表12	7層出土石器器種・石材組成表 .....	123
表13	7層縄群一覧表 .....	126
表14	旧石器觀察表 .....	182

## 写真図版目次

- 図版 1 上空から見た原田遺跡  
図版 2 5層SK57完掘状況  
図版 3 7層環状ブロック(北西から)  
図版 4 2~4層出土石器  
5層出土石器  
7層出土石器  
図版 5 7区5号後出縄群・石器ブロック(北東から)  
原川遺跡石器時代の基本十層  
図版 6 7区5号後出縄群・石器ブロック(北西から)  
5層縄群16~10(東から)  
上空から見た原田遺跡  
図版 7 7区Tライン土層断面T8付近(東から)  
8区南壁上層断面(南から)  
7区T7イン土層断面S7付近(南から)  
図版 8 8区南壁上層断面(南から)  
8区北壁上層断面(西から)  
原川遺跡周辺南北矢高  
図版 9 8区2~4層遺物出土状況(南から)  
8区2~4層遺物出土状況(西から)  
8区2~4層遺物出土状況 空撮  
図版10 4層縄群37  
4層縄群38  
4層縄群39  
図版11 4層縄群53・54  
4層縄群55・56  
4層縄群59  
図版12 2~4層石器ブロック49~53(西から)  
2~4層石器ブロック54~59(北西から)  
2~4層石器ブロック51(北から)  
図版13 2~4層石器ブロック52(南東から)  
2~4層石器ブロック52(北東から)  
2~4層石器ブロック54~57(北東から)  
図版14 2~4層石器ブロック51(北西から)  
2~4層石器ブロック58~59(北西から)  
2~4層石器ブロック66~67(北から)  
図版15 2~4層原川土状況(北から)  
2~4層Q12付近断面出土状況(東から)  
2~4層P12付近断面出土状況(東から)  
図版16 8区5層遺物出土状況(西から)  
8区5層遺物出土状況(上空から)  
7区5層遺物出土状況(東から)  
図版17 7区5層縄群後出状況(北西から)  
8区5層遺物出土状況(北から)  
5層石器ブロック28~34(西から)  
図版18 5層SK57後出(西から)  
5層SK57後出(南西から)  
5層SK57後出(東から)  
図版19 5層SK57上層断面(東から)  
5層SK57上層断面(南東から)  
5層SK57上層断面(東から)  
図版20 5層SK57(西から)  
5層SK57完掘(北西から)  
5層SK57完掘(北西から)  
図版21 5層SK57調査状況(南東から)  
5層SK57完掘(南東から)  
5層SK57完掘(北西から)  
図版22 5層SK57完掘(東から)  
5層縄群1(東から)  
5層縄群2(東から)  
図版23 5層縄群2(東から)  
5層縄群3(南から)  
5層縄群3(南から)  
図版24 5層縄群4(南東から)  
5層縄群5(南西から)  
5層縄群6(西から)  
図版25 5層縄群7(南から)  
5層縄群7(西から)  
5層縄群7(北東から)  
図版26 5層縄群9(東から)  
5層縄群10[右]・16(北西から)  
5層縄群11(西から)  
図版27 5層縄群12(西から)  
5層縄群13(西から)  
5層縄群14(南東から)  
図版28 5層縄群15 左・27(北東から)  
5層縄群16(北から)  
5層縄群16断面(北から)  
図版29 5層縄群17(東から)  
5層縄群18(南西から)  
5層縄群18(北東から)  
図版30 5層縄群19(西から)  
5層縄群20(東から)  
5層縄群21(西から)  
図版31 5層縄群22(北から)  
5層縄群23(北から)  
5層縄群24(南東から)  
5層縄群24(南から)  
5層縄群25(北から)  
5層縄群26(東から)  
図版33 5層縄群28(南から)  
5層縄群29(南西から)  
5層縄群31(西から)  
図版34 5層縄群30(北から)  
5層縄群35(北から)  
5層縄群32(北東から)  
図版35 5層縄群33(北から)  
5層縄群34(北から)  
5層縄群36(南から)  
図版36 5層縄群40(北東から)  
5層縄群41(西から)  
5層縄群42(西から)  
図版37 5層縄群43(西から)  
5層縄群43アッブ  
5層縄群43アッブ  
図版38 5層縄群44(南から)  
5層縄群45 奥・14[手前](南から)  
5層縄群45断面(北から)  
図版39 5層縄群47(南から)  
5層縄群50(南から)  
5層縄群46(南から)  
図版40 5層縄群48[南側](南から)  
5層縄群48[北側](南から)  
5層縄群48後出状況(南から)  
図版41 5層縄群51(南西から)  
5層縄群49(南から)  
5層縄群49アッブ  
図版42 5層縄群49アッブ  
5層縄群49アッブ

	5層複数52(西から)	2~4層出土石器(29)
図版43	5層石器ブロック36(南東から)	2~4層出土石器(30)
	5層石器ブロック48出土状況(北東から)	2~4層出土石器(31)
	5層石器ブロック48(北西から)	2~4層出土石器(32)
図版44	5層ナイフ形石器(3240)出土状況	2~4層出土石器(33)
	5層ナイフ形石器(3429)出土状況	5層出土石器(1)
	5層炭化物ブロック(57付近)(北東から)	5層出土石器(2)
図版45	5層炭化物ブロック_07付近】(北東から)	5層出土石器(3)
	7区5層遺物出土状況【S10付近】(北東から)	5層出土石器(4)
	7区5層遺物出土状況(6mから)	5層出土石器(5)
図版46	7区7層調査状況(北東から)	5層出土石器(6)
	7区7層調査状況(北から)	5層出土石器(7)
	7区7層遺物出土状況(上空から)	5層出土石器(8)
図版47	7層複数60(南東から)	5層出土石器(9)
	7層複数60アッブ	5層出土石器(10)
	雅(自然隕)出土状況(北西から)	5層出土石器(11)
図版48	7層石器ブロック5(南から)	5層出土石器(12)
	7層石器ブロック4アッブ	5層出土石器(13)
	7層石器ブロック6(北西から)	5層出土石器(14)
図版49	7層炭化物ブロック【P13付近】(南東から)	5層出土石器(15)
	7層石器ブロック14(西から)	5層出土石器(16)
	7層環状ブロック【石器ブロック15~23】(北東から)	5層川土石器(17)
図版50	7層石器ブロック22アッブ	5層川土石器(18)
	7層石器ブロック18石斧(6940)出土状況	5層川土石器(19)
	7層石器ブロック24石核(6938~6939)出土状況	5層川土石器(20)
図版51	7層N12付近炭化物ブロック(南西から)	5層川土石器(21)
	7層Q8付近炭化物ブロック(北西から)	5層出土石器(22)
	7層全風景	5層出土石器(23)
図版52	8区完掘(西から)	5層出土石器(24)
	8区東側斜面完掘(北西から)	5層出土石器(25)
	7区9層完掘(南西から)	5層出土石器(26)
図版53	雪中調査風景	5層出土石器(27)
	II石器振り下げ道具	5層出土石器(28)
	現地説明会	5層出土石器(29)
図版54	2~4層出土石器(1)	5層出土石器(30)
	2~4層出土石器(2)	5層出土石器(31)
	2~4層出土石器(3)	5層出土石器(32)
図版55	2~4層出土石器(4)	5層出土石器(33)
	2~4層出土石器(5)	5層出土石器(34)
	2~4層出土石器(6)	5層出土石器(35)
図版56	2~4層出土石器(7)	7層川土石器(1)
	2~4層出土石器(8)	7層川土石器(2)
	2~4層出土石器(9)	7層川土石器(3)
図版57	2~4層出土石器(10)	7層川土石器(4)
	2~4層出土石器(11)	7層川土石器(5)
	2~4層出土石器(12)	7層川土石器(6)
図版58	2~4層出土石器(13)	7層川土石器(7)
	2~4層出土石器(14)	7層川土石器(8)
	2~4層出土石器(15)	7層川土石器(9)
図版59	2~4層出土石器(16)	7層川土石器(10)
	2~4層川土石器(17)	7層川土石器(11)
	2~4層川土石器(18)	7層川土石器(12)
図版60	2~4層出土石器(19)	7層川土石器(13)
	2~4層川土石器(20)	7層川土石器(14)
	2~4層川土石器(21)	7層川土石器(15)
図版61	2~4層出土石器(22)	7層川土石器(16)
	2~4層出土石器(23)	7層川土石器(17)
	2~4層出土石器(24)	7層川土石器(18)
図版62	2~4層出土石器(25)	7層川土石器(19)
	2~4層出土石器(26)	7層川土石器(20)
	2~4層出土石器(27)	7層川土石器(21)
図版63	2~4層出土石器(28)	7層川土石器(22)

图版84	7层出土石器(24)	图版91	7层出土石器(45)
	7层出土石器(25)		7层出土石器(46)
	7层出土石器(26)		7层出土石器(47)
图版85	7层出土石器(27)	图版92	7层出土石器(48)
	7层出土石器(28)		7层出土石器(49)
	7层出土石器(29)		7层出土石器(50)
图版86	7层出土石器(30)	图版93	7层出土石器(51)
	7层出土石器(31)		7层出土石器(52)
	7层出土石器(32)		7层出土石器(53)
图版87	7层出土石器(33)	图版94	7层出土石器(54)
	7层出土石器(34)		7层出土石器(55)
	7层出土石器(35)		7层出土石器(56)
图版88	7层出土石器(36)	图版95	7层出土石器(57)
	7层出土石器(37)		7层出土石器(58)
	7层出土石器(38)		7层出土石器(59)
图版89	7层出土石器(39)	图版96	7层出土石器(60)
	7层出土石器(40)		7层出土石器(61)
	7层出土石器(41)		7层出土石器(62)
图版90	7层出土石器(42)	图版97	7层出土石器(63)
	7层出土石器(43)		7层出土石器(64)
	7层出土石器(44)		7层出土石器(65)

# 第1章 調査に至る経緯と調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

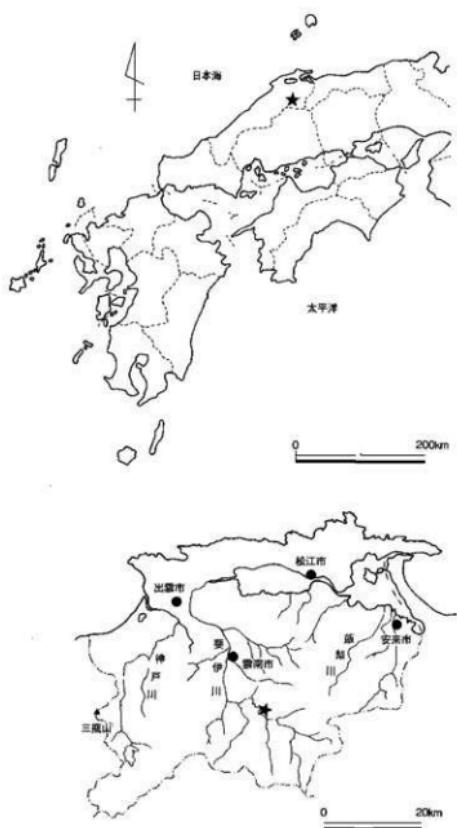
斐伊川は中国山地に源を発し、古くからその流域に広大で肥沃な土地を形成し、川雲地方の豊かな生活を育む一方で、幾度となく水害を及ぼしてきた。

斐伊川の治水事業は大正11年より国の事業として改修が行われたが、斐伊川中・下流域の住民は昭和18、20年の洪水をはじめ、昭和39、40、47年と相次ぐ洪水の米襲に悩まされてきた。とりわけ昭和47年7月の洪水では、斐伊川、神戸川とも破堤寸前の危険な状態におかれ、宍道湖の増水により松江市など約70km<sup>2</sup>が1週間にわたって浸水した。このため沿線の住民や自治体から斐伊川、神戸川

の抜本的な治水対策が要望され、昭和51年7月に工事実施基本計画の改訂を行い、いわゆる「治水3点セット」①斐伊川・神戸川上流におけるダムの建設、②中流の斐伊川放水路建設と斐伊川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖湖岸の整備を基本とした治水対策が具体化した。

尾原ダムはこの計画に基づき斐伊川上流の大原郡木次町(現 岩南市木次町)、仁多郡仁多町(現 奥出雲町)に計画された多目的ダムである。尾原ダム建設事業は平成3年10月の「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」調印を経て着手され、平成5年12月には水源地域対策特別措置法のダム指定を受けた。平成6年2月には「尾原ダム建設に関する基本計画」が公示され、現在建設が進められている。

平成3年6月には、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所(現 国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所)から島根県に対し、埋蔵文化財調査の依頼があった。これを受け島根県教育委員会では平成5年3月



第1図 原田遺跡の位置

と平成6年3月の2回にわたり分布調査を行った。本次町教育委員会と仁多町教育委員会の協力を得て行われたこの調査で、合計81か所の遺跡及び要確認調査地を設定した。

平成10年12月、遺跡の範囲確認調査を平成11年度から行うことが決定した。また、島根県教育委員会、本次町教育委員会、仁多町教育委員会で三者協議を行い、①確認のため再度分布調査を行うこと、②基本的な分担として、当初はダム本体部分を県が調査し、残土処理場や付け替え道路などの付帯設備部分は両町が対応すること、③今後の調査分担は調査状況や各機関の調査体制に応じて調整することの3点を確認した。平成11年3月に行われた3度目の分布調査では、新たに32か所の遺跡及び要確認調査地が認められ、遺跡及び要確認調査地は合計113か所となった。

平成11年度、島根県教育委員会は29か所の範囲確認調査を実施し、本報告書収録の原田遺跡を含む11か所について全面発掘調査が必要と判断した。平成12年には20か所で範囲確認調査を行った。平成13年3月に分布調査をあらためて実施し、2か所の要確認調査地を追加した。平成14年度及び15年度にも1か所の範囲確認調査を実施した。

島根県教育委員会が行った本調査は、平成12年度には雲南市垣ノ内遺跡と川平I遺跡、平成13年度には雲南市垣ノ内遺跡、家の後I遺跡、尾白I遺跡、尾白II遺跡、横ヶ塙遺跡と奥出雲町家ノ脇II遺跡、平成14年度には雲南市北原本郷遺跡、家の後II遺跡と奥出雲町原田遺跡、前田遺跡、平成15年度には雲南市北原本郷遺跡、家の後II遺跡、下布施氏館跡と奥出雲町原田遺跡、平成16年度には雲南市北原本郷遺跡と奥出雲町原田遺跡、平成17年度には奥出雲町原山遺跡、林原遺跡、平成18年には奥出雲町原田遺跡、林原遺跡、平成19年度には奥出雲町原田遺跡で実施した。発掘調査報告書は、これまでに垣ノ内遺跡、川平I遺跡、家の後I遺跡、尾白I・II遺跡、横ヶ塙、家ノ脇II遺跡、前田遺跡、家の後II遺跡、北原本郷遺跡、林原遺跡、原田遺跡(1・2・5～7区)については報告書が刊行されている。

本報告書は、平成16～19年度に発掘調査を実施した原田遺跡の一部の報告である。本書をもって原田遺跡の発掘調査の成果は全て刊行されることになった。

## 第2節 調査体制

調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

2004(平成16)年度 現地調査

事務局 山根正巳(埋蔵文化財調査センター所長)、卜部吉博(副所長)、

水島静司(総務グループ課長)、宮澤明久(調査第2グループ課長)

調査員 熟田貴保(主幹・調査第5サブグループリーダー)、伊藤徳広(同主事)、

馬庭範成(同(兼)文化財保護主事)、舟木千晴(同調査補助員)

2005(平成17)年度 現地調査

事務局 卜部吉博(埋蔵文化財調査センター所長)、永島静司(総務グループ課長)、

宮澤明久(調査第2グループ課長)

調査員 熟田貴保(主幹・調査第5サブグループリーダー)、伊藤徳広(同文化財保護主事)、

石橋裕子(同(兼)主事)、舟木千晴(同調査補助員)

## 2006(平成18)年度 現地調査

事務局 卜部吉博(埋蔵文化財調査センター所長), 坂本憲一(総務グループ課長),

宮澤明久(調査第2グループ課長)

調査員 熱田貴保(上幹・調査第5サブグループリーダー), 伊藤徳広(同文化財保護主任),

石橋裕子(同(兼)文化財保護主任), 永堀功(同(兼)主事),

舟木千晴(同調査補助員)

## 2007(平成19)年度 現地調査及び報告書作成

事務局 卜部吉博(埋蔵文化財調査センター所長)

坂本憲一(総務グループ課長), 宮澤明久(調査第1グループ課長)

調査員 久保田一郎(同文化財保護主任), 伊藤徳広(同文化財保護主任),

石橋裕子(同(兼)文化財保護主任), 稲田陽介(同調査補助員)

発掘作業員の雇用などの現地での発掘作業については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。担当者は次のとおりである。

## 2004~07(平成16~19)年度

社団法人中国建設弘済会島根県支部

[現場担当] 持田明典, 倉橋博之, 古岡智哉, 佐野靖郎, 篠山俊治(技術員)

[事務担当] 藤井利恵, 田部美代子, 松島美奈(事務員)

発掘調査及び報告書作成に際し、以下の方々から有益な御指導、御助言、御協力をいただいた。  
(五十音順、敬称略) 阿部朝衛(帝京大学), 稲田孝司(岡山大学), 稲村秀介(庄原市教育委員会), 大川泰広(鳥取県教育委員会), 岛村道雄(奈良文化財研究所), 沖憲明(広島県教育委員会), 小野秀幸(跡香川県埋蔵文化財調査センター), 小畠弘巳(熊本大学), 河合章行(鳥取県教育委員会), 小嶋善邦(岡山県古代吉備文化財センター), 小南裕一(跡山口県埋蔵文化財センター), 三枝健二(広島県立歴史民俗資料館), 坂本諭司(雲南省教育委員会), 澤田敦(跡新潟県埋蔵文化財調査事業団), 下岡順直(奈良教育大学), 芝香寿人(龍野市教育委員会), 鈴木忠司(京都文化博物館), 鈴木宏行(跡北海道埋蔵文化財センター), 早田勉(跡火山灰考古学研究所), 竹廣文明(広島大学), 多田仁(跡愛媛県埋蔵文化財調査センター), 田中義昭(島根県文化財保護審議会), 千葉豊(京都大学), 長友恒人(奈良教育大学), 中村唯史(島根県立三瓶自然館), 野津旭(跡トーワエンジニアリング), 蓬岡法暉(島根県文化財保護審議会委員), 原芳伸(跡徳島県埋蔵文化財センター), 藤野次史(広島大学), 町田洋(東京都立大学), 松本茂(宮崎県埋蔵文化財センター), 光石鳴巳(奈良県立橿原考古学研究所), 森田尚宏(跡高知県埋蔵文化財センター), 山崎修(雲南省教育委員会), 山田康弘(鳥取大学), 山本誠(兵庫県教育委員会), 湯村功(鳥取県教育委員会), 吉留秀敏(福岡市教育委員会), 渡辺正巳(文化財調査コンサルタント㈱), 雲南省教育委員会, 奥出雲町教育委員会, 島根県立八雲立つ風土記の丘, 財團法人奥出雲多根自然博物館

### 第3節 既往の調査概要と調査経過

原田遺跡は1993(平成5)年3月の分布調査で発見された集落跡である。その後、1999(平成11)年3月に再度分布調査を行い、河岸段丘の5haを要範囲確認調査地とした。これに基づき、確認調査は2000(平成12)年10月から12月に実施し、43本のトレンチを水田跡全域に入れ、川沿いの水田跡以外の段丘において遺構や遺物が確認された。その面積は29.800m<sup>2</sup>で、これを本調査範囲とした。

本書で報告する3・4・8・9区は、原田遺跡の中央にあたる。原田遺跡は2002(平成14)年度から発掘調査が開始され、2007(平成19)年度で、6年目を迎える。以下概要を述べる。

2002(平成14)年度は町道八代三沢線の付け替えのため1班が最も川上に位置する1区(2.200m<sup>2</sup>)の調査を実施した。調査の結果、縄文時代晩期の集落跡、古墳時代後期の横穴式石室1基、奈良時代の鍛冶遺構、斐伊川の旧河道が確認された。縄文晩期の土器、石器のほか、竪穴建物や土器埋設遺構が見つかった。

2003(平成15)年度はダムサイトの骨材採取地を探索するため、急遽5区の調査を実施した。調査区からは弥生土器がまとまって出土した。

2004(平成16)年度は、1区の西側に位置する2区(4.600m<sup>2</sup>)と段丘先端部の4区(4.700m<sup>2</sup>)の調査を2班体制で実施した。2区では多くの土器をはじめ、縄文晩期の建物や土坑墓、配石遺構など多数の遺構を検出した。遺構、遺物の下層における有無を確認するためのトレンチでは、段丘側から流れ込むように堆積した層から前期の土器片が2点出土した。

2005(平成17)年度は、2区と4区の間に位置する3区と、河岸段丘上段の6・7区の調査を3班体制で実施した。4月18日から人力掘削による本格的な調査を開始した。春先は雨天が続き、調査の進捗を心配したが、水はけがよく黒色砂の除去は順調に進んだ。6区と7区境付近から直線状に角礫が堆積していたこと、黒色砂中に火山灰が存在したことから、地質的な指導を6月20日に中村唯史氏から受けた。その折、7区全域に広がっている黄色粘質土が三瓶山から噴出した浮布降下火山灰であると指摘された。7月19日から下層確認トレンチの調査を開始すると水晶の剥片や蝶が出土し始めた。島根県では大規模な旧石器の調査は初めてであり、火山灰との関連や複数の遺構面が確認されたことから、その後も専門家による指導を受け続けた。旧石器が存在する土壤は火山灰の風化土のため粘性が強く、雨天が続くと滑り、ベルトコンベヤーも空回りするなど調査は困難を極めた。調査の結果、旧石器時代の遺構、遺物が三瓶浮布降下火山灰の上層、下層、始良丹沢火山灰の下層の3枚の層から出土することがわかった。遺構面が多いことから、平成17年度の調査は7区の三瓶浮布降下火山灰下層の調査と、始良丹沢火山灰下層の遺構・遺物の広がりを確認する調査で終了することとした。その間、10月2日には林原遺跡とともに現地説明会を行い、120人の参加があった。12月1日に空中写真撮影を行い、調査を継続した。12月5日から2日間暴風雪に見舞われ、一面が銀世界になり以後根雪となった。風雪の合間に見て調査を継続したが、12月22日に現地調査を終了した。

2006(平成18)年度は、7区の始良丹沢火山灰下層の調査と池田降下軽石層の下層の調査、8区の黒色土から始良丹沢火山灰下層までの調査、9区の調査を1班体制で行った。4月17日から調査を開始し、8区の表土は重機による掘削を行い、中世の包含層である0層から人力による掘削を行った。7区は始良丹沢火山灰層を重機で掘削し、下層の調査を人力により行った。7月19日には記録的な豪雨が島根県を襲い、斐伊川も氾濫した。斐伊川は堤防を越えて遺跡内まで流れ込んでいるほ

どである。島根県各地で甚大な被害が発生し、残念な事に亡くなられた方もおられた。遺跡周辺では各所で土砂崩れが発生し、国道も通行止めとなつた。その結果、遺跡への通じる道路が寸断されたため、調査を数日間休まざるをえなかつた。その後は天候に恵まれ、調査は進行した。7区では複数の石器ブロックで構成される「環状ブロック」が検出された。池田降下軽石層より下層は200mに限定し、人力による掘り下げを行い、遺構や遺物の発見に努めたが、無遺物層であることが確認された。9区は表土直下が遺構面であったため、重機で削除後、遺構の検出、掘り下げを行つた。8区1層では土器類や須恵器を中心とした土器層が検出された。その後、三瓶浮布降下火山灰の上層、下層、始良丹沢火山灰の下層の一部の調査を人力と重機の併用で行つた。その結果、三瓶浮布降下火山灰下層に確実に旧石器時代に属すると特定できる土坑が検出された。県内では旧石器時代の上坑が発見されるのは初めてであり、さらに上坑の性格が「墓」である可能性も考えられたため、マスコミへ記者発表を行つた。新聞は地方紙のみならず、全国紙にも掲載された。また、民放テレビ局のアナウンサーによる取材と撮影が遺跡内で行われ、夕方のニュースで特集された。11月23日には、現地説明会を行い、100名が遺跡を訪れた。また、地元ケーブルテレビの取材も行われ、説明会を担当した調査員が取材を受け、後日、ケーブルテレビで放映された。現地調査は12月6日に終了したが、8区の始良丹沢火山灰の下層には多数の石器が出土することが判明したため、一部の調査を次年度に持ち越した。

2007(平成19)年度は、8区の始良丹沢火山灰下層の一部のみ発掘調査を1班体制で実施した。4月5日より調査を開始し、多数の石器ブロックや炭化物ブロックを検出した。調査は順調に進み、また、遺物が出土しないグリッドも存在したため予定より早く6月13日に現地調査は終了した。これをもって原田遺跡の全ての発掘調査は完了したこととなる。

#### 第4節 普及啓発

原田遺跡の情報発信のため、尾原ダム建設に伴う遺跡調査についての発掘事務所便りとして「オロチのいぶき」を発行した。平成16年度～19年度までは、23号から最終号となる37号まで900部ずつ合計15回、各年度の原田遺跡の調査成果について情報発信し、遺跡近辺の住民へは配布及び回覧した。それ以外に、各年度の遺跡調査区の概要をまとめたカラーパンフレット「オロチのいぶき特別号」を平成16年度に3号、17年度に4号、18年度に5号を作成した。原田遺跡の発掘調査の最終年度である平成19年度は、尾原ダム建設に伴う発掘調査を行つた数多くの遺跡について、その成果を「オロチのいぶき総集編」として時代毎にまとめ発行した。発行に当たっては、雲南省教育委員会や奥出雲町教育委員会に遺物や遺構写真の貸し出しに協力してもらい、その地に生活する人々の生活の特徴を見童・生徒にもわかりやすくまとめた。この総集編は6,000部刊行し、雲南省本次町内及び奥出雲町内の地域住民の方に配布したり、島根県東部の小・中学校に配布したりして、尾原ダム建設に伴う遺跡について広く普及啓発することを図った。

原田遺跡についての公開活用としては、地域団体や自治体の主催による「尾原ダム祭の花祭り」が挙げられる。平成16年度～19年度も、毎年4月に尾原ダム地内を会場に開催された。会場では遺物や写真パネルを展示し、併せて原田遺跡の見学会も実施したりした。

また、平成16年度～18年度の発掘調査終了直前に、調査成果について現地説明会を行い、発見された遺構・遺物については、現物だけでなく写真パネル等も提示し説明した。この現地説明会は毎

回100名を超える参加があった。

さらに、鳥取県で初めて旧石器時代の大規模な調査が実施されたことから、原田遺跡や旧石器時代についてより広く公開するため、平成18年3月5日に、奥出雲町カルチャーブラザ仁多において講演会「火山灰に埋もれた旧石器時代のムラ」を開催した。地元を中心に県外からの参加もあり、120名が参加した。

その他、原田遺跡の発掘現場で児童・生徒を対象とした普及活動を行った。2005(平成17)年度は、5月には奥出雲町立亀嵩小学校と高田小学校の5、6年生20名が発掘体験を行い、地域の歴史を学習した。2006(平成18)年度は、8月28~30日に奥出雲町立仁多中学校の生徒4名が発掘体験や遺物の整理体験を行った。10月には、奥出雲町立布勢小学校の児童13名が2回に分けて原田遺跡を見学し、火山灰の堆積について観察したり、発掘体験をしたりした。

また、山陰両県魅力向上作戦会議事業の一つで、平成16年度から毎年開催しているとっとり・しまね発掘速報展では、平成17、19年度に原田遺跡の発掘成果を遺構の写真や遺物を展示してきた。特に平成19年度は、発見された遺物を常時展示している古代出雲歴史博物館において、とっとり・しまね速報展を開催し、展示解説とスライドによる講演を行った。



第2図 原田遺跡発掘調査対象地 (S=1/3,000)



第3図 原田遺跡トレーニチ及び調査区配置図(S=1/2,000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

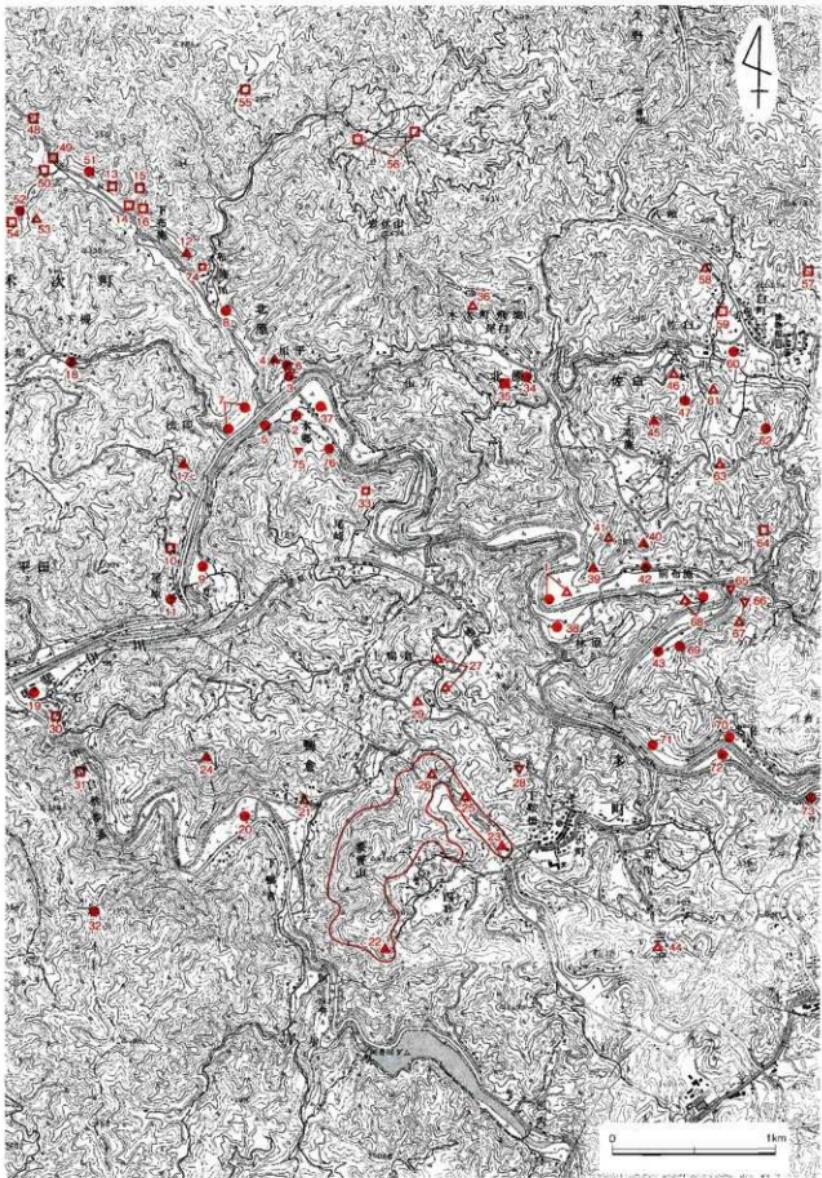
原山遺跡は、船通山に源を発する斐伊川の右岸に位置する。舌状に張り出した、標高約194～200mの河岸段丘上に立地している。遺跡が存在する段丘は大きく4段に分かれ、斐伊川に面する南側が一番低く、河床躍が堆積していたため遺跡の範囲外となっている。中段には1区から4区が存在し、調査の結果、縄文時代前期頃に斐伊川により削り取られた後陞化し、縄文後期後半から晩期の集落が確認された。上段は一面黒色砂に覆われていたが、東西で様相が異なる。東側は火山灰が黒色土の下層に良好に残っていたが、西側は斐伊川により縄文時代前期以前に火山灰等が削られ、黄色砂が堆積していた。旧石器時代の石器群が残存していたのは上段東側のみであった。最上段は、近代に削平されており、遺構面が削られていた。斐伊川中、上流域の遺跡の様相は、近年の尾原ダム建設に伴う発掘調査によって新たな資料が増加し、多くのことが明らかになってきている。以下、周辺の遺跡について概観する。

**【旧石器時代】** 原山遺跡(1)では、3つの火山噴出物(火山灰・軽石)の上下3つの文化層から4千点もの石器と60基の砾群、1基の土坑等が確認されている。後期旧石器時代初頭からナイフ形石器文化期の終末期の石器が出土している。原山遺跡以外で旧石器時代の可能性がある遺跡は、前田遺跡(38)である。安山岩製の有茎尖頭器が1点出土している。本報告で掲載している石材の原産地分析で、五色台の白峰産であるとされている。旧石器時代末～縄文時代草創期の石器と思われる。

**【縄文時代】** この地域で最も古い縄文土器は、原山遺跡(1)や川平I遺跡(7)から出土した早期の押型文土器である。前期の土器は北原本郷遺跡(37)や川平I遺跡で、中期の土器は、平田遺跡(19)や垣ノ内遺跡(8)で出土している。川平I遺跡では縄文時代早期以降の土坑も検出されている。縄文時代後期には、半山遺跡、下鶴鳴遺跡(20)、暮地遺跡(73)、林原遺跡(68)などで多数の土器や土坑、土器埋設造構、土偶が見つかっているほか、家の後II遺跡1区(2)では堅穴建物が、北原本郷遺跡では平地式建物跡や土器溜まりが検出された。中でも、林原遺跡では後期の土器溜まり8か所、堅穴建物1棟、土偶7点が出土している。晩期の遺跡も多く、家の後II遺跡では土器埋設造構4基、配石土坑2基、土坑51基が、原山遺跡では土器埋設造構が合計10基、堅穴建物合計5棟、配石(墓)や土坑(墓)のほか、線刻彫や石棒といった呪具や勾玉が出土している。土器埋設造構は、これまで暮地遺跡などで例が知られていたが、尾原ダム建設に伴う発掘調査によって検出数が増加し、斐伊川中流域で特徴的な造構であることが明らかとなった。

**【弥生時代】** 垣ノ内遺跡では弥生時代中期後葉～古墳時代前期の堅穴建物や掘立柱建物が合計16棟確認され、加薬性の強い「塙町系」の土器群が検出された。また、北原本郷遺跡では弥生中期前葉～古墳時代初頭の堅穴建物が見つかっており、集落構造を復元できるような資料が増加している。暮地遺跡では中期後葉の堅穴建物が2棟検出され、うち1棟は焼失建物であった。

**【古墳時代】** 岬辺の斐伊川中流域には古墳時代前期や中期の古墳は明確ではないが、後期には横穴式石室を持つ古墳が見られるようになる。原田古墳(1)は、墳形や規模は不明だが、横穴式石室から双龍環頭大刀、金銅製馬具一式、ヒスイ製勾玉などの玉類や鉄器、多数の須恵器が出土し、近畿地方との密接な関係がうかがわれる。築造時期は6世紀末と考えられる。同じ原山遺跡には同時期



第4図 原田遺跡と周辺の遺跡(S=1/30,000)

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	江戸以降	備考	遺跡地図
1	原田遺跡・原田古墳	集落・古墳								本郷町番掲載	N135
2	家の竣工遺跡	集落								免耕調查	Q111
3	宮/馬頭跡	散布地・墓葬								免耕調査	Q11
4	下布施氏新跡	山城								免耕調査	Q11
5	家の竣工遺跡	散布地								免耕調査	Q112
6	吉川ノ遺跡	散布地								免耕調査	Q113
7	川平I・遺跡	集落								免耕調査	Q114
8	堤内・内遺跡	集落								免耕調査	Q115
9	家の上遺跡	奈良道跡・制鐵遺跡								免耕調査	Q116
10	上堤内・内たら跡	制鐵道跡								免耕調査	Q117
11	石塚遺跡	散布地								免耕調査	Q118
12	末久寺遺跡	城跡								免耕調査	Q119
13	ゴマツリ野跡	制鐵道跡								免耕調査	Q120
14	寺田I・遺跡	制鐵道跡・古墳								免耕調査	Q121
15	寺田II・遺跡	制鐵道跡								免耕調査	Q122
16	寺田III・遺跡	制鐵道跡								免耕調査	Q123
17	トヤゲ丸城跡	城跡								免耕調査	Q124
18	下城田遺跡	集落								免耕調査	Q125
19	甲田遺跡	制鐵道跡ほか								免耕調査	Q126
20	下馬鹿遺跡	散布地								免耕調査	Q127
21	光音寺古墳	古墳									N8
22	三沢城跡	山城									H44
23	布広城跡	山城									H60
24	松木山遺跡	山城									N21, Q115
25	どけ古墳	古墳									N20
26	比丘尼根横穴墓群	横穴墓									N62
27	穴越古墳群	古墳									N22
28	鳥石古墓	古墳									N115
29	菅田古墳群	古墳									N122
30	勝越切妻古跡	制鐵道跡									G112
31	越波古跡	制鐵道跡									G114
32	大の原遺跡	散布地									N100
33	猪之外遺跡	制鐵道跡									G77
34	馬白I・遺跡	散布地									G54
35	馬白II・遺跡	廣葉樹									G55
36	馬白横穴墓群	横穴墓									G1
37	北原木造遺跡	集落									G10
38	前田遺跡	集落									N145
39	西尾社跡	城跡									N131
40	水手山遺跡	城跡									N42
41	殿内邊横穴墓群	横穴墓									N134
42	円満寺遺跡	祭祀遺跡・寺院跡									N144
43	家ノ堀II・遺跡	散布地									N146
44	正覚古墳群	古墳									N107
45	佐白城跡	城跡									N43
46	玉堂寺古跡群	古墳									N125
47	六方道跡	散布地									N130
48	家の反転跡	制鐵道跡									G67
49	柏木I・野原遺跡	制鐵道跡									G58
50	大庭遺跡	制鐵道跡									G107
51	赤瀬の棚遺跡	散布地									G108
52	北珠I・遺跡	散布地									G58
53	下布施横穴墓群	横穴墓									G69
54	家の野原跡	制鐵道跡									G109
55	下布施の上伊跡	制鐵道跡									G45
56	佐白・大原山巻鉄跡群	制鐵道跡									N123
57	金子古墳跡	制鐵道跡									N69
58	伊賀武雄境内横穴墓群	横穴墓									N140
59	佐白・原鉱跡	制鐵道跡									N75
60	中山道跡	散布地									N18
61	上布施横穴墓群	横穴墓									N19
62	上布施遺跡	散布地									N8
63	上布施・扇山古墳群	古墳									N110
64	龜ヶ谷遺跡	制鐵道跡									N126
65	シーハ石道跡	社跡									N137
66	時仙遺跡	社跡									N138
67	時仙山横穴墓群	横穴墓									N139
68	林原遺跡	集落・古墳									N61
69	家の盛遺跡	散布地									N146
70	寺塙遺跡	散布地									N141
71	延慶遺跡(家の前遺跡)	散布地									N147
72	寺宇根遺跡	散布地									N148
73	墓地遺跡	散布地									N56
74	谷口遺跡	生産遺跡									
75	西平遺跡	古墳・散布地									
76	コカ道跡	散布地									

(凡例) ● 集落・散布地 △ 古墳・横穴墓 ▽ 古墳・縄文・杜跡 ▲ 城跡 □ 生産遺跡

の土器溜まりが数カ所確認され、古墳との関係が考えられる。このほか横穴式石室を持つ穴窓1号墳(円墳：27)や前方後方墳で横穴式石室を持つ穴窓2号墳がある。この地域の横穴墓は平面縦長長方形で、断面三角形である。下布施横穴墓群(53)では装飾大刀を副葬した横穴墓が確認されている。このほか伊賀武社境内横穴墓(58)、殿ヶ跡横穴墓群(41)、時仏山横穴墓(67)なども発掘調査されている。集落遺跡としては古墳時代前期初頭の垣ノ内遺跡や平田遺跡が知られている。平田遺跡では堅穴建物から鍛冶炉や板状・棒状の鉄片などが検出され、火で加熱した鉄素材を壓で切断する原始的な鍛冶技術で鉄器が製作されたと考えられている。垣ノ内遺跡では古墳時代後期から再び集落が営まれ、9世紀まで継続する。家ノ脇II遺跡では古墳時代後期の集石と土器溜まりが確認されており、祭祀跡もしくは土器を廃棄した場所と考えられている。

**【奈良・平安時代】** 寺田I遺跡(14)、原山遺跡では鍛冶遺構が、楕ヶ跡遺跡(33)では平安時代の製鉄関連遺物が確認されている。寺田I遺跡では鋳造関連の遺物も出土しており、遺構や遺物のあり方から官営的な工房の可能性がある。また、亀ヶ谷遺跡(64)で平安時代後期の製鉄炉跡が検出された。家の上遺跡(9)では配石遺構から土馬、手捏ね土器が見つかっている。円満寺遺跡(42)でも湧水地点で大量の須恵器や土師器とともに土馬が出土した。これらは、水に関わる祭祀跡と考えられている。

**【中・近世】** 集落遺跡としては、家の後II遺跡や宮ノ脇遺跡(3)から中世の掘立柱建物が確認された。また、前田遺跡(38)では室町時代の貿易陶磁がまとまって出土し、集落の性格を考える上で注目される。寺院跡である円満寺遺跡からは青白磁梅瓶や青磁が出土している。この周辺は三沢氏が勢力を握っており、居城である三沢城(22)はよく知られている。独立丘陵に近い形態の鶴巣山に位置する多郭式の山城である。下布施氏館跡(4)は発掘調査で堀切や郭、通路状遺構が確認された。原田遺跡の尾根上には水手城跡(40)があり、郭が調査されている。中世前半の製鉄遺跡は上垣内たら跡(10)、枯木ヶ谷跡遺跡(49)、家の上鉄跡(54)で、本床状遺構のみの製鉄炉地下構造が確認されている。原田遺跡では中世の板屋型羽口を持つ精錬鍛冶炉が検出されている。近世になると、夷山雲地域では絲原家、卜藤家、櫻井家など有力鉄山氏のもと、大規模な高殿たたらが営まれ、鉄生産量は飛躍的に増大する。原田遺跡では製鉄に関連したと考えられる掘立柱建物跡が確認されている。尾白II遺跡(35)では近世以降の炭窯が調査されており、この中にはたたらで使用される大炭を生産した可能性のあるものも見られる。北原本郷遺跡では斐伊川の舟番所の可能性が指摘される建物跡も検出されている。

#### 【参考文献】

- 鳥根県教育委員会2003『増補改訂鳥根県遺跡地図I(出雲・隱岐編)』  
鳥根県教育委員会2003『尾白I遺跡・尾白II遺跡・家の脇II遺跡3区・川平I遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1  
鳥根県教育委員会2003『家の後I遺跡・垣ノ内遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2  
鳥根県教育委員会2004『楕ヶ跡遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』3  
鳥根県教育委員会2004『家の脇II遺跡・原田遺跡1区・前田遺跡4区 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』4  
鳥根県教育委員会2005『前田遺跡(2)・下布施氏館跡・原田遺跡1区(分析編) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
鳥根県教育委員会2005『宮ノ脇道路・家の後II遺跡1 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』6

- 鳥根県教育委員会2005「北原本郷遺跡 1 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」7
- 鳥根県教育委員会2006「原田遺跡(2) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」8
- 鳥根県教育委員会2006「家の後Ⅱ遺跡 2・北原本郷遺跡 2 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」9
- 鳥根県教育委員会2007「原田遺跡(3) 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」10
- 鳥根県教育委員会2007「林原遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」11

## 第3章 調査と整理の概要

### 第1節 調査の範囲と方法

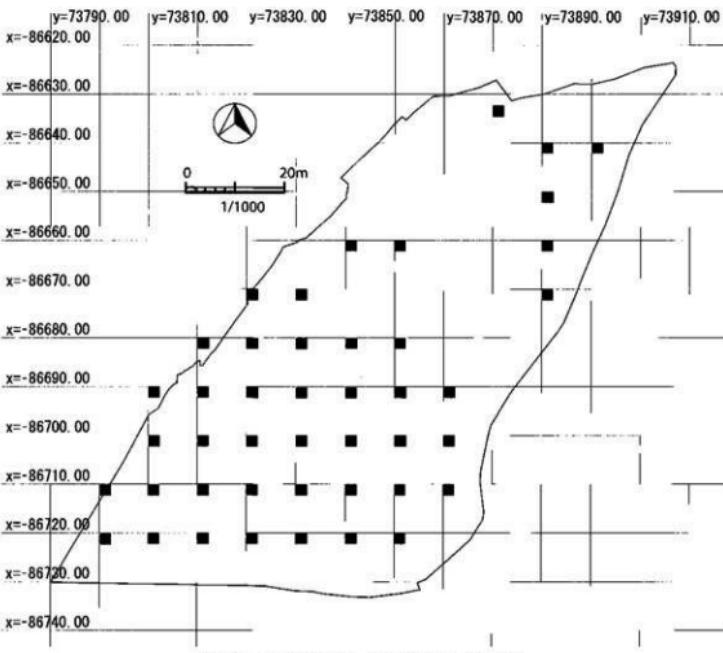
原田遺跡は約3万m<sup>2</sup>あり、ダム建設による用地買収前は水田で、その後は荒れ地となっていた。したがって、調査対象地の全面を耕作土が覆っており、どの調査区も調査開始とともに耕作である表土を重機により掘削した。今回報告する3区と4区は耕作土の下には中世以前の包含層が複数確認され、これらは人力により掘り下げを行った。各層の上面や任意の深さで掘り下げ後は精査を行い、遺構の検出にも努めた。7区と8区にも中世から縄文時代の包含層が確認され、さらに下層に旧石器の包含層が3面存在した。旧石器時代の調査対象面積は各文化層で7,500m<sup>2</sup>、延べ面積は2万m<sup>2</sup>を超える。これらも包含層については人力で、軽石層や遺物を含まない火山灰層は重機による掘削を行った。9区は表土の下には遺物包含層が存在しなかったため、表土を重機で除去後、遺構の精査、遺構の掘り下げを人力で行った。

通常の旧石器時代の遺跡では、出土する遺物は小さな石器のみであり、遺構が検出されることも多い。したがって、石器の出土位置を記録することは、石器の分布や同一母岩の接合関係から当時の人類の活動を推測し、集落の復元を行うために重要であり、例えるなら縄文時代では竪穴住居跡を記録することに匹敵している。7区と8区で確認された旧石器時代の包含層で出土する石器も1cm以下の小さなものが多く、縄文時代以降の包含層の掘り下げで用いられる鍬やスコップでは、包含層を薄く掘り下げることができないため、石器を掘り飛ばしてしまう可能性が高かった。しかし、細かい掘り下げや精査に用いる「ガリ」と呼んでいる草削りは、数10cmもある包含層を掘り下げるには向きであり、長時間しゃがんだ姿勢で掘り下げるには膝や腰への負担が大きかった。そこで、ガリの柄を真っ直ぐに伸ばしてパイプ等をつなぎ、立ったままで薄く包含層が掘り下げられるように改良した。この道具は、体重をかけば容易に包含層を薄く掘り下げができる。腕力は必要なく、性別や年齢を問わない道具であった。この道具を用い広大な旧石器時代の調査範囲を3つの文化層において掘り下げた。

なお、小さな石器が調査の対象であるため、耕土をふるいにかけ、微細な石器を見つけることも重要であるが、包含層は非常に粘性が強く、水洗によるふるいでも作業を行うことは困難であった。また、5層の石器ブロック48の耕土で数回試行したところ、石器は発見できなかったので、この度の発掘調査ではふるいは行っていない。

原田遺跡では、第2図の通り、当初から出土座標に合わせ、10m四方のグリッドを設定している。縄文時代以降の掘り下げもこのグリッドを基本に実施したが、旧石器時代の調査はこのグリッドを基準に段階的な調査方法を採用したので、ここで述べておきたい。

平成18年7月に旧石器が発見されたが、遺跡全体での石器の分布や密度、包含層の枚数や厚さ、時期などが全くわかつていなかったため、トレンチを設定し確認することとしたが、その後の具体的な調査方法も不明であったため、兵庫県七日市遺跡で大規模な旧石器時代の調査を経験されていた山本誠氏を現地に招いて調査方法について指導を得た。その指導では、第5図のようにグリッド杭の際に2m四方のトレンチ(先行トレンチ)を設定し、確実に遺物が出土しなくなる層まで掘り下



第5図 旧石器確認トレンチ(1) (S=1/1,000)

げ、遺跡全体の石器の広がりと基本層序を把握することが指摘された。次に、第6図のように、先行トレンチを結ぶように1m幅のトレンチを設定し、さらに各グリッドで「田」の字状にトレンチを廻らすことで、微地形の変化もトレンチ壁面で確認しやすくなり作業効率が上がることと、石器の分布密度がほぼ把握できるため、密度が低いグリッドをスコップで掘るなどの段階的な調査が可能となる点が指摘された。なお、第5図と第6図ともトレンチが掘られていない地点があるが、これは礫群などの造構が検出された場合や、調査の熟練度が上がりトレンチを掘る必要がなかった場所である。以上が旧石器時代を対象とした発掘調査方法の概要である。

## 第2節 基本層序

原田遺跡の上層区を第7図から第13図に図示している。縄文時代以降の層位は第2分冊で調査区毎に記述しているため、ここでは、7区と8区について旧石器時代の層位を中心に記述する。

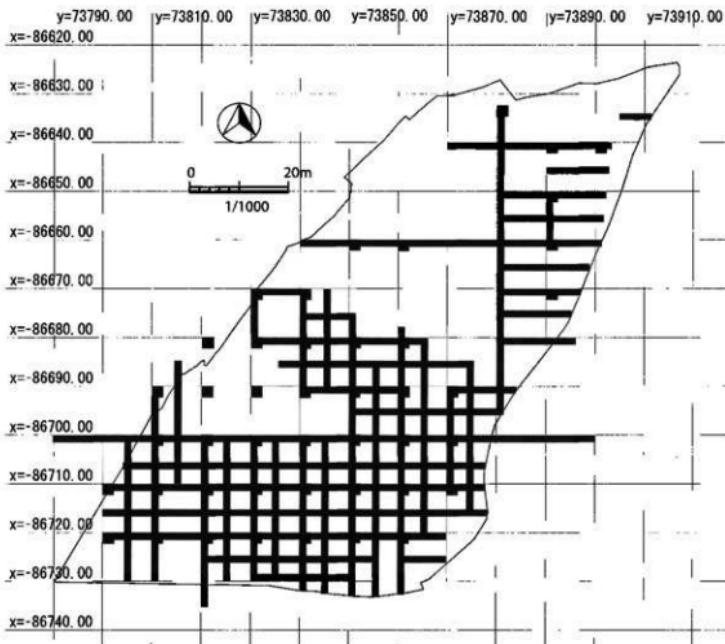
7区と8区の基本層序は上層から0層から10層となっている。

表十一 水田耕作に伴う表土層である。

0層-1層の上層に堆積する灰褐色土層で、中世の遺物を含んでいる。

1層-若干砂質になる黒色土層である。原田遺跡の9区以外の調査区でいわゆる黒色土として調査が行われた層である。出土遺物の時期は古墳時代~縄文時代を中心である。

2層-2区や3区の4B層と同一と思われる。軽石をほとんど含まない黒色土層である。下層に



第6図 旧石器確認トレンチ(2) (S=1/1,000)

属する旧石器時代の石器がわずかに出土している。自然の影響によって、この石器の出土位置は本来の位置(3層や4層)ではなく、上層の2層まで出土位置が上昇しているものと考えられる。2層の堆積の開始時期は縄文時代早期か草創期と考えられる。1区から4区、6区は斐伊川が3層以下を削り取り、河床疊層を形成した後に、1層と2層が堆積している。3層-暗茶褐色上層である。本来は4a層であったと思われるが、上層からの影響で色調が褐色化している。石器包含層である。

4層-4層は3つに分けられる。下から三瓶起源の浮布降下軽石(4c層)及び火山灰(4b層)、またそれらの二次堆積の層(4a層)と考えられる。石器は4a層を中心に出土するが、一部は4b層からも出土していたと考えられる。しかし、調査中は4c層の軽石より上位は全て4(上)層(=浮布降下火山灰層)と認識しており、軽石層近くで出土した石器が存在したため、4b層で出土していた石器もあったと考えている。

5層-比較的平坦な7区や、8区の西半分は粘性的強い層が堆積している。当初から石器が出土する層を5層として調査を行ってきたが、8区の東側斜面から谷地形までが斜面から崩落してきた土壤等によって、5a層、5b層、5c層の3つに分けられることが後に判明し、さらに混入する軽石や砂、鉄分の量などにより細分されることとなった。当初5層と呼んでいた石器包含層は細分後の5c層に該当する。したがって、遺跡全体に広がり、石器が多量に出土するのは5c層である。5b層で出土した石器はわずかで、5a層は第86図

14711の角錐状石器はのみである。5c層は粘性が非常に強く、雨天あるいは湿気の多い時期は非常に滑りやすい上壤である。

6層－始良丹沢火山灰(AT)を含む層である。東側斜面ではATの一次堆積層が存在する。

7層－5c層と同様に粘性の強い褐色土層である。原山遺跡の最下層の石器包含層である。

8層－下位の池田降下軽石層〔8(下)層〕と上位の池田降下火山灰層と考えられていた〔8(上)層〕層からなっている。

9層－暗褐色土層の古土壤層である。下層の10層からの浮き上がった円礫が多数含まれる。無遺物層である。

10層－斐伊川の河床疊層である。円礫が多い。花崗岩と凝灰岩が多いようである。

以上が原山遺跡の基本層序である。

### 第3節 遺構の認定と観察

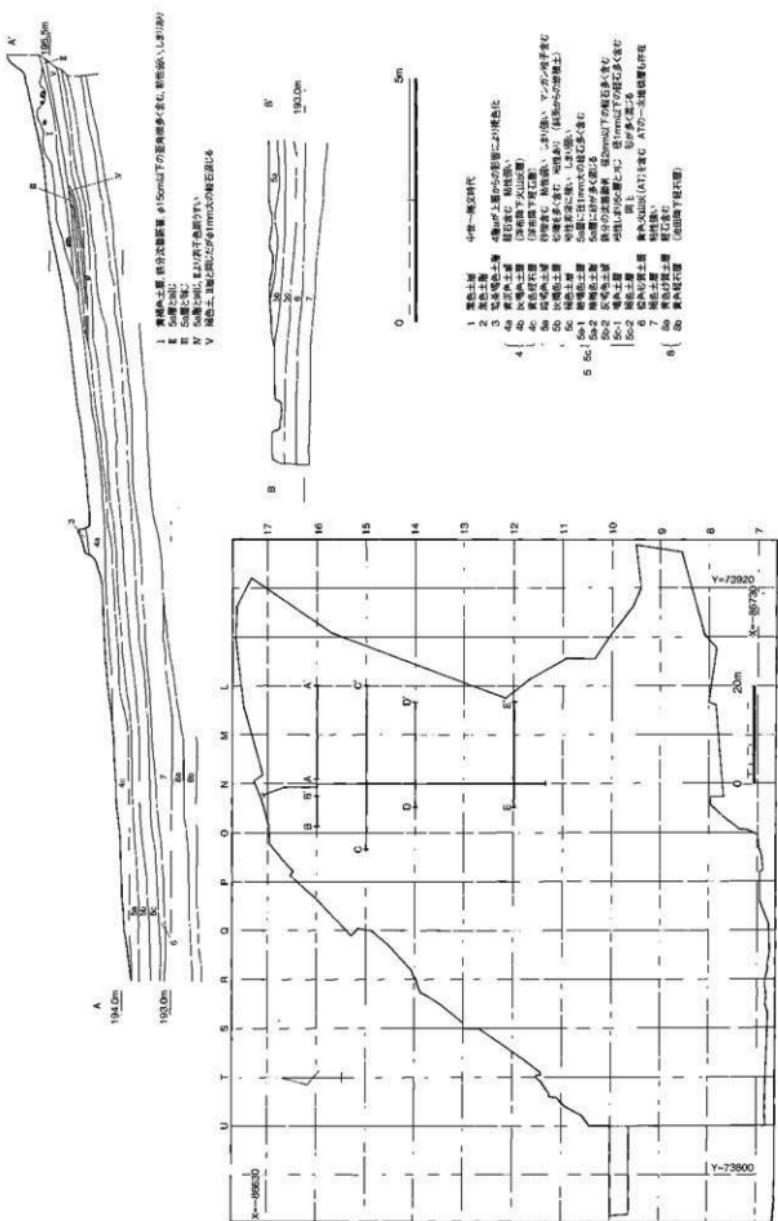
原山遺跡では68ヶ所の石器ブロックを設定している。これは、調査中に石器ブロックと認識して調査していた地点と、報告書作成時に机上で設定した地点に分かれる。石器ブロックの内容は様々で、わずか数点の石器しか出土していない物から492点の石器で形成されている石器ブロックも存在する。また、石器の分布密度や製作された時期も考え石器ブロックの設定を行すべきであるが、本報告では、発掘調査中に認識していた石器ブロックをまず設定し、それ以外で直径が10mまでの範囲に石器がまとまって出土しており、かつ周辺に石器が出土地していない範囲が存在することを基準に調査員が机上で石器ブロックの設定を行った。したがって、石器ブロックが近接している部分の分離はあくまでも視覚的な線引きであり、分布密度の濃淡も全く異なっているのが現状である。

また、数カ所で直径10mを超える石器ブロックの設定も行っている。これはどうしても図上で分離できなかつた散漫な集中地点をあえて大きな石器ブロックとして認定している。

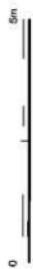
疊群は60基が確認されている。疊群の認定は全て現地で調査中に行われた。現地調査中は疊群として認定しなかった疊でも、報告書作成中に疊の分布図で確認すると、疊群として認定できた可能性がある地点も存在した。しかし、本報告では現地調査中に疊群として認識できた地点を疊群として報告する。現地での疊群認定の基準は、5点以上の被熱(赤化)した疊がある程度集中して出土していること、疊の出土している範囲が周辺部と分離できることである。これは、鈴木忠司氏の指導を元にしているが、認定はあくまでも調査員の上級で行われている。また、数基の疊群で構成疊数が5点に満たないものも存在する。これは明らかに周辺部に空白地帯が存在し、疊の被熱も明瞭な場合において設定されている。このように、今回の発掘調査では、現地で疊群ではないかと考えられる疊の集中地点も極力疊群と認定している。これはあえて疊群と認定することで、研究の俎上にあがり易くなることを考えてのことである。また、配石については、今回の報告では認定していない。疊群の構成疊の中にも明らかに配石と考えられる大型の物が存在しており、遺構外出上疊の中にも存在する。今後の検討課題であると考えている。

疊群の構成疊と、疊群としなかった遺構外で出土した疊については、個々に計測を行っている。報告書には紙面の制約上、個々の計測値は掲載していないが、添付したCDにデータが入力されているので参考にしていただきたい。

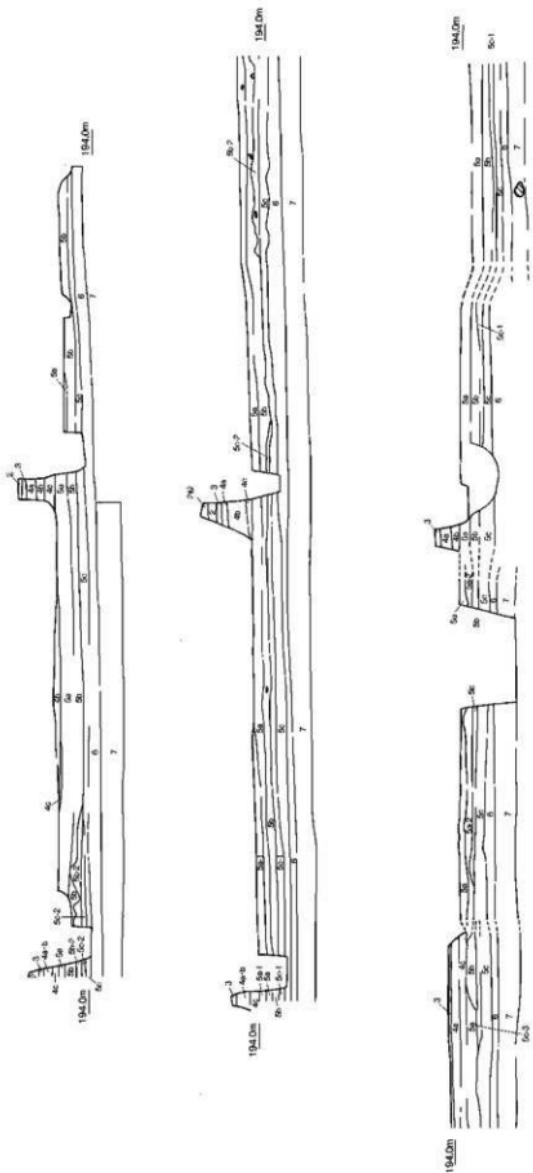
疊の計測は、最大長を「長さ」とし疊の継軸を設定し、それに直交し、左右で最も幅の広い部分

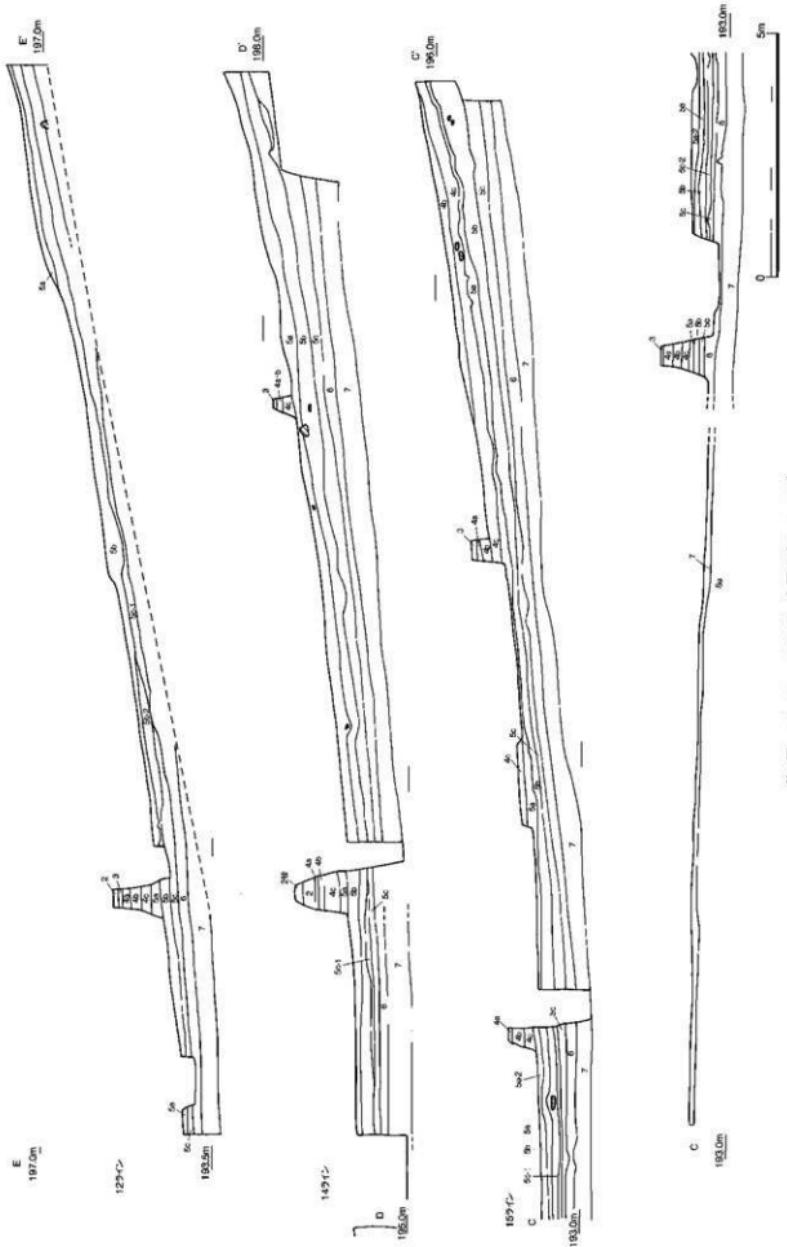


第7図 土質記述図(1=1/1,000)・16ライン土質図(S=1/100)

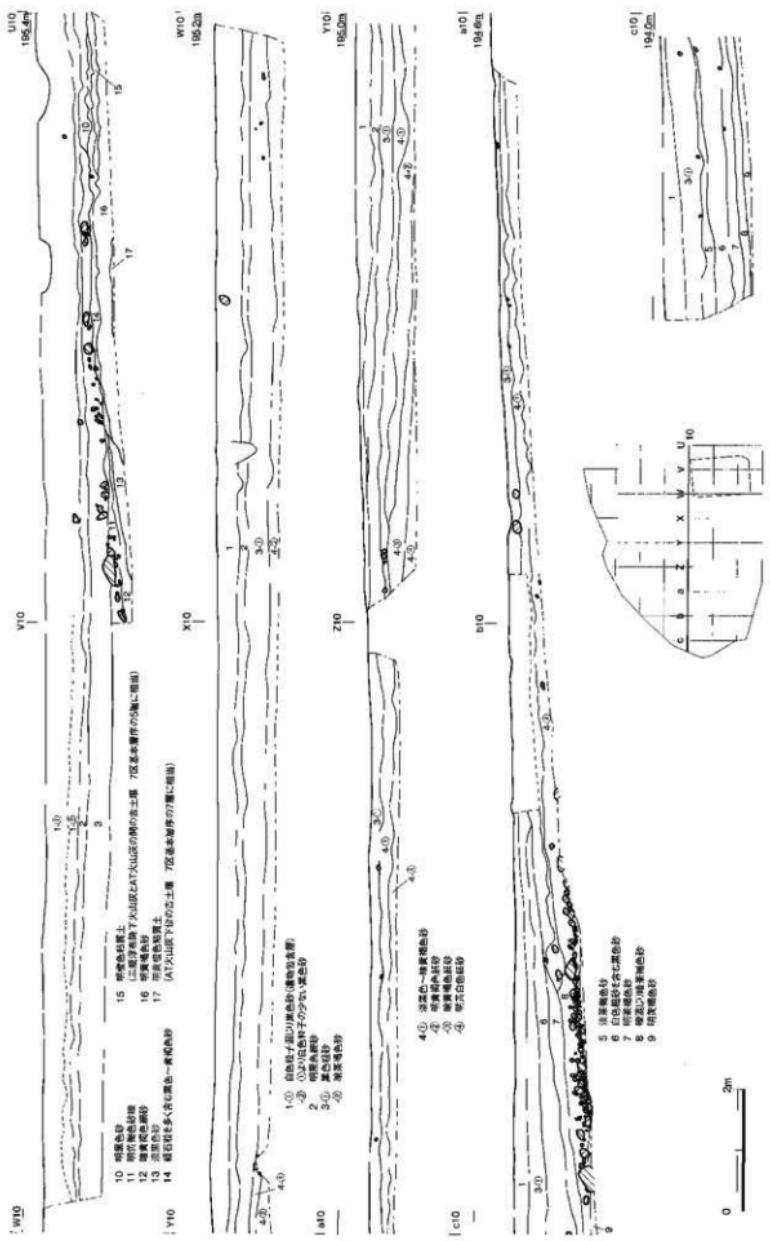


第8図 Nライン土層図 (S=1/100)

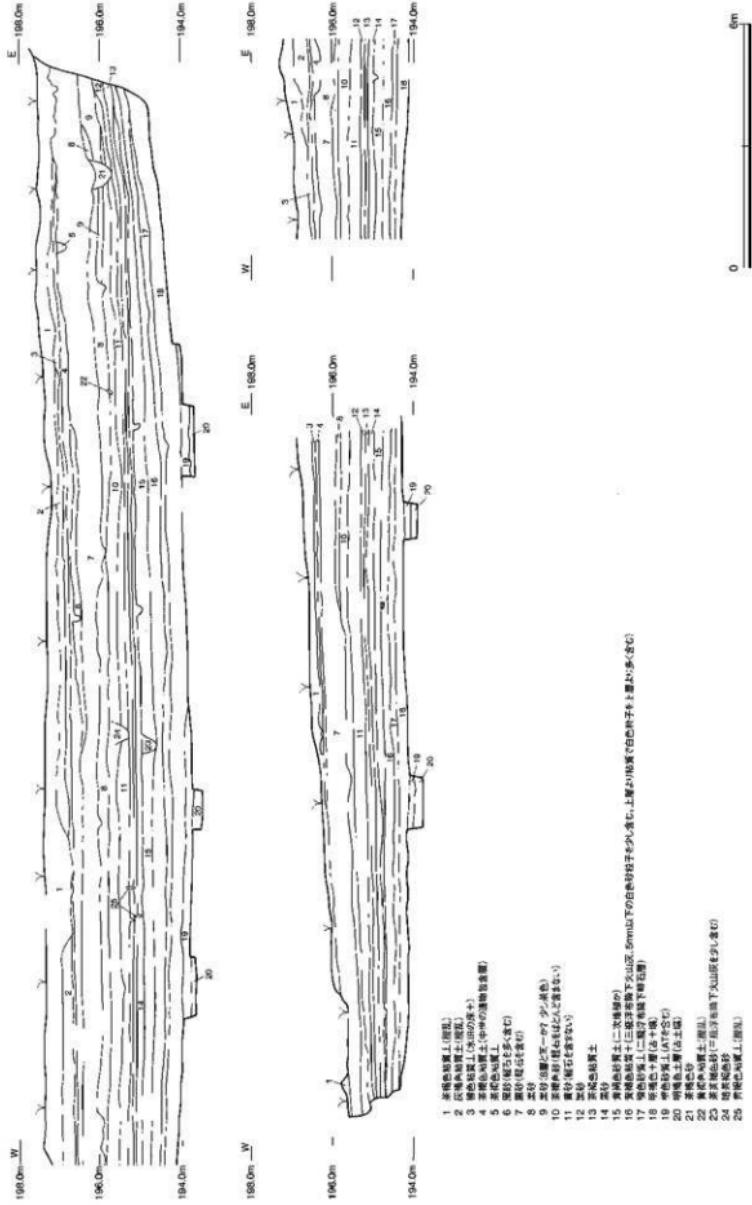




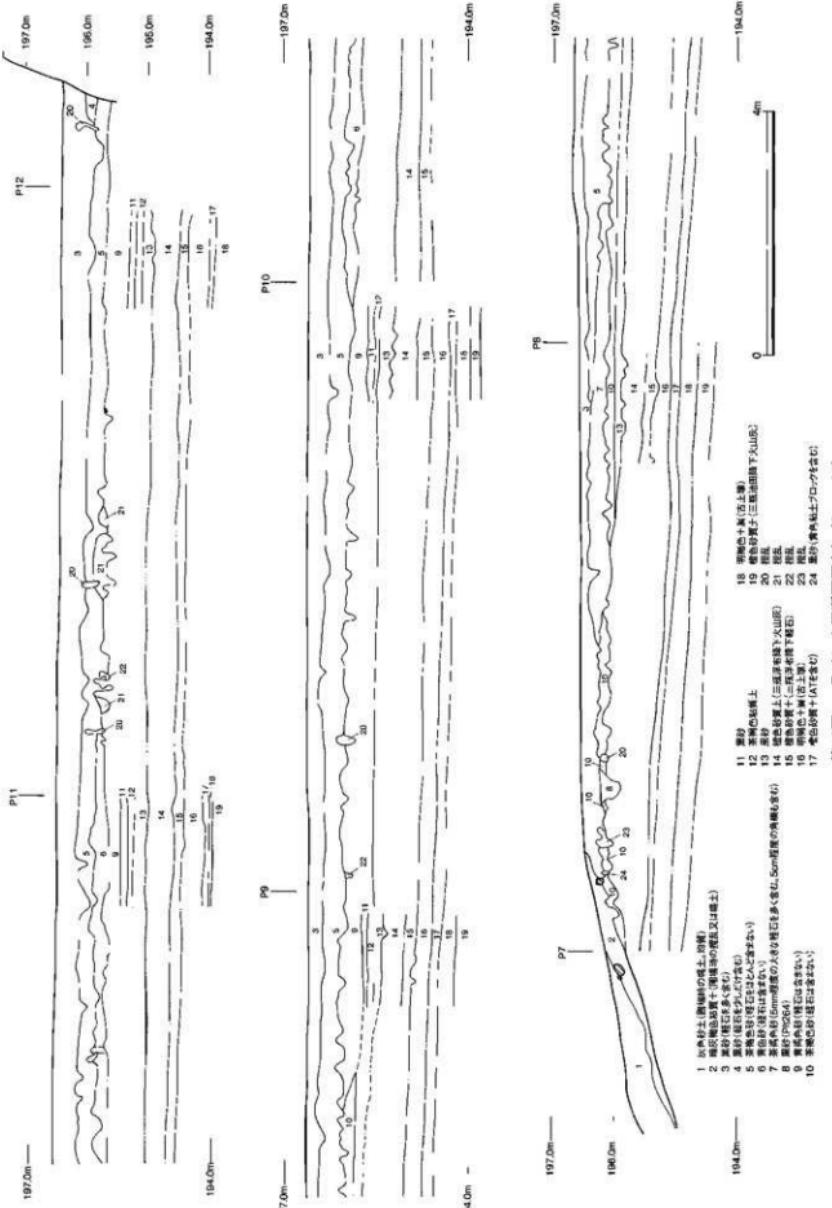
第5図 12・14・15ライン土壌図(S=1/100)



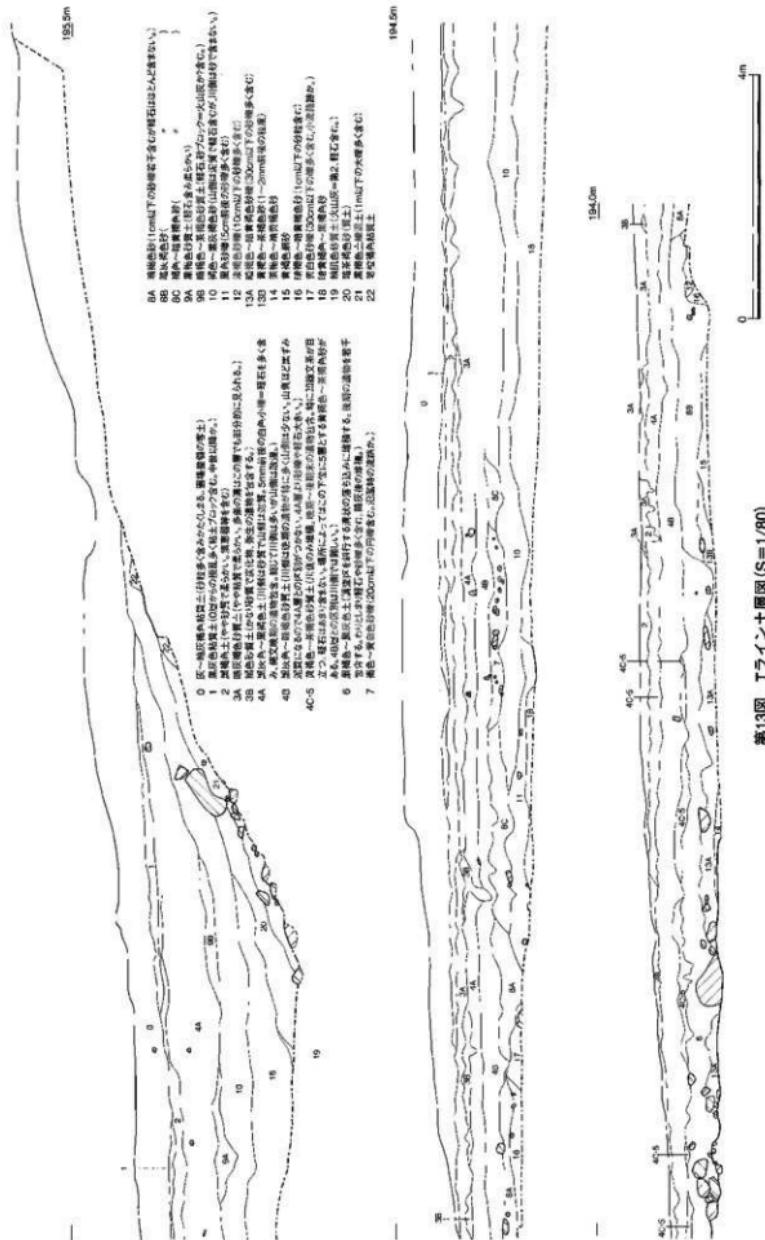
第10図 10ライン土層断面図 (S=1/80)



第11图 北壁及T15附近断面图 (S=1/120, S=1/80)



第12図 ライン土層断面図(1) (S=1/80)



第13図 Tライン土層図(S=1/80)

をもって「幅」、「長さ」と「幅」を計測した状態での最大高を「厚さ」としている。「赤化度」は赤化の部位と有無によってA～Dに区分している。Aは全面赤化、Bは表面赤化で割れ面非赤化、Cは割れ面赤化、Dは全面非赤化である。「破損度」は1～5段階である。1は完形、2は90%以上残存、3は50%以上90%未満残存、4は10%以上50%未満、5は10%未満残存と、縞の自然面が残っておらず残存度が推測できないもの、3cm以下的小縞や細片である。石材は肉眼観察で行っている。縞群は「分布類型」を分類している。縞群を50cmの方格に仕切り、方格内の縞の点数と方格の連なりを基準に分類している。密集型は5個以上の縞により構成。高密度集中型は縞が5個以上の方格を含み3～4個の方格が存在する。集中型は3～4個の方格により形成。低密度集中型は3～4個の方格を含み、1～2個の方格が存在する。分散型は1～2個の方格で形成である。

以上の縞群及び縞の認定と観察、計測については、鈴木忠司氏の指導内容と以下の報告書の縞群の認定基準を参考としている。

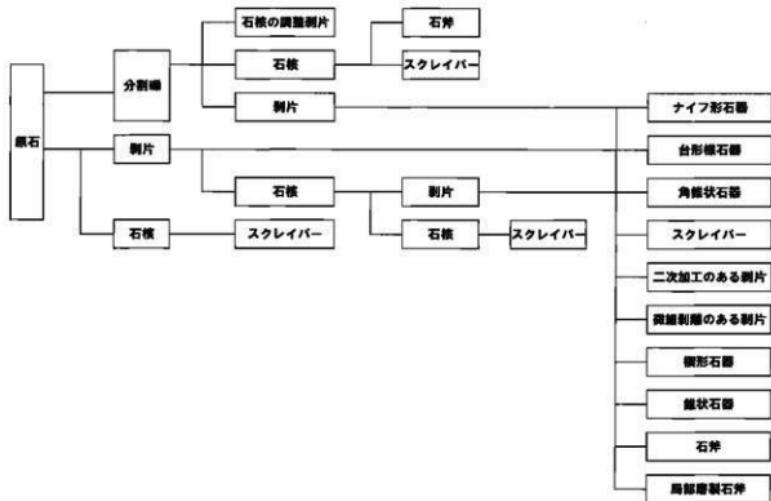
京都文化博物館・鈴木忠司 1994『匂坂中遺跡群発掘調査報告書』

#### 第4節 石器の分類と観察

ここでは、本遺跡で出土した主な石器の分類と計測基準を記述する。

##### 石器の分類

- ・ナイフ形石器-剥片の鋭利な縁辺を刃部にして、その他の縁辺に刃潰しの二次加工(調整)を加えている石器。一側縁加工や二次側縁加工がある。
- ・台形様石器-剥片の縁辺を刃部とした石器である。調整の種類や部位が様々で、両側縁や素材の打面側に調整を施したり、連続する微細な調整や、折断による調整などが存在する。形状や大きさも様々である。
- ・角錐状石器-素材となる剥片の腹面を調整せずに残し、主に残した腹面側から両側縁に二次加工を加え、先端を尖らせた石器である。原田遺跡では断面が台形になるものが多い。素材の腹面にも調整を加える物もわずかに存在する。
- ・スクレイバー-剥片の一側縁2分の1以上に連続した調整を施し、調整した部分を刃部として使用したと考えられる石器である。調整の角度は様々である。調整部位は一側縁だけでなく、両側縁や基部、縁辺全体に施す物がある。原田遺跡のスクレイバーは石核を素材とし、その縁辺に二次加工を施すものが多数出土している。
- ・二次加工のある剥片-剥片の縁辺に1ヶ所以上の明瞭な二次加工が施されている石器である。石核とは区別している。連続する二次加工が一定の距離で施されるとスクレイバーとなる。
- ・微細剥離のある剥片-剥片の縁辺に微細な剥離が1ヶ所以上存在する石器である。意図的な剥離でなく使用痕の一種と考えている。したがって、微細な剥離面が連続するものも存在する。スクレイバーや二次加工のある剥片と区別が困難な場合がある。
- ・ノッチャー-挿入石器とも言う。剥片の縁辺に二次加工により抉りを施した石器である。一度による調整と複数回の調整によるものがある。



第14図 原田遺跡での石器器種分類図(旧石器時代)

#### 石器の実測と計測

- ・剥片は打面を上に設定し、長軸を長さ、直交する最大の長さを幅としている。厚さは最大の厚さである。
- ・石核は、打面を上にしているが、複数打面の場合はまだった剥離の打面を上にしている。
- ・ナイフ形石器や角錐状石器は先端部を上に設定している。
- ・台形様石器は刃部を上にしている。
- ・スクレイパーと二次加工のある剥片、微細剥離のある剥片は長軸を縦に設定している。

## 第4章 旧石器(2～4層)の調査

### 第1節 層位

原田遺跡の3つの旧石器時代の文化層のうち、最も新しい時期の文化層である。2層から4層とされているが、遺物の位置が上方に動いたものが2層や3層で出土したと考えている。しかし、本来の遺物の出土層は4層であると考えている。この4層であるが、前述のように、層相で3つに分けられ、4c層としている軽石層からは石器が出土していない。4a層と4b層は、当初、浮布降下火山灰層として同一層と考えていたが、遺物の出土状況や上層の堆積状況を検討した結果、4層(上)を二分し、上層を4a層、下層を4b層とした。石器に比べて礫は長さや幅が大きく、重いものが多くいたため出土位置の移動が石器に比べ少ないと考えて、4c層(軽石層)の上面と礫の川上面の比高差を検討すると、4c層直上で出土する礫はほとんど無く、4c層上面から一定の間隔あけて上方で出土しているもののが多かった。この間隔が4b層を示している可能性が考えられる。

したがって、本章で述べる2～4層の石器群は本来4a層に属するものであったと考えている。

### 第2節 地形

ここでいう地形とは、層の堆積状態のことである。層の堆積の起伏や層厚の変化がどのような状況であったかを述べたい。しかし、2～4層の地形は細かい点では各層異なっているが、大きな違いは認められないため、4c層を代表して記述したい。

4c層は噴出時の堆積状態そのままである可能性が高く、旧石器時代の調査範囲全体に堆積していた。しかし、6ラインは非常に薄い堆積で、8ラインあたりから徐々に厚くなっている、最も北側の16ラインで最も厚い堆積であった。これは調査区が南から北に地形が徐々に下がっていることに起因していると考えられる。

また、5層上面はOラインに沿って南北に小さな谷地形が存在していた。4層はその谷を埋めるように堆積しており、4a～4c層は周囲に比べ堆積が厚かった。

### 第3節 器種組成

本文化層で出土した石器の一覧は表2である。出土した石器の数は1,750点で、A類(ナイフ形石器やスクレイバー等の狭義の剥片石器類)は353点で20%、B類(剥片とチップ類)が1,309点で74%、C類(石核)が59点で3%である。A類の内、スクレイバーが153点(43%)を占め、本文化層出土石器でも8.7%を占めている。次に微細剥離のある剥片の112点(31%)や二次加工のある剥片の67点(18%)よりも多くなっている。B類は900点が剥片で、409点がチップである。本文化層の器種組成の特徴としては、後述する5層や7層の石器群と比較的してもスクレイバーの出土数の多さ及び組成比率の高さが顕著である。本文化層の時期を推定する石器としてはナイフ形石器があげられるが、11点(本文化層出土石器では0.6%、A類では3%)の出土であった。

表2 2~4層石器ブロック器種組成表

ブロッ ク	剥片	石核	微細削 除のあ る剥片	スクリ ーピー ルのあ る剥片	二次加 工のあ る剥片	ナイフ 形石 器	チップ	楔形 石器	原石	ノッチ	石皿	分割 標	台石	合 計
49	25			1		1	4							31
50	12	2	2	3					1			3		23
51	28	1	4	3	4	1			1			1		43
52	4		3	3	1							1		12
53	20	1	5	4	5	1	10			1		1		48
54	95	4	13	19	9	1	33	1	1			2		178
55	86	2	9	11	4		79	1	2					194
56	110	7	10	19	12		75			1				234
57	15	2	2	4	1		3							27
58	10			1								2		13
59	58	6	5	12	6	1	22	1	1			3		115
60	37	6	4	5	1		3					1		56
61	10	2		3			4							19
62	10													10
63	10	2	4	2								1	1	20
64	27	2	5	12	2		6							54
65	8	2	4	5	1		2							22
66	139	6	16	17	11	2	43	2			1			237
67	60	2	6	14	7		59							148
68	33	1	3	4			14	1						56
外	103	11	17	14	1	4	52	1	1			6		210
合計	900	59	112	153	67	11	409	7	6	3	1	20	2	1750

表3 2~4層石器ブロック石材組成表

ブロッ ク	安山岩	黒曜石	凝灰岩	凝灰 岩石	玉砂	メノウ	碧玉	流紋岩	碧紋岩 質凝灰 岩	水晶	石英	花崗岩	砂岩	玄武岩	頁岩	合 計
49	7	1	6	15	1				1							31
50	9	3	1	1				7		1		1				23
51	14	5	7	4			1	4			1		7			43
52	1			1	7			2				1				12
53	39	3							1		5					48
54	164	1	2	1	5			3				2				178
55	177	4	5	1				3			4					194
56	193	21	2	5				3			10					234
57	21	1	2					1			2					27
58	9	2						2								13
59	108		1	11				3		1	1					115
60	52	2						2								58
61	18			1												19
62	10															10
63	11	1	4	3												20
64	51		1	2												54
65	17	1	3					1								22
66	215	13	2					1	5			1				237
67	140	2		1				3		1	1					148
68	55	1														56
外	156	7	4	7	6	2	1	8	2	1	11		1	1	3	210
合計	1467	68	40	42	20	2	2	45	7	31	36	3	11	1	3	1750

表4 2~4層出土石器器種・石材組成表

	剥片	石核	微細削 除のあ る剥片	スクリ ーピー ルのあ る剥片	二次加 工のあ る剥片	ナイフ 形石 器	チップ	楔形 石器	原石	ノッチ	石皿	分割 標	台石	合 計	
安山岩	754	38	87	141	52	8	379	5	0	3					1467
黒曜石	26	6	10	3	5	1	17								68
凝灰岩	30	2	2	2		1	2								40
凝灰岩質	32	3	1	1	1		2					2			42
玉砂	8		6	3			2	1							20
メノウ		1				1									2
碧玉	1		1												2
流紋岩	18	1	1	1	1		5	1			17				45
流紋岩質	4	1	1	1			1								7
水晶			1					1	1						3
石英	18	6			7			4			1				36
花崗岩	2														3
砂岩	5	1	2		1						1		1		11
玄武岩				1											1
頁岩	2			1											3
合計	900	59	112	153	67	11	409	7	6	3	1	20	2	1750	

## 第4節 遺構と遺物

### (1) 遺構分布(第15図～第17図・第21図・第124図)

本文化層で出土した石器と礫は第15図のように出土地点がほぼ重なっている。出土位置は調査範囲の中央で、ちょうど傾斜が緩くなったところから平坦面にかけて分布している。石器と礫は主に南北方向に列状で分布する傾向がある。これらの石器や礫の分布や検出状況から認定した遺構は、石器ブロック20ヶ所、礫群10基、炭化物ブロック1ヶ所である。各石器ブロックは面的に重複していると考えられるものも存在するが、分離することができなかつたため、便宜上、図上で各石器ブロックを分けている。

石器ブロックは分布密度の違いがそれぞれ認められるが、20ヶ所認定している。石器ブロックは大きく、5つのまとまりに分けられる。

第1は石器ブロック49～51の一一群で、調査区の北側に分布している。第2は石器ブロック53～57で、北東から南西にかけて分布しており、特に、54～56の分布密度が高くなっている。第3は石器ブロック58～65でさほど石器の分布密度の高くない石器ブロックの一群众である。北北東から南南西にかけて分布している。第4は石器ブロック66～68で南北に分布している。第5は石器ブロック52のみである。このブロックは周辺から石器や礫群が全く出土しておらず、1ヶ所のみ離れて検出されている。また、他の石器ブロックは3層か4層で石器が出土しているが、石器ブロック52はわずかに2層の下部にまで石器が確認されている。この石器ブロックの特殊性は後の石器ブロックの記述で述べたい。

第124図では石器ブロックと礫群の分布の重なりを図示している。礫群は10基検出されているが、礫群37のみが石器ブロックと分布の重なりが確認されていない。本文化層は石器ブロックと礫群が重複して見られるようである。

炭化物ブロックは石器ブロック54と55をまたぐように1ヶ所確認されている。周囲から焼けた礫は多数確認されているが、特に分布に偏りは見られず、礫群と考えられるものもなかった。したがって、この炭化物ブロックは礫群に関係したものではないと考えられる。

### (2) 磕群(第5表・第18図～第20図)

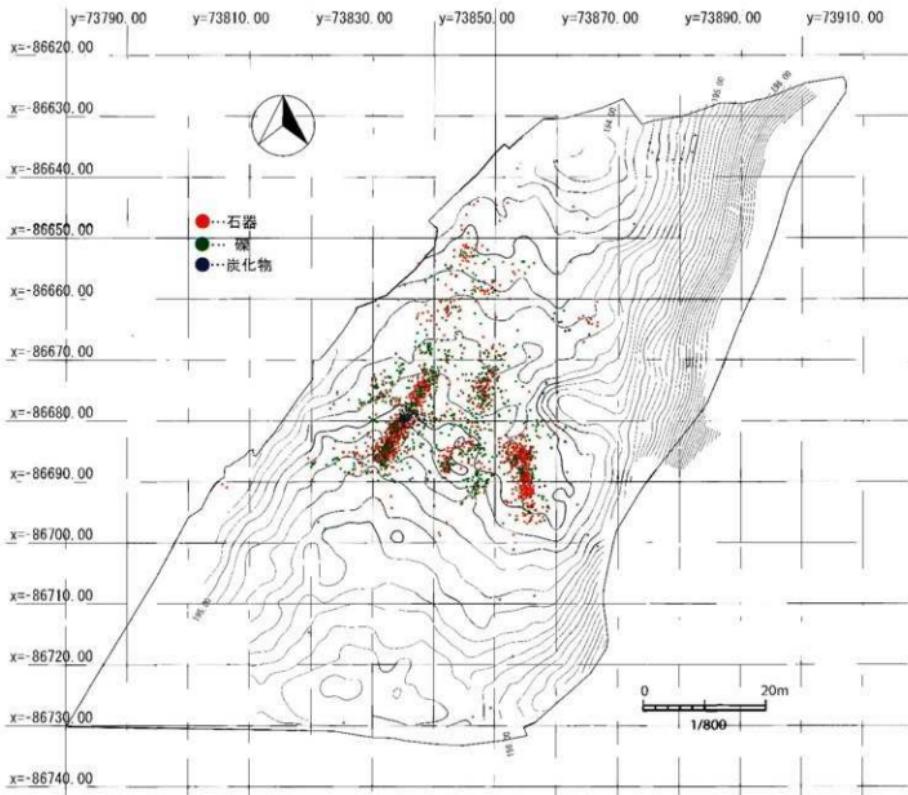
10基を礫群として認定したが、礫群以外の礫の出土数は非常に多く(第16図)、類型が「分散」として認定できるものはかなり存在したと考えられるが、調査中に認定したものを礫群として今回は報告する。

確認された礫群はそれぞれ規模や構成礫の様相が異なっている。本文化層の礫群は構成礫の数が6～20点で、1基の平均構成礫数は12点である。5層では構成礫数が100点を超えるものも多くあり、平均52点となっている。以上から2～4層の礫群の構成礫数は非常に少ないといえる。

赤化は全て「八」であるが、破損度は「1」の比率が高い礫群37や「4」が多い礫群55～57があり、「5」を含む礫群も存在している。

石材は凝灰岩が多く、礫群55と59で花崗岩の比率が高くなっている。

規模と類型は関係が深いと考えられる。本文化層では類型は「分散」が多く、「集中」は見られなかった。「分散」が多いためか、構成礫は少ないが礫群の長軸が2mを超える大型のものも存在している。

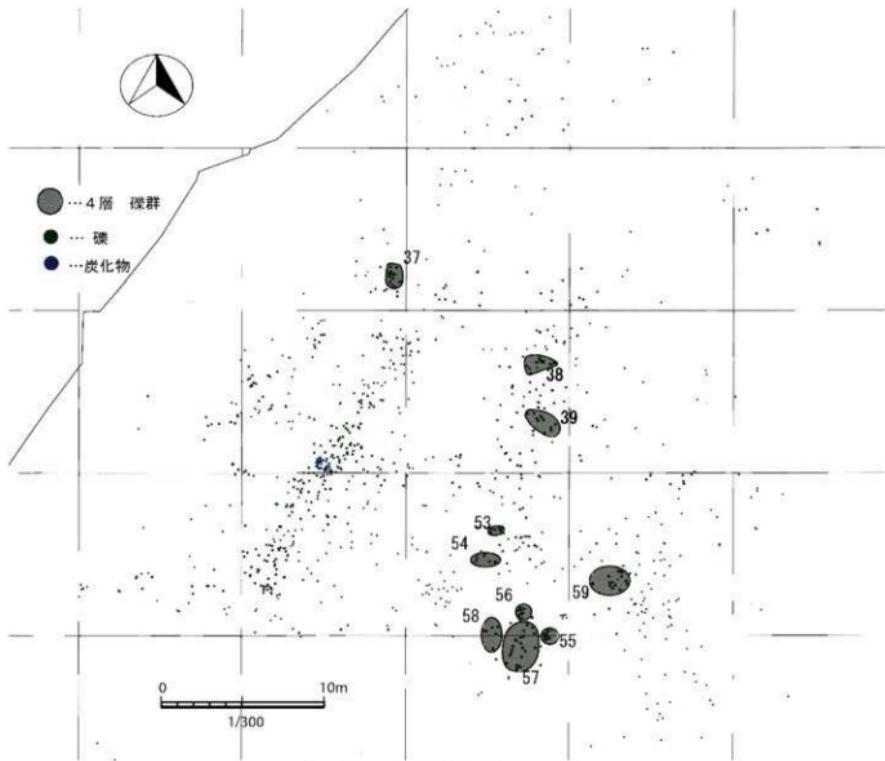


第15図 2～4層遺物出土状況図 (S=1/800)

縄群間の接合は、第17図に示している。縄群間での接合が見られるものは、縄群53・55～58がある。縄群38・39・54のように縄群とならなかった縄と接合する場合もある。縄群間あるいは縄群以外の縄とも接合しない縄群は縄群37と59である。縄群55～58は近接した縄群であるが、相互に接合関係も認められており、縄群の使用を考える上で興味深い例である。以下に個々の縄群の詳細を説明する。

#### 縄群37(第18図)

平坦なQ13グリッドで検出された縄群である。石器ブロックの間で検出されたため、本文化層で唯一石器ブロックとの重複が認められなかった縄群である。最も近くに分布する縄群は縄群38で9m程離れている。構成縄の長さの最大値と最小値が本文化層中で最も小さい。縄の石材のほとんどは凝灰岩であるが、破損していない縄が多いが、小片となった破損度「5」の縄が存在することが特徴である。4c層上面からおよそ30cm上方で縄が出土しており、この面が4b層上面の可能性がある。縄群内及び縄群間接合は認められなかった。



第16図 2~4層礫群位置図 (S=1/300)

#### 礫群38(第18図)

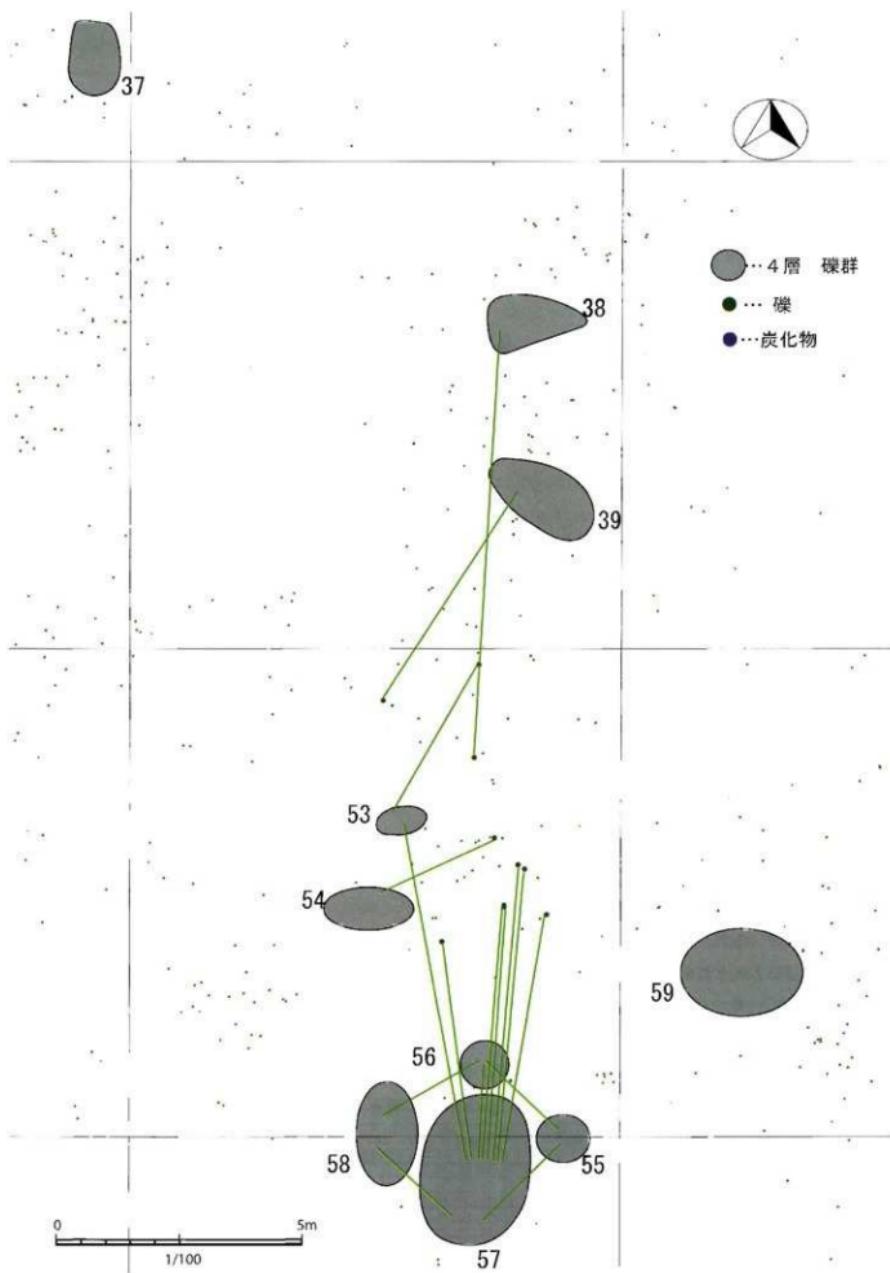
類型が「分散」の礫群である。赤化した礫がまばらに分布している状況であるが、礫の底面の標高差はほとんど無かった。礫の石材は全て凝灰岩であった。礫群内及び礫群間での接合はなかったが、約8.7m離れた礫群外で出土した礫と接合した構成礫が存在する。

#### 礫群39(第18図)

礫群38の南約2mで発見された礫群である。礫群38と同様に「分散」である。石材は凝灰岩が多い。

表5 2~4層礫群一覧表

構成名	グリット	特徴	構成 磨耗												規 模	炭化物	集積する 礁群	礁群間 接合	分布 類型			
			側面 最大高さ(小方)	高さ(cm)	A	B	C	D	1	2	3	4	5	元礫	側面 最高点-底 部	地 質 構 造 等						
礁群37	Q13	-	14	8.4	7.1	6.3	14	0	0	0	9	1	0	2	2	1	0	13	0	1.3	0.6	-
礁群38	P12	-	11	15.2	5.0	8.9	11	0	0	0	3	1	3	4	0	0	0	11	0	18	1.8	- プロト59
礁群39	P12	-	12	10.6	6.5	3.4	12	0	0	0	2	0	2	0	2	1	0	11	0	2.6	1.0	- プロト80
礁群51	P11	-	6	13.5	5.8	10.2	6	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	5	0	1.6	0.8	- プロト63 磯群57
礁群54	T8	-	7	19.2	6.3	13.7	7	0	0	0	1	1	1	4	0	1	0	6	0	1.9	0.9	- プロト63
礁群55	T8/9	-	20	16.4	6.0	11.2	20	0	0	0	5	0	3	12	0	0	0	12	0	0.8	0.4	- プロト65 磯群56-57
礁群56	P11	-	14	22.7	4.3	9.5	14	0	0	0	1	0	1	12	0	3	0	12	0	1.0	0.6	- プロト65 磯群56-58
礁群57	P10/H1	-	18	14.2	4.3	8.7	18	0	0	0	1	0	0	18	0	1	0	17	0	2.6	1.1	- プロト65 磯群56-57 分散
礁群58	P10/H1	-	6	14.0	7.0	10.0	6	0	0	0	2	0	0	4	0	0	0	6	0	1.5	0.9	- プロト65 磯群56-57 分散
礁群59	H1	-	13	14.8	3.9	9.8	13	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	6	0	1.3	1.3	- プロト66



第17図 2~4層磁群接合関係図 ( $S=1/100$ )

く、破損度「5」の礫も存在していた。礫群内の接合は1個体2点である。礫群内の接合は無かったが、約5m離れた礫群外出土の礫と接合している。

#### 礫群53(第19図)

礫群54の北東に近接して作られていた礫群である。礫群はわずかな傾斜のある平坦な地形にあった。構成礫は北側に偏っており、礫群内の接合は1個体3点である。また6mほど離れた礫群57と接合関係が確認された。

#### 礫群54(第19図)

凝灰岩主体の礫群である。破損したものが多かったが、構成礫の長さ(平均値)は13.7cmで最も大きかった。礫群内及び礫群間で接合できた礫は無かったが、礫群外の礫と接合している。

#### 礫群55(第19図)

礫群56～58と隣接した高密集の礫群である。これらはわずかな傾斜の緩斜面に形成されている。構成礫の大きさの平均値も16.4cmと大きく、破損度も「1」と「4」が多く、破損度「1」は花崗岩である。礫群56～58と同様に石器ブロック65と重複している。礫群内の接合は6個体12点あり、礫群56と57との間で接合関係が認められた。礫群外の礫とも接合している。

#### 礫群56(第19図)

礫群55よりは構成礫間が空いている礫群であるが、高密集とした礫群である。最大長が22.7cmの構成礫があり、本文化層の礫群中で最も大きい。この礫は礫群の構成礫としてはかなり大型であるため、台石等として使用された礫の可能性がある。礫群内で2個体7点の接合が確認された。また、礫群55・57・58と礫群間接合が確認されている。礫群外の礫とも接合している。

#### 礫群57(第20図)

本文化層で最も広範囲に礫が分布している礫群である。分布類型は「分散」である。礫群55・56・58とは隣接している。非常に緩い斜面に形成されている。構成礫のほとんどは凝灰岩で破損度合いが高かった。礫群内で2個体4点の接合が認められた。また、礫群53・55・56・58との間で接合が確認されている。礫群外の礫とも多数接合しており、約5～6m離れた数点の礫との接合関係が存在している。

#### 礫群58(第20図)

全て凝灰岩の礫群である。分布は非常に分散しておりまとまりはない。礫群内の接合は無かったが、礫群56・57と礫群間接合が確認された。礫群外の礫とも接合している。

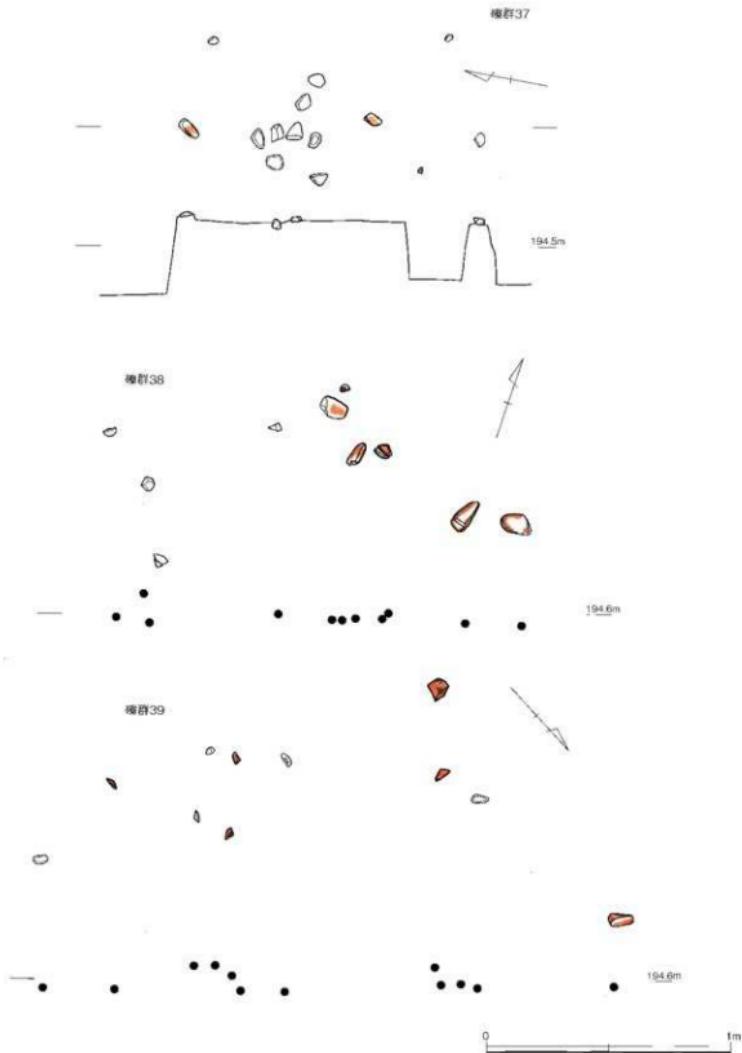
#### 礫群59(第20図)

平坦面に作られた礫群で、礫が広範囲に分布している。石器ブロック66と重複している。礫群の南側に5点ほどの礫のまとまりが見られるが類型は「分散」である。散漫な分布状況であるが、礫の上下移動はほとんど認められない。礫群内及び礫群間接合は認められなかった。

### (3) 石器ブロックと出土石器(第21図～第38図)

#### 石器ブロック49(第22図・第23図)

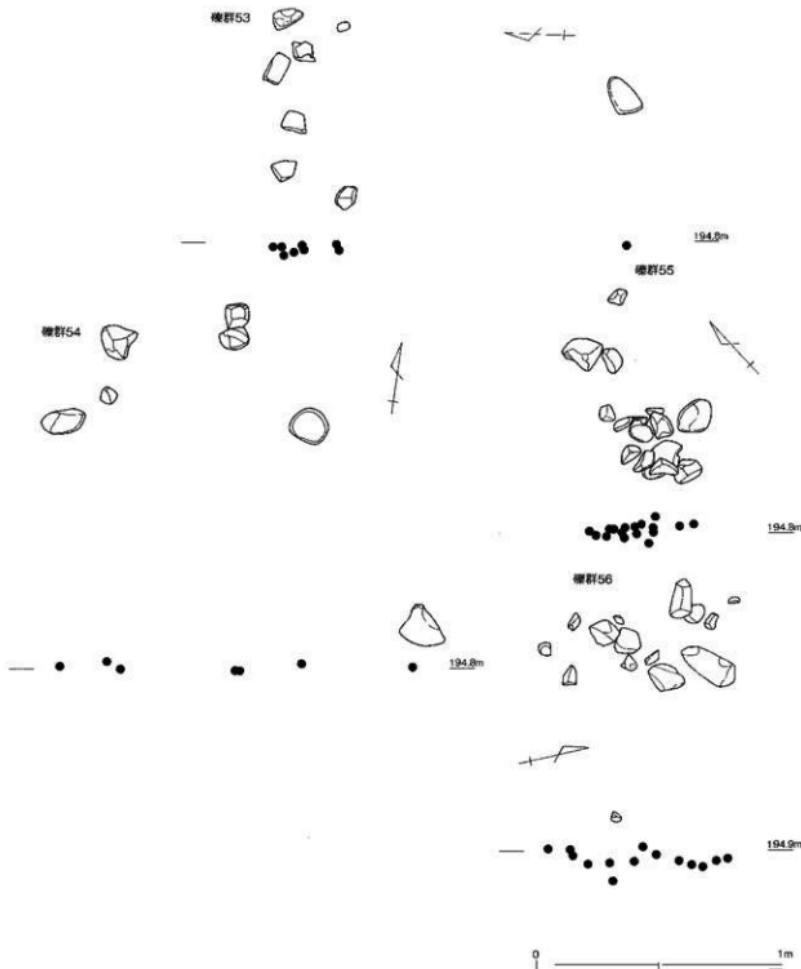
P14グリッドに検出された石器ブロックである。本文化層の石器ブロックの中で最も北に形成されている。石器の出土数は31点で、A類が2点、B類が29点である。A類はナイフ形石器とスクレイバーがそれぞれ1点ずつ出土している。B類は剥片が25点で、チップが4点である。石核は出土



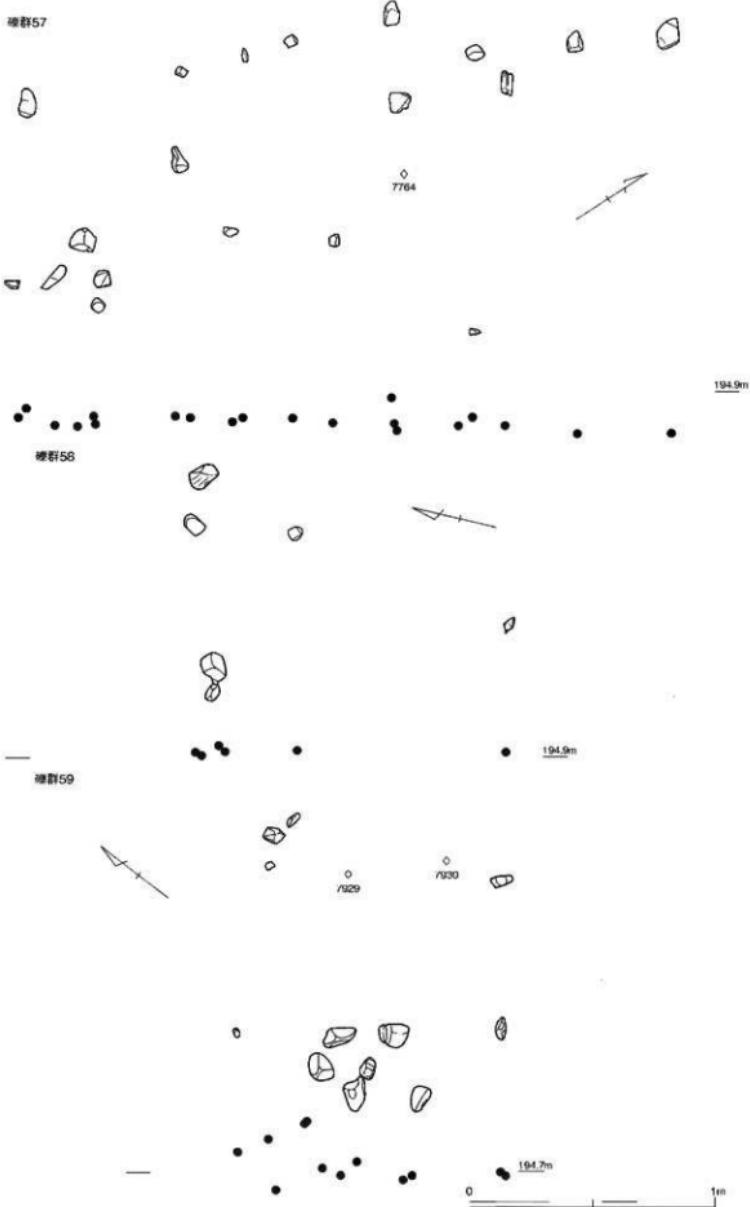
第18図 2~4層標群37~39実測図 ( $S=1/20$ )

していない。ブロック内の石器分布であるが、ブロックの北東部に石器が集中している。ナイフ形石器とスクレイパーは隣接して出土している。出土した石器は30cmの幅で上下の移動が認められる。石材比率は凝灰岩(凝灰岩Bも含む、以下同様)が21点(67%)と最も多く、安山岩が7点(22%)で肉者がほとんどを占めている。黒曜石と流紋岩が1点ずつ出土している。

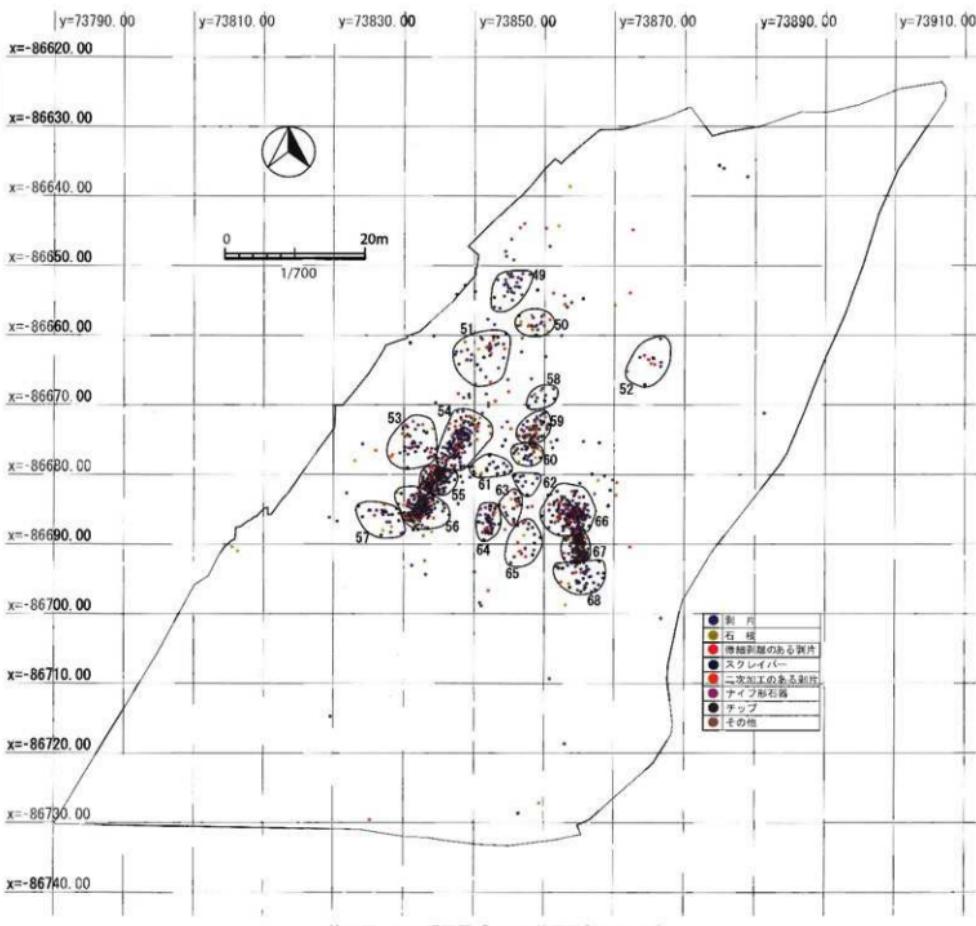
第23図10408は凝灰岩製のナイフ形石器である。厚みのある縦長剥片を素材とし、二側縁の基部に調整を施している。素材となる剥片の長さは短く、また打点が残っている。調整は腹面と背面の



第19図 2~4層櫻群53~56実測図(S=1/20)

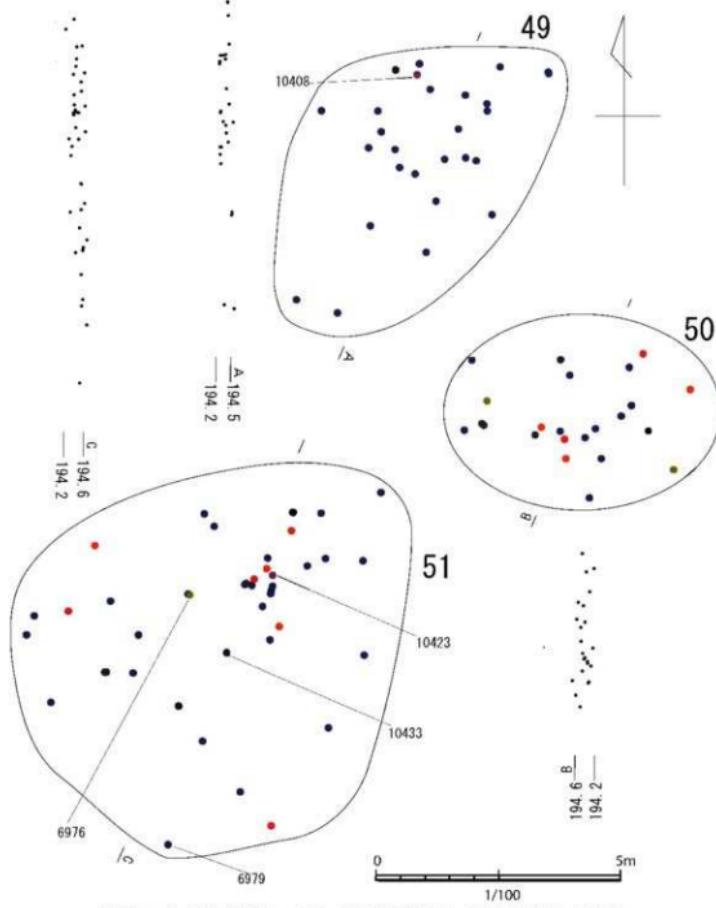


第20図 2~4層地群57~59実測図 ( $S=1/20$ )



第21図 2~4層石器ブロック位置図 (S=1/700)

肉面から施されている。10423は縦長剥片を素材としているが、長さは10408と同様に短い。右側縁に調整剥離を加えている。先端部と基部の剥離は製作時か使用時の欠損と考えられる。素材剥片には打点が残っていない。器種は一側縁加工のナイフ形石器と思われるが、二側縁加工であった可能性もある。10433はスクレイバーである。一側縁に連続した急斜度の調整を施している。上半は欠損している。6976は凝灰岩製の石核である。縦長剥片を剥離しているが、長い剥片は数枚しか剥離できていない。打面は複設打面である。作業面に見られる左右からの剥離は石核調整である。原田遺跡ではこの石核から剥離された剥片あるいは類似した細長の剥片は認められなかった。6946は寸詰まりな剥片である。作業面と主要剥離面の剥離方向は上方からである。6945は自然面が残る剥片

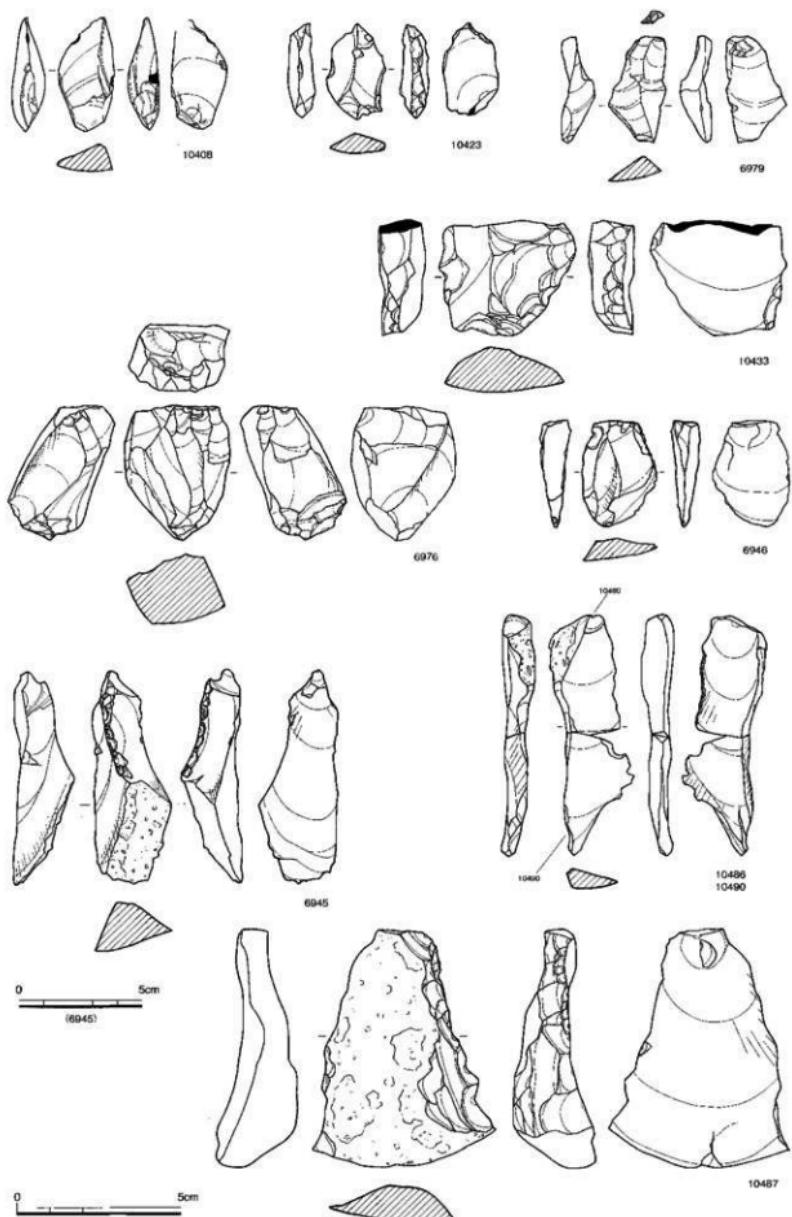


第22図 2~4層石器ブロック49~51出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

であるが、背面の稜線上に連続する調整が施されており、スクレイパーとしている。10486・10490は接合した微細剥離のある剥片である。調査時の破損により接合部分は完全な接合とならなかった。10487は剥片素材のスクレイパーである。右側縁に大きな剥片を加えた後、上半部に微細な調整剥離を施している。

#### 石器ブロック50(第22図・第23図)

ナイフ形石器などの主要な器種が出土していない石器ブロックである。石器ブロック49と51に近く、それぞれの分布に意味が存在する可能性があるが、接合関係はない。A類が5点、B類が剥片のみ12点、C類が2点である。A類は二次加工のある剥片と微細剥離のある剥片である。石器の石材比率は39%が安山岩で、30%が流紋岩、13%が黒曜石となっており多様である。



第23図 2~4層出土石器実測図(1) (S=2/3)

#### 石器ブロック51(第22図・第23図)

およそ8mの不定型な円形の範囲に43点の石器が出土した石器ブロックである。A類がナイフ形石器1点を含み12点出土している。B類は剥片のみ28点でチップは出土していない。石核は1点のみ出土している。石器の石材組成は安山岩14点(32%)で最も多く、凝灰岩(凝灰岩Bも含む)11点(25%)、砂岩7点(16%)、黒曜石5点(11%)、流紋岩4点(9%)、碧玉と石英が1点ずつと多様な石材が出土している。

第23図10423はナイフ形石器としている。安山岩製である。縦長剥片を素材とし、右側縁に調整を加えている。先端は二次加工ではない。6979は玉髓製の剥片である。縦長剥片で、背面に自然面が残っている。腹面と背面の両面とも上方よりの剥離で、打面が固定されている。石材の産地分析により花仙山産であると判明している。

#### 石器ブロック52(第29図・第23図・第40図)

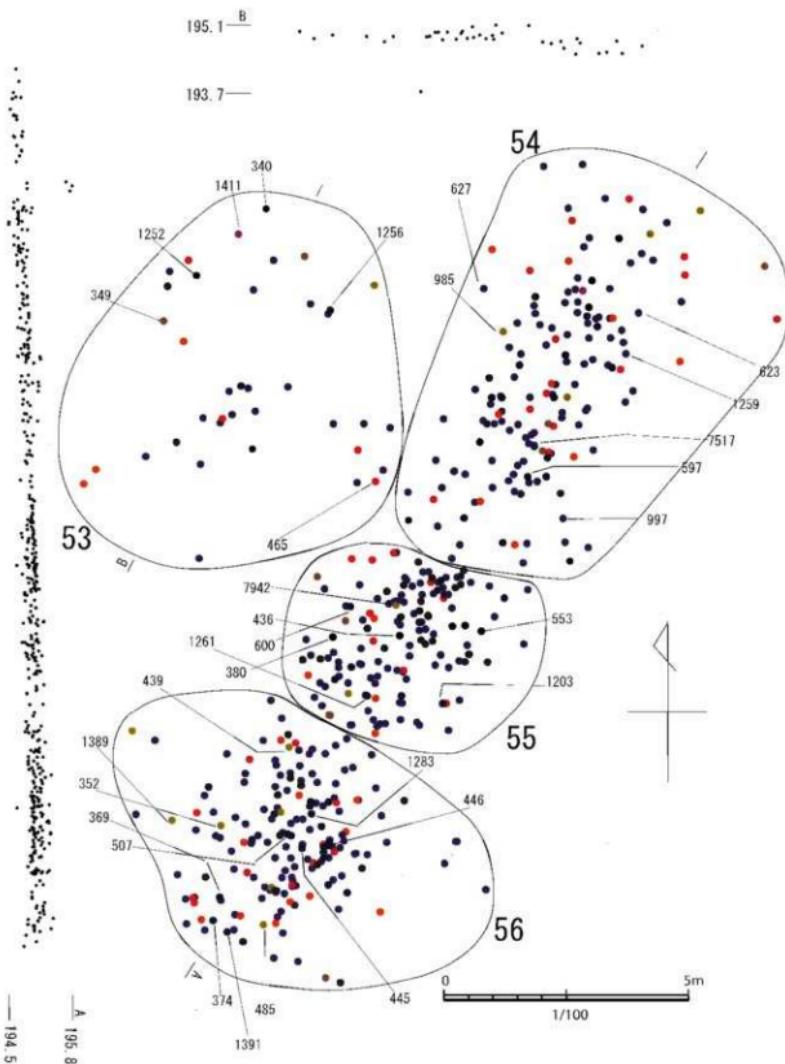
出土石器数が12点と非常に少ないが、分布範囲を広く設定した石器ブロックである。本文化層で唯一斜面に検出された石器ブロックである。本ブロックの周囲には斜面であるためか3・4層の堆積が薄いため、石器は2層下部まで出土している。石器の出土分布は、ブロックの中心に石器が集中して出土している。同じ文化層の他の石器ブロックとは距離を空けて分布している。石器組成はA類が7点で、B類が4点である。石核やチップは出土していない。A類の出土比率が高く、道具として使用された石器の比率が非常に高い石器ブロックである。

第23図6946は微細剥離のある剥片である。石材は流紋岩で、比熱している。素材の打面が残存している。6945はスクレイパーである。自然面が残る縦長剥片を素材とし、背面の稜線上に一方向からの調整が施されている。しかし、スクレイパーの調整部位が素材の両側縁ではなく、背面の稜線上に施されている点から、縦長剥片を剥離する前に施されていたと考えることもできる。石材は流紋岩である。10486・10490は縦長剥片の接合資料である。石材を玉髓としているが、玉髓周辺の珪質化していない部分で、いわゆる「カド石」と呼ばれるものである。10487は縦長剥片素材のスクレイパーである。背面には自然面を大きく残している。素材の打面も残存している。石器ブロック52で出土している玉髓は珪質化しておらず、本ブロックで出土した流紋岩の一群と本来同じ石材であったと考えている。

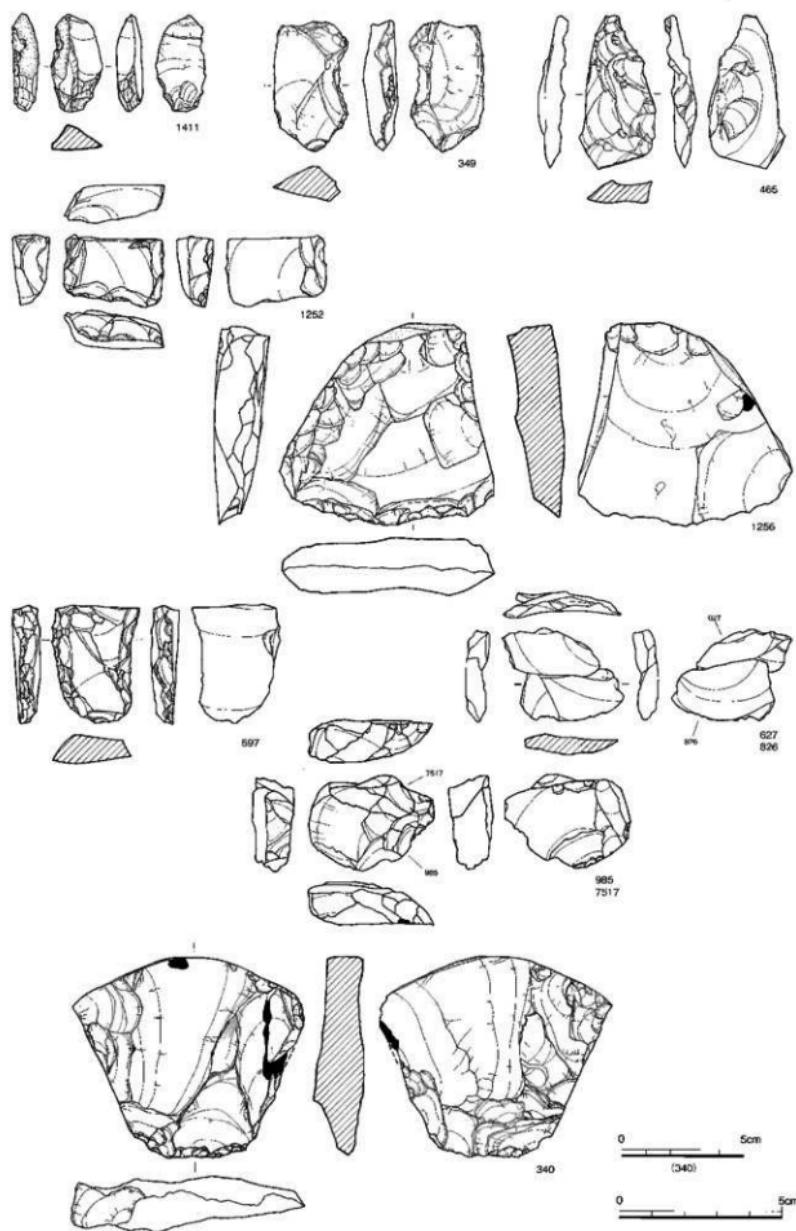
#### 石器ブロック53(第24図・第25図)

石器ブロック54から56は石器の出土分布が列状となっているが、石器ブロック53はその西側に分布する石器ブロックである。ブロックの範囲内に極端なまとまりは認められないが、南東の一群は石器ブロック54に含まれる可能性ある。石器組成はナイフ形石器から石核、剥片、チップなど多岐にわたっている。石材は81%が安山岩で、10%が石英となっている。

第25図1411は黒曜石製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、基部の両側縁に調整を施している。背面には自然面を残している。素材となる剥片は上下からの剥離面が認められる。上方は欠損している可能性がある。349はノッチ(抉入石器)である。横長剥片を素材とし、素材の打面側に調整を施している。465は微細剥離のある剥片である。黒曜石製で左側縁に使用痕と思われる微細な剥離が認められる。素材は横長剥片で打面が残っている。複設打面である。1252と1256は安山岩製のスクレイパーである。この二つは石核として使用され、その後スクレイパーに転用されたものと考えられる(石核転用スクレイパー)。1252は板状素材の縁辺で剥片を剥離した後、微細な調整



第24図 2~4層石器ブロック53~56出土石器平面・垂直分布図 (S=1/100)



第25図 2~4層出土石器実測図(2) (S=2/3)

を縁辺に施している。1256も板状剥片の縁辺から剥離を施し、その後、微細な調整を施している。剥片の剥離は背面で行われている。右側面の剥離面は折断によると考えられる。自然面が周囲に残っているが、円錐に近いようである。

#### 石器ブロック54(第24図・第25図・第40図・第41図)

列状に並ぶ石器ブロックのもっとも北に分布しているブロックである。北東から南西に石器が分布している。器種組成はB類が全体の71%を占めている。A類も23%(42点)であるが、その内、微細の剥離のある剥片が13点(30%)でスクレイパーが19点(45%)である。石材も安山岩が92%である。玉髓の比率は2.8%と低いが、5点も出土している。

第25図597はスクレイパーである。縦長剥片素材で腹面からの調整を縁辺に施している。627・826は剥片の接合資料である。627が石器ブロック54から、826が石器ブロック63で出土している。2点とも横長剥片である。985+7517は本ブロック内で接合した資料である。985が石核で、7517が剥片である。石核は何点もの剥片を認められる。剥離面から推測すると打面転位を繰り返しながら横長剥片を剥離しつつも、寸詰まりな剥片が剥離されているようである。

#### 石器ブロック55(第24図・第26図)

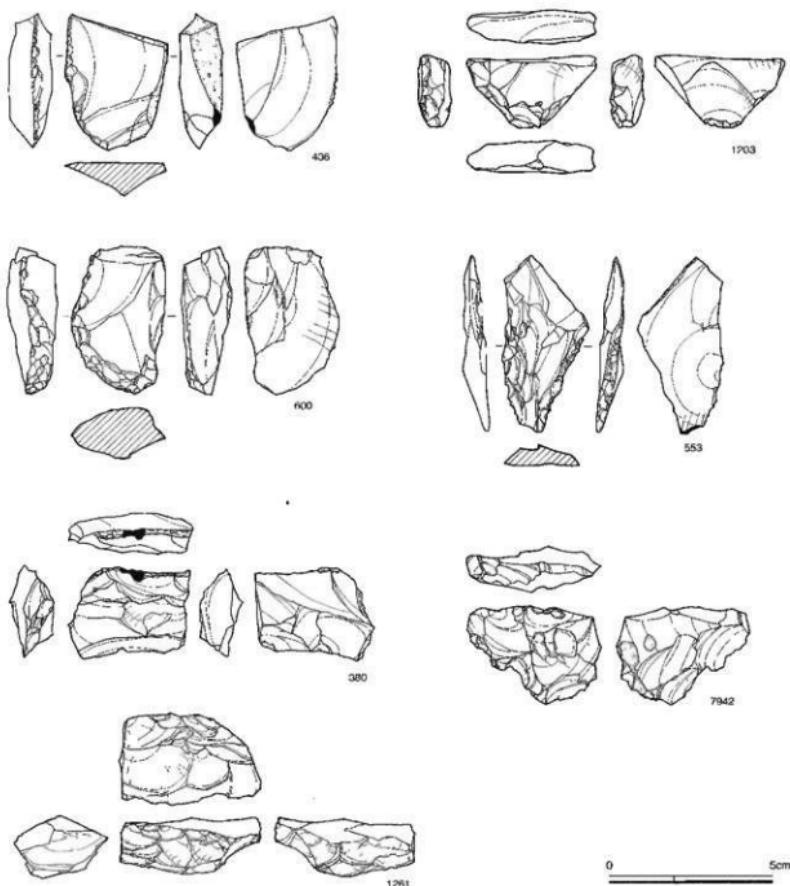
石器ブロック54と56に挟まれた石器ブロックで、178点の石器がおよそ5mの円内から非常に密集して出土している。石器組成はA類が12%で、B類が84%である。石材組成は安山岩が91%と非常に高いが、黒曜石や石英等も数点出土している。

第26図436・1203・600・553・380・1261はスクレイパーである。1203・600・380・1261が石核転用スクレイパーと考えている。全て横長剥片を剥離している。剥片の幅が3cm前後のものが多いようである。436と553は剥片素材のスクレイパーである。1203の上面と380の右側面は折断による剥離である。600の調整は丁寧に施されている。7942は石核である。黒曜石製で、自然面の凹みが剥離されずに残っている。剥片の剥離は打面と作業面の転位が頻繁に行われている。剥片は横長剥片を剥離している。

#### 石器ブロック56(第24図・第27図・第28図)

石器ブロック55の南西に隣接して分布する石器ブロックで、石器ブロック54と55と列状に分布している。55と同様に石器の密集地帯が幅5m程で分布しているが、その周囲からも石器が出土しており、55に比べブロックの範囲が広くなっている。石器の出土点数は234点で石器ブロック66の237点に次いで、本文化層中2番目に出土点数が多い。石器の組成比率はA類が42点(17%)で、B類が185点(79%)である。C類の石核も7点(2%)と本文化層で最も多く出土している。石材組成は安山岩が82%で、隣接する石器ブロック54と55より10%ほど低くなっている。その代わり、黒曜石が8%(21点)で、石英が4%(10点)と比率が高くなっている。

第27図281・445・1283・507・369・374・第28図1391はスクレイパーである。その内、第27図507と374、第28図1391が石核転用スクレイパーである。スクレイパーは調整部位と調整方向がそれ異なっており、腹面からの調整を一側縁に施す第27図445や、一側縁は腹面から、さらに一側縁には背面からの調整(交叉剥離)を施す446や1283、側縁全てに調整を施す352や507、背面からの調整を一側縁に施す369、腹面からの調整を二側縁に施す374、厚みのある石核を用い、打面からが細かな調整を急斜度に加える第28図1391などが存在する。これらは同じスクレイパーという分類となっているが、使用方法が異なっていることが当然予想される。第28図439・485・1389は石核である。

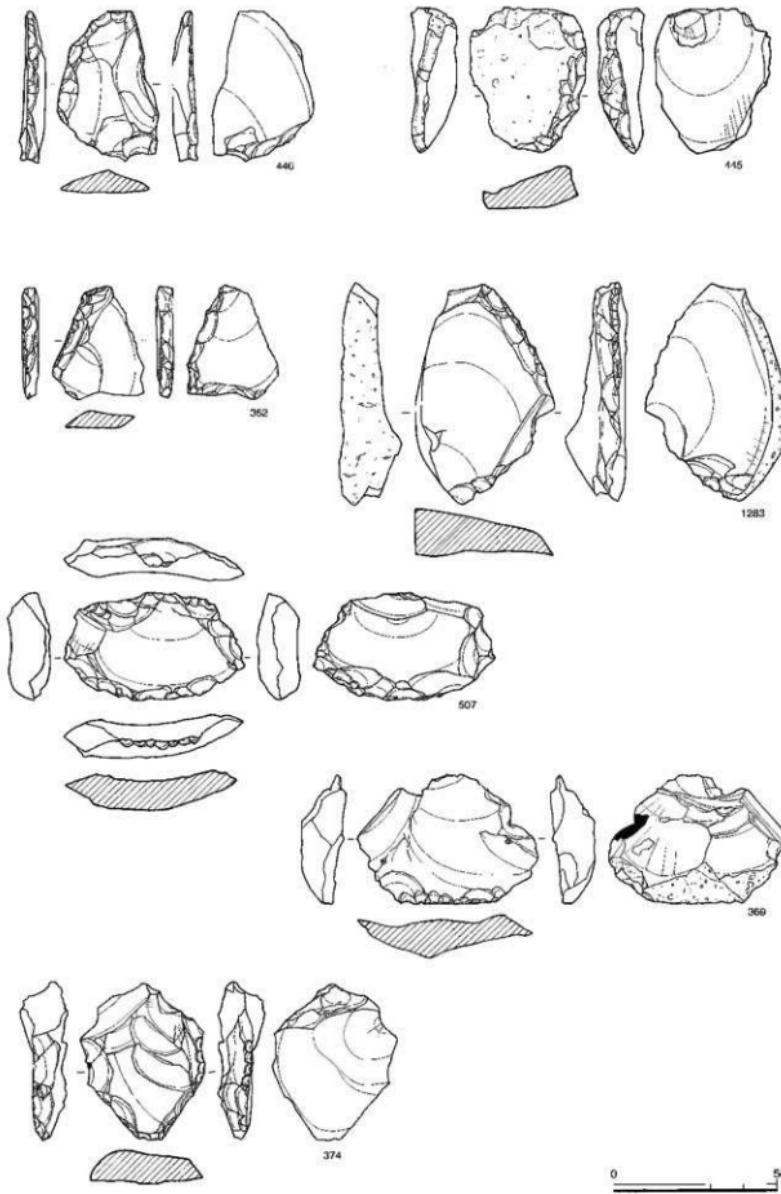


第26図 2~4層出土石器実測図(3) (S=2/3)

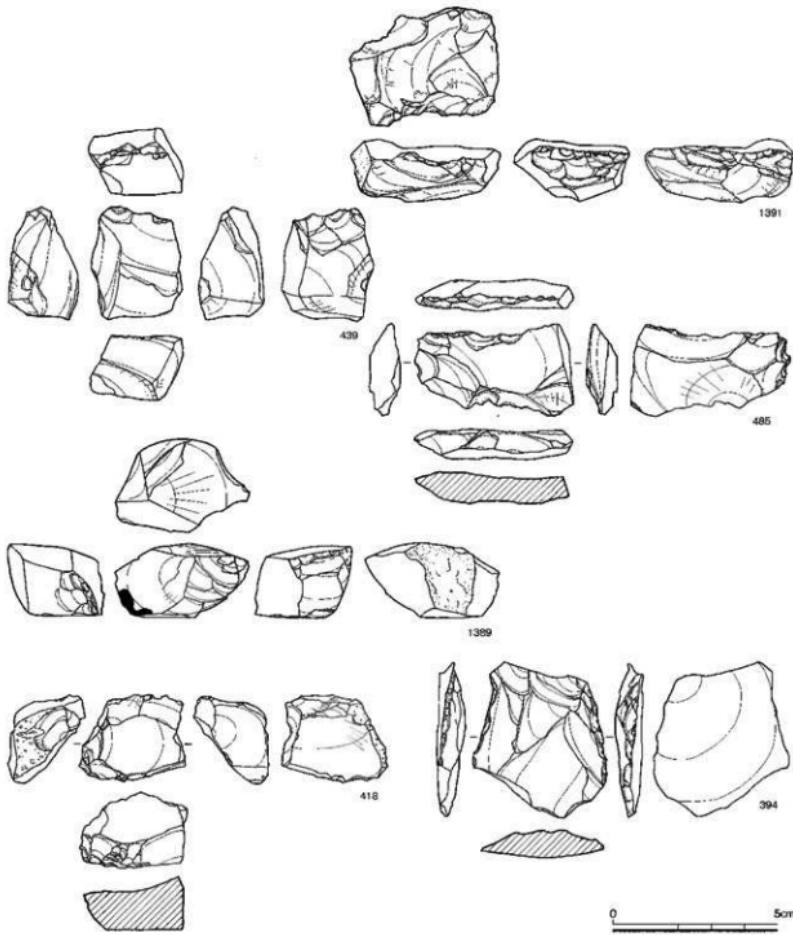
439のみ凝灰岩Bで、それ以外は安山岩である。439と1389は厚みのある石核で、打面を転位しつつ、幅広の剥片を剥離しようという意図が感じられるが、小さな剥離面も多く見られる。1389は細かい剥離面が連続して施されていることから右核転用スクレイパーとなる可能性もある。485は板状の剥片素材の石核で、横長剥片を剥離しているが、寸詰まりな横長剥片が多いようである。右側縁は折断による剥離と見られる。

#### 石器ブロック57(第28図・第29図)

石器ブロック56の南南西に隣接する石器ブロックである。石器ブロック54や55.56に比べ石器の出土数も27点と非常に少ない。また、分布密度も散漫である。石器の器種組成はB類が66%(18点)であるが、剥片がその内15点出土している。A類は25%でスクレイパーが4点(14%)で割合が高い。



第27図 2~4層出土石器実測図(4) (S=2/3)



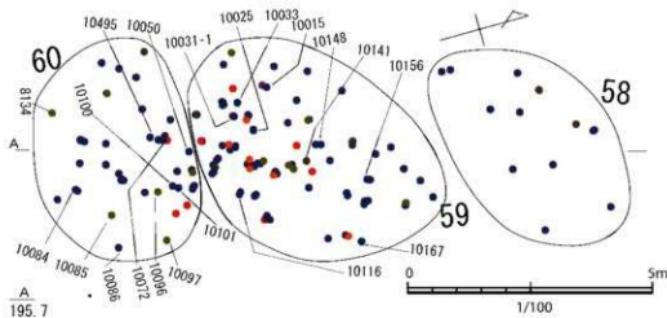
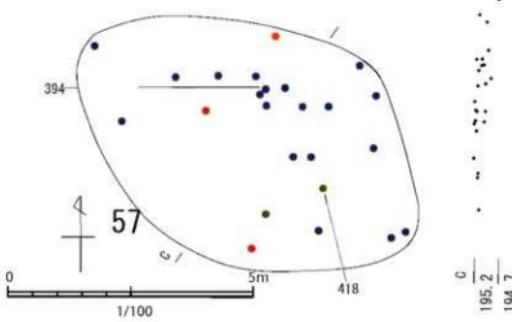
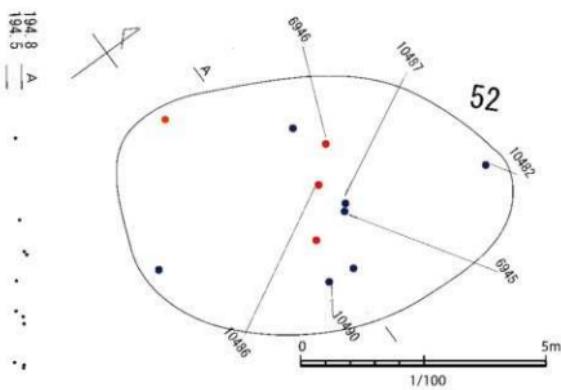
第28図 2～4層出土石器実測図(5) (S=2/3)

石材の77% (21点) が安山岩で、それ以外は1、2点ずつである。

第28図418は安山岩製の石核である。418は分厚い石核で、右側縁に大きな剥片が剥離されている。下側縁の下方からの剥離はスクレイパーに転用するための剥離かもしれない。394は剥片素材のスクレイパーで腹面から二側縁に調整が施されている。

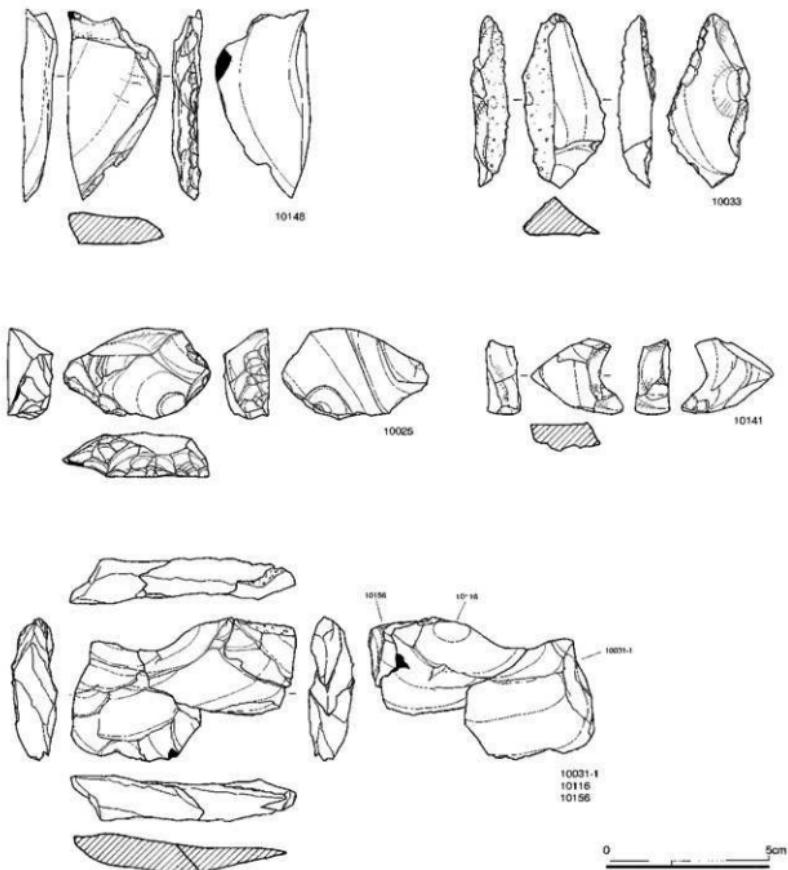
#### 石器ブロック58(第29図)

小規模の石器ブロックである。石器の出十点数も13点と少なく、A類はスクレイパーが1点で、そのほかはほとんどが剥片である。石材も安山岩が多く、黒曜石と流紋岩が2点ずつ出土するのみである。石器の分布も散漫で偏りは見られなかった。



194.3

第29図 2~4層石器ブロック52・57~60出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

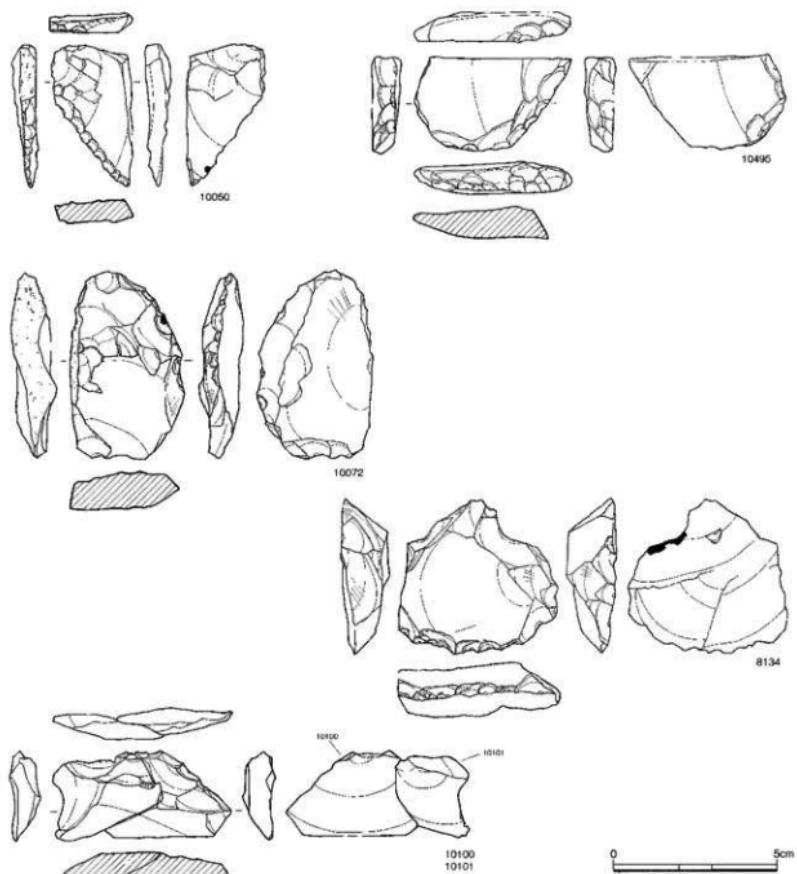


第30図 2~4層出土石器実測図(6) (S=2/3)

#### 石器ブロック59(第29図・第30図・第41図)

石器ブロック58の南に隣接して設定したブロックである。出土点数は115点で、石器の分布密度が石器ブロック58より高く、まとまって出土している印象である。器種組成はA類が22%(26点)で1点ナイフ形石器を含んでいる。スクレイバーが10%(12点)出土している。楔形石器とノッチ(抉入石器)が1点ずつ出土している。石材組成は安山岩が93%と大部分を占めている。石英が1点出土しているが、本文化層では3点しか出土していない水晶が1点出土している。後述する石器ブロック60とは非常に近接しており、一つのブロックとして認定しても良いと思われたが、石器の器種組成の違いから二つのブロックとしている。詳細は石器ブロック60で述べる。

第30図10148・10033・10025はスクレイバーで、10141がノッチ(抉入石器)である。10148と10033

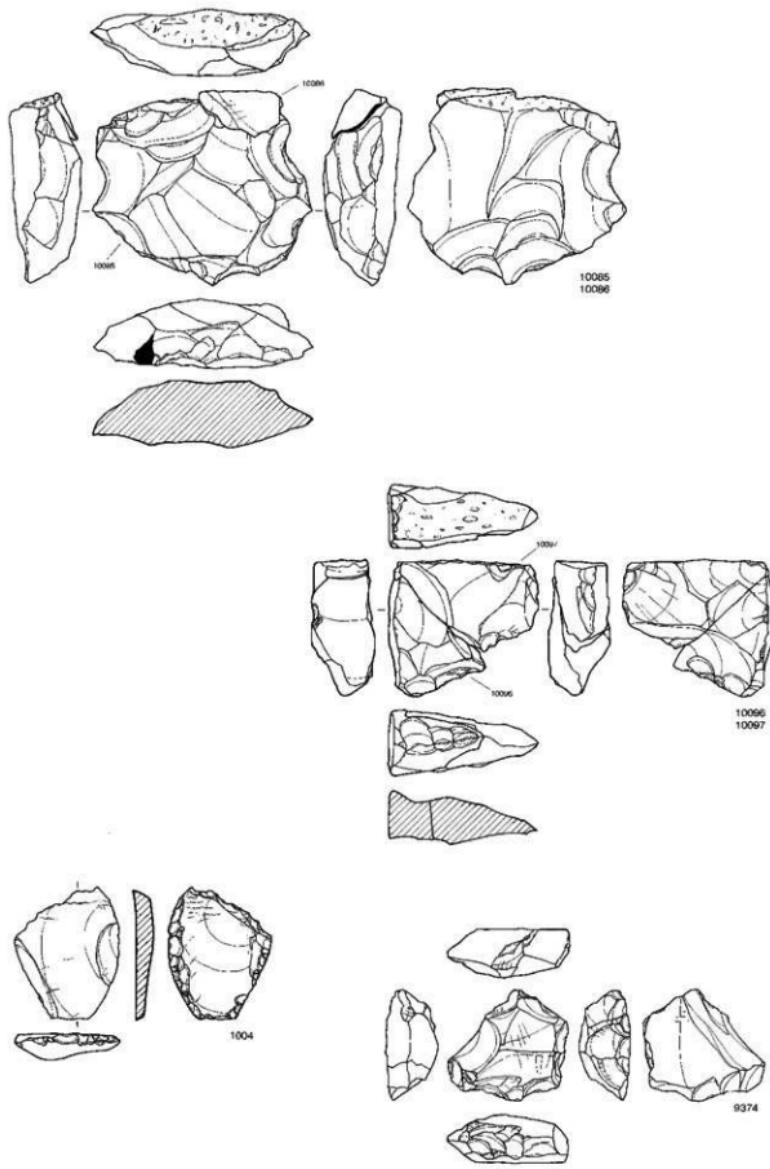


第31図 2~4層出土石器実測図(7) (S=2/3)

は剥片素材のスクレイバーで前者が腹面からの調整、後者が背面からの調整を施している。10025は石核転用スクレイバーで石核の打面から急斜度の調整を連続させている。10141は安山岩製で右側縁を大きく抉って剥離しており、ノッチ(抉入石器)とした。10031-1+10116+10156は本ブロック内で接合した資料である。石核から剥片がどのように剥離されていくのか理解しやすい資料である。剥離順序は最初に10156を剥離し、次に10116を剥離し、さらに残った10031-1から数枚の剥片を剥離している。元の石核は板状の剥片素材で、10156には自然面が残っているため、大きさがある程度限定される。

#### 石器ブロック60(第29図・第31図・第32図・第40図・第41図)

石器ブロック59隣接した石器ブロックである。出土石器数は56点とさほど多くない。分布密度も



第32図 2~4層出土石器実測図(8) (S=2/3)

59と同等である。器種組成はA類が16%（9点）で、B類が71%（40点）で、C類が10%（6点）である。A類はスクレイパー（5点）と微細剥離のある剥片（4点）のみである。チップも3点しか出土しておらず、B類のはほとんどは剥片である。石材組成は安山岩が92%で大部分を占めている。石器ブロック59と極めて隣接しており、同程度の分布密度で、かつ石器の出土している標高も変化がないため、59と合わせて一つの石器ブロックと考えても良いかもしれない。しかし、器種組成は剥片以外で様相が異なっている。石核は右器ブロック60が10%で5%多く、二次加工のある剥片は59では出土していない。またチップが59では19%であるのに対し、60では5%であった。この点と合わせ分布図上で範囲が二つに分けられるのではないかと考えたため、あえて別の石器ブロックとした。

第31図10050・10495・10072はスクレイパーである。10050と10495は切断面を持ち、10495と10072は石核転用スクレイパーで交互剥離により調整が施されている。8134は石核である。板状の剥片を素材としており、素材の腹面から全側縁に剥離が施されている。下側縁はスクレイパーとしても良いかもしれない。10100+10101は剥片同士の接合資料である。横長剥片を剥離している様子がわかる。第32図10085+10086は石核と剥片の接合例で、石核である10085は全側縁で打面と作業面の転位を繰り返しながら剥片を剥離している。10096+10097は石核同士の接合資料としている。当初2点は一体で石核であったが、何らかの要因で破損し、二つに分割されたため、別々の石核として利用されたと考えている。これら3点の接合資料は全て本ブロック内で接合している。

#### 石器ブロック61(第32図・第33図)

石器ブロック54・55・60・62・64などに挟まれて検出された石器ブロックである。出土石器数は10点と少ない。剥片の出土数が10点と最も多く、スクレイパーやチップ、石核が出土している。石材は安山岩が18点の94%で、卡體が1点出土している。遺物の出土した標高は石器ブロック62の右器よりも若干低くなっている。地形の変化はほとんど見られず、時期差の可能性も考えられる。

1004はスクレイパーである。腹面に丁寧な調整を施している。9374は石核転用のスクレイパーである。石核の周囲で剥片を剥離し、その後、わずかに調整を施し、スクレイパーとしているが、スクレイパーとしての調整が少なく、石核そのものかもしれない。

#### 石器ブロック62(第33図)

石器ブロック61の南東に形成された石器ブロックである。出土石器点数は10点で全て安山岩製の剥片である。前述のように石器ブロック61の石器より出土高が若干高いようである。

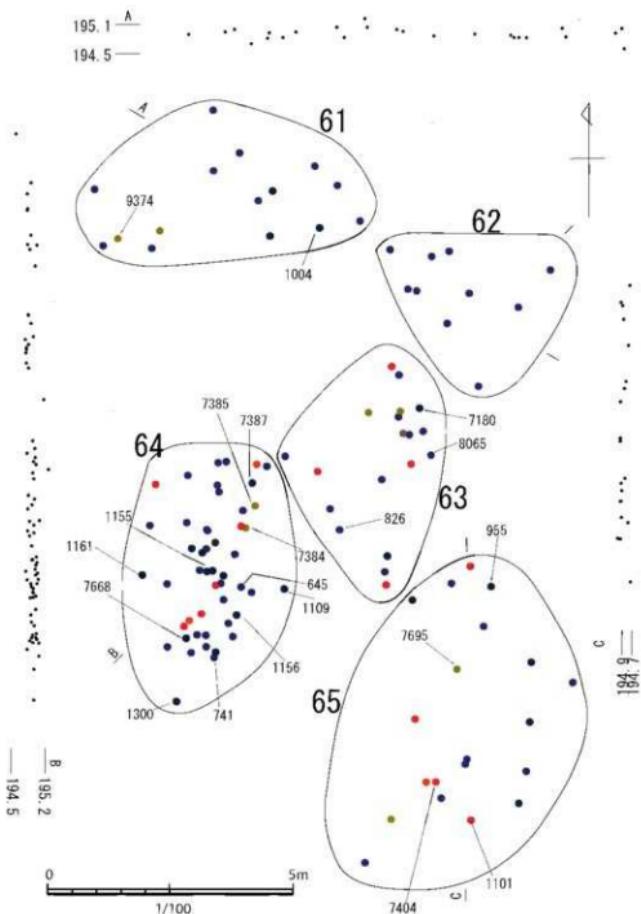
#### 石器ブロック63(第33図・第34図)

石器ブロック62・64・65の間に形成された石器ブロックである。ブロック内の北東側と南西側に石器の分布がかかる。このかたよりは隣接する石器ブロックに所属するものであるかもしれない。出土した石器数は20点で、A類が6点、B類が10点、C類が2点である。B類は剥片のみである。石材は安山岩が11点の55%で、凝灰岩類が7点(35%)、黒曜石が1点である。

第34図7180はスクレイパーである。自然面を打面とする剥片を素材としており、素材の端部に腹面から調整を加えている。調整は比較的急斜度である。8065は大型の剥片である。表面の風化が激しい凝灰岩である。背面の剥離痕からは、自然面を有する石核の周囲から剥片を剥離している様子がうかがえる。

#### 石器ブロック64(第33図・第35図・第41図)

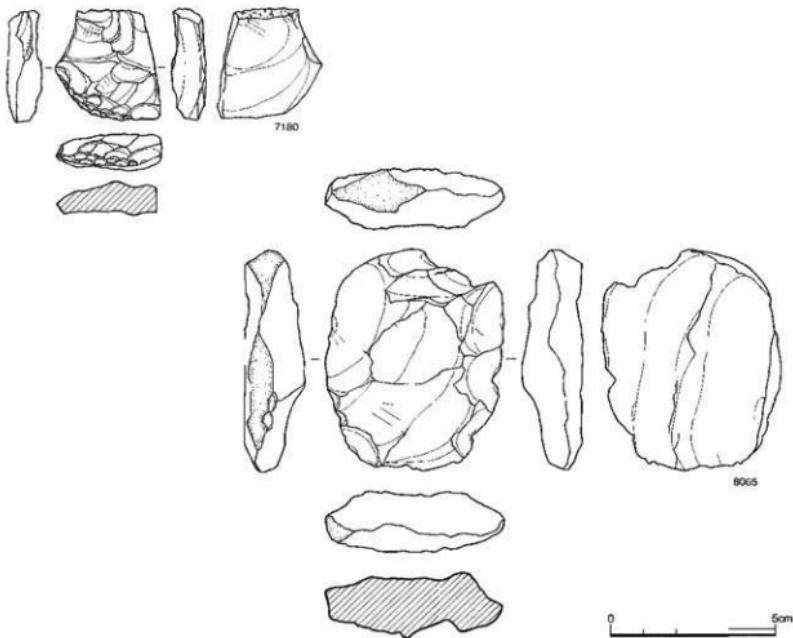
石器ブロック63の南西に隣接し、56の東、やや離れて位置に設定した石器ブロックである。出土



第33図 2~4層石器ブロック53~56出土石器平面・垂直分布図 ( $S=1/100$ )

石器数は54点で、周辺の右器ブロックからは10点から20点しか出土していない。右器ブロックの規模はほぼ同じ5m程度である。このブロックは周辺の右器ブロックと比べ右器の分布密度が高くなっている。右器の器種組成は、A類が35%で、B類が61%、C類が3%である。A類19点の内、スクレイパーが12点も出土しており、本ブロックで出土した右器の22%を占めている。石材は51点が安山岩で94%である。その他は凝灰岩類である。

第35図1156・1109・1155・7668・1161・1300はスクレイパーである。1156は剥片を剥離し尽くした右核を利用した右核転用スクレイパーであろうか。1109は横長剥片を素材としており、剥片の末端部に腹面から調整を施している。1155は横長剥片を素材とし、調整により三角形の形状に整形さ



第34図 2~4層出土石器実測図(9) (S=2/3)

れたスクレイパーである。調整は交互剥離である。7668は剥片素材のスクレイパーである。背面は自然面である。1161は剥片素材のスクレイパーである。調整は交互剥離で素材の打面側を折断している。形状は三角形で本プロックの1155や第25図1256、340、第27図352、第30図10148などと同様である。1300も交互剥離のスクレイパーである。素材は剥片で、細かい調整を縁辺に連続させている。7385と7384は石核である。両者とも安山岩製で厚い板状剥片を素材としているようである。打面転位と作業面転位を繰り返し、横長剥片を剥離している。

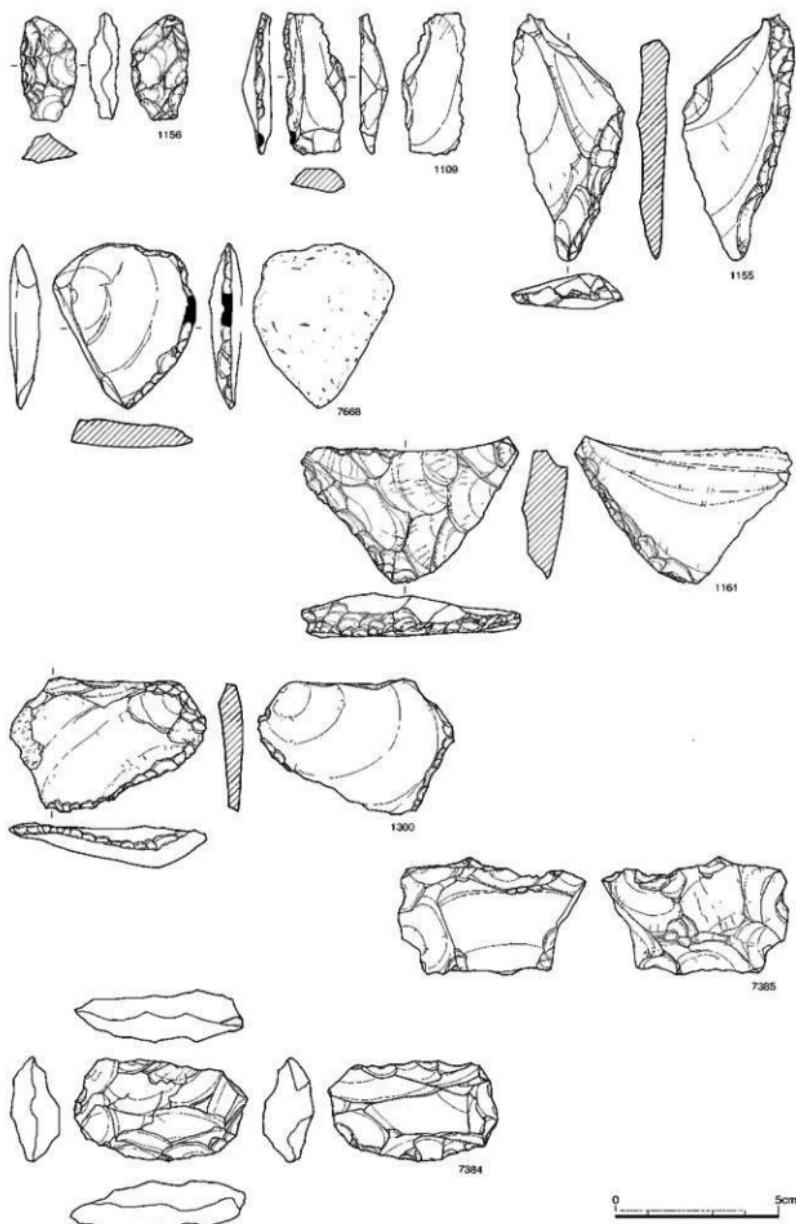
#### 石器プロック65(第33図・第36図・第40図)

石器プロック63と65の南東に形成された石器プロックである。出土石器数は22点と少ないが、プロックの最大径が5mを超えるため、石器の分布密度が低い。A類とB類がそれぞれ45%を占めている。安山岩が使用石材に占める割合は77%である。

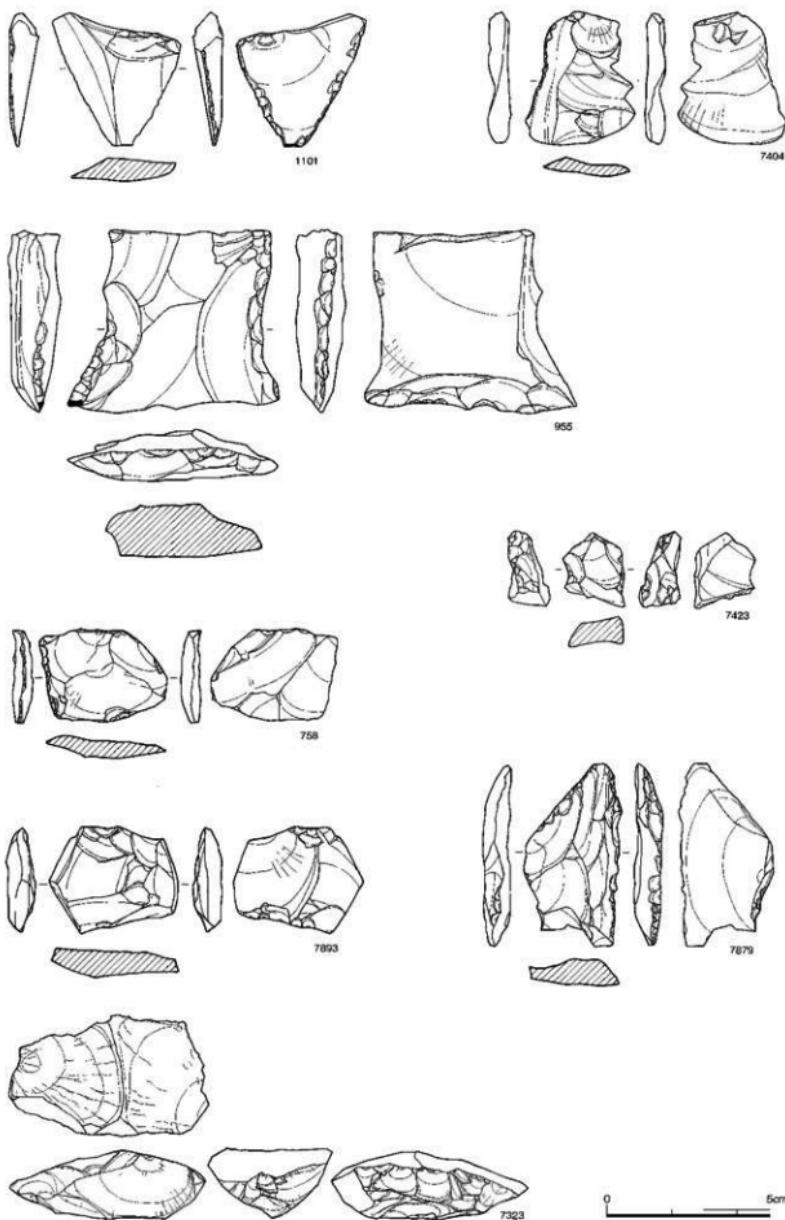
第36図1101と7404は微細剥離のある剥片である。共に剥片素材である。1101の右側縁はスクレイパーの刃部の可能性がある。左側縁には微細な剥離が連続している。7404は黒曜石製である。左側縁に微細な剥離痕が残っている。955は石核転用のスクレイパーである。板状剥片を用い、横長剥片を剥離している。右側縁と左側縁下半部にスクレイパーの調整が見られる。

#### 石器プロック66(第36図・第37図・第38図)

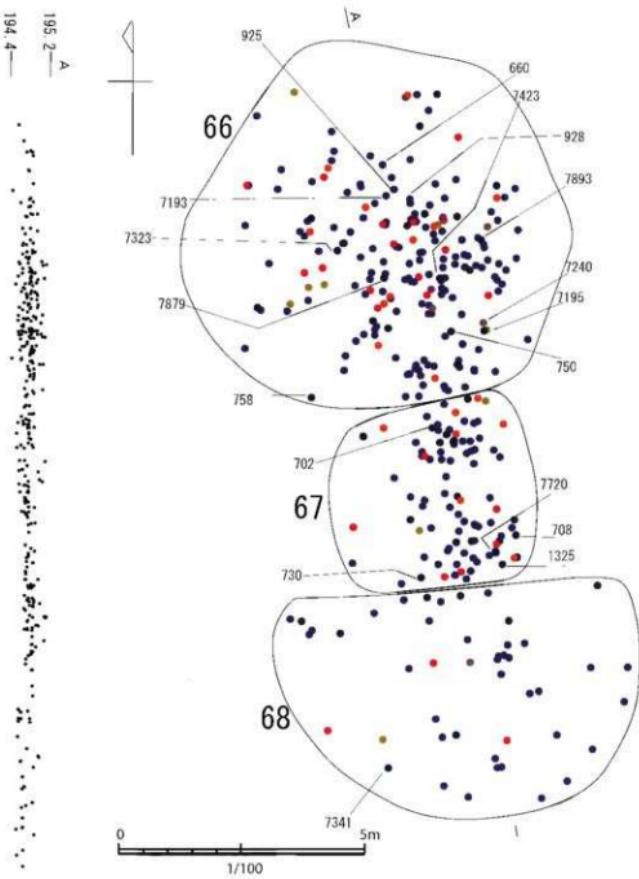
本文化層の南東に列状に分布する石器プロック66から67の石器プロックの内、最も北に形成されている石器プロックである。プロックの直径も7mを超えており、かなり広くなっている。石器の



第35図 2~4層出土石器実測図(10) (S=2/3)



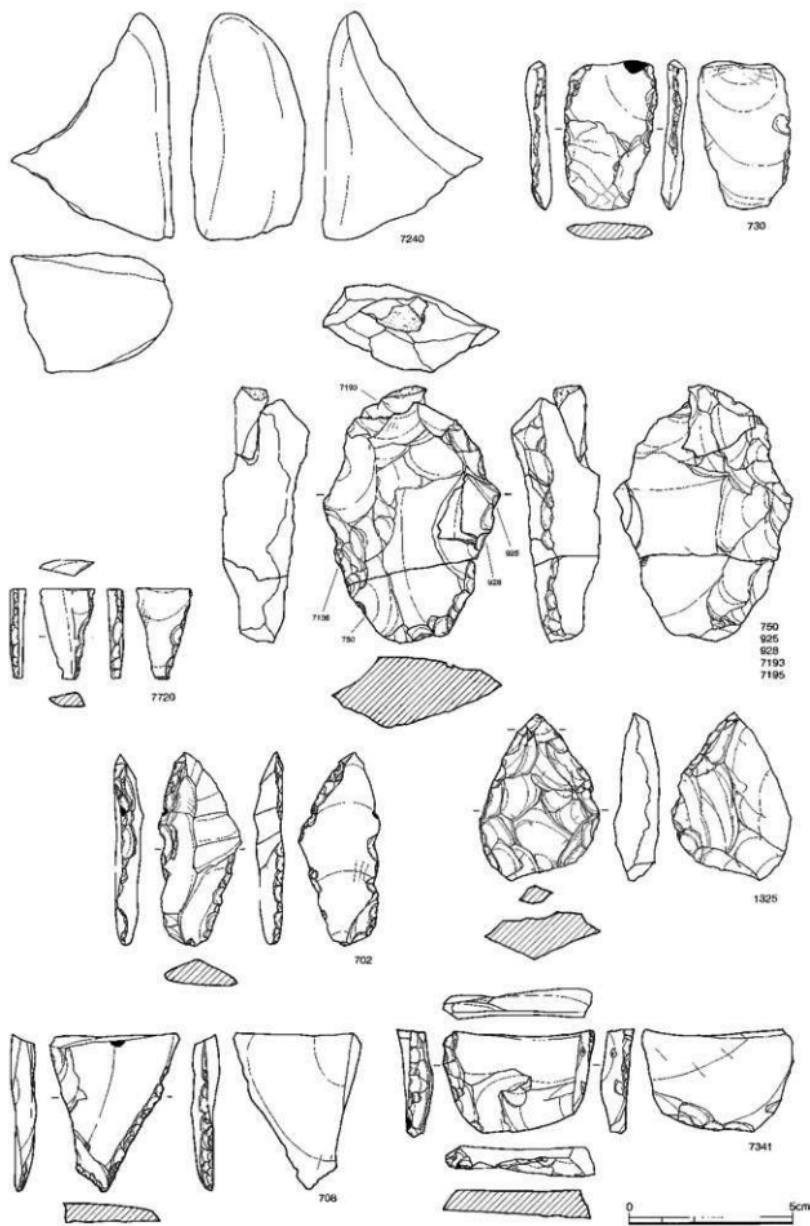
第36図 2~4層出土石器実測図(11) (S=2/3)



第37図 2~4層石器ブロック66~68出土石器平面・垂直分布図 ( $S=1/100$ )

分布は中心部が最も集中しており、外側に向かって密度が低くなっている。出土石器の点数は本文化層で最も多く、237点である。 $\Delta$ 類は48点で20%である。スクレイパーと二次加工のある剥片が10点以上、ナイフ形石器と楔形石器も2点ずつ出土している。石核も6点出土している。

第36図758・7423・7893・7879・7323はスクレイパーである。758と7893は上下端部に調整が施されているが、スクレイパーではなく、楔形石器として使用された結果の可能性もある。7423と7323は石核転用スクレイパーと考えている。7423は黒曜石で、両側縁に細かな調整が施されており、7323は複設打面で、横長剥片を剥離後、打面から微細な剥離が加えられている。スクレイパーとしているが、連続する調整は顕著でなく、石核の可能性も否定できない。第38図7240は石皿としている。大部分が欠損により本来の人さきは不明である。上面は石皿状に窪んでいるため、石皿と



第38図 2~4層出土石器実測図(12) (S=2/3)

しているが、研磨痕は確認されていない。したがって石皿ではない可能性がある。 $750+925+928+7193+7195$ は本ブロック内で接合した資料である。石材は流紋岩質凝灰岩で非常に珪質化している。大型の剥片を素材とした石核である。打面と作業面を転位し、四方から剥片を剥離している。スクレイパーとして転用しているのは750のみである。7195と750は折断による剥離と思われる。

#### 石器ブロック67(第37図・第38図)

列状に分布する石器ブロックの中間に設定した石器ブロックである。石器の分布密度は南と北に分かれるようで、石器ブロック66と68に含まれている可能性もある。出土石器数は148点で、ブロックの直径が5mにも満たないが比較的多くの石器が出土している。A類はスクレイパーが14点(9%)出土している。B類は全体の80%を占めている。石材は安山岩が94%とかなりを占めている。

第38図730・7720・702・1325・708は全てスクレイパーである。730と7720、702は横長剥片を素材としており、本文化層の安山岩製のスクレイパーではあまり見られないものである。しかし7720と702は腹面と背面からの交互剥離を施しており、本文化層のスクレイパーで多用される技法である。1325は先端をとがらせるスクレイパーである。形状は三角形となり、これも本文化層のスクレイパーでよく見られる。708は折断された横長剥片を素材とし、腹面から調整を行っている。

#### 石器ブロック68(第25図・第37図・第38図)

本文化層の最も南東に形成された石器ブロックである。出土点数が56点と少なく、並んで形成されている石器ブロック66と67に比べ石器に分布密度が低い。石器の器種組成はA類がスクレイパーと微細剥離のある剥片、楔形石器で8点(14%)で、B類は47点(83%)である。石材は98%が安山岩である。

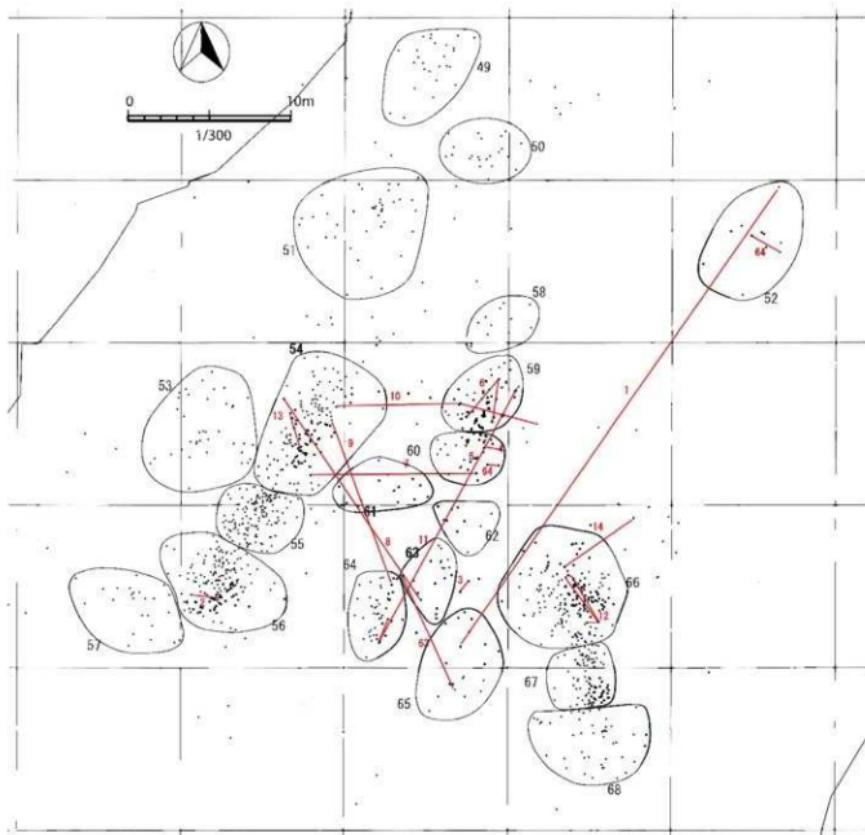
第25図340は安山岩製の石核を転用したスクレイパーである。素材となる剥片は非常に大型の板状剥片で、側縁から横長剥片を剥離している。打面と作業面は転位を繰り返している。側面に円礫面を持つ自然面が残っており、第25図1256の石核転用スクレイパーと同様に円礫素材の石核が存在したようである。円礫の安山岩を使用している点が本文化層の特徴の一つである。第38図7341もスクレイパーである。上半部は欠損ではなく、折断による剥離と思われる。両側縁は腹面から、下端部は背面から交互剥離により調整を施している。

#### (4) 石器の接合と母岩別資料(第39図～第41図)

本文化層では17個体40点の接合が確認されている。7個体は石器ブロック内の接合で、それ以外は石器ブロック間、あるいは石器ブロック内出土石器と石器ブロック外の出土石器との接合である。

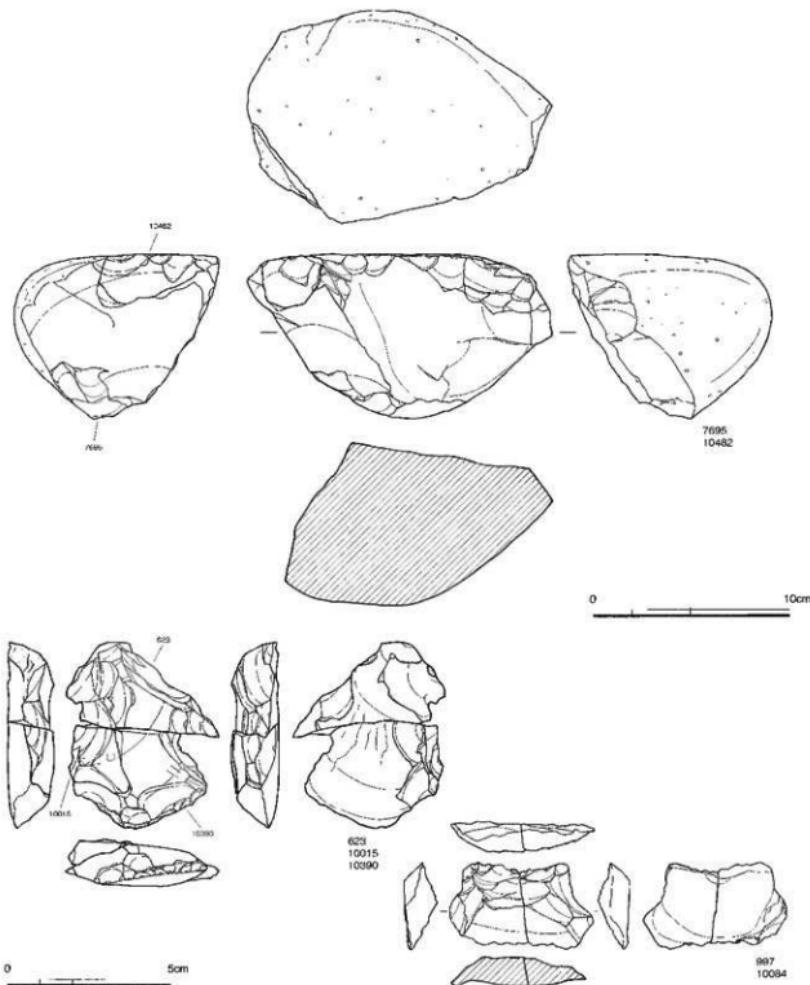
本文化層では隣接する石器ブロックでほとんど接合していない状況が見られる。最も長い距離での接合例は34.5m離れている母岩別資料No.1である。石器ブロック内の接合資料は各ブロックで出土した石器の記述部分で記載したため、以下では、石器ブロック間接合および石器ブロック出土石器とブロック外出土石器の接合例について述べようと思う。

第40図7695+10482は石核と剥片の接合例である。円礫の凝灰岩を大きく割った後に打面を固定し、寸詰まりな剥片を剥離している。10482は横長剥片であるが、ステップ・フラクチャー(階段状剥離)を起こしており、石核に段が生じている。623+10390+10015は石核転用スクレイパーに剥片が接合した例である。623と10390は折断により分割されたものと見られ、10390は折断後スクレイ



第39図 2~4層出土石器接合関係図 (S=1/300)

バーとして再利用したと考えられる。997+10084は剥片同士の接合である。二次加工は見られない。第41図1259+7387は剥片と石核転用スクレイパーである。7387のスクレイパーは1259と折断後、数枚の剥片を剥離した後に、スクレイパーとしている。645+741+10167の接合資料は石核転用スクレイパーである。接合資料の右側縁の細かい剥離は連続しており、10167と741が分離していない状態で剥離されたものと考えられる。645に見られる調整は若干大きな剥離であるため、右側縁の剥離と同時期か不明である。660+10693は剥片と石核の接合例であるが、数カ所に小さな剥離痕が連続してみられ、石核転用スクレイパーであると考えられる。660は石核の打面に接合しており、打面に以前の剥離面が数枚確認されている。打面再生剥片ではないかと考えている。10693は660を剥離後、剥離面を打面として剥離を進めている。

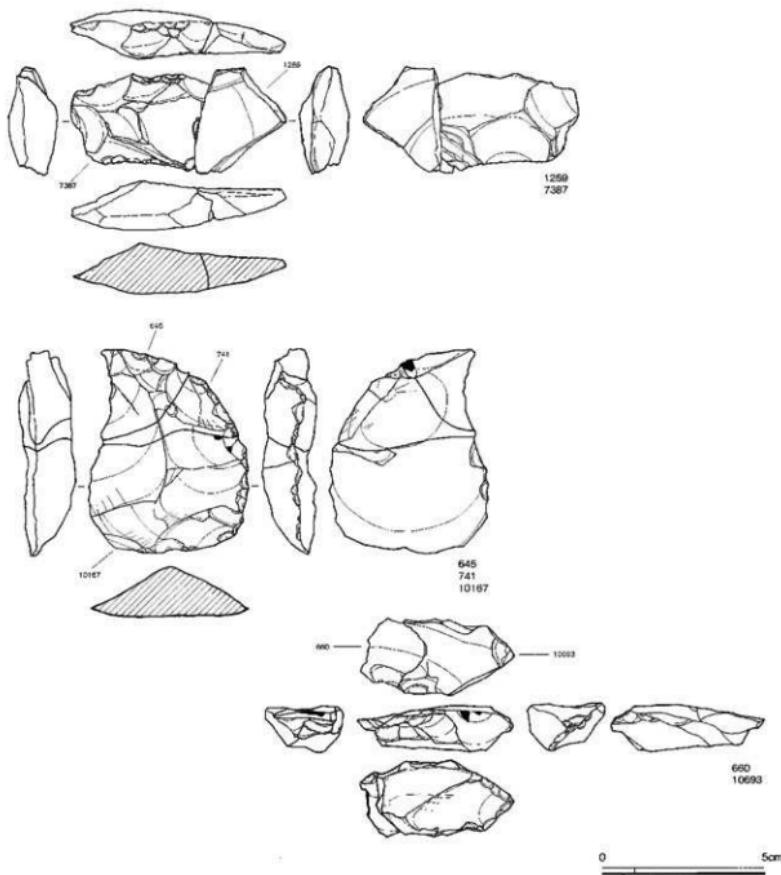


第40図 2~4層出土石器実測図(13) (S=2/3)

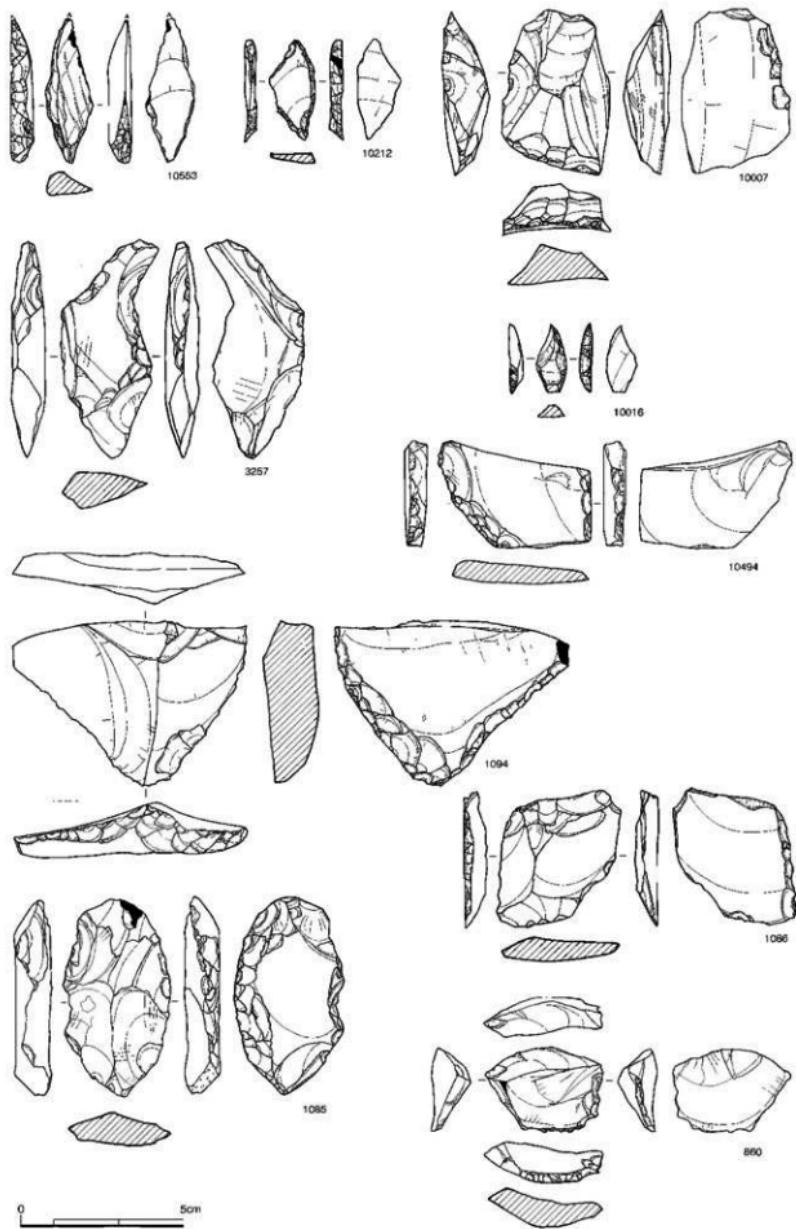
(5) 石器ブロック外出土石器(第42図・第43図)

第42図10553は安山岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材としている。二側縁加工で、打面は残っていない。10212も縦長剥片素材のナイフ形石器である。これも二側縁加工である。打面は残っていない。10007・3257・10494・1094・1086・1085・860・第43図6942・10444・10176はスクレイパーである。10494と1094、1086、860・第43図10444は剥片素材のスクレイパーで、それ以外は石核軸用スクレイパーである。多くは折断による剥離面を有している。10210・808は微細剥離の

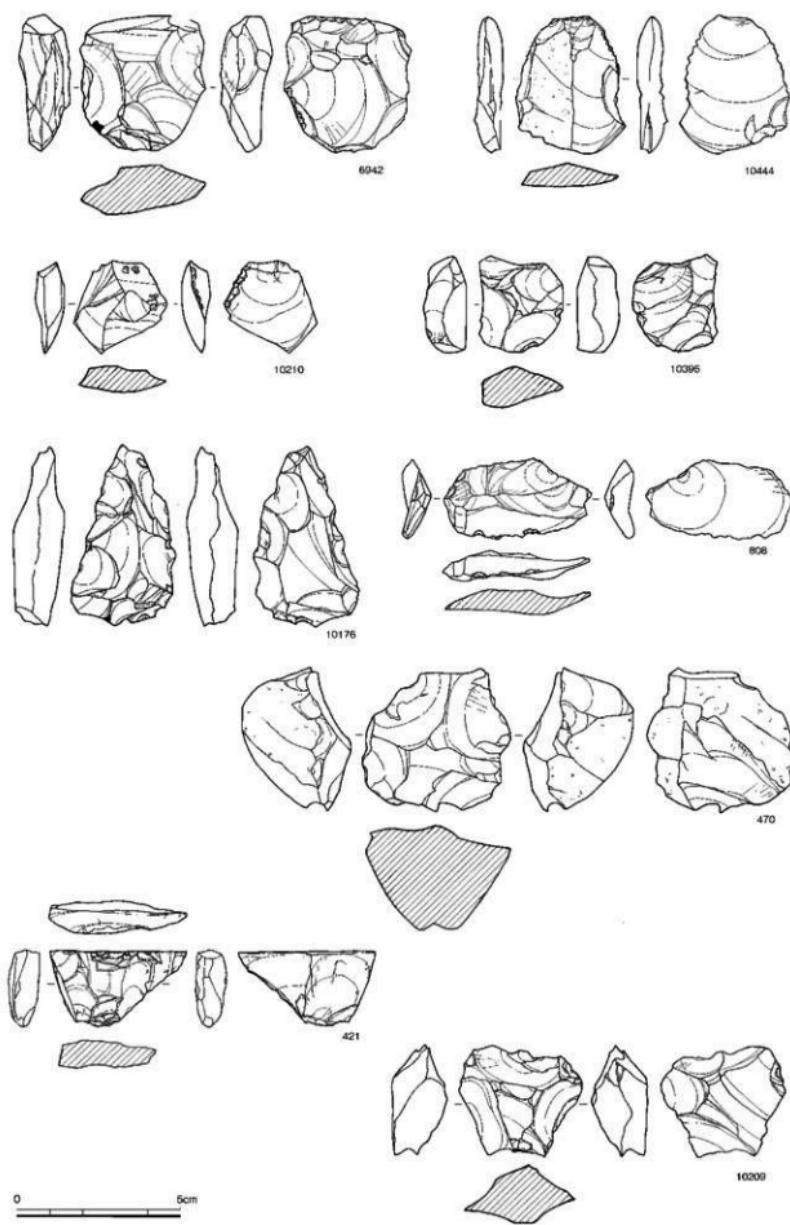
ある剥片である。10210は碧玉で石材の原産地分析の結果、产地不詳の「原山3遺物群」となっている。808は水晶製の薄い剥片を利用している。10395・470・10209は石核である。10395は黒曜石で、表面が風化したものである。470と10209も打面と作業面を転位し、剥離作業を行っている。



第41図 2~4層出土石器実測図(14) (S=2/3)



第42図 2~4層出土石器実測図(15) (S=2/3)



第43図 2~4層出土石器実測図(16) (S=2/3)

## 第5章 旧石器(5層)の調査

### 第1節 層位

原田遺跡の3つの旧石器時代の文化層のうち、中位に属する文化層である。5層としているが、遺物の位置が上方に動き4層で出土したものも存在する。しかし、4層は浮布降下火山灰と軽石層であり、軽石層が残っている地点では石器が上方に移動することはなかった。軽石層が無く、4層で出土した石器については、石器ブロックとの位置関係や石器の観察から本文化層に分類可能なものはここで報告している。

5層は旧石器を対象とした調査区全体に堆積していた。調査区東側の斜面には上方からの土砂の崩落により粘性の強い当初5層としていた褐色土層の上層に砂礫を含む層と、粘性の弱いマンガン粒を含む層が堆積していることが判明した。そこで、上からマンガン粒を含む層を5a層に、その下の砂礫を含む層を5b層、粘性の強い遺跡全体に広がる褐色土層を5c層とした。5層の下層はATの6層であり、色調は黄色系であり、粘性も強くなかったため、5層との分離は可能であった。また、上層の4層のうち火山灰層も粘性は5層に比べ弱く、軽石層が残っている地点ではさらに5層との分離は容易であった。

### 第2節 地形

5層の地形は第47図のように東側が西に急傾斜しており、小さな谷地形となっている。この谷地形は南北に伸びている。谷地形の北側は非常に緩い傾斜で、ほとんど平坦といって問題ない面が存在する。後述するSK57はこの平坦面と東側の急斜面の境で検出されている。

谷地形の西側は徐々に高くなっていき、緩い尾根状地形となる。尾根の先端は非常に緩い傾斜で、谷地形の平坦面と合わせている。尾根の内斜面は徐々に傾斜している。この傾斜面は縄文時代と推定される斐伊川の旧河道によって削平されており、それ以降西側の旧地形は不明である。

### 第3節 器種組成

本文化層で出土した石器の一覧は表6である。出土した石器の数は1,360点で、そのうちB類が995点で、653点が剥片、342点がチップである。B類が本文化層出土石器の73.1%を占めている。次にA類は214点である。A類は多く出土している順に、二次加工のある剥片が76点、スクレイバーの51点、微細剥離のある剥片42点、ナイフ形石器19点、ノッチ(抉入石器)12点、角錐状石器9点、楔形石器3点、錐状石器2点である。スクレイバーは3%で、2~4層のスクレイバー比率が8.7%であったのに比べ、低くなっている。角錐状石器は本文化層でのみ出土する器種である。C類は106点である。石核が95点で、調整剥片が10点、打面調整剥片が1点である。調整剥片はナイフ形石器の調整剥片が多い。2~4層に比べ、器種組成が多様化している傾向が見られる。

本文化層の時期を推定する石器としてナイフ形石器と角錐状石器があげられる。ナイフ形石器は19点で1.3%、角錐状石器は9点で0.6%である。ナイフ形石器がB類に占める割合は8%で、角錐状石器の割合は4%である。2~4層のナイフ形石器のA類中の割合は1.1%である。本文化層で

表6 5層石器ブロック器種組成表

ブロック	剥片	石核	微細剥離のある剥片	スクレーパー	二次加工のある剥片	ナイフ形石器	チップ	楔形石器	原石	ノッチ	分離標	敲き石	調理剥片	打面調整剥片	角錐状石器	錐状石製品	合計
26	1	1	1		2											2	7
27	3	2		1					2	1					1		10
28	37	5	3	1		1		1	1	3							51
29	15	2			1			3									21
30	33	2	4	7	7	2	9			1	2				1		68
31	30	14	1	6	6		2			1	1				1		62
32	51	6	3	6	2	3	9				1			1			82
33	37	8	2			2					3				1		53
34	26	7	2	3	6						1						45
35	16	2	1	3	1	1				1							25
36	22	2	2	1	2			1	1								31
37	35	6					1	1	1	1					2		45
38	2	1	2		2												9
39	6	1	2	5	1		2										17
40	2	1		2	1	2				1	2						11
41	14	4				1	6			2					1		28
42	4	1	3		1												9
43	3				1							1					5
44	4	3	2	1	1												11
45	6	1	1	2	3		2										15
46	14	3		1					1								19
47	3				1												4
48	158	11	3	5	11	6	274		7	4	2		10		1		492
外	131	17	11	6	25	3	28	1	5	1	9				3		240
合計	653	95	42	51	76	19	342	3	17	12	25	1	10	1	9	2	1360

表7 5層石器ブロック石材組成表

ブロック	安山岩	黒曜石	凝灰岩	凝灰岩	玉髓	メノウ	碧玉	流紋岩	洪積岩質凝灰岩	水晶	石英	花崗岩	閃綠岩	砂岩	玄武岩	貫入岩	頁岩	合計
26			2		1			3				1						7
27	5		2	2				1										10
28	4	3	28	10				4					1	1				51
29	1		1	2	1			1	1	3	11						21	
30	41	12	6	4				4				1					68	
31	32	3	8	8	1			6	3				1				62	
32	28	8	13	23				9			1						82	
33	16	4	15	13				3			2						53	
34	12	1	16	8	1			4		2	1						45	
35	1			22		1					1						25	
36	1	2								27			1				31	
37	3	7	6					1		27				1			45	
38	1	8															9	
39	8	1						1		2	5						17	
40	6		1					3		1							11	
41	13		10					1		1	1				2	28		
42	3		5					1									9	
43	3		2														5	
44	8								2			1					11	
45	6							2	1	2	2					2	15	
46	4		9					2			4						19	
47	2		1					1									4	
48	449	1	9					8		11	11			1		2	492	
外	57	36	21	20	30	1	2	33	11	2	21			2	1	1	240	
合計	704	86	155	90	56	1	3	87	17	29	111	2	1	6	2	2	1360	

表8 5層出土石器器種・石材組成表

	測 片	石 核	微 細 剥 離 の あ る 剥 片	ス ク レ イ バ ー	二 次 加 工 の あ る 剥 片	ナ イ フ 形 石 器	チ フ ブ	環 形 石 器	原 石	ノ ツ チ	分 割 礫	敲 き 石	調 整 剝 片	打 面 調 整 剝 片	角 錐 状 石 器	棒 状 石 器	合 計	
安山岩	265	26	13	32	30	16	294			10			10		6	2	704	
黑曜石	37	7	8	8	11		11	1						3			86	
凝灰岩	97	27	6	2	4	1	5		2		8	1			1	2	155	
凝灰岩	68	8	1	1	6		2		1		2						90	
玉髓	37	3	5	2	8					1							56	
メノウ			1														1	
碧玉	1		2														3	
流紋岩	45	10	2	2	5		7		1		15						87	
海綿岩風化灰岩	8	2			1		6										17	
水晶	11	2	1	2	6		7										29	
石英	73	6	3	2	4		8	2	13								111	
花崗岩	1	1															2	
閃綠岩			1														1	
砂岩	4	2					2										6	
玄武岩																	2	
實入材	2																2	
頁岩	3	1			1	2				1							8	
合計	653	95	42	51	76	19	342	3	17	12	25	1	10	1	9	2	2	1360

はナイフ形石器や角錐状石器が道具となる器種に占める割合が非常に高いと考えられる。

#### 第4節 遺構と遺物

##### (1) 遺構分布(第44図・第47図・第64図・第126図)

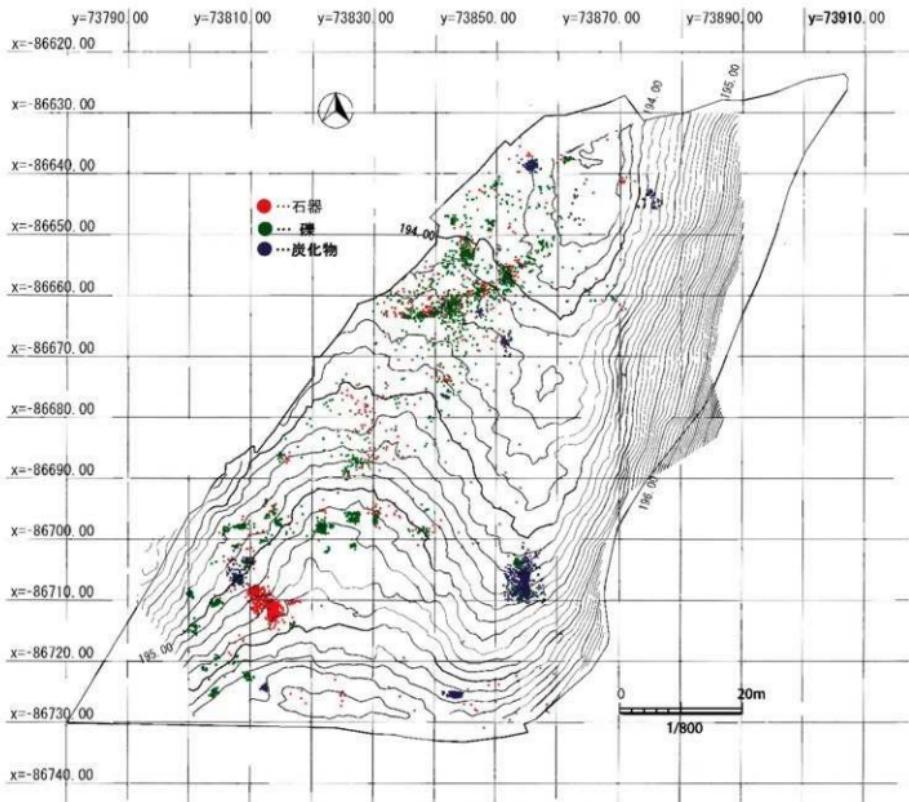
本文化層で認定された遺構は上坑1基、礫群49基、石器ブロック23ヶ所、炭化物ブロック多数である。第44図を見ると、出土した石器と礫は、分布が重複せず分離している南側(仮に「南ブロック」と呼ぶ)と、重なっている地点が多い北側(仮に「北ブロック」と呼ぶ)に大きく分けられる。便宜上、この二つのブロックの境界は第44図のX = -86690とする。

南ブロックは尾根の等高線にある程度沿って礫群が分布し、その内側に、石器ブロックが1ヶ所と礫群1基が検出されている。また、2基の礫群は谷地形の底面に形成されている。等高線に沿って検出された礫群は一定の間隔を空けて数多く形成されている。

北ブロックは、南ブロックが形成されている尾根の先端からまばらに石器ブロックと礫群数基が分布している緩斜面と、その北側のはば平坦地に南西から北東にかけて列状に石器ブロックと礫群が弧を描きながら分布している範囲が存在する。北ブロックは石器ブロックと礫群が重なって検出されている地点が多い。本報告では石器ブロックを明瞭に分離しているが、石器ブロックは重複している可能性は当然考えられる。現地での発掘調査時は、礫の検出面の高さと平面的なまとまりによって礫群を認定しており、ある程度のまとまり、特に時期の違いは確認することができた。しかし、石器については、浮き上がりによる移動が多々認められたため、石器ブロックの重複があった場合分離はほとんど不可能であると言える。石材や器種組成に大きな違いがあれば分離することも可能であると考えられるが、今回は発掘調査時にそういった基準で石器ブロックを認定することはできなかった。したがって、石器ブロックは図上での認定である。

第126図では石器ブロックと礫群の分布の重なりと接合関係を図示している。

炭化物ブロックは数多く確認されているが、礫群と分布が重なる一群と、周辺から礫群や石器ブロックが検出されていない一群が認められる。最も北東で確認されている炭化物ブロックは風倒木

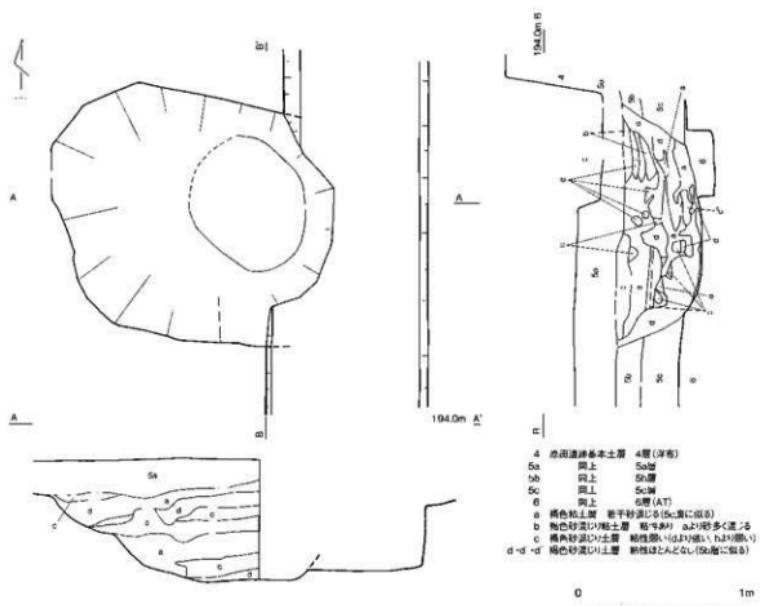


第44図 5層遺物出土状況図 (S=1/800)

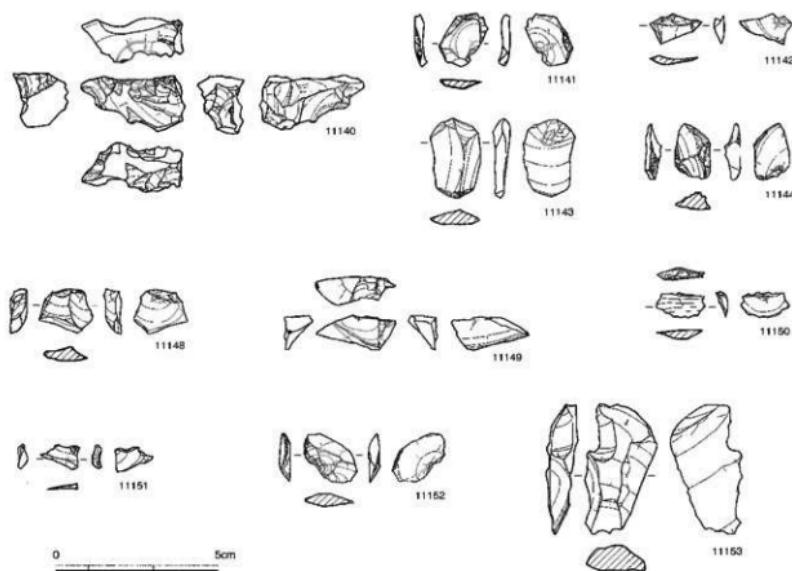
等による自然の営みによるものではないかと考えている。

#### (2) 土坑(第45図・第46図)

土坑は1基確認されている。遺構名はSK57である。遺跡の北東隅、斜面から平坦面へと傾斜が変化する地点に造られている。SK57はグリッド毎の層序を確認するために4a層掘り下げ後にグリッドに沿って設定した南北方向のトレンチを掘り下げ中に検出された遺構である。したがって、遺構の東側が一部削平されており、遺構の規模は不明である。確認されている形状や規模は、SK57の平面プランは東西方向に長い楕円形で、長軸が残存長1.77mで、短軸が1.47m、深さは最大で0.73mである。断面の形状は壁面が弧状に落ち込み、底面はわずかに平坦となっている。底面の平面形は円に近い楕円形である。平面プランを楕円形とし、底面の位置とトレンチの東壁で土坑が確認できなかった点からSK57の大きさを復元すると、平面プランの長軸はおよそ2mを超える大きさの土坑であったと推定される。



第45図 5層SK57実測図 (S=1/30)



第46図 5層SK57出土石器実測図 (S=2/3)

次に土層の観察結果を記述したい。SK57は5b層の上面から掘り込まれており、SK57の覆土が5a層で完全に覆われている。また、5a層は4c層に覆われていることは調査中に確認しており、確実に旧石器時代の土坑であるといえる。SK57の底面は6層のATまで掘り進められている。覆土は、原田遺跡の基本層序である5b層、5c層、6層と同様の層が交互に堆積している状況であった。本来であれば、1層ずつ個別に記述すべきではあるが、全く同じ記述となる層が複数存在したため、本報告では、覆土をaからdに分類し、分層を行った。層序は水平に近い堆積を示すものが多く、堆積角度が斜め、あるいは傾いた層はほとんど見られなかった。しかし、わずかに層の断面形状が円形となって堆積している層は見られた。

SK57からは11点の石器が出土している。全てグリッドの層序確認用のトレンチ内からの出土で、遺構の東側でしか出土していない。遺物の出土高は、遺構の中位から下位である。特に個別の層から出土することもなかった。

第46図1140は黒曜石製の石核である。細かな剥離を施している。11141・11143・11144・11150・11152は二次加工のある剥片としている。全て黒曜石であるが、風化の度合いが個々に異なっている。小さな剥片を素材としており、細かい調整を部分的に連続して行っている。11142・11148・11149・11151は黒曜石製の剥片及びチップである。以上の黒曜石製の石器は腹面及び背面の観察から打面を固定せず、剥片を剥離している様相が読み取れる。11153は安山岩製の剥片である。SK57から出土した石器はこれ以外は全て黒曜石製であった。背面の観察からは打面の固定は行っていない。表面は非常に風化している。

### (3) 碓群(表9・第48図～第63図)

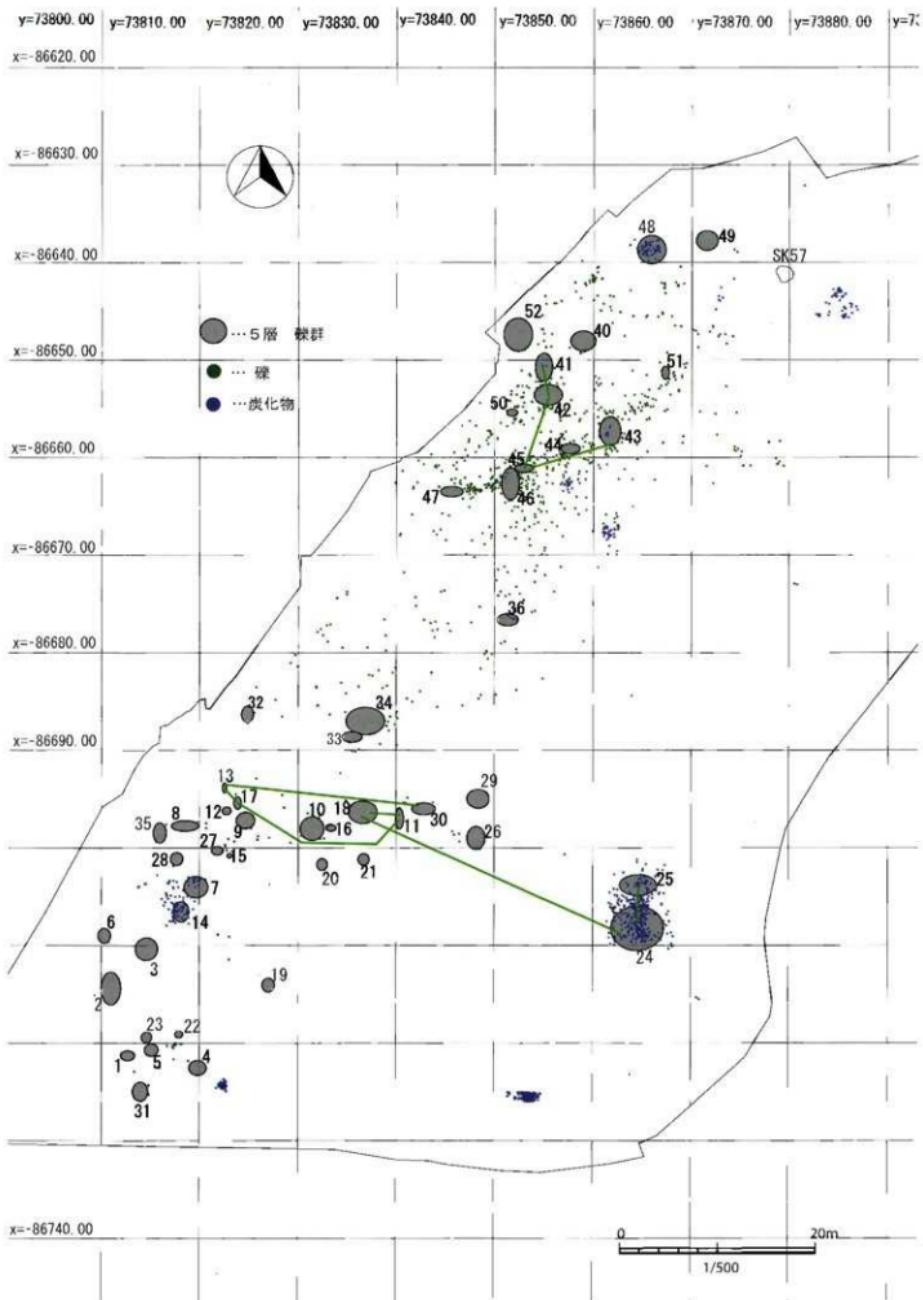
49基を碓群として認定したが、2～4層と同様に碓群以外の碓の出土数も非常に多く(第44図)、さらに類型が「分散」として認定できるものはかなり存在したと考えられるが、調査中に認定したものを碓群として報告する。

また、碓群の検出高および底面の高さの違いから碓群を二つのグループに分けている。この違いは、時期差であると考えているが、2時期に全ての碓群が形成されたわけではなく、形成時期にはさらに幅があると思われる。しかし、本報告では、便宜上、碓群の底面が6層に接して検出されたものを「5(下)」、5層の中位から上位で確認された一群を「5(中)」としている。

確認された碓群はそれぞれ規模や構成碓の数などの様相が異なっている。本文化層の碓群は構成碓の数が4～180点と非常に幅がある。本文化層で検出された碓群1基の構成碓は平均52点と、2～4層の12点とはかなり聞きがある。また、5(上)の碓群12基では平均53点で、5(下)の碓群は51点で差はなかった。後述するが、7層は碓群が1基しか確認されておらず、構成碓数は117点である。

赤化は全て「A」が97%を超えており、「B」と「D」は1%に満たず、「C」はなかった。また、5(上)と5(下)での差も見られなかった。

破損度は「4」の比率が最も高く42%あり、「1」は22%である。「5」は12%、「3」は10%、「2」は6%である。5(上)は「1」が10%で、「2」が3%、「3」が5%、「4」が50%、「5」が31%である。「4」「5」の割合が高くなっている。5(下)は「1」が25%で、「2」が6%、「3」が12%、「4」が39%、「5」が5%である。「1」と「4」が高く、5(上)と比べ「1」の割合が非



第47図 5層磁群位置図・接合関係図 (S=1/500)

表9 5層礫群一覧表

構群名	グリッド	特徴	堆積物											堆積物	底生生物	底生生物	底生生物	分布類型			
			風化			堆積物			石			殻		種類	底生生物		底生生物	底生生物			
			最高	最低	平均	A	B	C	D	E	F	G	H		泥質	砂質	泥炭質				
礫群1 T7 S(下)	15	11.3	5.1	8.1	15	6	6	6	6	6	7	1	4	0	11	0	1.0	0.5	-		
礫群2 T8 S(下)	117	10.6	3.4	6.6	167	31	0	7	56	6	42	7	22	3	82	0	2.0	1.4	-		
礫群3 T9-T9S(下)	120	12.5	2.2	6.4	99	0	0	0	15	15	61	12	25	11	83	0	1.7	1.4	-		
礫群4 S7-T7(下)	76	13.0	3.7	7.7	73	0	0	3	11	20	16	1	72	2	2	0	1.8	1.1	-		
礫群5 T7 S(下)	5	10.8	4.7	8.4	8	0	0	0	5	0	0	3	0	2	0	6	0	1.1	0.4	-	
礫群6 T8/L9(下)	67	16.8	3.0	7.1	60	5	0	2	6	7	22	29	3	60	0	8	0	1.0	1.0	-	
礫群7 S8/T9S(下)	68	14.4	2.5	8.3	68	0	0	0	18	12	8	24	6	50	1	17	0	2.3	1.6	有 プロト46	
礫群8 T10 S(下)	33	22.0	3.1	8.7	33	0	0	0	0	4	7	20	2	9	0	24	0	2.0	1.0	-	
礫群9 S10 S(下)	58	22.0	4.3	11.0	54	0	0	0	1	1	10	39	3	39	0	15	0	1.9	1.4	-	
礫群10 R10 S(下)	173	11.9	3.1	7.3	173	0	0	0	0	0	0	0	34	1	138	0	2.1	1.5	-		
礫群11 O10 S(下)	40	40.5	4.2	10.3	40	0	0	0	7	0	5	25	3	16	2	22	0	1.6	0.8	-	
礫群12 S10 S(下)	9	18.0	5.0	8.8	9	0	0	0	0	0	2	7	0	2	1	6	0	0.9	0.8	-	
礫群13 S10 S(下)	13	22.8	4.8	7.4	13	0	0	0	1	0	2	10	0	5	0	8	0	0.8	0.3	-	
礫群14 T8 S(下)	100	12.4	3.8	7.4	84	5	0	1	26	15	15	42	5	80	6	20	0	1.5	1.1	有 プロト44	
礫群15 S9 S(下)	4	22.0	10.2	16.1	4	0	0	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0.4	0.3	-	
礫群16 R10 S(下)	111	15.0	3.7	8.4	111	0	0	0	65	9	3	33	0	28	4	79	0	0.7	0.6	-	
礫群17 S10 S(下)	12	26.0	3.4	7.7	12	0	0	0	1	0	0	9	2	0	3	9	0	1.8	0.8	-	
礫群18 R10 S(下)	172	22.0	3.3	9.1	171	1	0	0	62	7	23	54	5	45	8	19	0	2.7	2.1	-	
礫群19 S8 S(下)	16	14.1	3.0	6.9	18	0	0	0	2	0	2	4	10	7	6	11	0	1.1	0.8	-	
礫群20 R9 S(下)	11	11.0	6.2	8.6	11	0	0	0	7	1	0	3	0	4	1	6	0	1.0	0.8	-	
礫群21 R9 S(下)	29	16.0	2.7	8.7	29	0	0	0	6	0	6	15	2	19	0	10	0	1.0	0.8	-	
礫群22 T8 S(下)	10	8.8	5.3	7.1	10	0	0	0	5	0	0	5	0	8	0	2	0	0.3	0.3	-	
礫群23 T8 S(下)	7	10.2	5.7	7.7	7	0	0	0	3	2	0	2	0	3	0	4	0	0.9	0.8	-	
礫群24 O8 S(下)	178	22.7	2.1	9.9	178	1	0	1	32	9	22	98	23	76	1	101	0	4.6	3.2	有 プロト44	
礫群25 O8 S(下)	67	23.3	2.2	10.3	67	0	0	0	12	2	3	48	4	18	0	49	0	1.8	1.6	有 プロト43	
礫群26 G10 S(下)	9	11.0	5.1	8.7	9	0	0	0	4	0	2	31	0	2	7	0	1.9	1.5	-		
礫群27 S9 S(下)	10	10.2	3.7	7.3	10	0	0	0	5	1	1	2	1	0	1	8	0	0.8	0.7	-	
礫群28 T9 S(下)	18	25.9	5.2	10.0	18	0	0	0	4	4	4	6	0	13	0	5	0	1.3	0.9	-	
礫群29 D10 S(下)	7	22.9	6.7	10.2	7	0	0	0	0	1	2	4	0	9	0	4	0	1.3	0.4	-	
礫群30 Q10 S(上)	17	11.1	3.4	7.3	17	0	0	0	0	2	1	12	2	7	0	10	0	2.8	1.6	-	
礫群31 T7 S(下)	76	11.6	3.6	6.3	76	0	0	0	4	0	7	30	14	47	0	29	0	1.7	1.4	-	
礫群32 S11 S(上)	8	8.3	2.7	5.4	8	0	0	0	0	0	1	5	2	7	0	1	0	1.1	0.9	-	
礫群33 R11 S(上)	15	17.6	3.5	8.4	15	0	0	0	0	2	3	7	3	0	0	15	0	2.7	1.0	-	
礫群34 R11 S(上)	31	12.5	3.1	6.5	31	0	0	0	1	1	3	16	10	3	0	28	0	2.5	1.7	-	
礫群35 R11 S(下)	19	12.9	1.7	6.9	18	0	0	0	4	0	0	12	3	8	0	11	0	2.1	1.6	-	
礫群36 O10 S(下)	15	12.9	3.3	8.8	15	0	0	0	0	3	8	3	1	1	0	14	0	1.4	0.5	有	
礫群40 P15 S(下)	36	16.3	4.6	10.6	36	0	0	0	1	6	14	15	0	18	0	18	0	2.1	1.4	-	
礫群41 P19 S(上)	21	23.5	2.1	8.8	21	0	0	0	2	0	3	13	3	15	1	5	0	2.2	0.8	有 プロト45	
礫群42 P14 S(上)	81	25.5	1.1	8.1	82	0	0	4	3	1	5	19	18	0	67	0	2.3	2.1	-		
礫群43 O14 S(上)	180	26.0	1.1	8.5	179	1	0	0	31	3	7	71	68	87	9	104	0	2.3	1.7	有 プロト45	
礫群44 P14 S(上)	44	29.5	2.3	5.7	44	0	0	0	2	0	1	30	11	29	3	2	0	1.5	1.4	-	
礫群45 P13 S(下)	159	32.1	1.8	4.2	151	2	0	0	7	8	4	61	75	64	3	60	0	1.7	0.9	-	
礫群46 P13 S(上)	33	15.5	3.8	8.6	35	0	0	0	18	2	1	10	4	27	0	6	0	1.5	1.3	有 プロト45	
礫群47 O13 S(下)	30	18.3	2.4	7.2	39	0	0	0	0	3	3	31	2	12	1	26	0	1.8	0.8	-	
礫群48 O16 S(下)	134	15.0	1.6	8.3	134	0	0	0	0	86	14	6	45	3	114	3	17	0	2.1	1.2	有
礫群49 N16 S(下)	26	25.8	4.7	9.5	26	0	0	0	19	3	2	1	1	15	2	9	0	1.7	1.0	-	
礫群50 P14 S(上)	9	16.5	4.8	10.4	8	0	0	0	3	1	4	6	0	5	0	4	0	0.8	0.2	-	
礫群51 O14 S(上)	19	27.9	4.6	10.6	18	1	0	0	5	0	6	8	0	7	1	11	0	0.9	0.6	-	
礫群52 P15 S(下)	34	19.9	5.9	10.1	34	0	0	0	20	0	8	6	0	5	0	29	0	2.2	1.7	-	

常に高く、完形の構成礫が多い状況が見られる。

石材比率は本文化層の全礫群で花崗岩が45%、閃綠岩が2%、凝灰岩が52%である。各礫群では花崗岩と凝灰岩の比率は当然異なっており、礫群33のように構成礫15点が全て凝灰岩であるものや、礫群4のように97%が花崗岩であるといった状況も見られた。構成礫の石材で花崗岩の割合が優勢なものが5(上)の礫群12基の内、5基、5(下)の礫群37基の内、11基である。

本文化層の礫群類型は「高密集」が25基と多く、全体の51%を占めている。「集中」は5基で10%、「低密集」が5基で10%、「密集」が4基で8%、「分散」が10基で20%である。5(上)と(下)で見ると、「高密集」は33%と56%、「集中」は16%と8%、「低密集」が16%と8%、「密集」が8%と8%、「分散」25%と18%である。以上から、5(上)は「高密集」と「分散」の割合が高いが、その他も極端に低くなっている。全類型がおおむね検出されていた。しかし、5(下)は「高密集」が半分以上を占め、「分散」が若干高いものの、それ以外は10%にも満たなかった。5(上)と5(下)の礫群の差は分布類型に大きく現れていることがわかった。

礫群間の接合は、第47回に示している。数多くの礫群で礫群間接合が確認されている。礫群間で

の接合は疊群の同時代性を検討する上で有益な情報である。

以下では、個別の疊群の報告を行っていく。

#### 疊群 1 (第48図)

原山遺跡で最初に確認された疊群である。旧石器時代を対象とした調査区の南西端に近いが、周囲には多くの疊群が確認されている。東と西に構成疊の分布が分かれている。構成疊は凝灰岩が多くなっている。疊群内外の接合はなかった。

#### 疊群 2 (第48図)

類型が「高密集」の疊群である。構成疊がまとまって検出された北側と、分散して分布している南側となっている。疊の底面は地形に沿って揃っていた。疊の破損度は「A」が多く、破損していない疊が多く出土している。疊の石材は大半が凝灰岩であった。全構成疊117点中107点の赤化度が「A」で、その他は「D」である。疊群内で3個体7点の接合が認められた。北側の密集地点は現地で検出状況の剥ぎ取りを行っており、他の遺物と共に保存されている。

#### 疊群 3 (第48図)

同じく「高密集」の疊群である。120点の疊が出土しているが、石材は凝灰岩がほとんどである。疊の長さの平均は6.4cmと比較的小さい。石器ブロック47と分布が重なっている。疊群内で4個体10点接合している。

#### 疊群 4 (第48図)

76点の疊で構成された疊群である。疊の石材は72点が花崗岩である。破損度は「5」が1点出土しているが、その他は「1」から「4」で極端な偏りなく検出されている。疊群内で5個体10点接合している。接合点数は構成疊の点数のわりに多いと思われる。

#### 疊群 5 (第48図)

分布類型が「分散」の疊群である。疊数が8点と非常に少ない。石材は凝灰岩が6点で、残りは花崗岩である。疊群内で1個体2点接合している。

#### 疊群 6 (第49図)

本遺跡の最も西で検出された疊群である。疊数は67点で、60点が花崗岩である。赤化は全て「A」である。疊群内で3個体6点接合している。

#### 疊群 7 (第49図)

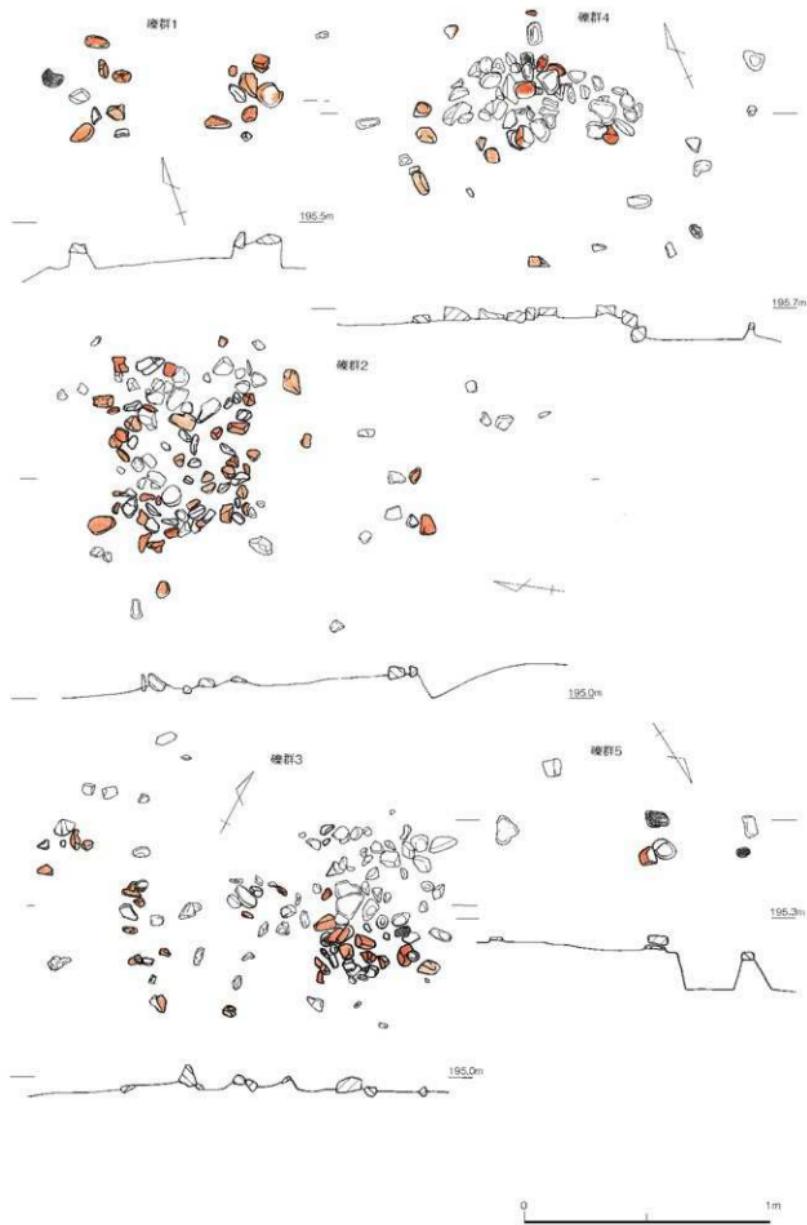
規模が長軸2.3mで短軸1.6mと大きな範囲の疊群である。疊数は68点と多いわけではないが、「高密集」である。石器ブロック46と分布が重複している。数は多くないが、炭化物が周囲から出土している。

#### 疊群 8 (第49図)

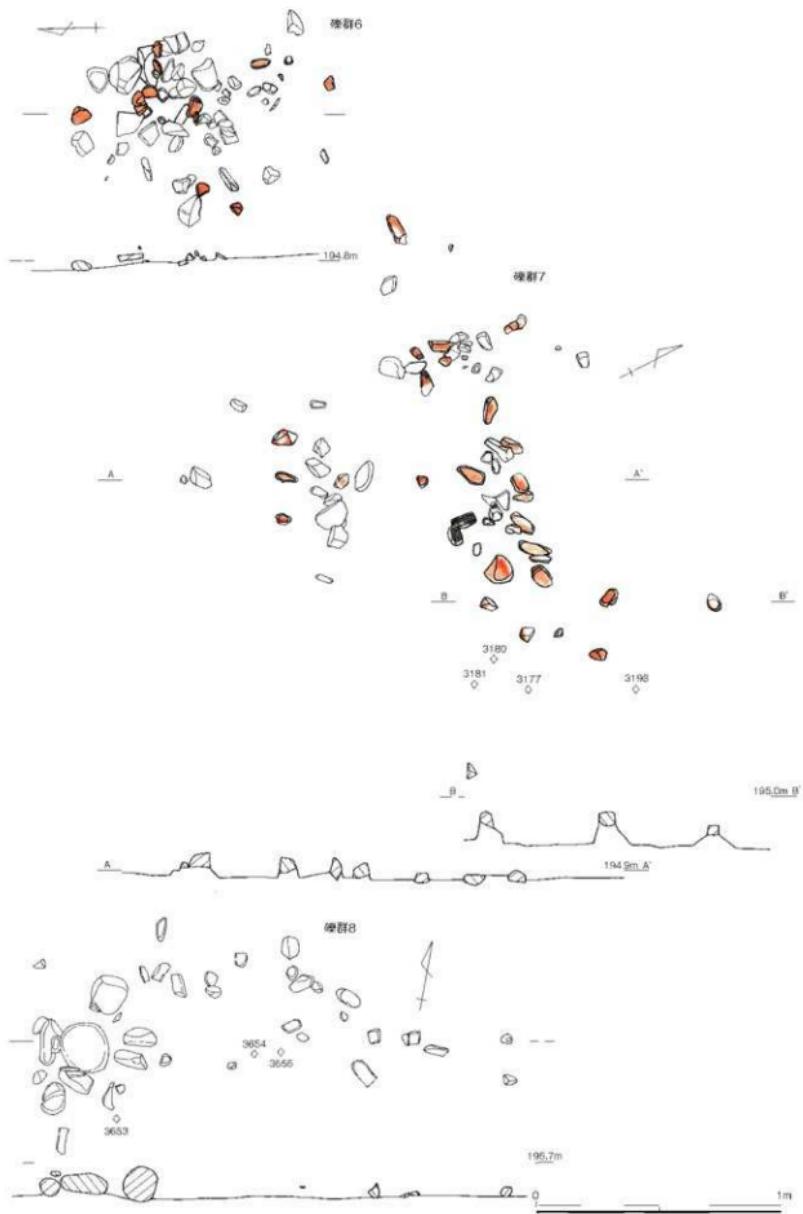
西側に大型の疊がまとまって出土した疊群である。疊の直径が22cmと非常に大きなものも見られるが、これは加熱しても熱効率が悪く、疊群の構成疊ではなく、配石の可能性が高い。石器ブロック45が重複している。

#### 疊群 9 (第50図)

構成疊数54点の疊群で、疊全ての赤化度は「A」である。疊群8と同様に直径が22cmもの疊が存在しており、配石の可能性がある。この大型の疊はよく赤化していた。完形の疊は1点しかなく、かなり破損している疊が多かった。疊群内での接合が11個体33点で、疊の总数が54点であったがよ



第48図 5層棲群1～5実測図 ( $S=1/20$ )



第49図 5層礫群6～8実測図 ( $S=1/20$ )

く接合している。礫群内で破損したまま廃棄されていたものと考えられる。

#### 礫群10(第50図)

本文化層で2番目に構成礫数が多い礫群である。礫数は173点である。全て赤化度「A」で、138点が凝灰岩である。構成礫の直径は最大で11.9cmであり、層数は多いが20センチを超える大型の礫は存在しなかった。非常に礫の大きさがまとまった礫群であるといえる。

#### 礫群11(第50図)

原田遺跡最大の直径40.5cmの構成礫を持つ礫群である。礫群17と18の2基と接合関係にあり、礫群内でも10個体20点の接合が見られた。石材は花崗岩16点で、閃緑岩2点、凝灰岩22点で、花崗岩と凝灰岩との石材比率は他の礫群に比べ小さい。

#### 礫群12(第51図)

礫数が9点で「分散」の類型となる礫群である。完形の礫はなくかなり破損している。石材は凝灰岩が多い。

#### 礫群13(第51図)

13点の礫が小さい範囲にまとまった礫群で、礫自体の破損も進んでいる。分布類型は「集中」となる。礫群間接合は礫群17と30の2基で、礫群内でも4個体10点が接合している。

#### 礫群14(第51図)

礫数100点で構成された「高密集」の礫群である。炭化物が礫群内外で多量に出土している。炭化物の出土面は礫群の底面から上方である。石器ブロックも重複している。石材は8割が花崗岩である。礫の26%が破損度「1」で、42%は「4」、「2」「3」も10%以上存在する。

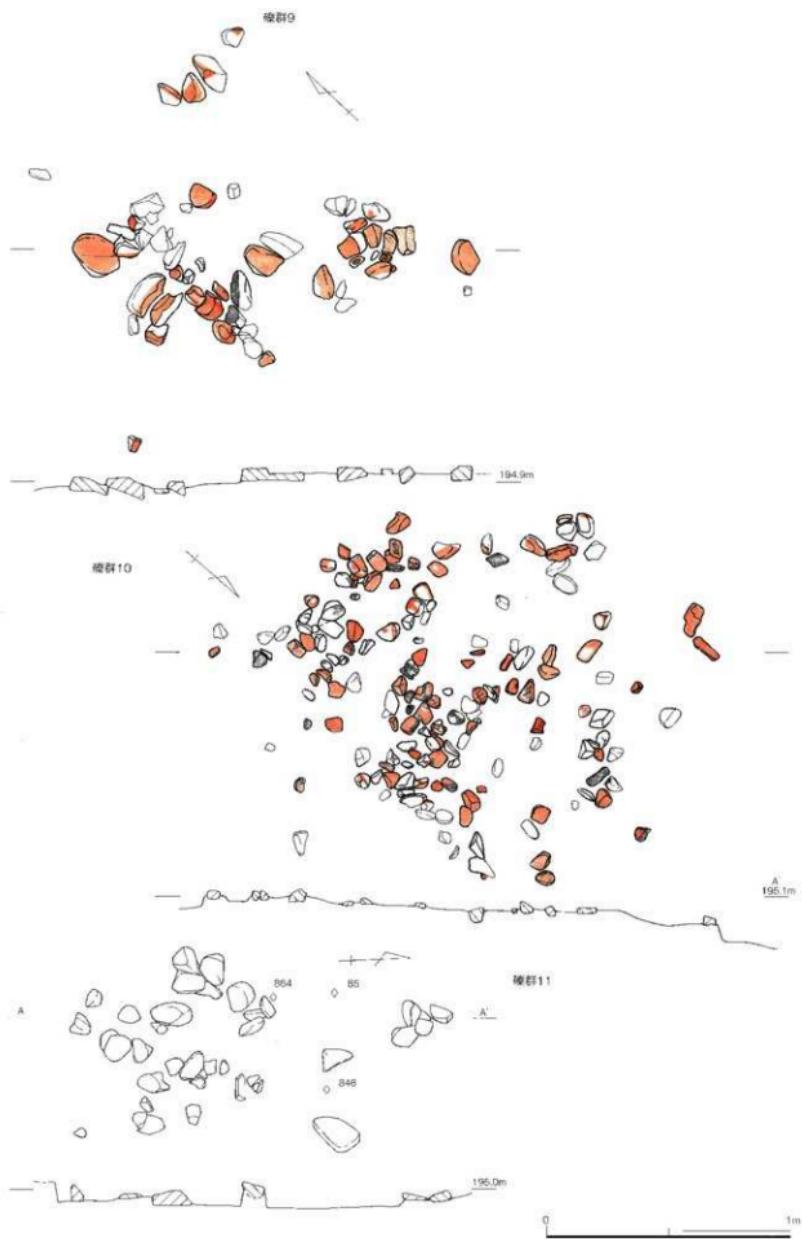
#### 礫群15(第51図)

構成礫が4点しかなく、礫群とすべきでないかもしれないが、本報告では配石は設定していないため、礫群としている。また個々の礫の人大きさも直径が最大22cmのものや、4点の礫の直径の平均値が16cmにもなり、他の礫群と比較しても大きさが顕著であり、この点からも配石とすべきであったかもしれない。4点の礫は大型ではあるが、全て比熱しており、礫群内で1固体2点の接合が見られた。分布類型が「密集」である。

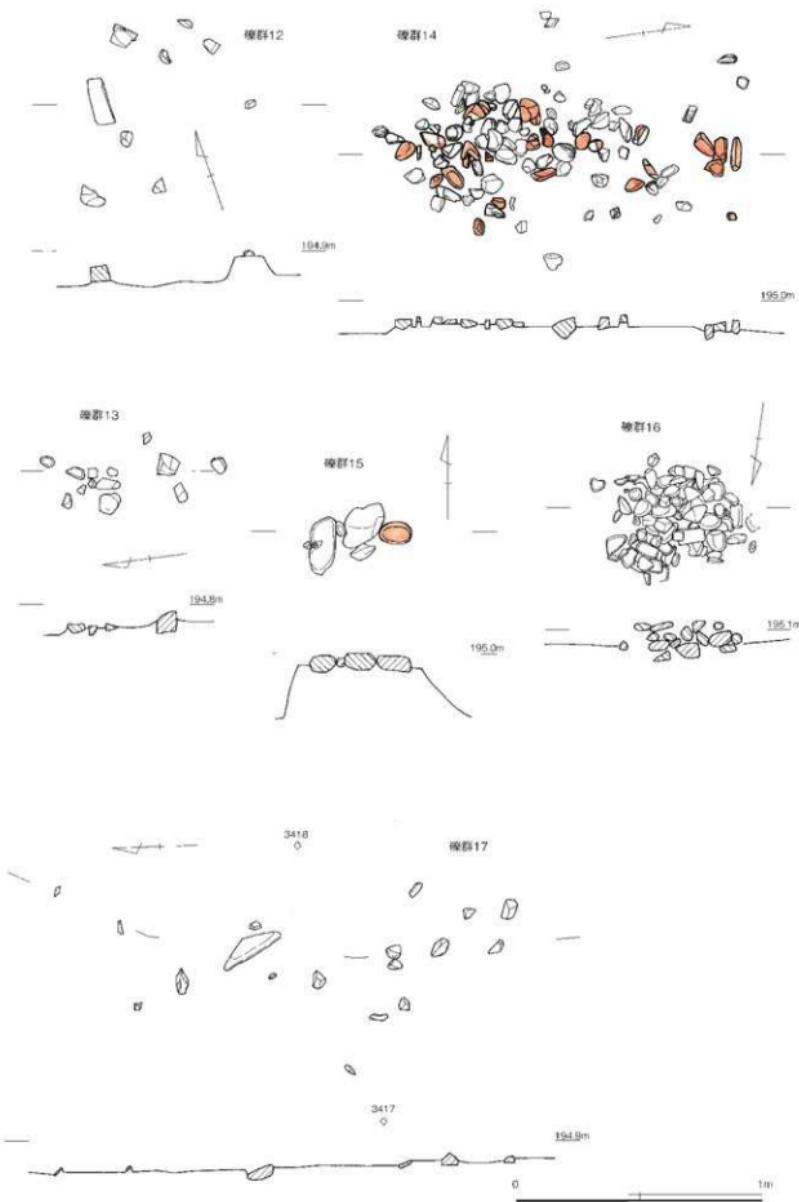
#### 礫群16(第51図)

これも分布類型が「密集」となる礫群である。範囲が0.7mの円形内に111点もの礫が分布している。礫は面的にはほとんど広がらず、数段に重なった状態であった。発掘調査中は掘り込みを伴う礫群の可能性も考え、周間に十層確認用のトレーナーを設定し掘り下げたが、礫群に伴う掘り込みなどの痕跡は認められなかった。したがって、この礫群は掘り込みに積み込まれたものではなく、平坦面に礫を積み重ねた状態で埋もれることになる。しかし、礫群の底面から最上面までの高さは約18センチもあり、積み上げるには高すぎる印象である。トレーナーで掘り込みを確認できなかったが、地面を掘削後、掘り上げた土砂をすぐに埋め戻していれば、トレーナーで確認できなかつた可能性もある。また、礫を積み上げ後に周間に土を持った可能性も考えられる。いずれにしても原田遺跡ではこのように礫を積み上げた状態で検出された礫群は他になく、礫群の性格や使用方法、廃棄状態を検討するうえで、良好の資料と思われる。構成礫数は100点を超えるが、礫群間の接合はなく、礫群内で2個体4点の接合が認められただけである。

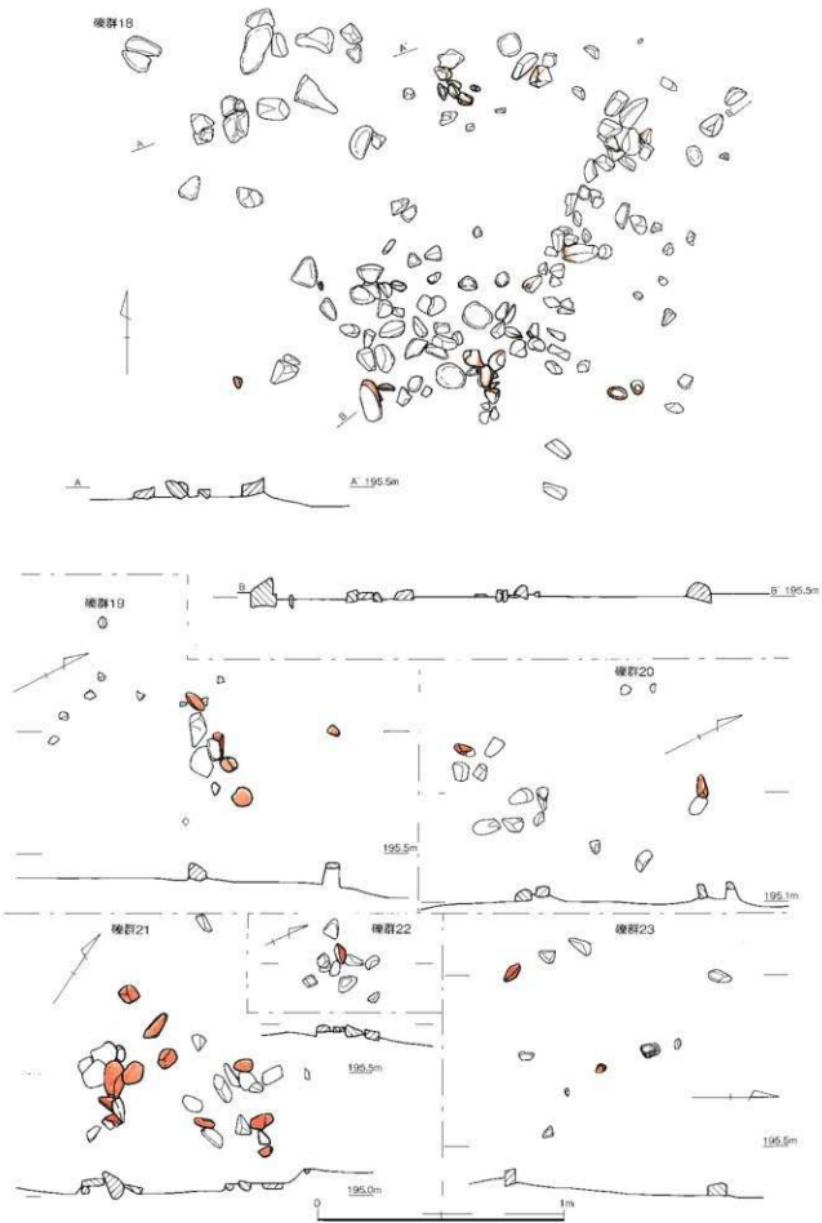
#### 礫群17(第51図)



第50図 5層棲群9~11実測図 ( $S=1/20$ )



第51図 5層塊群12~17実測図 ( $S=1/20$ )



第52图 5層裸群18~23実測図 ( $S=1/20$ )

砾の分布範囲が長径1.9mもある大型の砾群である。しかし、砾は非常にまばらに出土しており、分布類型も「分散」である。最大径が26.0cmもある大型の砾が出土しているが、これは他の構成砾に比べ非常に大きく、砾群を構成する砾として焼成されたものか不明である。しかし、この大型の砾は表面が赤化しており、被熱しているのは確かだと思われる。他の構成砾と比較しても出土した高さに大きな違いはない。この砾は大型だが構成砾である可能性と、構成砾ではないが砾群に付随した砾である可能性が考えられる。砾群11と13との間に接合関係が見られる。

#### 砾群18(第52図)

本文化層の砾群では2番目に大きな規模の砾群である。構成砾数も172点と非常に多い。後述するが、本文化層で最も広い範囲で設定した砾群24は数基の砾群により構成されている可能性が高く、単一の砾群では、本砾群が構成砾数の多さ、砾群の範囲などで本文化層中で最も規模の大きな砾群と言える。構成砾の82点(47%)は破損しておらず、破損した砾によって構成砾数が多くなっているわけではなく、砾の個体数が砾群形成時から多い砾群であるとわかる。石材は119点(69%)が凝灰岩である。砾群11と24と砾群間接合の関係にあり、砾群内でも11個体25点の接合が確認されている。接合関係が見られた砾群24は立地も谷地形の底面と全く異なっているため、今回の接合関係の確認は、砾群の形成時期や形成場所を考える上で興味深い。大きな範囲の砾群であるが、石器ブロックと分布範囲が重なることはなかった。

#### 砾群19(第52図)

南プロックの等高線に沿って確認された砾群の一群ではなく、その内側に形成された砾群である。石器ブロック48の範囲に重なっている。砾群は18点の砾で構成されている。砾群の中心に直径10センチを超える砾が集中しており、その周囲に小さく割れた砾が分布している。破損度「5」が10点もあり、砾の半数以上を占めている。砾群45も同様に半数近くの砾が破損度「5」であるが、本文化層の砾群では砾の破損が非常に進んでいる数少ない砾群である。

#### 砾群20(第52図)

砾群19と同じ分布類型が「低密集」となる砾群である。後述する砾群21と合わせて、砾群10や18等の砾群が並んで確認されている一群の南側にやや離れて検出されており、砾群の大きさも同程度である。完形の砾が多く、破損している砾も接合せず、接合関係は全く認められなかった。

#### 砾群21(第52図)

砾群19との関係が考えられる砾群であるが、破損度が「4」が最も多く、砾群内の接合も2個体7点確認されている。

#### 砾群22(第52図)

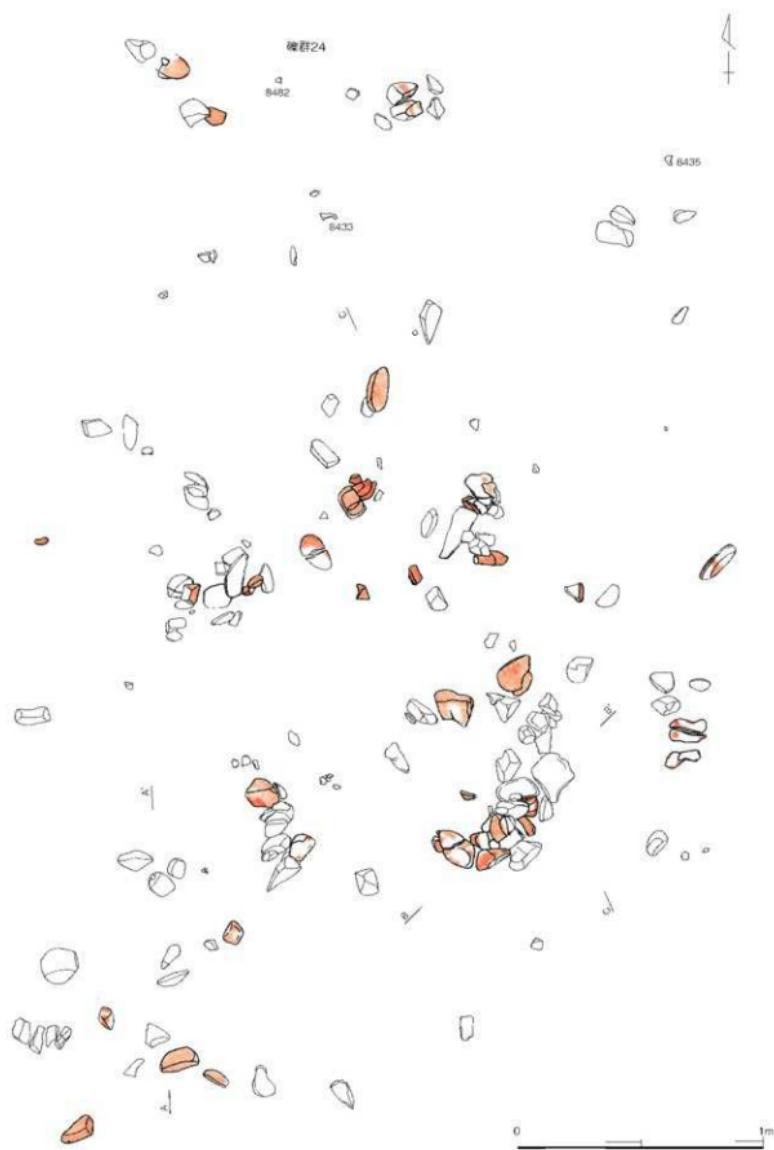
最も砾群の規模が小さい砾群である。砾群の範囲は長軸、短軸とも0.3mしかなく、原田遺跡の中で最も小さい砾群である。構成砾数は10点で、半数が完形である。「密集」である。

#### 砾群23(第52図)

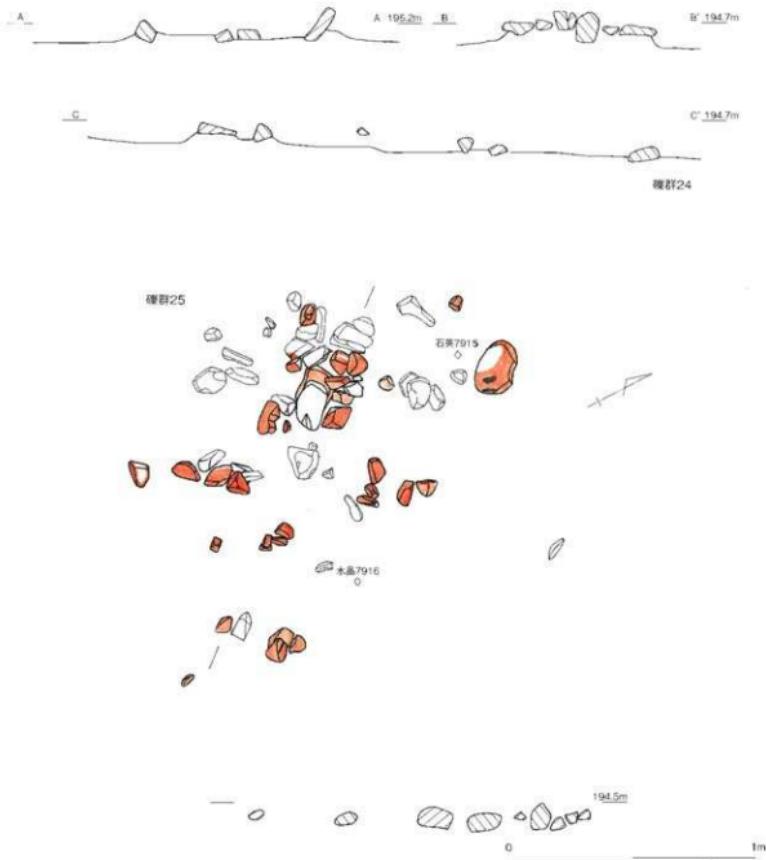
砾群5に隣接していた砾群である。構成砾数は7点で、「分散」である。非常に砾が分散して出土しており、砾群5と合わせて一つの砾群と考えても良いかもしれない。

#### 砾群24(第53図・第54図)

谷地形の底面で検出された砾群である。原田遺跡で最も大規模の砾群で直軸が4.6m、短軸が3.2mである。構成砾数も178点と最も多いが、砾の分布にはまとまりが何カ所かに見られる。数基の砾



第53図 5層櫟群24(1)実測図( $S=1/20$ )



第54図 5層礫群24(2)・25実測図 ( $S=1/20$ )

群が隣接し、あるいは重なって分布している可能性が高い。大型の礫が何点も見られるが、礫の割れ面を接して隣り合う礫と多くが接合し、その場所で破断したものとわかる礫が数多く出土している。礫群内の接合は23個体80点あり、礫群間接合は礫群18と25と確認されている。炭化物は礫群24と25、石器ブロック39を覆う範囲で数多く出土している。

#### 礫群25(第54図)

礫群24と同様に谷地形の底面で検出された礫群である。67点全ての礫の表面が赤化しているが、赤化の度合いが高い礫群である。礫群24とは空間があり、別の礫群としている。礫群24と同様に石器ブロック39と範囲が重なっており、また周辺から多量の炭化物が検出されている。礫群間接合が礫群24と認められた。

#### 礫群26(第55図)

礫群29と共に、南ブロックで並んで検出された礫群の内、最も東で検出された礫群である。小さい礫が分散して形成された礫群である。石器ブロック40と範囲の重複が見られた。

#### 礫群27(第55図)

これも小さい礫が分散して形成する礫群である。凝灰岩が主体である。

#### 礫群28(第55図)

平坦面を持つ大きな礫の西側に多数の礫を配置した礫群である。周辺に分散した礫も見受けられるが、中心部分に礫がまとまっていた。

#### 礫群29(第55図)

礫群26と共に、南ブロックで並んで検出された礫群の東端で検出された礫群である。礫の分布は北西と南東に大きく分かれている。北西は直径22.9cmの大型の礫のみで、南東にそれ以外の礫がかたまって出土した状況である。

#### 礫群30(第56図)

構成礫数が17点しかないが、礫群の規模は広く、「分散」となる礫群である。3個体6点が礫群内接合している。完形の礫は出土していない。

#### 礫群31(第55図)

本文化層の礫群の内、もっとも南で検出された礫群である。構成礫の長さの平均値が6.3cmで最も小さい。破損度も「4」と「5」で64点と84%を占めており、ほとんどの礫は小さく割れている状況である。破損度は高いが、礫群内の接合は1個体2点しかなく、ほとんど接合しなかった。また、礫群間での接合も見られなかった。

#### 礫群32(第56図)

北ブロックの南端に形成された礫群で、小さい範囲に礫がまとまって出土している礫群である。礫の赤化が顕著で、礫の破損した状態を観察するのに適した礫群であったため、礫群2と同様に現地で地表面の剥ぎ取りを行い、実物の礫を設置して礫群の展示が可能な状態で保存管理している。石器ブロック38と遺構の重複が見られた。

#### 礫群33(第57図)

礫群34と接し、北ブロックの最も南で検出された礫群である。全て凝灰岩で、破損度も「4」が最も高くなっている。3個体7点の接合が礫群内で認められた。

#### 礫群34(第57図)

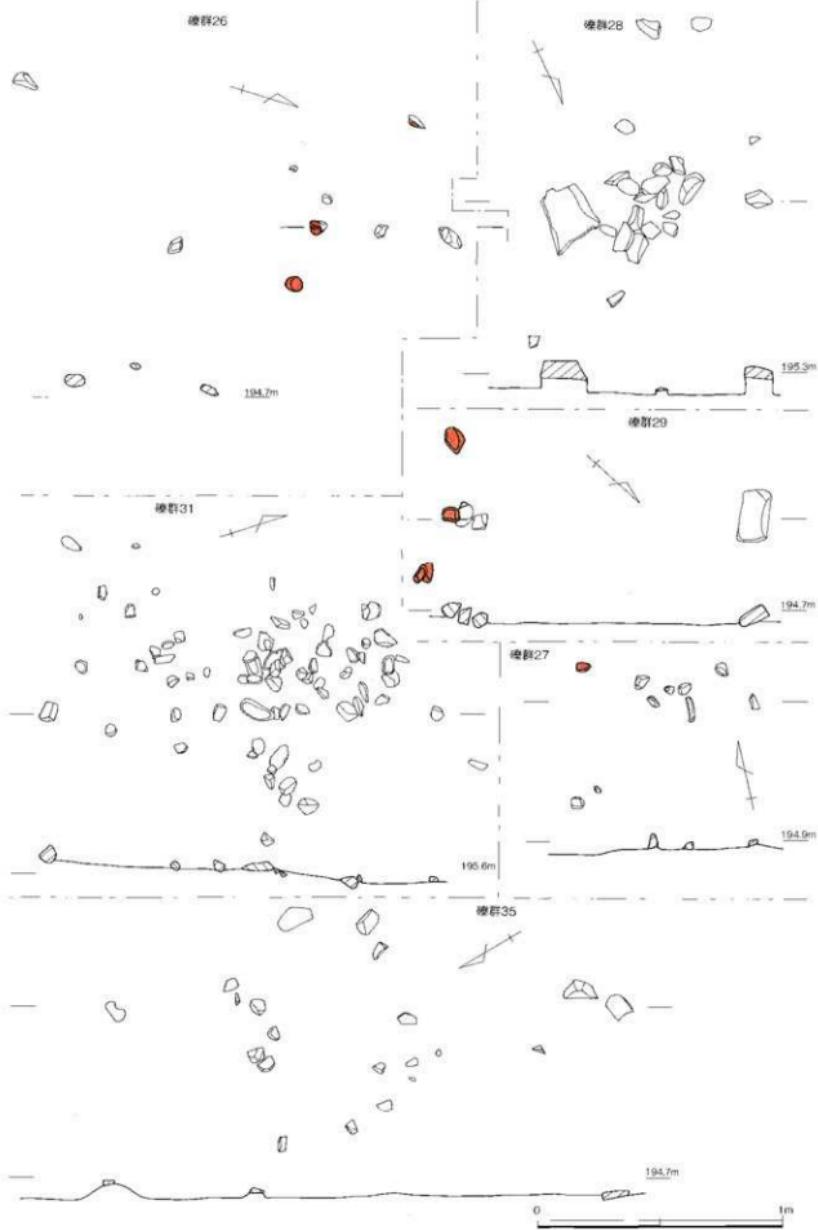
礫群33と隣接していた礫群である。これは破損度の「4」と「5」が高く、礫はほとんど破片であった。石材は凝灰岩が多数を占めている。礫群33と共に石器ブロック37と範囲が重なっている。礫群内で3個体8点の接合が認められた。

#### 礫群35(第55図)

礫群8に隣り合う礫群で、構成礫数は19点しかないが、長く広がって分布しているため、「分散」となる礫群である。完形の礫もあるが、破損しているものが多い。石器ブロック45と重複している。礫群内での接合はなかった。

#### 礫群36(第58図)

7区と8区の境で検出された礫群である。周間に礫や石器、炭化物はあるが、礫群は存在しない。ほとんどが凝灰岩の礫群である。接合は確認できなかった。



第55図 5層標群26~29・31・35実測図 (S=1/20)

礫群30

第56図 5層礫群30・32実測図 ( $S=1/20$ )**礫群40(第58図)**

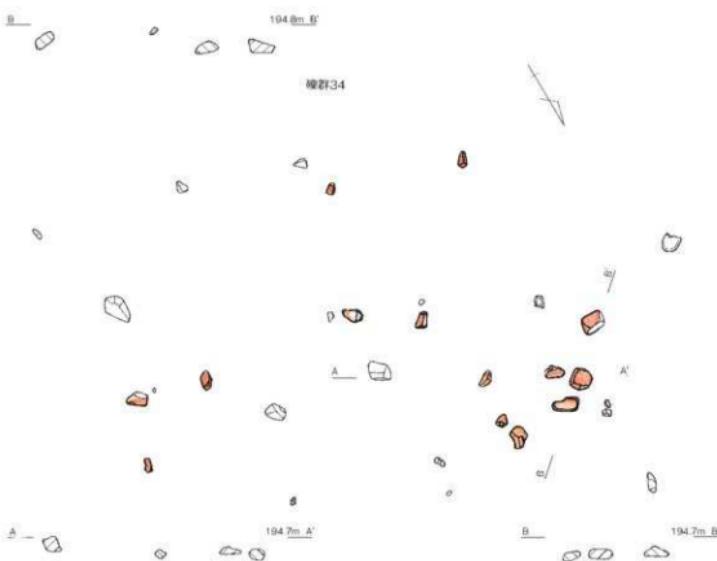
北ブロックに検出された礫群である。完形の礫は1点しかないが、構成礫の長さの平均値は10.8cmで個々の礫が大きいようである。礫は北と南に分布が偏っている。礫群内で5個体15点接合しており、接合後の礫の大きさは平均値を上回ると考えられる。

**礫群41(第59図)**

礫群の底面が6層直上でない一群で、形成時刻を5(上)としている。石材は花崗岩が多く、破損度は「4」が多い。構成礫の平均値は8.8cmであるが、最大値が23.5cmで、最小値が2.1cmであり、差が極めて大きくなっている。礫群内で4個体8点が、礫群間では礫群42と接合している。

**礫群42(第59図)**

礫群41の南に形成されている礫群で、これも6層直上ではなく、5層の中位から上位で礫が検出されている。大半が凝灰岩で、破損度も高い。また4点被熱していないと見られる礫も確認している。構成礫の平均値の最大値と最小値は礫群41よりも差が開いている。平均値は6.1cmで、礫の大きさはかなり小さかった。礫群内で11個体29点の接合が確認された。



0 1m

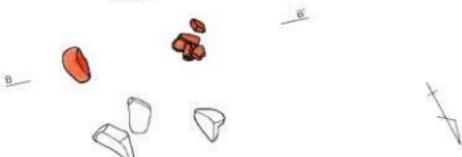
第57图 5层块群33·34尖测图(S=1/20)

標群36

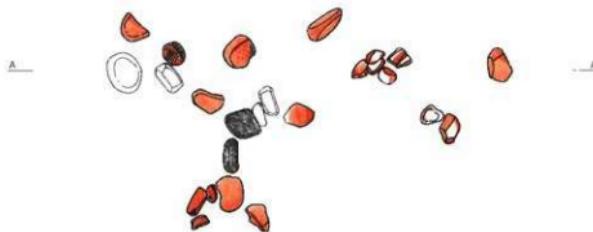


194.3m

標群40



193.6m



A' 193.6m



B' 193.6m

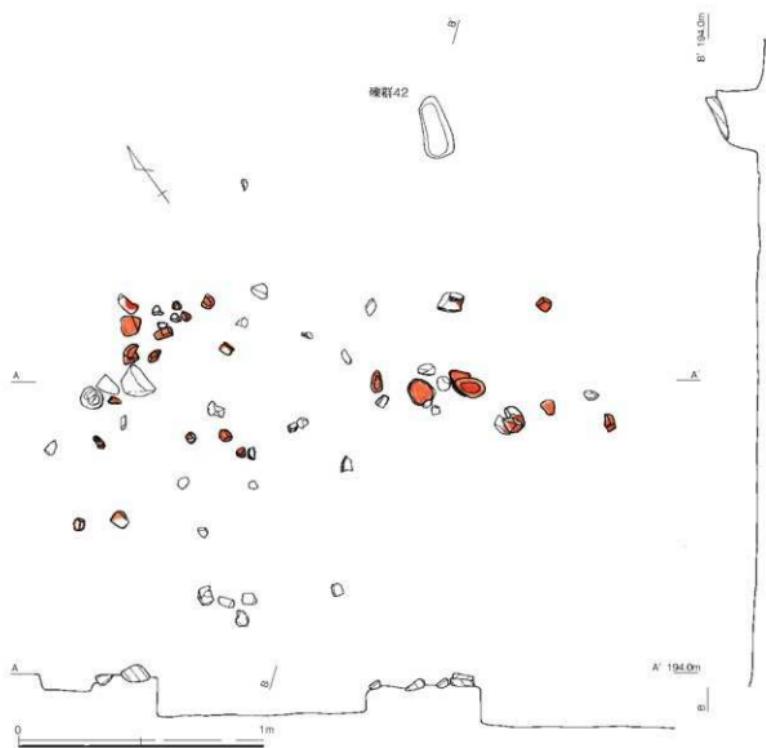


第58図 5層標群36・40実測図 ( $S=1/20$ )

sondage 41



sondage 42



第59図 5層塊群41・42実測図 ( $S=1/20$ )

#### 礫群43(第60図)

本文化層で構成礫数が180点と最も多い礫群である。この礫群も礫の最大長が28.0cmもあり、かなり大きい礫が存在する。完形の礫も31点あるが、「4」と「5」で139点もあり全体の77%を占めている。完形の礫は礫群43の中でも比較的深い位置から出土することが多く、破損度合いが高い礫は上方から多くが出土している。第60図の黒丸は破片となった礫の位置を表している。45と接合関係にあり、礫群内で13個体38点接合している。

#### 礫群44(第61図)

礫群43の西側から検出された礫群で、これも最大長が29.5cmの大型で平坦面を持つ礫が含まれている。この大型の礫の平坦面には敲打痕や研磨痕などの使用痕は肉眼では確認できていない。石材のほとんどは花崗岩であるが、破損度が高いのがこの礫群の特徴である。礫群内で4個体9点の接合が認められた。

#### 礫群45(第61図)

礫群46と平面分布が重なっている礫群である。しかし、礫の出土高が礫群45の方が10cm以上高く、礫群45は礫群46より後に形成されていたと考えられる。この礫群も32.1cmの大型の平らな礫を作っている。破損度は「5」が最も多く、礫のほとんどは小さく破損している。礫群42と43が接合関係にあり、礫群内では、7個体18点接合している。

#### 礫群46(第62図)

礫群45と平面分布が重なるが、造構の高さが異なっており、本礫群の時期は5(下)と考えている。礫の約半分は破損しておらず、北ブロックで検出された5(上)の礫群の多くは破損度が高い傾向となっているが、この礫群は破損度が低い。造構の検出面以外にも、礫の破損度合いで時期差が現れているようである。

#### 礫群47(第61図)

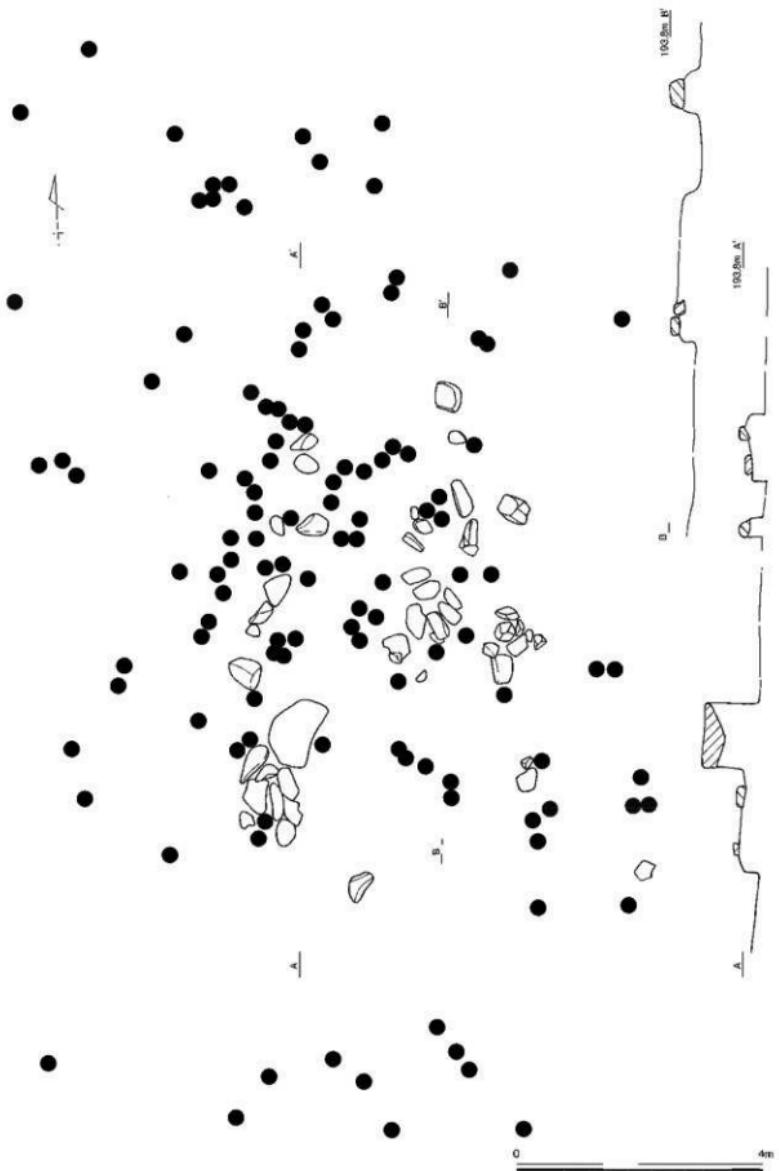
北ブロックで礫や石器が帶状に出土している地点の、最も西で検出された礫群である。構成礫の破損度は高く、礫群内で1個体2点の接合が見られた。

#### 礫群48(第62図)

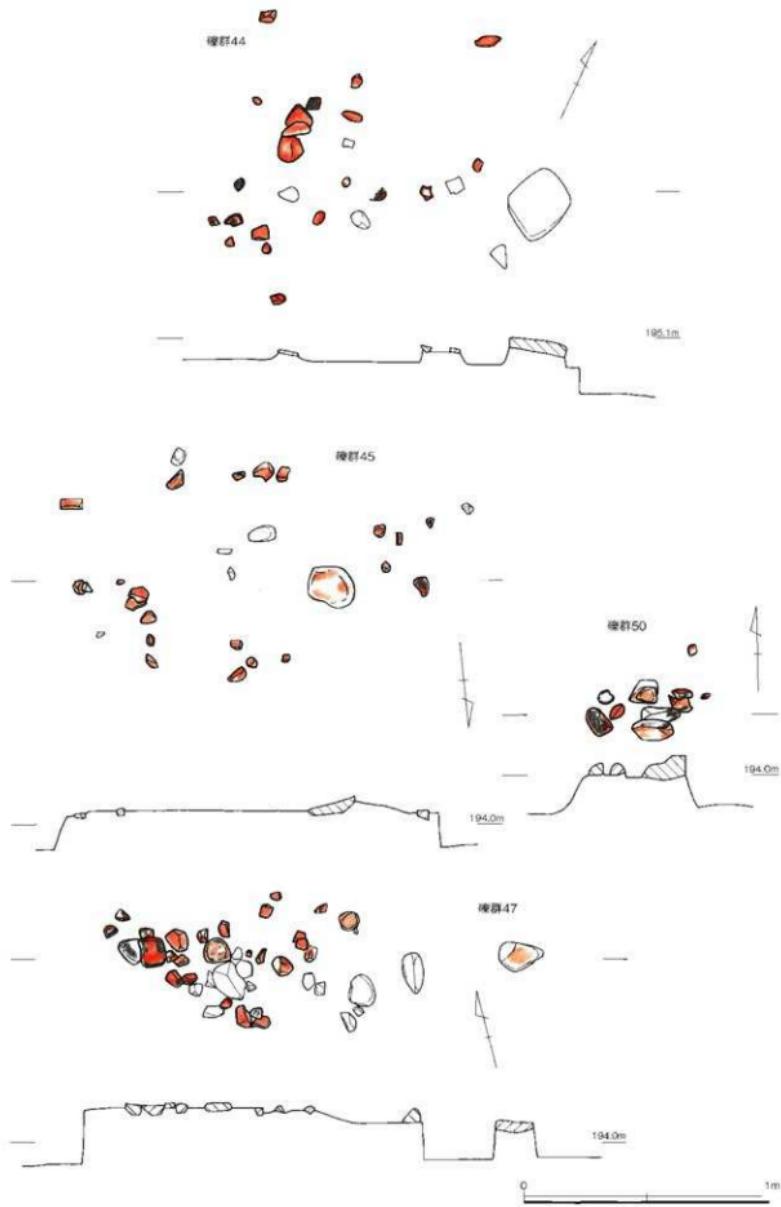
調査区の北の端で発見された礫群である。構成礫数も134点と多く、これらが「高密集」で分布している。全ての礫が被熱している。114点が花崗岩で、礫の破損度は66点が完形、「4」が45点である。礫の平面分布を見ると、いくつかのまとまりが見られる。以上から「密集」が数基集まった「高密集」状態の礫群であると考えられる。構成礫数が多いものの、礫群内の接合は4個体9点しかなかった。周辺からかなりの数の炭化物が検出されている。これらの炭化物は礫の検出面とほぼ同じ高さで検出されている。

#### 礫群49(第63図)

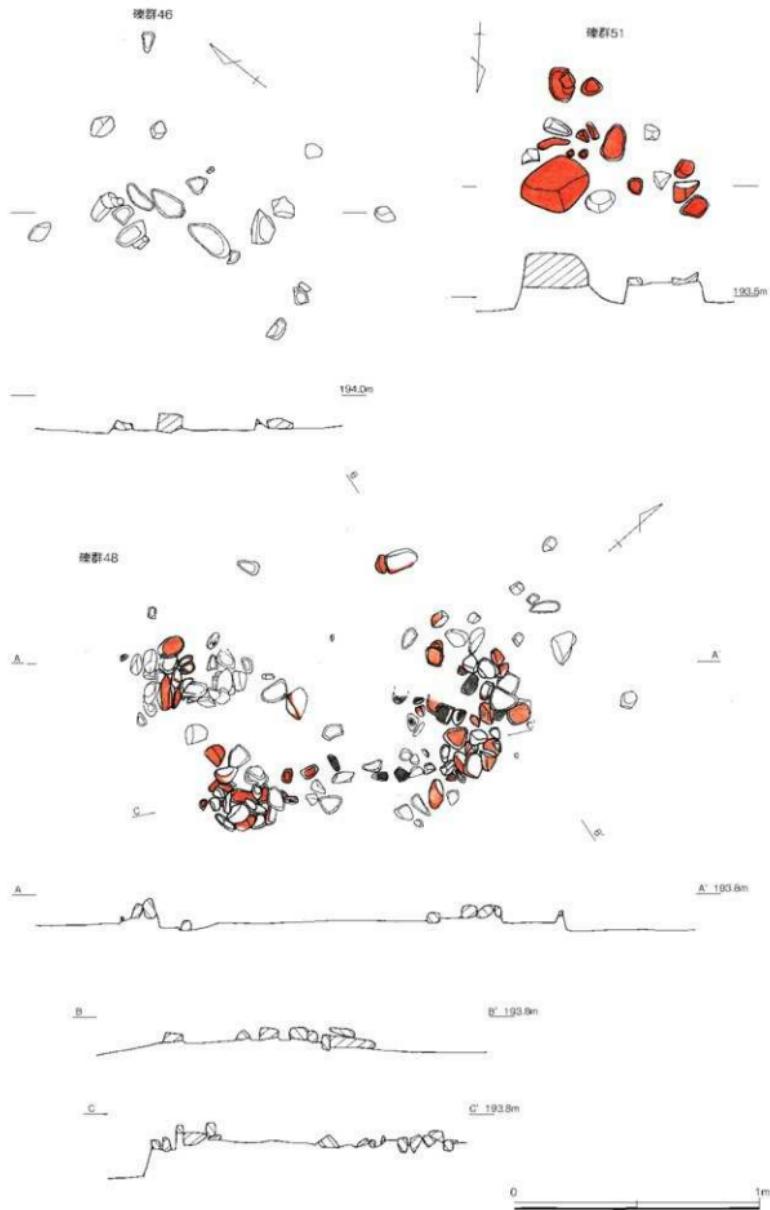
原山遺跡の礫群の内、最も北東で、遺跡の端で検出された礫群である。2つの大型の礫が伴っている。石器ブロック26が礫群と同じ範囲で、かつ同じ検出面で分布している。二つの造構の間には何らかの関係があったと考えられる。石器ブロックの項目で記述するが、棒状の礫が2点出土している。2点は接合するため本来は1点であったと考えられるが、大型で平坦面を持つ礫の存在と合わせて考えると礫群の使用方法を検討する上で興味深い事例である。また、接合関係は全く見られなかった。



第60図 5層礫群43実測図 (S=1/20)

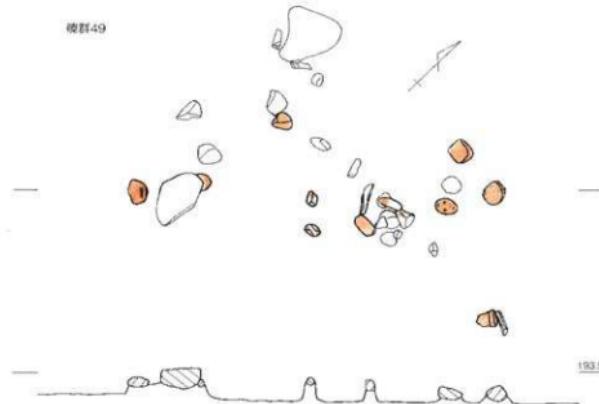


第61図 5層縦群44・45・47・50実測図(S=1/20)

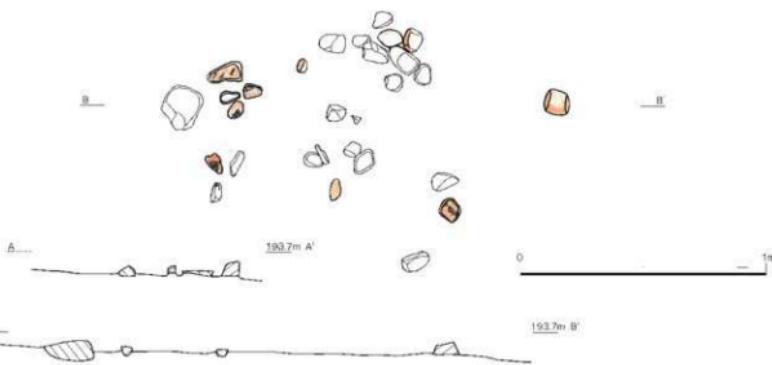


第62図 5層砾群46・48・51実測図 ( $S=1/20$ )

棟群49



棟群52



第63図 5層棟群49・52実測図 ( $S=1/20$ )

#### 砾群50(第61図)

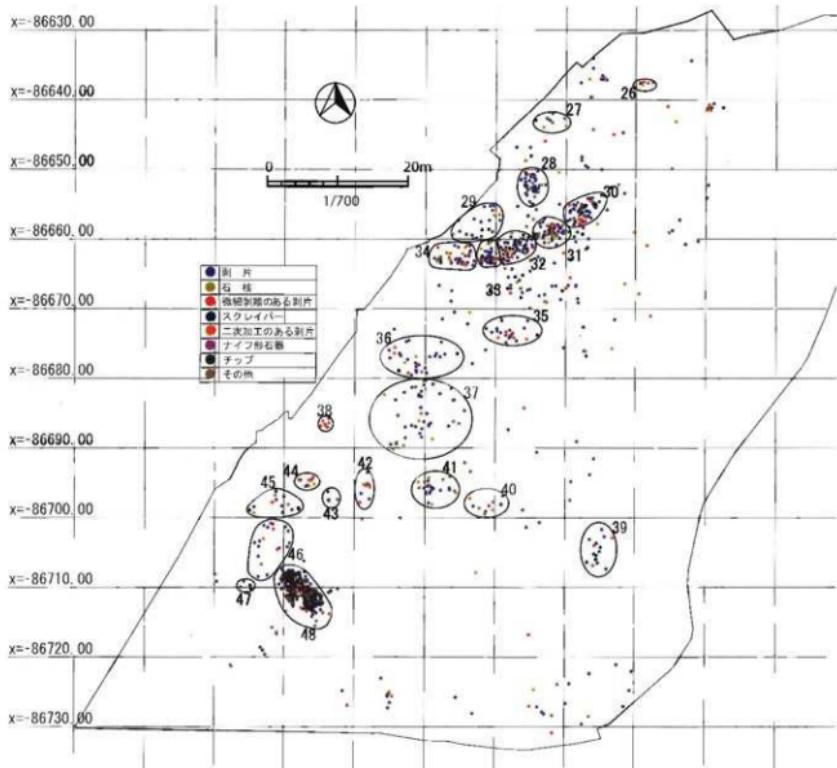
砾の平均の長さが10.4cmと、北ブロックの5(上)の砾群の中では、比較的大きい砾で構成された砾群である。砾のいくつかは重なっている。非常に小さな範囲にまとまって検出されており、分布類型も「密集」である。

#### 砾群51(第62図)

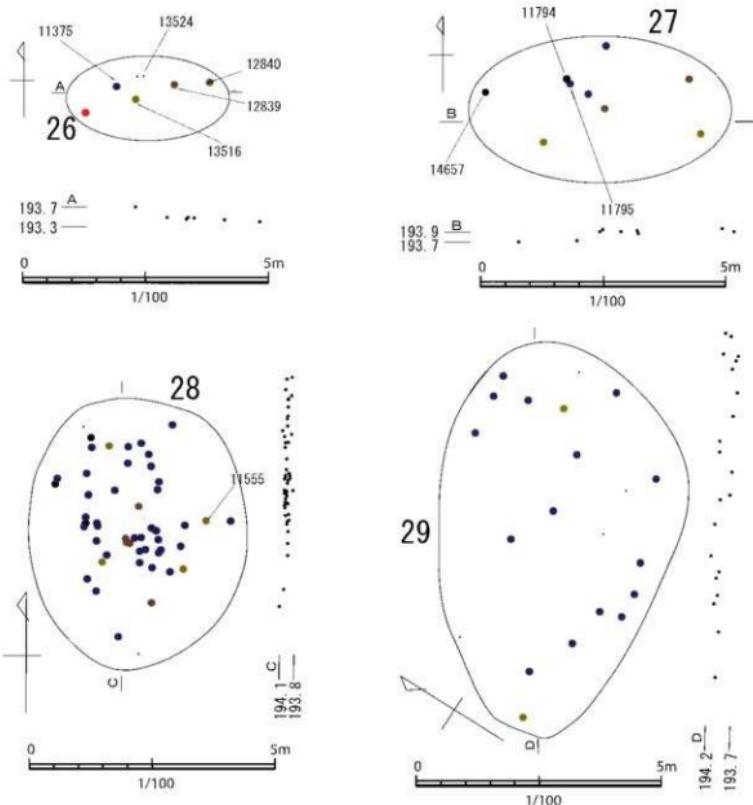
大型の砾を伴う砾群で、最も大きな砾は長さが27.9cmもある。完形の砾も存在するが、破損しているものが多い。砾群内で3個体8点の接合が見られた。

#### 砾群52(第63図)

調査区の北西の端で検出した砾群である。完形の砾が多く、砾の平均の長さも10cmを超えている。凝灰岩が多い砾群である。砾の分布は東側に大きなまとまりが見られる。西側のまとまりは別の砾群としても良いかもしれませんったが、砾の出土面の高さが同じであったため、同じ砾群として扱っている。砾群内で1個体2点の接合が認められた。



第64図 5層石器ブロック位置図(S=1/700)



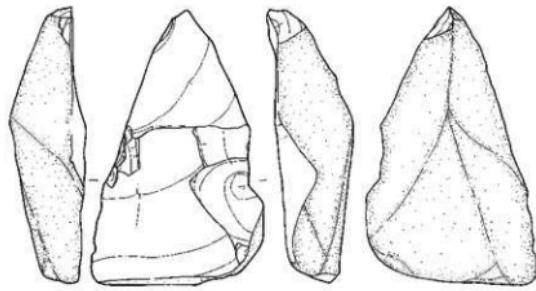
第65図 5層石器ブロック26~29出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

#### (4) 石器ブロックと出土石器(第64図~第86図)

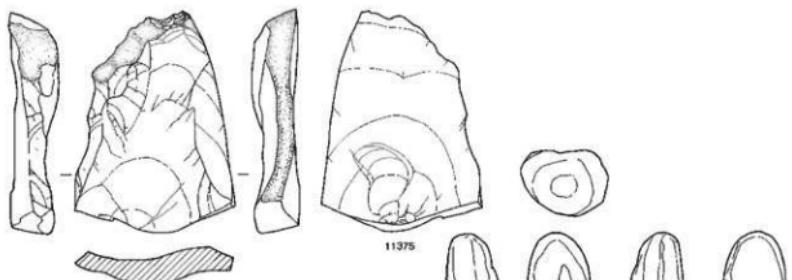
##### 石器ブロック26(第65図・第66図)

調査区の最も北東で検出された石器ブロックである。本文化層の石器ブロックの中で最も北に形成されている。礫群49と範囲を同じくし、石器の検出面も全く同様で、何らかの関係が考えられる。石器の出土数は7点で、A類が3点、B類が1点である。B類は剥片が25点である。石器の出土分布には偏りは見られない。ブロック内で1個体2点の接合が認められた。

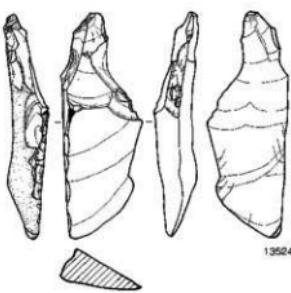
第66図は全て本ブロック出土石器である。13516は石核である。細粒の花崗岩製である。腹面は全て自然面である。右側縁から1枚の剥片を剥離している。11375は流紋岩製の剥片である。腹面背面とも同一方向の剥離面が多いが、右側縁の下端に横からの剥離痕が見られ、打面は固定されていないようである。13524は二次加工のある剥片である。両側縁に腹面から調整が施されている。調整は連続しており、スクレイパーとしても良いかもしれない。12839+12840は棒状の礫である。本ブロック内で接合した唯一の資料である。石材は凝灰岩としているが、変成岩としても良いかも



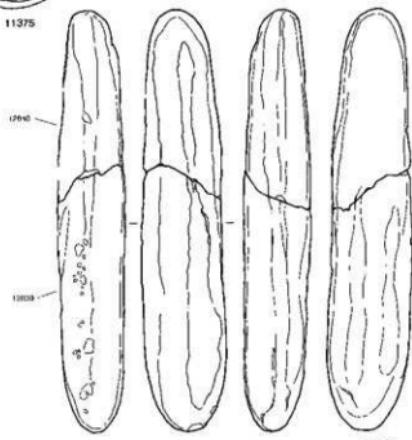
13516



11375



13524



12839

12840

0 5cm

0 10cm  
(12839 - 12840)

第66図 5層出土石器実測図(1) (S=2/3)

しない。上下端部は溝状や敲打痕状の痕みが観察でき、例えば敲石や石棒といった器種となる可能性もある。しかし、石質による自然面の風化度の違いとも考えられる。実際、観察者によっても自然面か人工的な痕跡か意見が分かれていた。したがって、本報告では、棒状の礫としている。

#### 石器ブロック27(第65図・第67図)

石器ブロック26より若干範囲が広いブロックである。調査区の北端に近い位置で検出されている。出土石器数は10点と少ないが、A類が2点出土している。その内、1点が角錐状石器である。

第67図11794は安山岩製の角錐状石器である。断面が方形に近い形状に整形されており、2面はほとんど未調整である。先端は尖っており、左側縁に素材の線辺を残しているため、ナイフ形石器と考えることも可能である。しかし、本報告では、背面を左から調整している点と、右側縁を腹面から調整を行っている点から角錐状石器としている。11795は流紋岩製の剥片である。上下からの剥離痕が認められる。14657は縦長剥片素材のスクレイバーである。腹面の右側縁に背面側から調整を続続させている。これも素材の剥片を観察すると上下からの剥離面が存在し、打面が固定されていないことがわかる。

#### 石器ブロック28(第65図・第67図)

出土石器数が51点と本文化層中では比較的多い石器ブロックである。石器の出土分布は中心にまとまっている。B類が37点(74%)と多数出土している。9%(5点)を石核が占めており、石核の割合が高くなっている。接合は本ブロック内で1個体と、右器ブロック33との間に1個体認められた。石材は凝灰岩Bが10点(74%)と非常に多く、安山岩は1%にも満たないブロックである。

第67図11555は石核である。石材は凝灰岩Bである。素材は自然面を有する分割砾と考えられる。打面と作業面を固定せず、剥離を行っている。

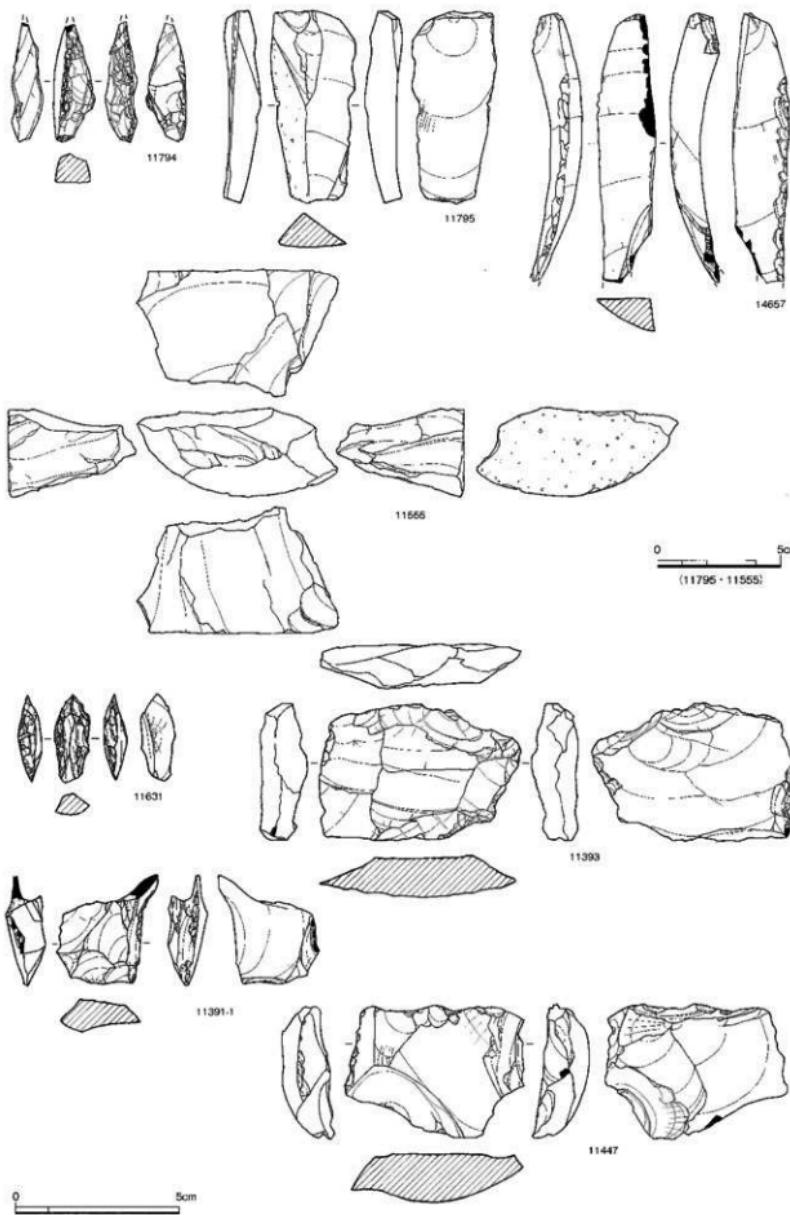
#### 石器ブロック29(第65図・第67図)

散漫かつ広範囲に石器が分布する石器ブロックである。南には石器ブロック33や34が隣接している。器種組成はA類が74%で、B類が4%である。C類も少なく、剥片とチップが出土した石器のほとんどを占めている。石材は11点(52%)が石英で、安山岩は1%にも満たない。主要な石材は異なるが石器ブロック28と同様に安山岩の比率が極めて低い石器ブロックである。

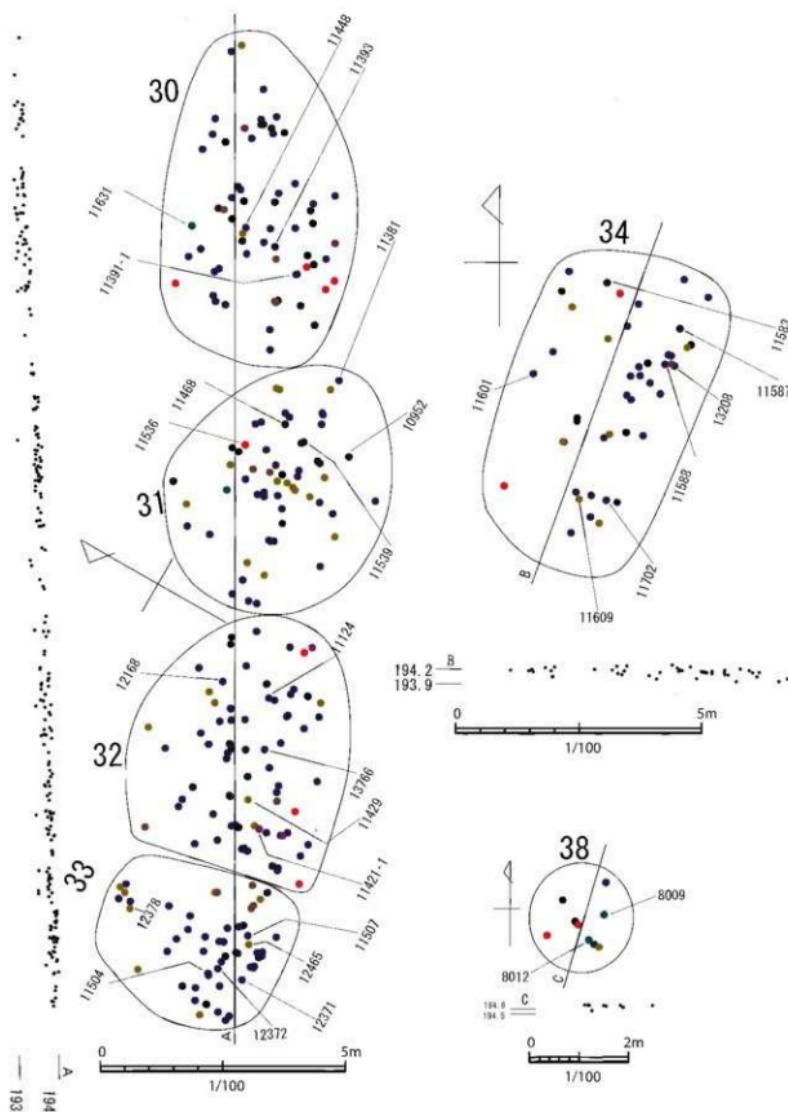
#### 石器ブロック30(第67図・第68図)

北ブロックで弧状に石器ブロックが並ぶ、その最も東で設定した石器ブロックである。北東から南西に石器が分布している。器種組成はB類が全体の61%を占めている。A類は32%(22点)で、ナイフ形石器2点と角錐状石器1点が含まれている。7点のスクレイバーと微細剥離のある4点の剥片が出土しているが、本文化層で検出された石器ブロック中で最も多く出土している。二次加工のある剥片も7点出土しており、出土石器数が際だって多い石器ブロック48を除くと最多の出土数である。石器の使用石材は安山岩が60%を占め、北ブロックでは最も安山岩の比率が高い石器ブロックである。黒曜石も17%、12点の出土数は本文化層の右器ブロックの中で最も多い出土数である。

第67図11631は角錐状石器である。黒曜石製である。打面を残している横長剥片を素材としている。腹面側からの調整により断面を台形に整形している。先端は両側縁からの調整により尖らせている。基部に下方向からの調整はない。11393と11391-1は安山岩製のスクレイバーである。両者とも右核転用スクレイバーである。11393は剥片素材の石核を元にしており、上下方向から横長剥片を剥離している。スクレイバーの調整は両側縁と下縁に交叉剥離で施されている。11391-1も剥片素



第67図 5層出土石器実測図(2) (S=2/3)



第68図 5層石器ブロック30～34・38出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

材の石核であったが、上方を折断により剥離している。両側縁に交互剥離により調整を施されている。しかし、左側縁の調整は調査中の欠損により一部の観察が困難であった。11447は黒曜石製の石核である。形状などが11393によく似ている。上縁と左側縁の細かな剥離はスクレイパーの調整の可能性もある。

#### 石器ブロック31(第68図・第69図・第82図)

石器ブロック30と32に挟まれた右器ブロックで、62点の石器がおよそ5mの円形の範囲から出土している。石器組成はA類が24%で、B類が51%、C類が22%である。A類にはスクレイパーと二次加工のある剥片が6点ずつと、角錐状石器が1点含まれている。このブロックの特徴としては、C類の割合の高さが上げられる。C類は石核が14点と本文化層で出土した全石核の14%を占めており、後述する石器ブロック48のように多量の剥片やチップが石核と共に出土した石器ブロックよりも多く出土している。他の石器ブロックとは異なる性格あるいは工程の石器ブロックではないかと考えられる。石材は51%が安山岩であるが、その他の石材も少量ではあるが出土しており、多様な石材を保有する石器ブロックである。石器ブロック36と接合関係が存在する。

第69図11381は剥片である。安山岩製の縱長剥片である。肉眼観察では表面の風化がみられない。打面は複数打面で、打面調整が行われている。末端は折断ではないかと考えられる。腹面の剥離方向とは異なる剥離面が背面に見られる。10952と11468はスクレイパーである。前者は剥片素材のスクレイパーで調整は微細な剥離、後者は剥片素材の石核を転用したスクレイパーで、石核時の剥離面を生かし、急斜度調整を施している。11536は微細剥離のある剥片である。石材は凝灰岩で、剥片の左側縁に微細な剥離が連続している。

#### 石器ブロック32(第68図・第69図・第82図)

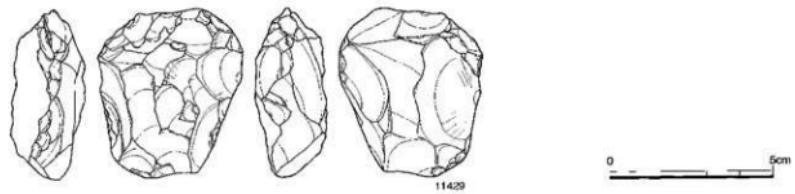
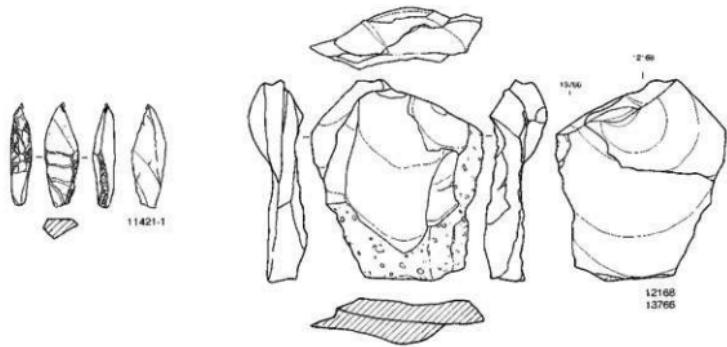
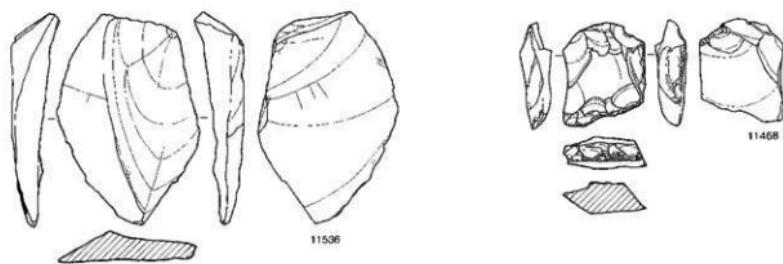
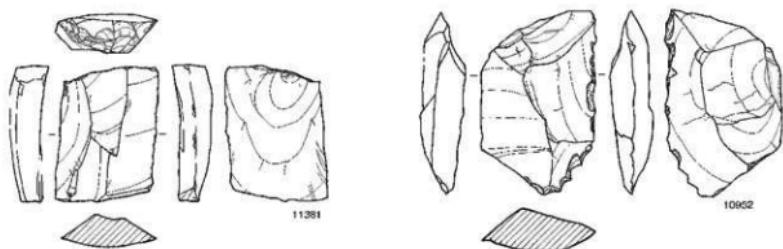
石器ブロック31と33に挟まれ、石器ブロック33に極めて隣接しているブロックである。平面分布では33との分離は非常に難しかった。出土石器数は82点と多く、17%がA類で、73%がB類である。C類は8%だが、打面調整剥片が1点出土している。本文化層で石核の打面調整剥片と認識できたのはこの1点のみである。またA類には3点のナイフ形石器が含まれている。石材組成は凝灰岩と凝灰岩Bと合わせても43%で、安山岩も34%である。その他の石材も一定の割合で出土している。石器ブロック31よりも各石材の比率が分散している。石器ブロック内で1個体2点接合し、石器ブロック33との間にも接合関係が存在する。

第69図11421-1はナイフ形石器である。厚みのある縱長剥片を素材とし、二側縁加工を施している。素材は腹面と背面の剥離が下方から行われており、単設打面と見られる。左側縁の調整は腹面からだけでなく、背面からも行われている。12168+13766は本ブロック内で接合した2点の剥片の接合例である。石材は凝灰岩Bである。自然面を有する石核から13766が剥離され、その後12168が剥離されている。石核の元となる原石は自然面の形状からアシメトリックと考えられる。11429は石核である。打面と作業面の軸位を繰り返し、寸詰まりな剥片を剥離している。左側縁の細かい交互剥離はスクレイパーの調整の可能性もある。

#### 石器ブロック33(第68図・第70図・第82図)

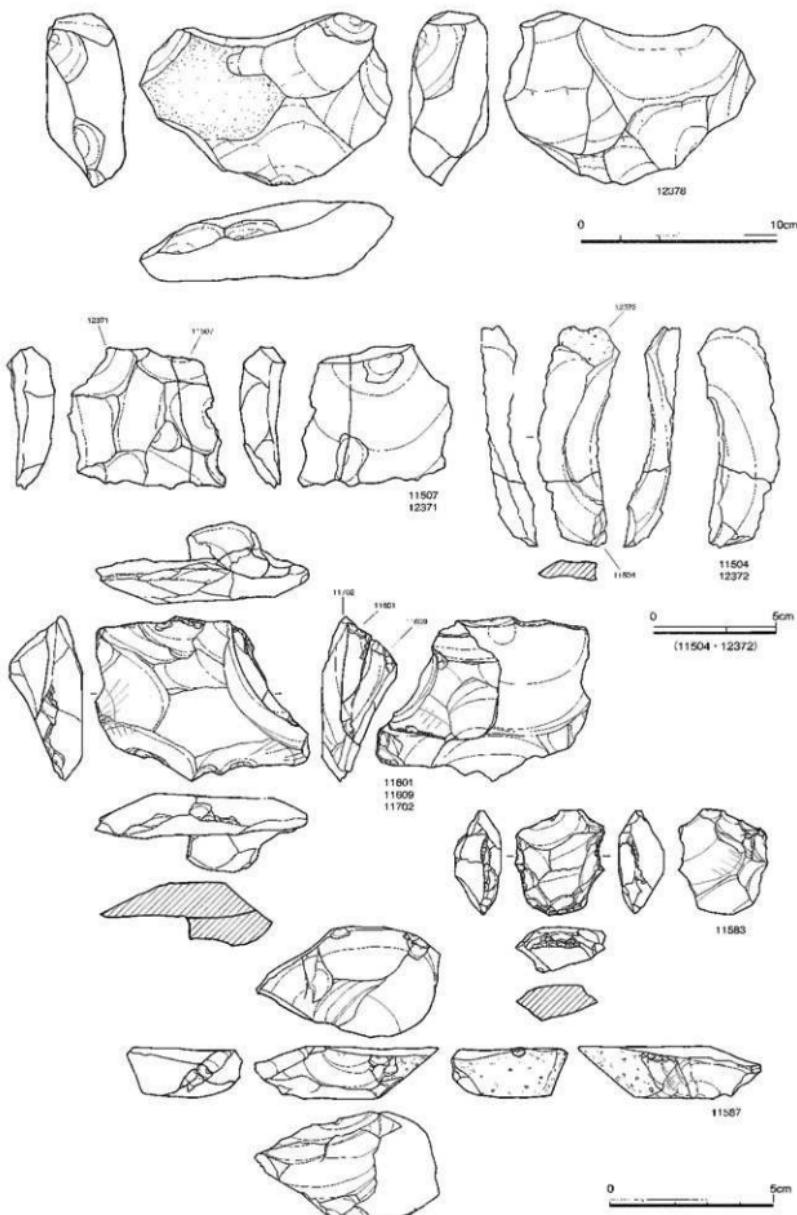
石器ブロック32に続く石器ブロックで、平面分布の分離は非常に難しい。ブロック内は南側に石器が多数出土するまとまりがあり、北側に数点の小さなまとまりが見られる。

北側のまとまりで出土した石器が石器ブロック28と接合し、南側のまとまりの石器が石器ブロック



0 5cm

第69図 5層出土石器実測図(3) (S=2/3)



第70圖 5層出土石器實測圖(4) (S=2/3)

ク32と接合している。またブロック内でも接合資料が存在する。

器種組成は37点(73%)がB類である。C類は8点(15%)である。A類はほとんど無かった。石材は凝灰岩と安山岩で8割以上となっている。

第70図12378は石核である。凝灰岩の大型石核で、素材は分割確かかなり大きな剥片である。打面と作業面を転位しつつ、大きい剥片を剥離している。剥離された剥片は、若干横長剥片が多いように見受けられるが、縦長剥片も剥離されている。11507+12371と11504+12372はブロック内で接合した例である。前者は一つの剥片であったが、二つに分割後、腹面に二次加工が施されている。後者は剥片を剥離した時に削れてしまったものと考えられる。

#### 石器ブロック34(第68図・第70図・第82図)

北ブロックで石器ブロックが並ぶその最も西で設定された石器ブロックである。石器の出土地点のまつまでは見られない。ブロックの範囲は広いが、石器の分布密度が低いため、総点数は45点である。ナイフ形石器などは出土しなかったが、A類が21%あり、B類が57%である。C類も15%である。石材組成は凝灰岩が最も多く、安山岩が続く。水晶や石英も存在する。石器ブロック32から34は凝灰岩が主体となり、かつ多様な石材組成となる石器ブロックである。隣接する石器ブロック29や31とは石材組成に違いが見られた。ブロック内で2個体の接合資料が確認されている。

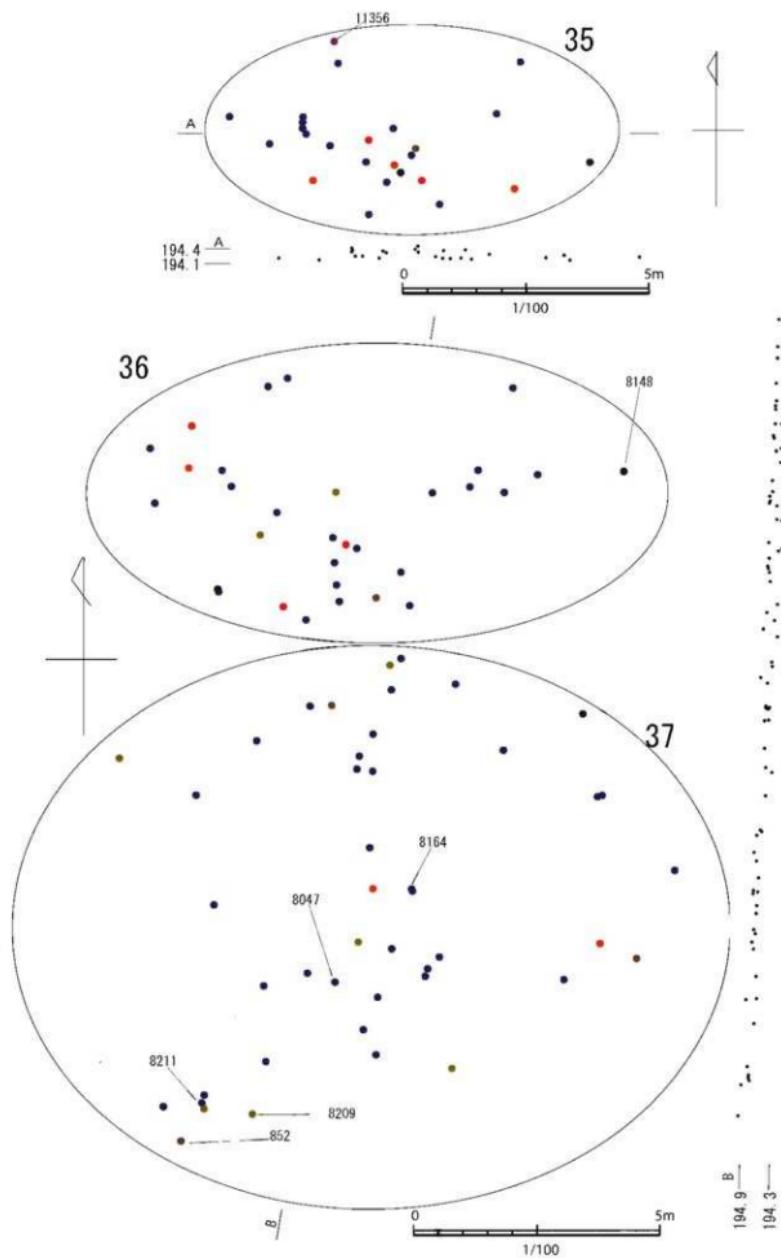
第70図11583と11587は石核転用スクレイパーである。11583は剥片を剥離しづくし、これ以上の剥離は困難となった石核を利用している。形状や技術的にも石器ブロック31で出土した第69図11468のスクレイパーと酷似している。11587は水晶製で、横長剥片を剥離していた石核を素材としている。石核は打面を転位している。スクレイパーの調整はごくわずかで、微細剥離のある剥片となる可能性もある。また、水晶であるため剥離面の観察が困難で、調査中の破損による剥離を調整としている可能性も否定できない。その場合、スクレイパーではなく、石核となる。11601+11609+11702は石核に剥片が接合した例である。3点とも微細な剥離がそれぞれ見られる。3点は剥離された後にスクレイパーとして使用されているかもしれない。接合資料の剥離面を観察すると、打面と作業面を転位しつつ剥離作業を行っていることがわかる。また石器ブロック33とは石質や剥離技術が非常に似通っている。同一母岩であった可能性がある。第82図11588+13208は自然面を有する剥片2点が接合した資料である。打面を固定し同一方向に剥片を剥離している

#### 石器ブロック35(第71図・第72図)

尾根から谷に向かって傾斜を始める地点に形成された石器ブロックで、非常に散漫な分布密度となる石器ブロックである。南に礫群36が形成されている。出土石器数は25点で、器種組成はA類が32%(8点)でナイフ形石器とノッチ(抉入石器)が1点ずつ出土している。石核は出土していない。石材組成は玉髓が88%(22点)と大部分を占めている。その他は安山岩と碧玉、石英が各1点(4%)ずつ出土している。本文化層での玉髓製石器の総数56点の内、39%が木ブロックで出土している。石器ブロック外から30点(53%)出土しており、石器ブロック内で出土した玉髓のはほとんどは木ブロックから出土している。

第72図11356はナイフ形石器である。二側縁加工で素材は横長剥片を斜めに使っている。左側縁は全面に調整を行い、特に素材の打面に近い下半は入念な調整剥離を行っている。右側縁は下半及び先端付近に調整を施している。しかし、先端に近い剥離は調整ではない可能性もある。

#### 石器ブロック36(第71図・第82図)



第71図 5層石器ブロック35~37出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

北ブロックの南の形成されている石器ブロックで、南西よりに石器の出土がまとまっている。南に隣接する石器ブロック37との区別が難しいブロックである。剥片が多く出土しており、その他は数点ずつで、ナイフ形石器などは出土していない。石材組成は石英が27点(87%)と最も多く、安山岩は1点(3%)である。石器ブロック内で1個体接合し、石器ブロック31とも接合資料が確認されている。

#### 石器ブロック37(第71図・第72図)

北ブロックの最も南に位置する石器ブロックである。石器の分布範囲は10mを超えており非常に広くなっている。分布にまとまりは見られない。出土石器の80%(35点)がB類で、その他は石核が13%(6点)である。石材は60%(27点)が石英で、石器ブロック36と同様に割合が高くなっている。しかし、黒曜石と凝灰岩の比率も高くなっている。若干様相が異なっている。石器ブロック内で2個体の接合資料が確認されている。

第72図8047+8164は石核である。両側縁で剥離を行っている。何らかの原因で破損したものであろうか。852はノッチ(抉入石器)である。左側縁中央を抉り込むように腹面から剥離が施されている。8209+8211は石核に剥片が接合した資料である。半らな亞円錐の凝灰岩の原石を用い、2回剥離作業を行って、8211が剥離されている。その後、8209を石核として2枚の剥片を剥離している。

#### 石器ブロック38(第68図・第72図)

南ブロックの最も南西に位置している。周辺には石器ブロックは存在しないが、疊群32の分布が重なっている。出土石器は9点で、その内、角錐状石器が2点である。石材比率は黒曜石が8点で、安山岩が1点である。安山岩の1点は角錐状石器である。本文化層で黒曜石の組成が唯一高い石器ブロックである。

第72図8009と8012は角錐状石器である。8009は黒曜石製で、分厚い横長剥片を素材としているようであるが、調整により素材の形状は不明である。腹面には素材の剥離面が大きく残っている。断面形が台形となるように調整は腹面からだけではなく、背面側からも施されている。左側縁の下半は素材の剥離面が残っている。左側縁の上半には長い調整剥離が連続して施されている。先端の右からの剥離は製作時あるいは使用時の破損の可能性もある。8012は安山岩製で、これも断面形が台形となっている。左側縁の下半と腹面に素材の剥離面が残っている。8009と同様に左側縁は上半のみに調整が施され、右側縁には全体を調整している。断面が台形になるように背面の調整も行われている。

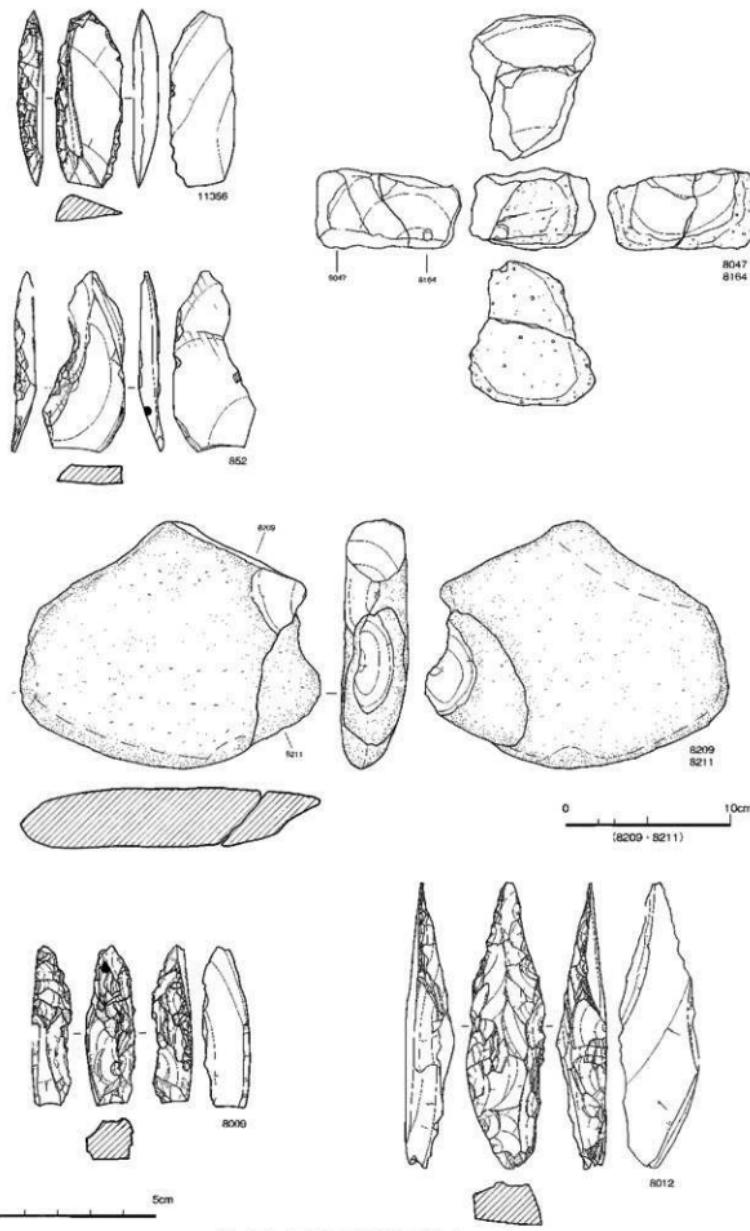
#### 石器ブロック39(第73図・第74図)

南ブロックの谷地形の底面に形成された石器ブロックである。疊群24と25がブロックと重なっている。石器の点数は17点と少なく、ナイフ形石器なども見られなかった。石材は安山岩が多く、石英が続いている。

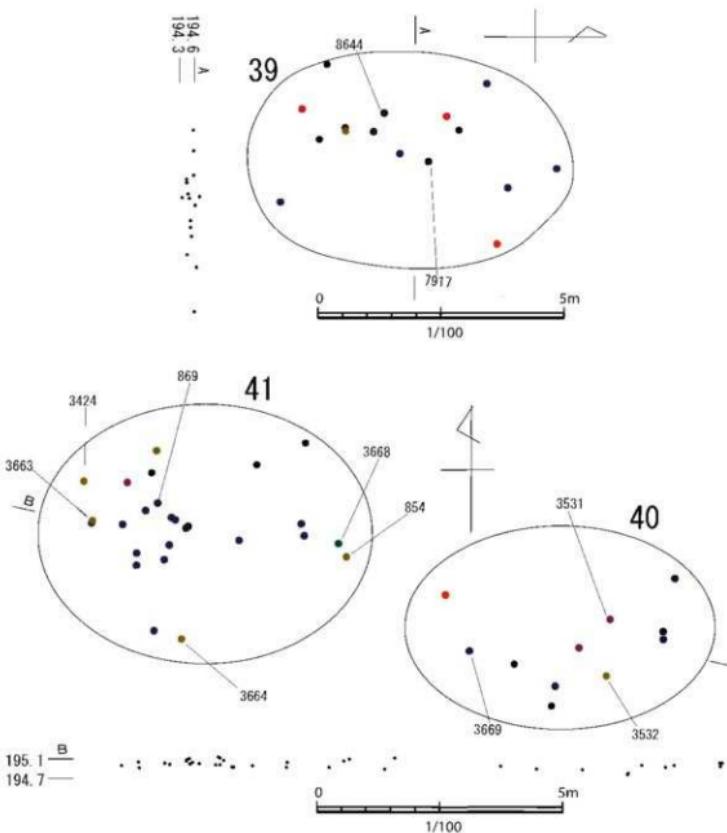
第74図8644と7917はスクリイバーである。8644は水晶の剥片を素材としている。水晶の石器は剥離面の前後関係や稜線の認定などが非常に難しく、今後接合した場合には剥離面が本報告と異なる可能性がある。この資料は側縁に二次加工が連続して施されているためスクリイバーである。7917は石英製で、自然面を有する大型の剥片を素材とし、先端に調整を施している。

#### 石器ブロック40(第73図・第74図・第83図)

南ブロックには疊群が等高線に沿って分布している。その最も東に分布する疊群26と29が本石器



第72図 5層出土石器実測図(5) (S=2/3)



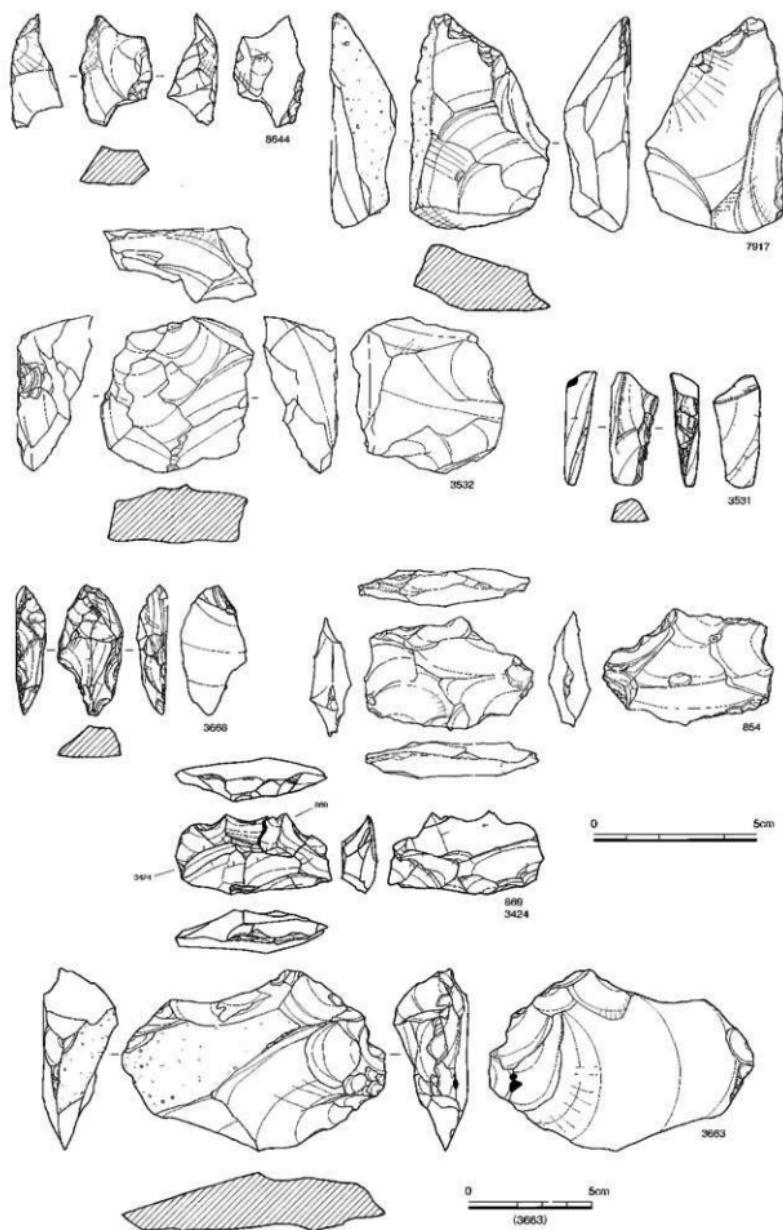
第73図 5層石器ブロック39~41出土石器平面・垂直分布図 (S=1/100)

ブロックと重なっている。出土した石器は11点で分布は散漫である。石器の器種組成はA類が54%で、B類が18%である。A類には2点のナイフ形石器が含まれている。ブロックから出土した石器の数は少ないが、剥片類の割合が極端に少ないので本ブロックの特徴である。石器ブロック41と接合関係が存在している。

第74図3532は右核である。石材は水晶で、分厚い剥片を素材とした右核である。剥離方向は四方からである。3531はナイフ形石器である。上半部は石器製作時の破損と見られる。素材は横長剥片で、打面側を調整している。かなり幅広の横長剥片と見られ、左側縁の剥離面は背面の2枚の剥離面より古く、瀬戸内技法による横長剥片の可能性も考えられる。

#### 石器ブロック41(第73図・第74図・第83図)

石器ブロック40の西側に位置する石器ブロックである。西側に石器の分布がかたよっている。出土石器28点の内、A類が14%と石器ブロック40の54%よりかなり低くなっている。反対にB類は



第74図 5層出土石器実測図(6) (S=2/3)

71%で右器ブロック40の18%より高くなっている。C類も石核が4点(14%)出土している。石材は安山岩が多いが、凝灰岩も多くなっている。石器ブロック40は凝灰岩が1点のみ出土しているが、本ブロックは10点も出土している。ブロックの様相の違いは器種組成と石材の両面で見られる。右器ブロック40との接合資料が存在する。ブロックの内でも接合資料が1個体認められている。

第74図3668は角錐状石器である。安山岩製で両側縁に調整が施されている。素材となる剥片は縱方向に用いられている。腹面は1面でないが、先端の剥離面は意図的な剥離ではないと考えられる。また、左側縁下半部の抉り込みは欠損により再調整されたため形成されたものと思われる。この角錐状石器は上部のどちらかが先端か不明である。前述した石器ブロック38で出土した第72図8009と8012の角錐状石器の断面が台形になる点と、左側縁の調整が上半部に限定される点から考えると、3668の実測図は上下が反対である可能性がある。854は石核で、869+3424は石核と剥片の接合例である。854と3424は形状や剥離技術が類似している。剥片を素材とし、打面と作業面を転位し剥片を剥離している。854はスクレイパーに再利用されている可能性もある。3663は頁岩製の石核としている。非常に硬質な白色の石材で、頁岩に分類したが、珪質化した別の石材の可能性もある。自然面を有する大型の剥片を素材とし、打面と作業面を転位して剥離作業を行っている。およそ幅3cm以下の剥片が剥離されているようである。

#### 石器ブロック42(第75図・第76図)

石器9点で構成された石器ブロックである。A類とB類が44%ずつ出土している。ナイフ形石器等は出土していない。南北に細長い分布を示している。石材は凝灰岩が安山岩より多く出土している。ブロック内で1個体が接合している。

第76図3661+3662はブロック内での接合資料である。一つの剥片から3662が剥離されている。3430は凝灰岩製の微細剥離のある剥片である。

#### 石器ブロック43(第75図・第76図)

わずか5点の右器しか出土していないブロックである。ナイフ形石器が1点出土している。安山岩と凝灰岩製の右器が出土している。

第76図845は安山岩製のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、素材の打面側に調整を施している。素材となる剥片は腹面と背面の剥離方向は同じである。

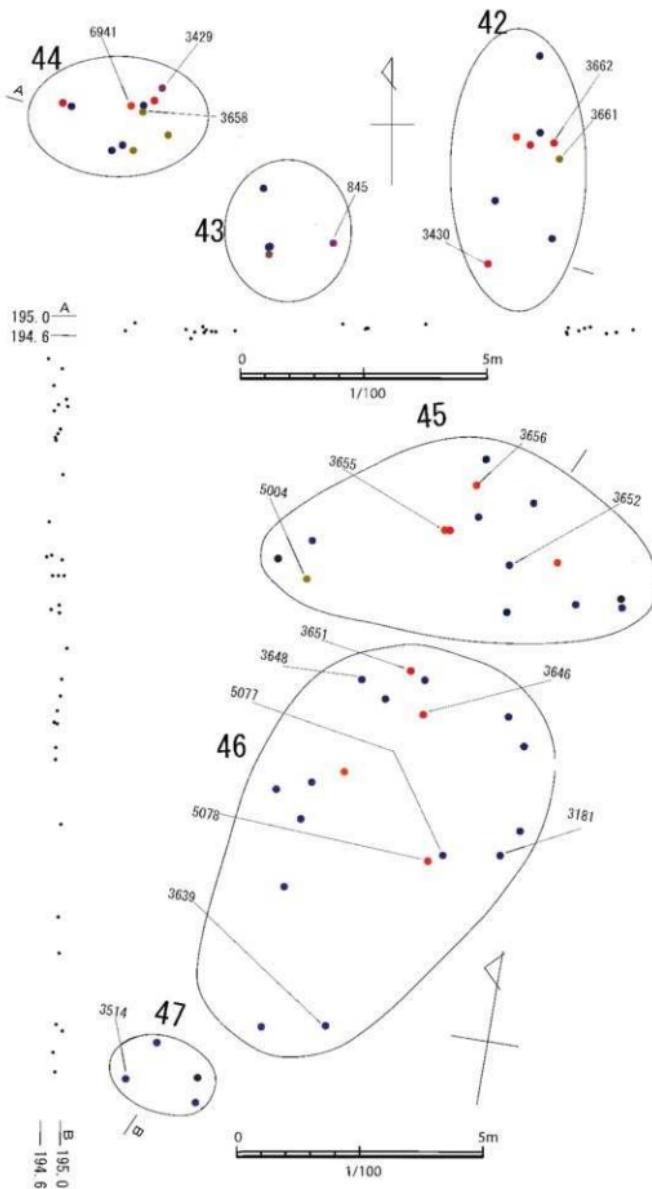
#### 石器ブロック44(第75図・第76図)

石器ブロック43の北西に形成された石器ブロックで、礫群13と17が分布範囲に重なっている。石器の出土点数は11点と少ない。A類B類C類がほぼ同数出土している。したがって、石核の出土数が他のブロックより多くなっている。

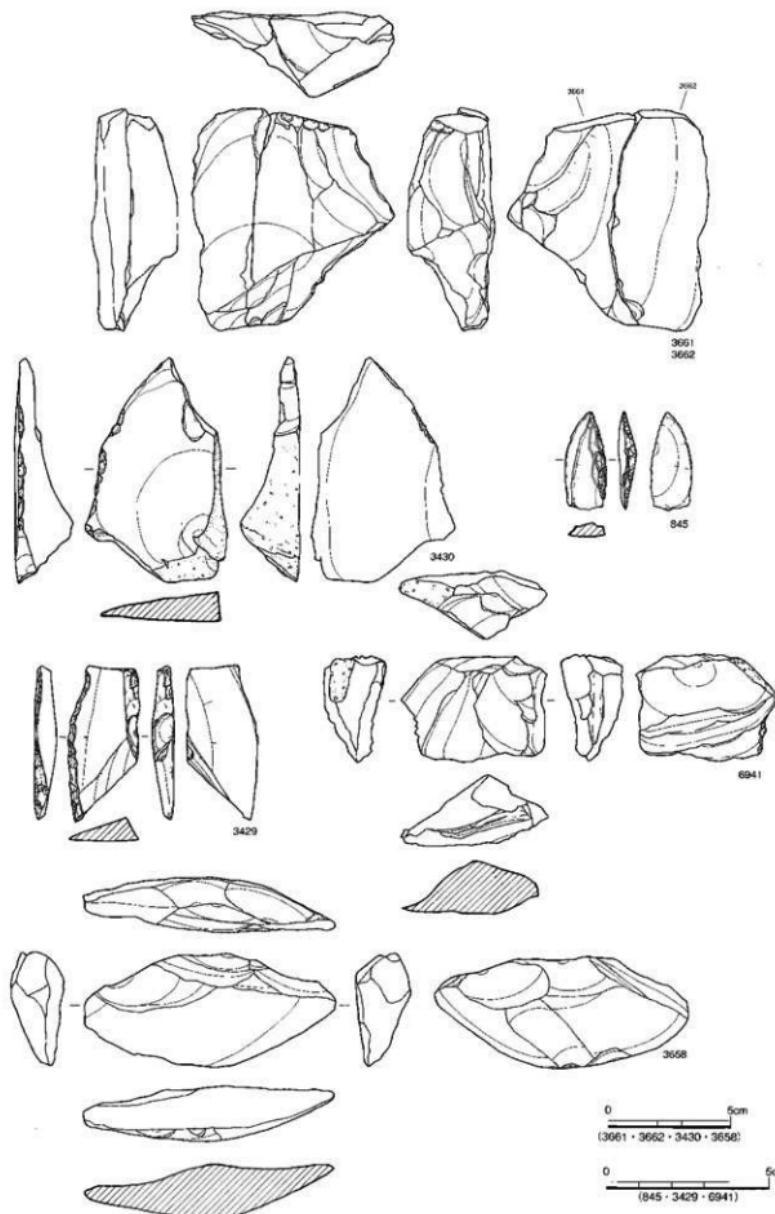
第76図3429はナイフ形石器と思われる。先端と基部を欠損している。両側縁に調整が施されている。左側縁上半が刃部と思われるが、欠損しており一部しか確認できなかった。6941は水晶製の二次加工のある剥片である。腹面が階段状の剥離面となっている剥片で、左側縁に二次加工が施されている。3658は砂岩の石核である。砂岩としているが、硬質で変成岩の一種かもしれない。大きな剥片の縁辺を用い剥片を剥離している。

#### 石器ブロック45(第75図・第77図)

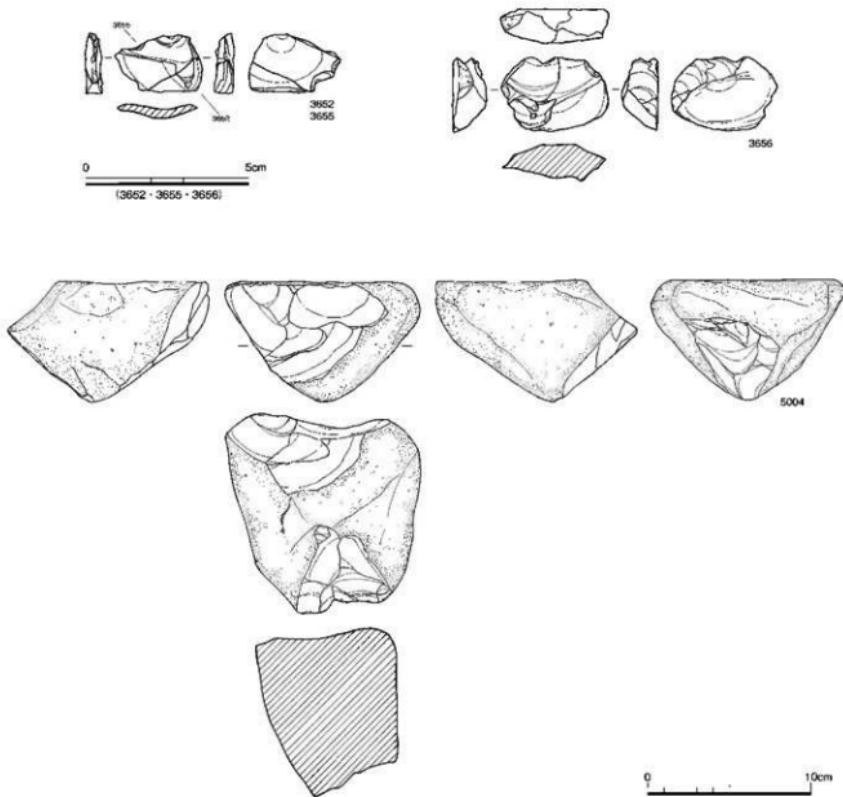
S10からT10に分布する石器ブロックである。等高線に沿って形成されていた南ブロックの礫群はこの右器ブロックを境にして南に方向を変えている。出土石器数は15点と少ないが、分布範囲は



第75図 5層石器ブロック42~47出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)



第76図 5層出土石器実測図(7) (S=2/3)



第77図 5層出土石器実測図(8) (S=2/3)

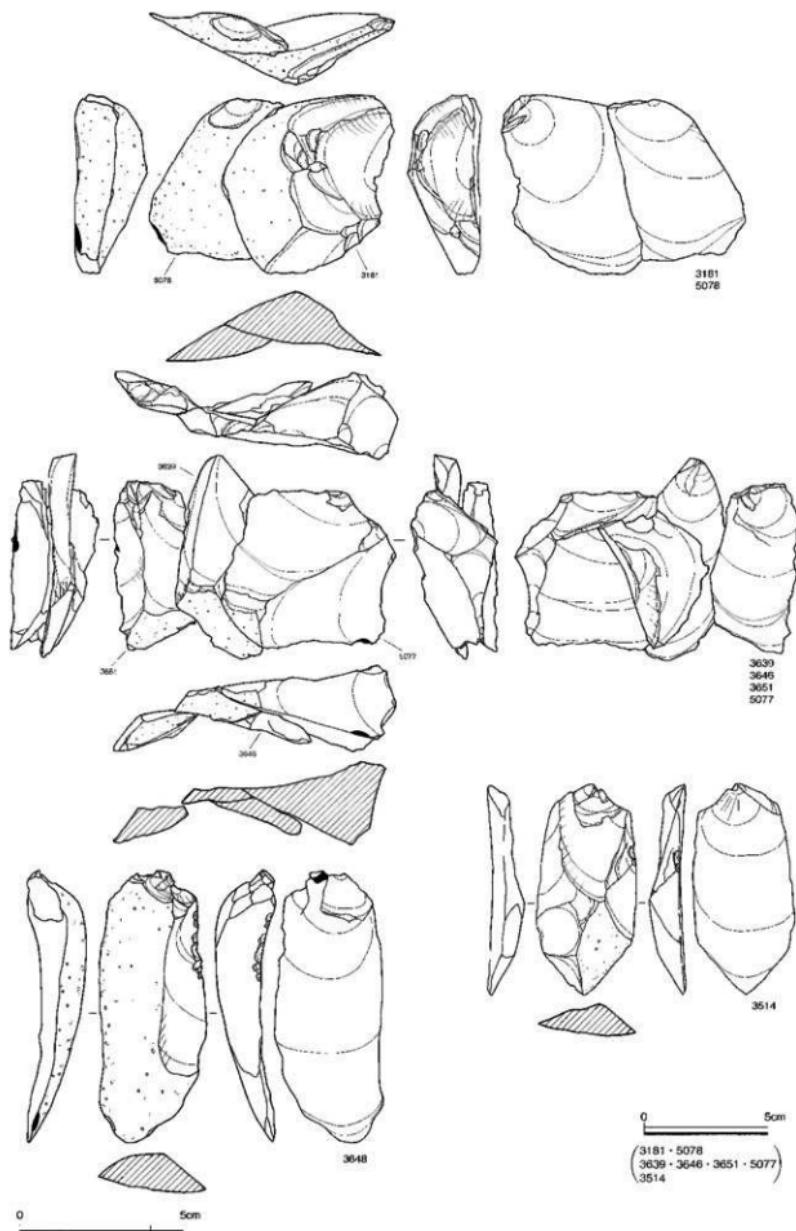
広くなっている。石材は安山岩が多く、凝灰岩は出土していない。ブロック内で1個体接合している。

第77図は本ブロック出土石器である。3652+3655は頁岩の母岩別資料である。3655には二次加工が施されているが、3652と分割される以前に剥離されていたのか不明である。3656は左側縁に剥離痕を持つ二次加工のある剥片である。5004は流紋岩製の大型の石核である。亜角砾を素材とし、原石の平坦面を打面として剥片を剥離している。

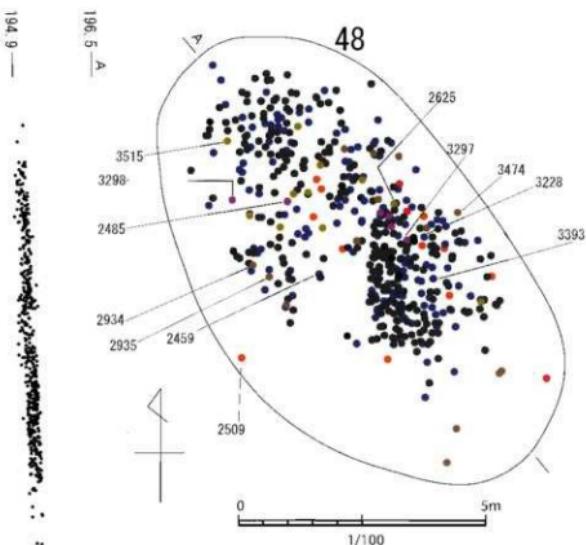
#### 石器ブロック46(第75図・第78図)

石器ブロック45の南に設定した石器ブロックである。出土石器点数は19点と少ないが範囲の広いブロックである。器種組成はB類が73%と多く、石材は凝灰岩が47%と最も多くを占めている。ブロック内には4点と2点の2つの接合資料が存在するが、これらは同一母岩と考えられる。

第78図3181+5078と3639+3646+3651+5077は凝灰岩の同一個体と考えられる母岩別資料No.23とした接合資料である。二つの自然面を観察すると表面は非常に滑らかで、円礫か亜円礫の原石と



第78図 5層出土石器実測図(9) (S=2/3)



第79図 5層石器ブロック48出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)

考えられる。接合した剥片は原石の自然面を削除するために剥離された剥片であると考えられる。ほとんどは縦長剥片である。3648は凝灰岩の剥片である。自然面の状態や石質、縦長剥片であることを考えると前述の母岩別資料No.23と同じ個体であると考えられる。

#### 石器ブロック47(第75図・第78図)

石器ブロック46の南西に位置する小さな石器ブロックである。わずか4点の石器で構成されている。剥片が3点とチップが1点で全てB類である。他の石器ブロックとの接合関係は存在しなかつたが、石器ブロック46の接合資料と同一母岩と考えられる剥片が出土している。

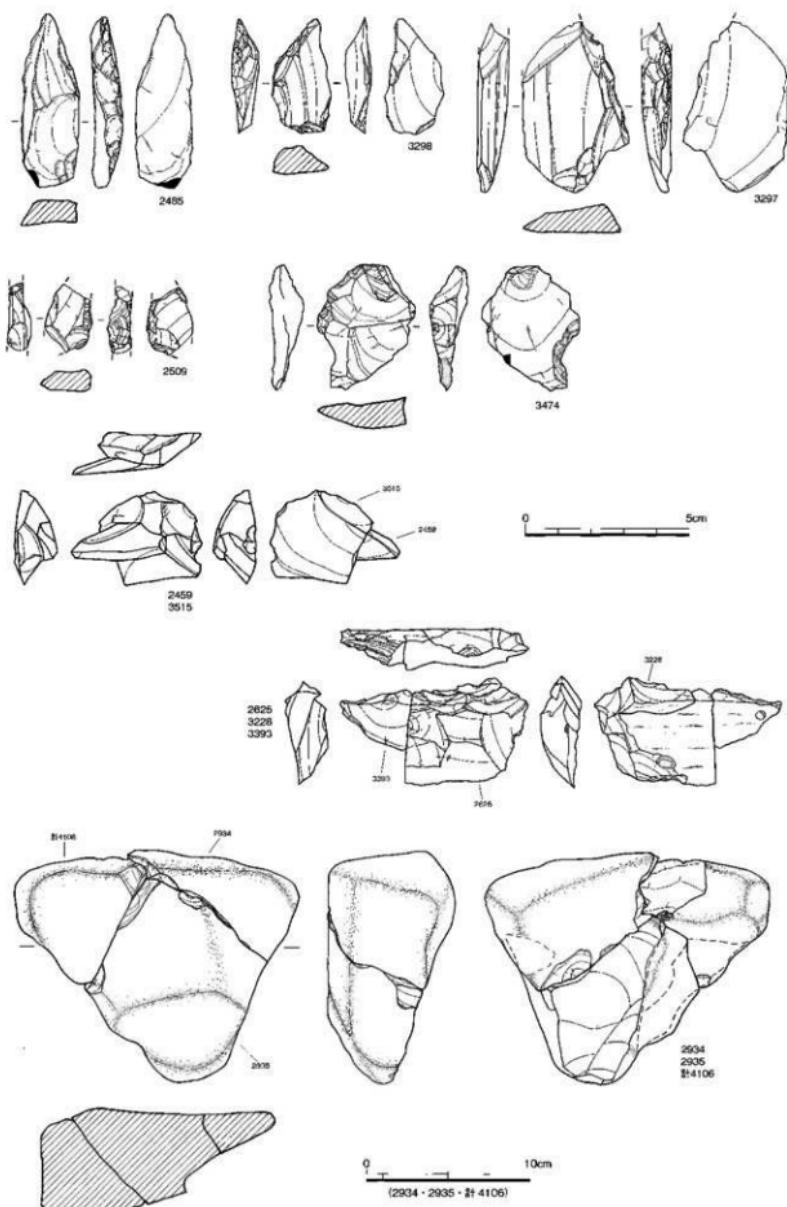
第78図3648は凝灰岩製の剥片である。石器ブロック46の母岩別資料No.23と同じ個体であると考えられる。

#### 石器ブロック48(第79図・第80図)

原山遺跡で最も多くの石器が出土している石器ブロックである。平成17年7月に旧石器時代の遺物の有無を確認するために掘り下げたトレンチで最初に発見された旧石器は、このブロックのものであった。その意味でも原山遺跡を代表する石器ブロックと言える。

出土石器の点数は492点で、本文化層出土石器の36%を占めている。原山遺跡の全旧石器が3,977点であり、全体の12%も本ブロックで石器が出土することになる。石器の分布は非常に密集しているが、密集部分の南西側はトレンチ調査によって5層の上部が削られているため、石器の分布密度が低いところが存在する。また、密集部の周囲にも散漫に石器が出土している状態である。

出土石器の器種組成はA類が8%(40点)で、B類が87%(432点)、C類が2%(11点)である。A類の内、ナイフ形石器は6点出土しており、本文化層で最も出土している。角錐状石器は出土してい

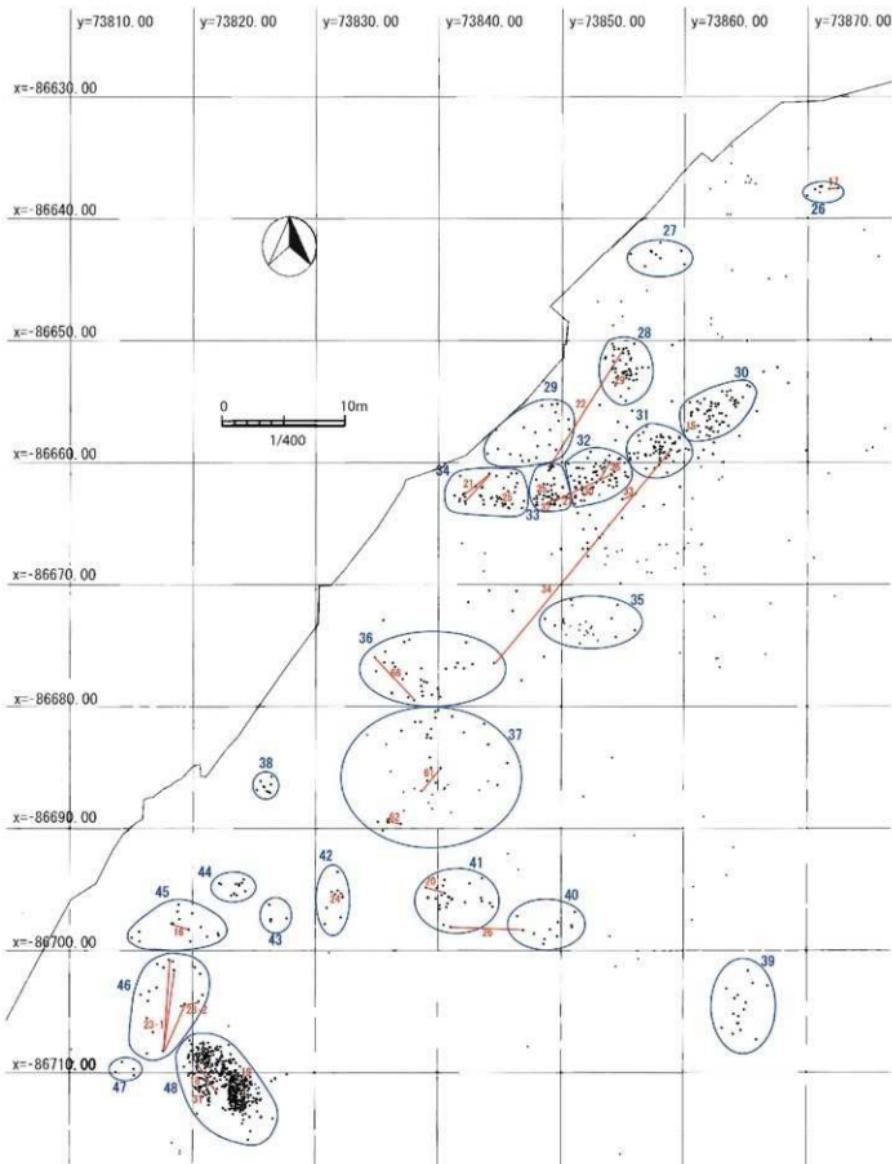


第80図 5層出土石器実測図(10) (S=2/3)

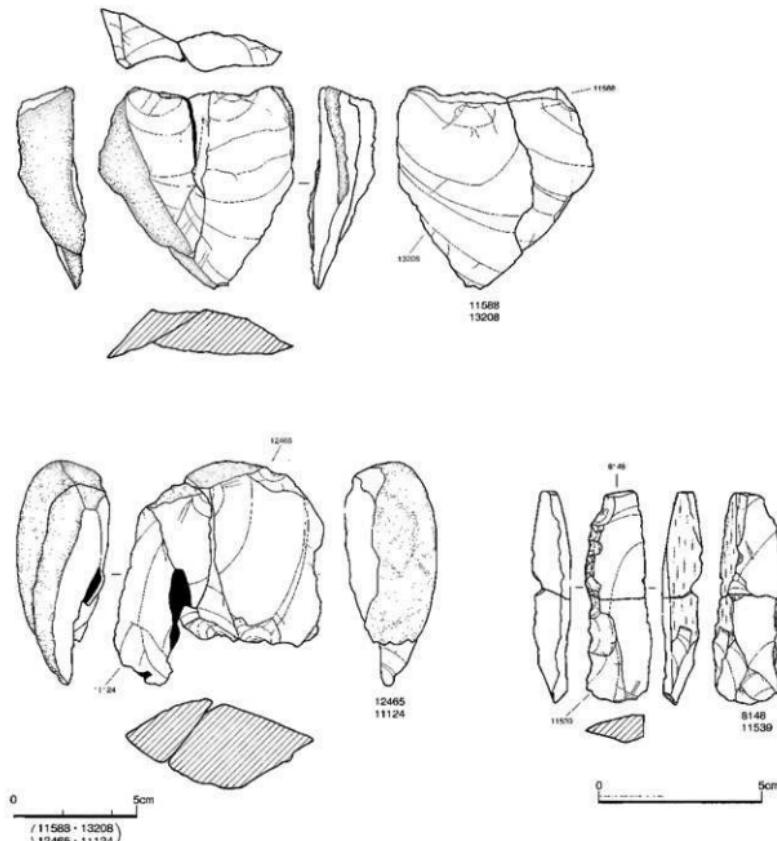
ない。また、10点はナイフ形石器の調整剥片である。ナイフ形石器は多く出土しているが、スクレイバーや二次加工のある剥片等の出土数が、他の石器ブロックに比べ少なかった。B類は、チップが63% (274点)で剥片が36% (158点)で、チップだけで本ブロックの55%を占めている。器種組成でこれほどチップが突出した石器ブロックは他に存在しなかった。

石材組成は91% (449点)が安山岩である。その他の石材は11点ずつの水晶と石英、9点の凝灰岩、8点の流紋岩、2点の頁岩、1点のみの黒曜石と玄武岩である。なお、安山岩は本文層で出土した全安山岩製石器の63%である。

第80図2485・3298・3297はナイフ形石器である。2485は凝灰岩製で横長剥片素材の一側縁加工である。素材の剥片は單設打面であると思われる。3298のナイフ形石器は二側縁加工で、右側縁が刃部となっている。横長剥片が素材で、打面は調整により残っていなかった。3297は先端部が欠損している幅広のナイフ形石器である。これは横長剥片素材で、一側縁加工である。2509は水晶製の二次加工のある剥片であるが、右側縁に刃潰し加工状の調整が施されている。ナイフ形石器の可能性も考えられる。2459+3515と2625+3228+3393は右核に剥片が接合した例である。剥片の剥離は打面と作業面を転位しつつ剥離している。2934+2935+計4106は分割縫の接合例である。器種は分割縫としているが、剥片と石核、あるいは、破損した台石の可能性もある。しかし、敲打痕などは確認できなかった。



第81図 5層出土石器接合関係図 (S=1/400)



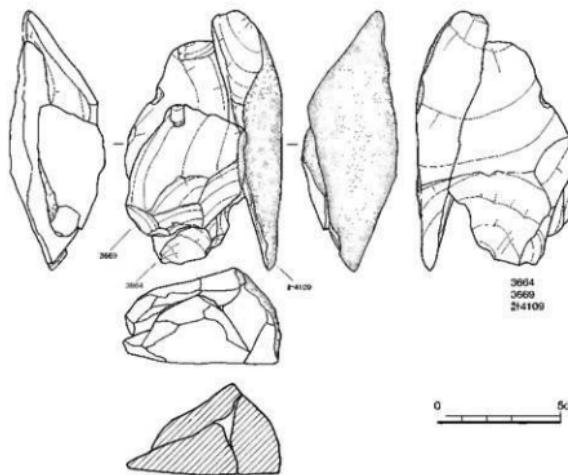
第82図 5層出土石器実測図(11) (S=2/3)

##### (5) 石器の接合と母岩別資料(第81図ー第83図)

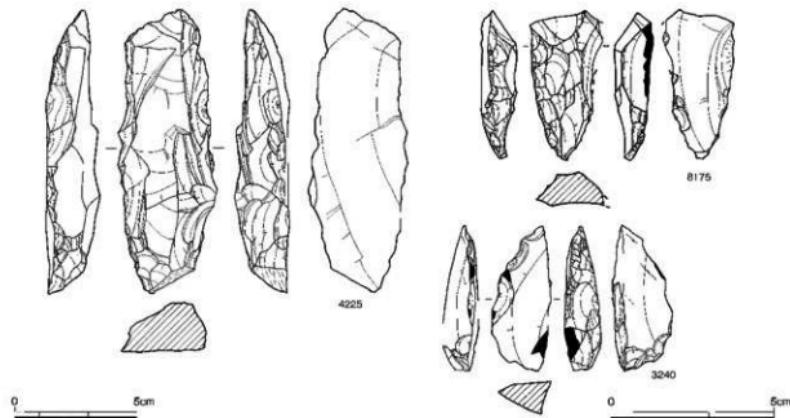
本文化層では25個体55点の接合が確認されている。21個体は石器ブロック内の接合で、それ以外は石器ブロック間での接合である。

本文化層の接合資料は石器ブロック内での接合がほとんどで、母岩別資料No.23のように多数の接合が見られるものもある。本文化層は石器ブロックと砾群の分布状況から北ブロックと南ブロックに分けられるが、北と南での接合ではなく、それぞれのブロック内での接合のみが確認された。石器ブロック内の接合資料は各ブロックで出土した石器の記述部分で記載したため、以下では、石器ブロック間接合の母岩別資料について述べる。

第82図11124+12465は石器ブロック32と33との接合資料である。同一の剥片を2点に分割後、12465を右核としている。8148+11539は石器ブロック31と36の接合である。元はスクレイパーで、背面側からの衝撃により剥離したものと考えられる。第83図3664+3669+計4109は石器ブロック40



第83図 5層出土石器実測図(12) (S=2/3)

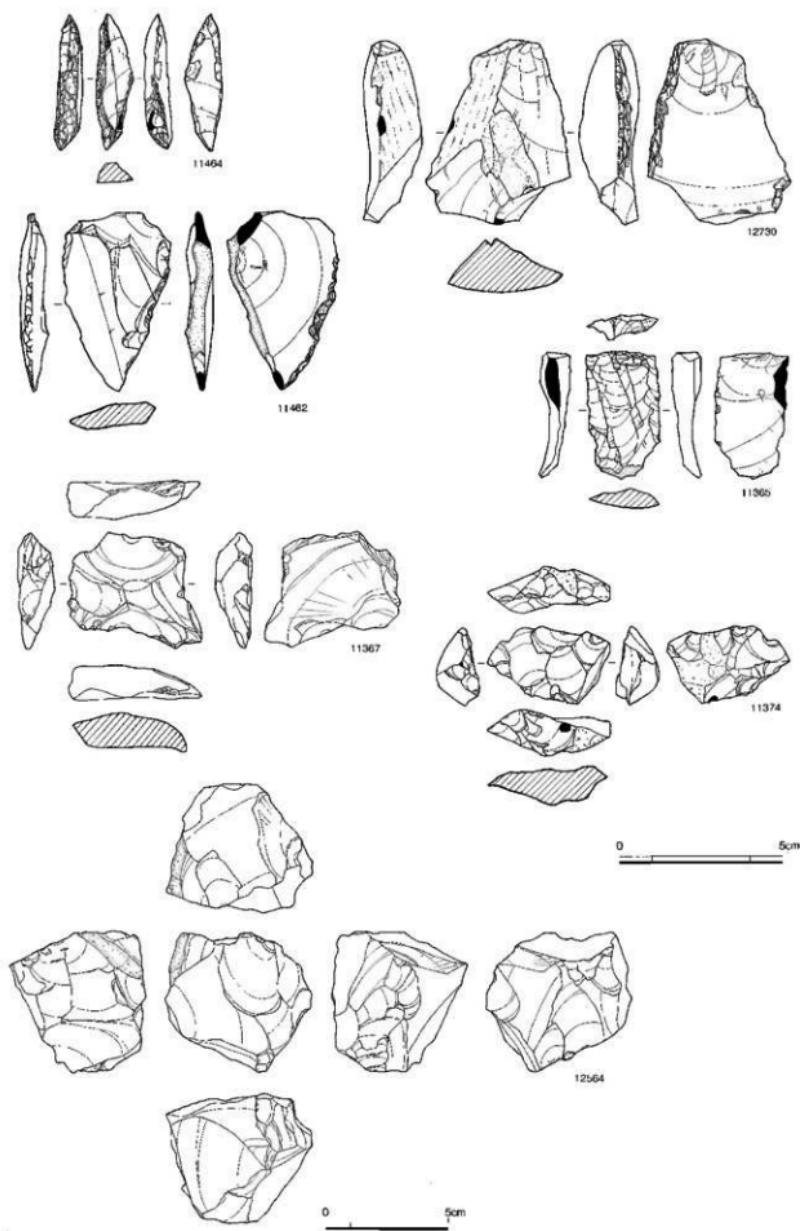


第84図 5層出土石器実測図(13) (S=2/3)

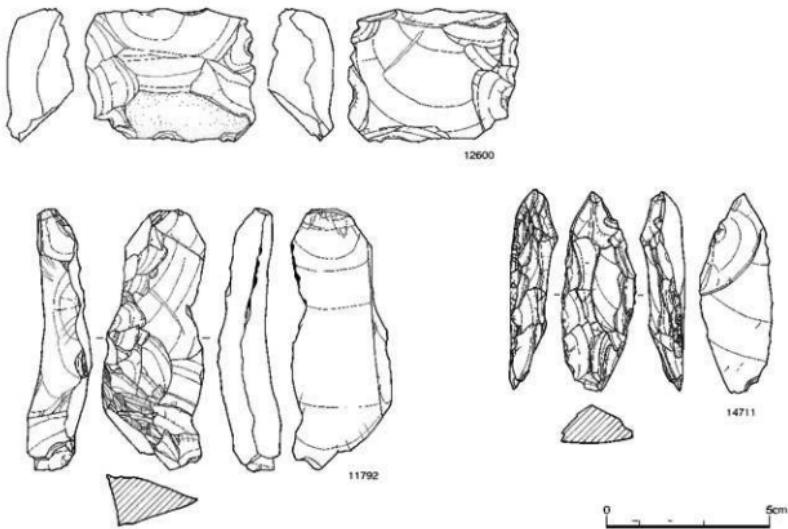
と41の接合資料で、3664が剥離された後、3664+計4109が剥離され、計4109が剥離されている。

#### (6) 石器ブロック外出土石器(第85図・第86図)

第84図4225と8175は角錐状石器である。4225は安山岩製で大型である。断面が台形に成るよう両側縁に調整が施されている。基部には自然面が残っている。8175は黒曜石製である。表面は風化し、白色化している。これも断面は台形となっている。横長剥片素材で、左側縁に連続した調整



第85圖 5層出土石器實測圖(14) (S=2/3)



第86図 5層出土石器実測図(15) (S=2/3)

が、右側縁の下半に調整が施されている。実測図では、先端部を素材の剥離面としているが、上下が逆になっている可能性も否定できない。3240は頁岩製のナイフ形石器である。珪質化はしていない。二側縁加工であるが、刃部にある3つの剥離面は調整ではないと考えている。第85図11464はナイフ形石器である。縦長剥片を素材としており、細長く二側縁加工を行っている。基部への調整のため打面は残っていない。刃部に見られる数枚の剥離面は使用の際にできたものかもしれない。12730と11462はスクレイパーである。11365は黒曜石製の微細剥離のある剥片である。打面は複設打面で、主に上方からの剥離によって剥片が剥離されている様子が見られる。11367と11374、12564、第86図12600は石核である。形状はそれぞれ異なるが、打面と作業面の転位が頻繁に行われている。11792は大型の剥片を用いた微細剥離のある剥片である。14711は角錐状石器である。出土層位は5a層である。両側縁に連続する調整剥離が施されている。腹面の先端部に近い剥離面は破損によるものと思われる。その後、再調整がわずかに行われている。この角錐状石器も先端が上どちらか不明である。断面は台形ではなく三角形となる。

## 第6章 旧石器(7層)の調査

### 第1節 層位

原山遺跡の3つの旧石器時代の文化層のうち、下位に位置する文化層である。7層の調査としているが、遺物の位置が上方に動き6層で出土したものもわずかに存在する。6層は始良丹沢火山灰(AT)の降灰後、間をおかず堆積した二次堆積層が多いと考えている。これは6層にATがブロック状に含まれており、肉眼でもATと確認できること、上壤化していないことから想定している。また斜面側ではATの一次堆積層となっている。以上から6層は短期間で形成された層と考えられる点、6層出土遺物が6層下部で出土し、7層の直上から出土している点、6層で遺物が出土する場合は7層の上部でも遺物が出土しており、石器ブロックの中で出土を捉えられる点から6層の出土遺物も本來は7層で出土していたと考え本章で報告している。

7層は旧石器を対象とした調査区全体に堆積していた。非常に粘性が強い褐色土層で、砂もほとんど含まれていなかった。層厚は15~30cmである。

出土した石器と疊群は7層中で出土面が2つに分けられる。7層の上位を中心に石器や疊が出土し、場所によっては、6層下部まで出土する「7層(上)」と、7層中位を中心に出土する「7層(中)」が存在している。

### 第2節 地形

7層の地形も東側が斜面となっており、西に傾斜している。傾斜は徐々に緩くなり、一端平坦面を形成した後、西に平坦に広がっていく。西へ行くに従い、標高はわずかに高くなっている。したがって、斜面の下は谷地形となっているが、2~4層や5層のような谷地形でなく、ちょっとした窪地程度である。

調査区より西側は、縄文時代と推定される斐伊川の旧河道によって削平されており、旧地形の復元是不可能である。

### 第3節 器種組成

本文化層で出土した石器の一覧は表10である。出土した石器の数は867点で、そのうちA類が198点で、台形様石器が67点と最も多く、二次加工のある剥片が63点で次に多くなっている。続いて、20点のスクレイパー、19点の微細剥離のある剥片、13点のナイフ形石器、10点の楔形石器となっている。A類は本文化層出土石器の約22%を占めている。次にB類は473点の51%である。B類は多い順に、剥片が371点、チップが102点、バルバースカーラー1点である。C類は159点である。全て右核で158点である。D類はその他の石器で、右斧が5点、砥石が4点、局部磨製右斧が1点、敲石が2点、台石が1点である。

本文化層の時期を推定する石器としては、台形様石器とナイフ形石器、石斧(局部磨製石斧)があげられる。台形様石器が本文化層出土石器の7%を占めている。ナイフ形石器は1.4%、石斧類は6点で0.6%である。次に、台形様石器がA類に占める割合は33%で、ナイフ形石器は6%である。

表10 7層石器ブロック器種組成表

ブロッブ	剥片	石核	スクレーパー！	二次加工のある剥片	ナイフ形石器	チップ	台形様石器	楔形石器	原石	ノツチ	分割礫	敲き石	局部磨製石斧	バルバースカイ	台石	磁石	石井	合計
1	10	1			1	1	3											16
2	6	2				1	2		1									12
3	63	15	3	2	5	27	34		1	2	1	1			1			155
4	2	1	1			4	2											10
5	8	1		1	2	7	1									1		22
6	11	3	2		2	6						1						25
7	9	8			3													20
8	2	9		2	1		1				3				1			19
9	4	1	1				1											7
10	26	10	2	2	7	5	2											54
11	11				2	5												16
12	6	1			2													5
13	6	10	2		1													19
14	5	3		1	1	3	8						1					22
15	7	7			1	1												16
16	3	1							1							1		6
17	2	5					1	1	1						1			11
18	27	13	1		4	6												53
19	10	3		2	4				1						1			21
20	18	3		3	3	3	2								1			33
21	6	5	2	3	1					1								18
22	18	15	2	3		1	1						1					41
23	52	16	5	4	15	14	2	6		1					1			117
24		3	1															4
25		1					3		1									5
外	58	23		1	6	23	8	2	10		2			1				134
合計	371	158	19	20	63	13	102	87	10	16	4	9	2	1	2	1	4	867

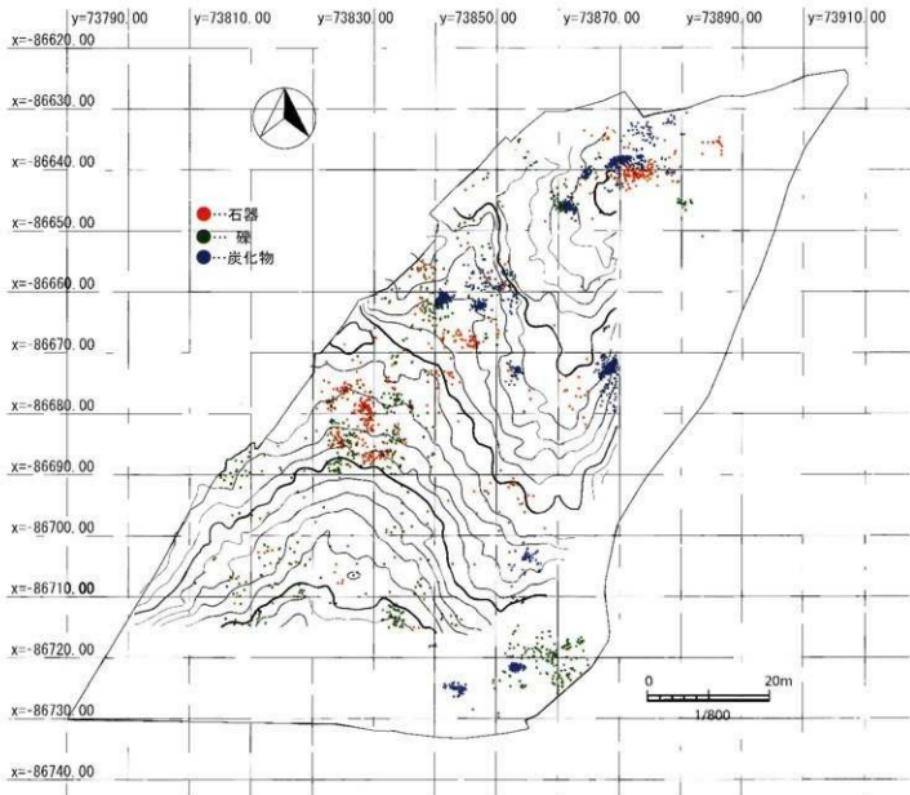
表11 7層石器ブロック石材組成表

ブロッブ	安山岩	黒曜石	基灰岩	玉髓	メノウ	碧玉	流紋岩	斑紋岩質基灰岩	水晶	石英	花崗岩	砂岩	片岩	チャート	泥岩	貫入岩	鉄石英	合計
1		8				8												16
2	1	2	8							1								12
3	1	140	6				1	1	3	2						1		155
4	8	1								1								10
5	13	1	1					1		2								18
6	12	6	3		1	3												25
7		5					3		6	5	1							20
8		3	3				9	1	4	1	1							19
9	2		3						1	1								7
10	6	1	42	2				1		1	1	1						54
11								18										18
12		5	4															9
13		17		1	1													19
14	18									2		2						22
15	2					3				11								16
16	1							1	2		2							6
17	1	1	2			3			4	1								11
18	1	2	2			4		1	42		1							53
19	1	1	1	1					14			3	1					21
20		1							31		1							33
21		1				2			14		1							18
22	4					1			35	1								41
23	19	1				4		4	88		1							117
24			2						2									4
25	3					1		1										5
外	9	32	3	12	1	20	9	1	42	2	2	2	1	2				138
合計	49	252	19	98	1	12	56	31	18	302	9	2	10	4	2	1	1	867

表12 7層出土石器器種・石材組成表

剥片	石核	石器種別										局部磨製石斧	バブルバースト	合石	砥石	石斧	合計
		直縁剥離核の ある剥片	スクレーパー	二次加工の あら剥片	ナイフ形石器	チップ	台形様石器	楔形石器	磨石	ノッチ	分割核						
安山岩	17	4	2		5	11	5	5									49
麻原石	95	19	8	6	11		56	55		3							282
凝灰岩	10	5														2	19
玉髓	47	22	7	2	11	1	2	5			1						98
メノウ																	1
碧玉	8	1	1			1	1										12
流紋岩	17	23		2	2		2			2	6						56
斑紋片質凝灰岩	16	2		1	6		6										31
水晶	3	4	1	1	4		2	1			2						18
石英	150	73		8	26	25		8	9	1							302
花崗岩	1	2					1				2			1	2		9
砂岩	1					1											2
片岩	3	2														4	10
チャート	1					2	1										4
泥岩	1	1															2
貫入岩										1							1
鉄石英											1						1
合計	371	158	19	20	65	13	102	67	10	14	4	9	2	1	2	1	867

本文化層の特徴としては、台形様石器と石斧類が他文化層にない器種として出土する点と、台形様石器と右核が器種組成に占める割合が高いことが挙げられる。



第87図 7層遺物出土状況図(S=1/800)

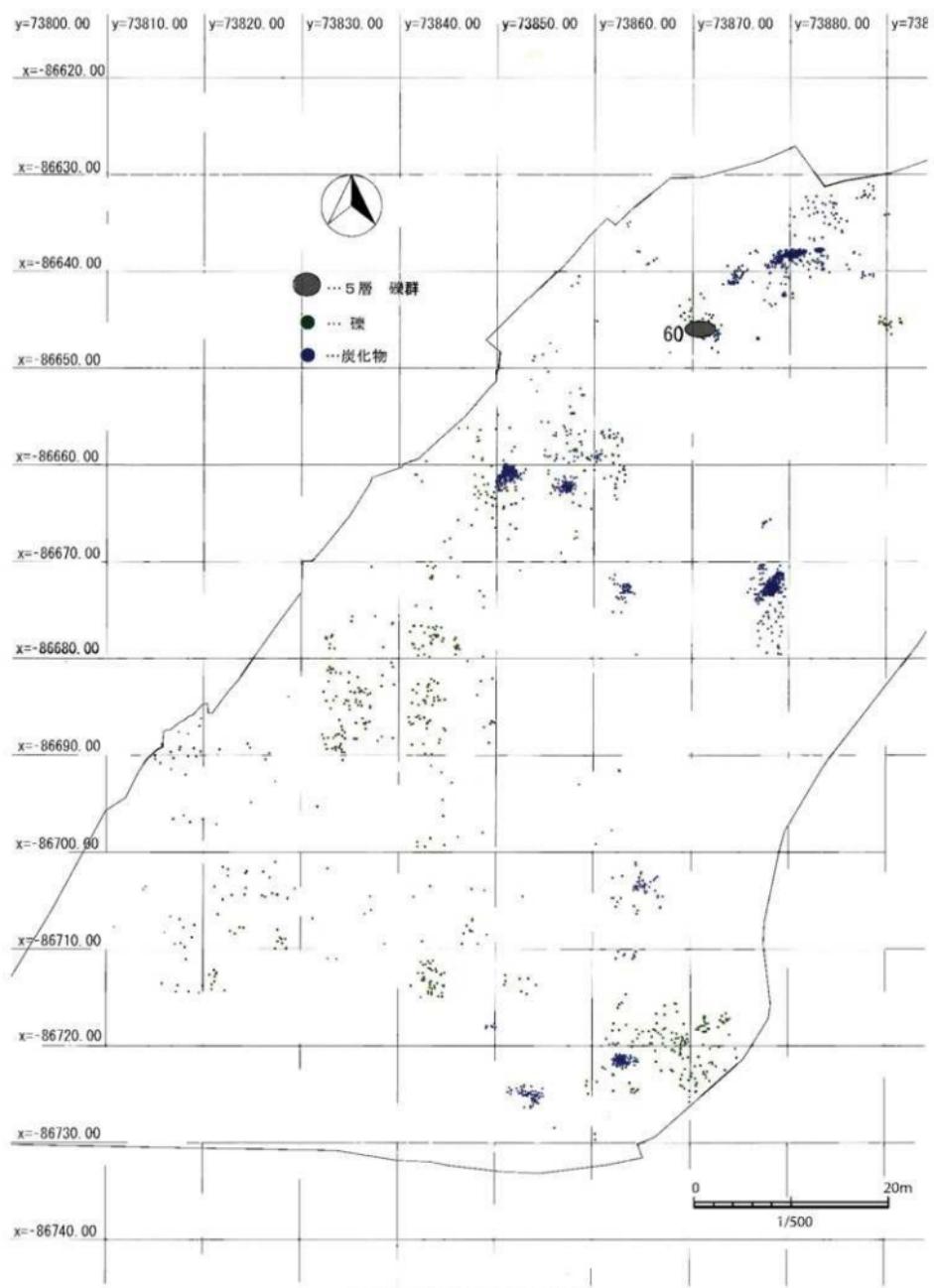
#### 第4節 遺構と遺物

##### (1) 遺構分布(第87図・第88図・第90図・第128図)

本文化層で認定された遺構は礫群1基、石器ブロック25ヶ所、炭化物ブロック多数である。第87図を見ると、遺構の分布は大きく3つに分けられる。

第一は、調査区の北東、M15・M16・N15・N16グリッドを中心に石器ブロックと礫群、炭化物ブロックが分布する範囲である。石器ブロック1から5が該当する。第二は、R12グリッドの杭を中心にして8ヶ所の石器ブロックが最大幅約16mの環状(環状部)に配置され、その内側(中央部)に1ヶ所の石器ブロックが検出される「環状ブロック」地点である。石器ブロック15から23が該当する。第三は、第二で挙げた環状ブロック周辺で検出された石器ブロックで、石器ブロック6から14、24、25である。

本文化層からは炭化物ブロックが数多く確認されている。礫群と分布が重なる一群と、周辺から礫群や石器ブロックが検出されていない一群が認められる。



第88図 7層礫群位置図 (S=1/500)

表13 7層礫群一覧表

遺構名	グリッド	時期	埋戻	構成 磨耗										規 則	主な物	累積する 遺構	隣接合	分布 類型					
				長さ(cm)	赤化	破損度	石 材	規															
				最大	最小	A	B	C	D	1	2	3	4	5	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩					
礫群 60	O15 (N15)	7(上)	117	15.7	3.3	8.9	117	0	0	0	11	16	21	62	7	25	2	90	0	2.9	1.6	有	ブロッケン 真面

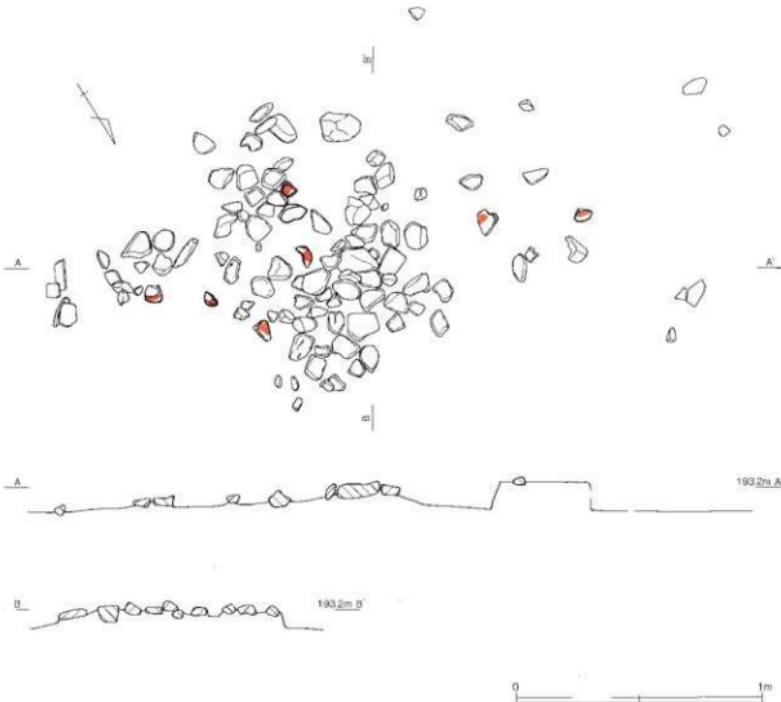
礫の出土に関しては、各石器ブロック内で石器と同様に出土している一群がある。特に、環状ブロック内でまとまって出土している。その他に、北東の石器ブロック群の南東側に1ヶ所、調査区の南東隅に大きく分布する1ヶ所、その西北西側に約20mあたりの1ヶ所に礫の集中地点が存在するが、これら3ヶ所は斜面から崩落した礫が堆積しているか、何ら加工の痕跡がない質の悪い石英がまとまっていた場所である。質の悪い石英は原田遺跡9区の削平された斜面に岩脈として大量に含まれており、岩脈から崩落した小礫が堆積していたものと考えられる。

## (2) 級群(表13・第89図)

本文化層で確認された礫群は1基である。

### 礫群60(第89図)

7層で確認された唯一の礫群である。原田遺跡で最古の礫群である。調査区の北側で検出されて



第89図 7層礫群60実測図(S=1/20)

いる。礫群は6層であるATを掘り下げ後、すぐにいくつかの構成礫が現れ、7層上部の掘り下げ時にはほぼ全ての構成礫が検出面を同じくして出土している。したがって、礫群の形成時期は7層(上)と考えられる。礫分布は中心に大きなまとまりがある。周囲には炭化物がまとまって出土している。石器ブロック5と分布範囲が重なり、構成礫の上面に接した状態で、安山岩製のナイフ形石器が1点出土している(第95図・14415)。

構成礫数は117点で、全て表面が赤化している。構成礫の大きさは最大長が15.7cmで大型の礫は含まれていない。破損度は「4」が最も多く、ある程度破損が進んだ礫によって構成されている。石材は凝灰岩が大部分を占めている。分布類型は「高密集」である。

### (3) 石器ブロックと出土石器(第90図～第122図)

#### 石器ブロック1(第91図)

調査区の最も北東で、斜面の中腹で検出された石器ブロックである。石器の出土数は16点で、A類が5点、B類が10点である。A類は3点が台形様石器、1点がナイフ形石器である。B類は剥片が9点である。ブロック内の南西部からは、石器部出土分布に空白地帯が存在する。石材は黒曜石と碧玉が半分ずつである。台形様石器は全て黒曜石製で、ナイフ形石器は碧玉製である。接合資料は認められなかった。

#### 石器ブロック2(第92図・第93図)

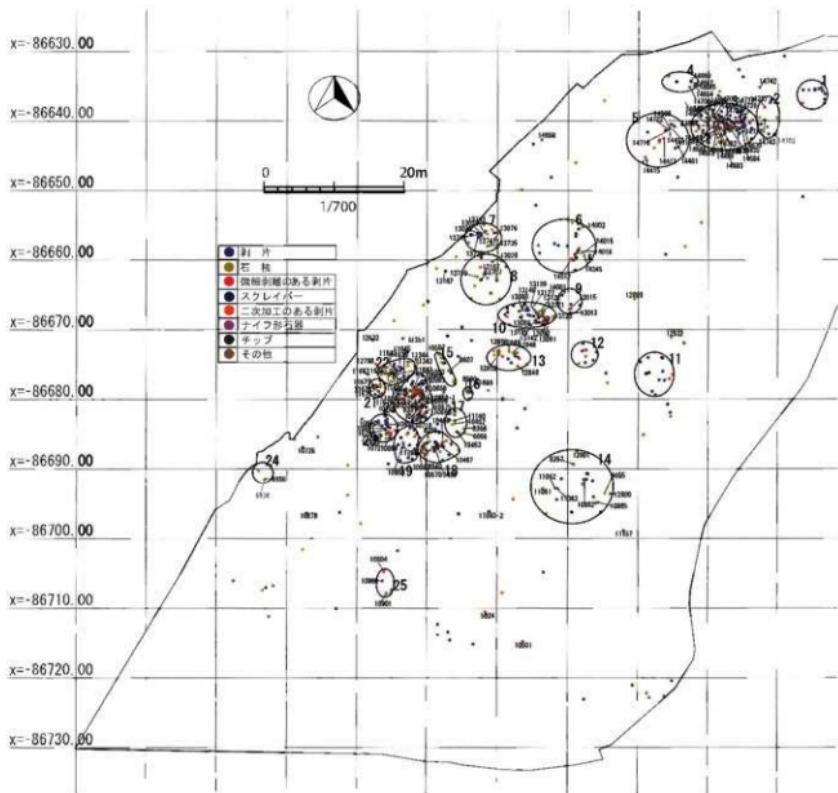
出土石器数が12点と数の少ない石器ブロックである。斜面に分布している。石器の出土分布は分散している。B類が6点(50%)と半数を占めている。18%(2点)を石核が占めており、石核の割合が高くなっている。石材は8点(66%)が玉髓で、近接する石器ブロック1には見られなかった石材である。

第93図14737はナイフ形石器である。石材は玉髓である。素材は縦長剥片で二側縁に調整を施している。打点側を先端にしているが、先端部は欠損している。打面は残っていないかと考えられる。14743は玉髓製の台形様石器である。薄い寸詰まりな剥片を素材とし、打面に調整を施している。14703も玉髓製の台形様石器である。分厚い寸詰まりな剥片を素材としている。刃部は素材の側縁を利用し、左側縁には調整を腹面から施している。右側縁は折断による剥離ではないかと考えている。

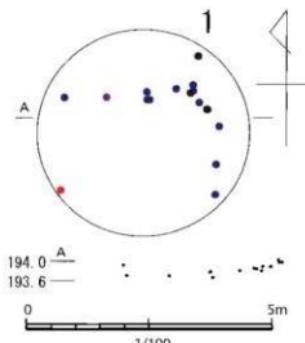
#### 石器ブロック3(第92図・第94図)

石器が密集して出土している石器ブロックである。石器ブロック2と4、5に挟まれたブロックで、斜面の傾斜が緩やかになったあたりに形成されている。出土点数は155点と本文化層で最も多く出土している。器種組成はA類が46点(29%)で、B類が90点(58%)である。C類は石核が15点(9%)出土している。その他では台石と敲石が1点ずつ出土している。A類では、34点が台形様石器で、73%である。石材は140点(90%)が黒曜石で、玉髓は6点(3%)である。本文化層で黒曜石の製材組成比率が最も高い石器ブロックである。

第94図は全て本石器ブロック出土石器である。14824・14847-2・14847-3・14782・14670・14818+14819・14720・14781・14868・14856・14835・14836は台形様石器である。全て黒曜石製である。縦と横の長さがほぼ等しい寸詰まりな剥片を素材としているものが多い。素材となる剥片の側縁を刃部とするものが多いが、14847-3は剥片の末端を刃部としているようである。14818+14819は縦

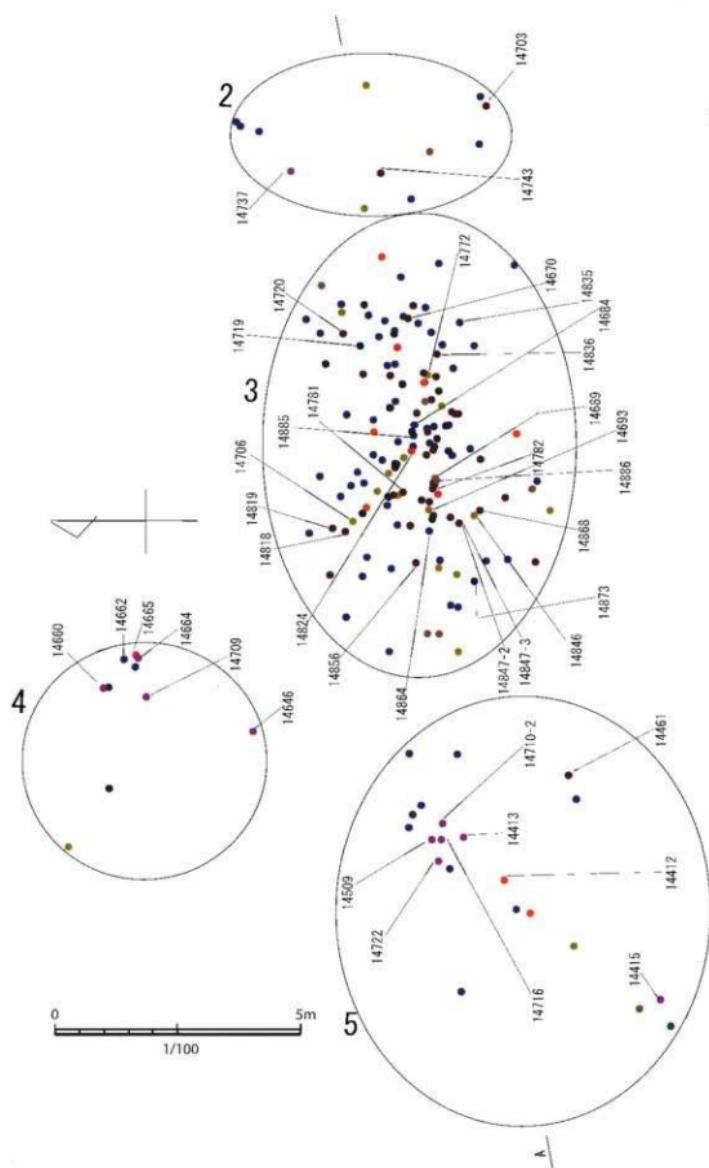


第90図 7層石器ブロック位置図 ( $S=1/700$ )



第91図 7層石器ブロック1出土石器平面・垂直分布図 ( $S=1/100$ )

長剥片を素材としている。調整は腹面や背面に限定せず、打面側には意図的に施すといった企画性も存在しない。また一個縁の調整のもの(14836など)と二個縁のもの(14824など)が存在する。調整剥離の大きさは非常に細かく、また連続した剥離を行っている。調整剥離は使用痕による微細な剥離との区別が非常に困難である。14689・14846・14772・14706・14693は石核である。石材は黒曜石で、角縁が原石となっている。全て剥片を素材とし、打面と作業面を転位し剥離を行っている。剥離された剥片は縦横比が同じくなる寸詰まりな剥片が多く、これらは上記の黒曜石製の台形様石器の素材となつたと考えられる。残念ながら台形様石器と石核の接合



第92図 7層石器 ブロック2-5出土石器平面・垂直分布図 (S=1/100)

193.5 A

192.6 —

資料は確認できなかった。14772(正面左上)と14706(裏面左下)は素材となる剥片の腹面をかし剥片を剥離している。この剥離による剥片の腹面は凸面となるが、背面も同様に素材剥片の腹面が残るため凸面となる。このような剥片が台形様石器の素材となった例は14720である。このブロックでは他の石核にも同様の剥離痕を残しているものが存在している。14886はノッチ(挿入石器)である。右側縁に調整に深い調整を施している。14719と14684+14873はスクレイバーである。14864+14885は被熱した剥片である。被熱により石器全面に大小のひびが入っており、側縁はそのひびにより剥落している。被熱によるため、表面の光沢もなくなっている。

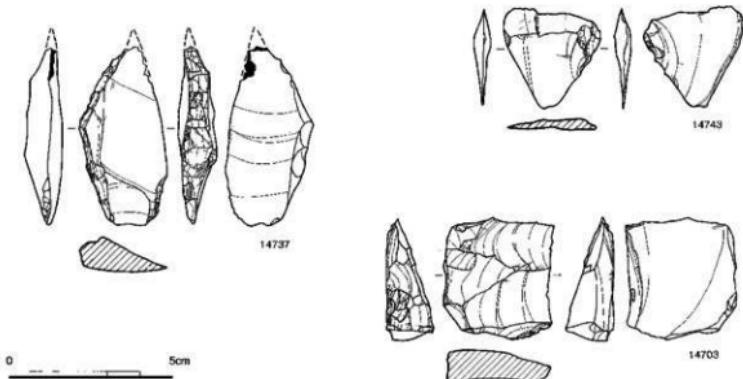
#### 石器ブロック4(第92図・第95図)

本文化層で最も北に位置している石器ブロックである。調査区の際で検出されたため、北側に調査区を拡張している。出土分布は北東側にナイフ形石器と剥片がたまつて出土している。石器点数は10点である。器種組成はA類が5点で、B類が4点である。A類ではナイフ形石器が4点である。ナイフ形石器だけで本ブロックの40%を占めている。石材は7点が安山岩である。ナイフ形石器は全て安山岩である。

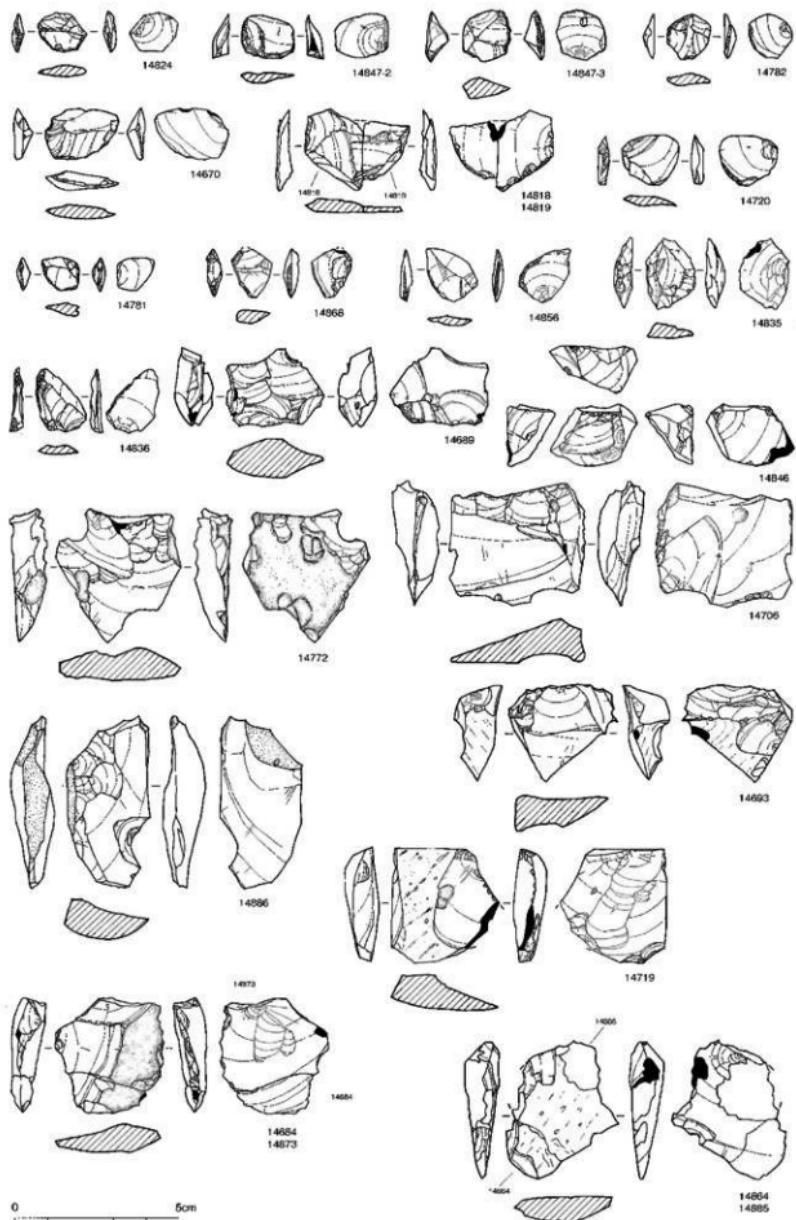
第95図14664・14660・14646・14709は安山岩製のナイフ形石器である。全て先端が欠損している。素材は縦長剥片で、二側縁加工を施している。14709は素材となる剥片の打面を基部にしており、素材の用い方が異なっている。素材の剥離面からは打面の方向が固定されておらず、縦や横からの剥離面が見られる。また、素材の打面は全ての資料で残っていない。14665は縦長剥片素材の微細剥離のある剥片である。素材の剥片は打面を固定してせず、剥離を行っており、上記のナイフ形石器と同様である。石材も同質の安山岩である。14662も同質の安山岩を用いた剥片である。14665と14662はナイフ形石器の素材と考えられる。面が見られ、錐状石器である。黒曜石製である。打面を残している横長剥片を素材としている。

#### 石器ブロック5(第92図・第95図)

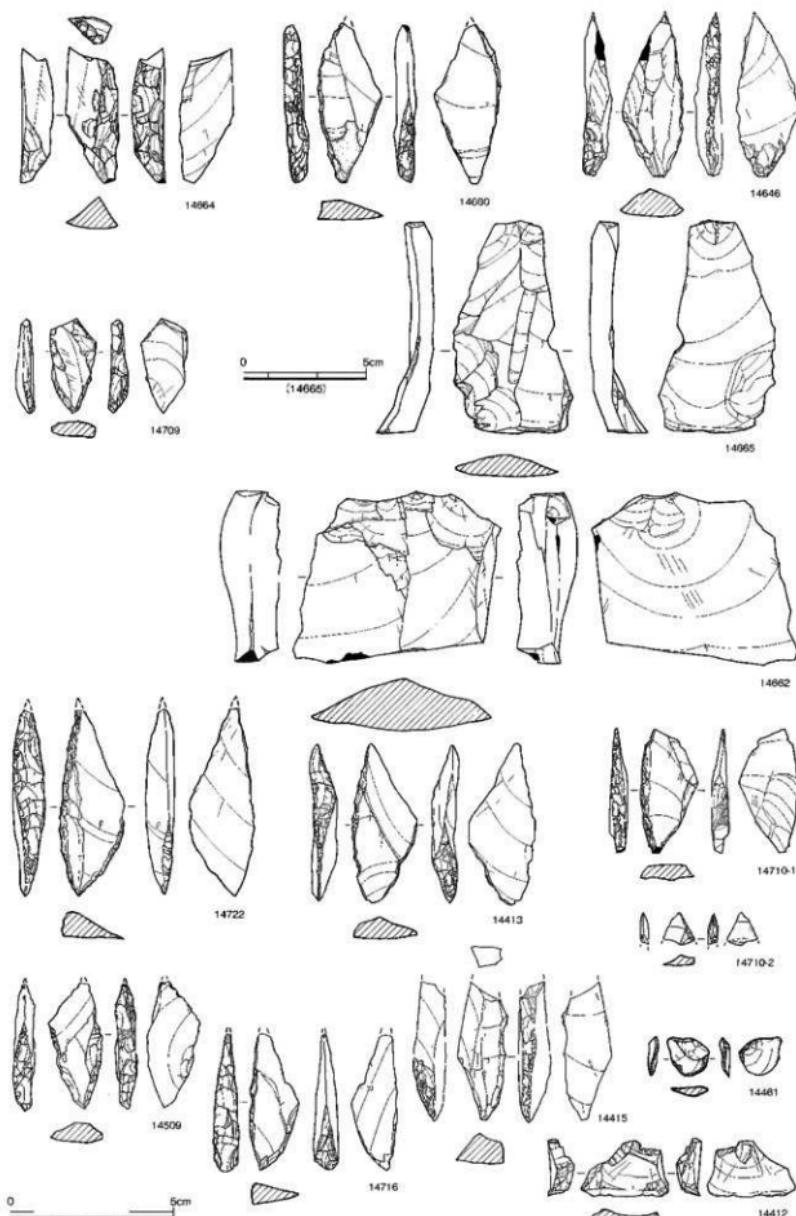
石器ブロック1~5は調査区の北東にまとまっているが、そのもっとも西に形成された石器ブロックである。種群60がブロックの南西に範囲が重なっている。石器の出土点数は22点で、A類が11点で50%, B類が8点で36%である。A類にはナイフ形石器7点と台形様石器1点が含まれてい



第93図 7層出土石器実測図(1) (S=2/3)



第94図 7層出土石器実測図(2) (S=2/3)



第95図 7層出土石器実測図(3) (S=2/3)

る。ナイフ形石器は本ブロックの石器の31%を占めている。台形様石器の14461はブロックの東側から出土しており、第92図の石器の平面分布図を見ると、隣接する台形様石器が主体の石器ブロック3側であり、本ブロックではなく石器ブロック3を構成する石器であった可能性がある。石材は72%が安山岩で、1点が黒曜石である。この1点が14461の台形様石器である。

第95図14722・14413・14710-1・14710-2・14509・14716・14415は安山岩製のナイフ形石器である。14413以外は先端が欠損もしくは先端部しか残っていない、縦長剥片を素材とするものが多いが、14509は横長剥片、14716は縦長剥片を斜めに用いている。全て二側縁加工である。打面は調整により全て取り除かれている。14461は貝殻状の小型剥片を素材とした台形様石器である。石材は黒曜石で、寸詰まりな剥片を横にして3方に連続する細かい調整を施している。石器ブロック3の台形様石器群と同じ石材で、同様の技法により作られている。14412は水晶製の二次加工のある剥片である。横長剥片を素材としている。

#### 石器ブロック6(第96図・第97図)

石器ブロック5の13mほど南西に設定した石器ブロックである。若干範囲が広いブロックである。出土石器数は25点で、A類が4点出土している。B類が17点である。C類も石核が3点出土している。石材は12点が安山岩で、6点が黒曜石である。

第97図は本ブロックの出土した安山岩製の石器である。14016と14003は剥片である。14016は寸詰まりで、14003は幅広の剥片である。14345は石核で腹面に横からの剥離が認められる。大きな剥片は剥離されていないようである。14015と14012は幅広の剥片を素材としている。石器ブロック4や5の安山岩製の二側縁加工のナイフ形石器と石質も同じで、ナイフ形石器の素材と考えても良いと思われる。

#### 石器ブロック7(第96図・第98図・第118図)

調査区の北西際で検出された石器ブロックである。出土石器数が20点と比較的少ない。石器の出土分布は散漫である。B類が9点(45%)であるが、40%(8点)を石核が占めており、石核の割合が高くなっている。接合は石器ブロック8との間に2個体認められた。石材は水晶が6点(24%)、石英が5点(20%)、凝灰岩が5点(20%)である。

第98図13076は凝灰岩製の石核である。亜角礫の原石の角を打ち欠いている。打面は自然面を利用している。剥片は1枚のみ剥離されている可能箇がある。

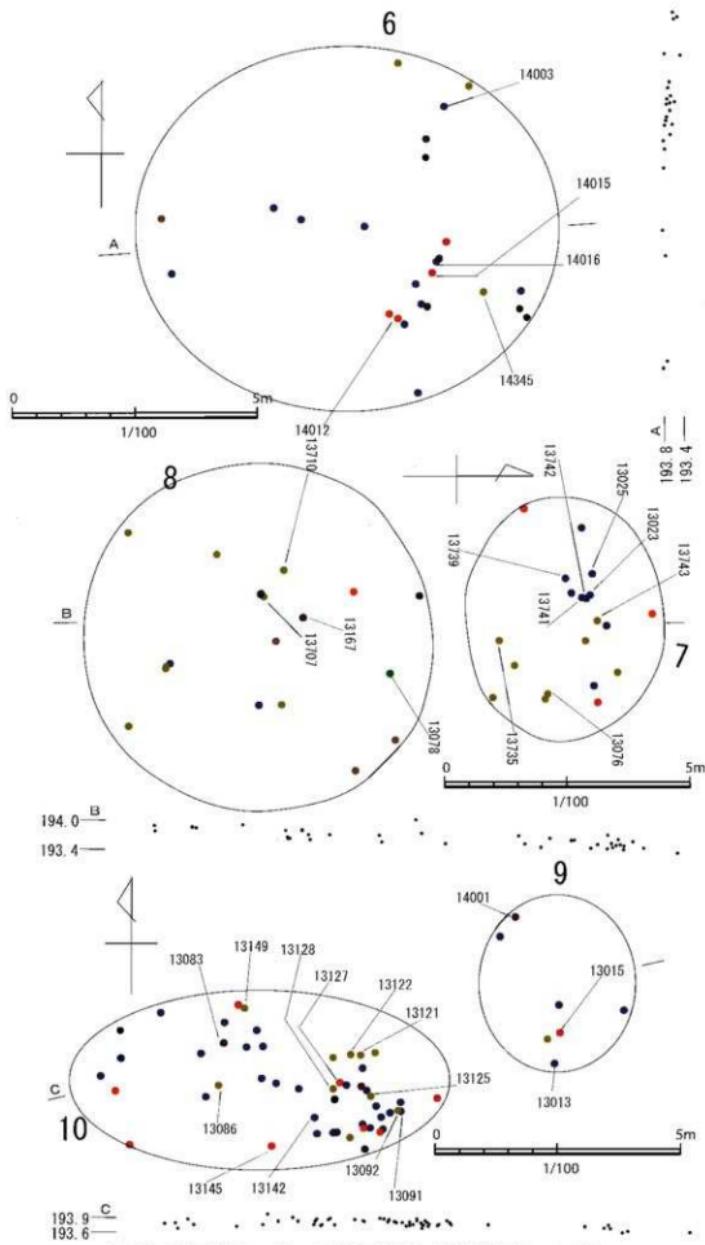
#### 石器ブロック8(第96図・第98図・第118図)

石器ブロック7の南に隣接する石器ブロックである。7より散漫かつ広範囲に石器が分布している。器種組成はA類が21%で、B類が10%である。C類は47%で非常に高い。研磨面を持つ石器が1点出土している。石材は9点(47%)が流紋岩で、安山岩は出土しなかった。

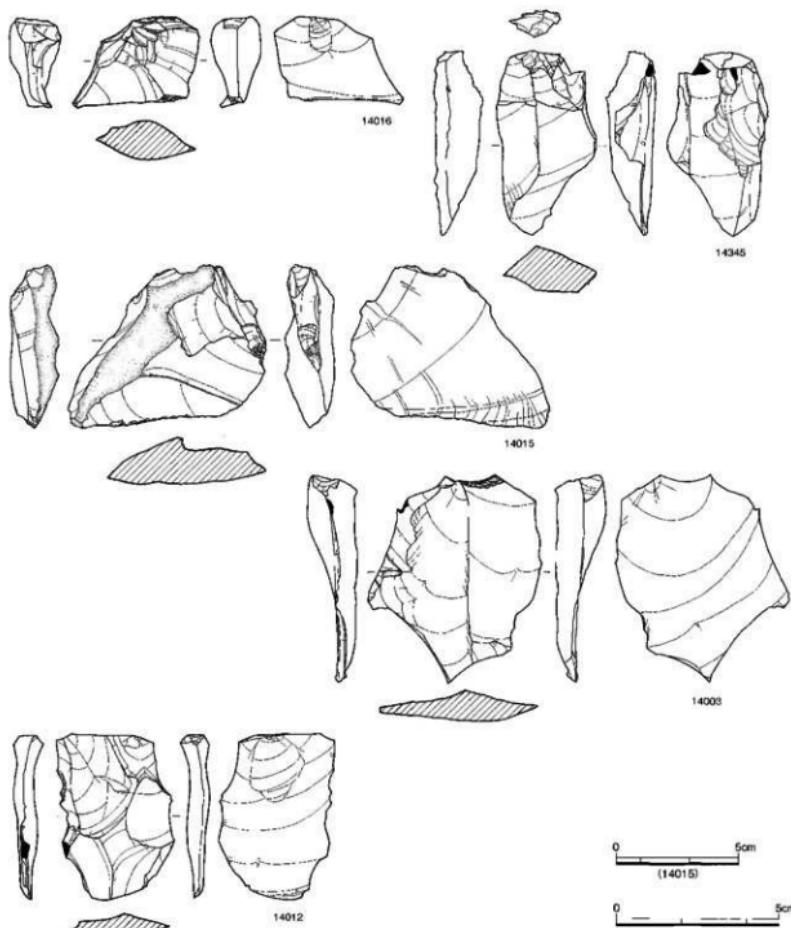
第98図13167は水晶製の台形様石器である。寸詰まりな剥片を横に据え、素材の打面側に調整を施している。13078は研磨面を持つ石器である。砥石としているが、磨石の可能性もある。花崗岩製で側縁の加工の後、両面が研磨されている。

#### 石器ブロック9(第96図・第98図)

出土石器の数が9点と少ない石器ブロックで、範囲も狭く設定されている。器種組成はB類が全体の57%を占めている。A類は28%(2点)である。台形様石器1点が含まれている。石器の使用石材は玉髓と黒曜石、石英、流紋岩質凝灰岩でまとまりはなかった。ブロック内で1個体接合している。



第96図 7層石器ブロック6~10出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)



第97図 7層出土石器実測図(4) (S=2/3)

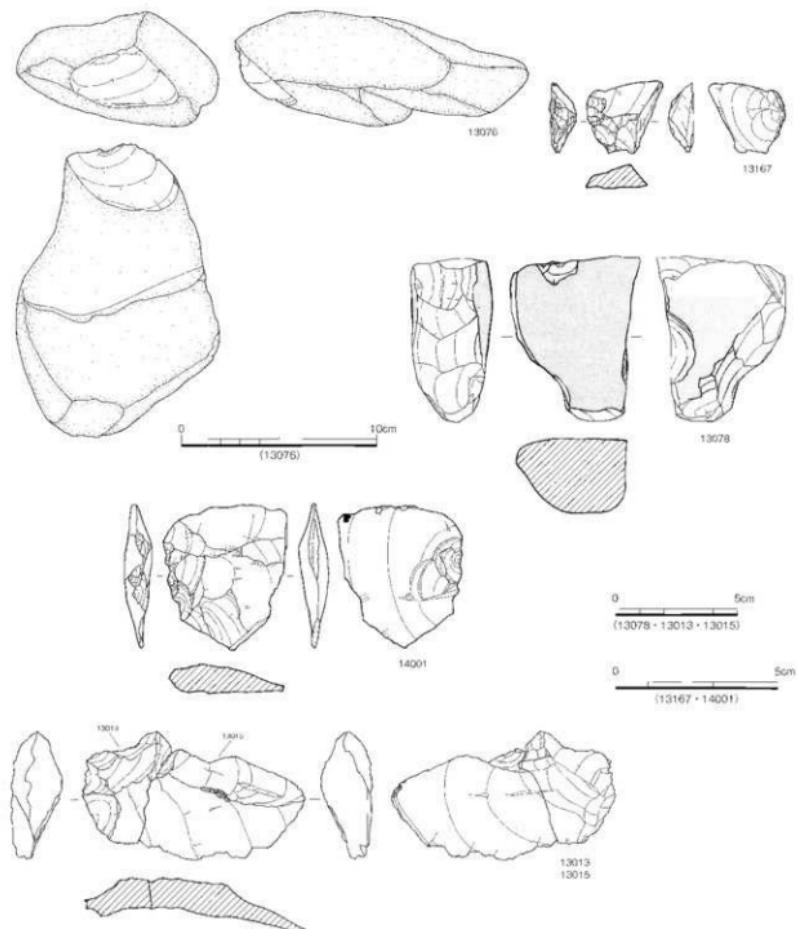
第98図14001は玉髓製の台形様石器である。石器ブロック3の台形様石器とは異なり、非常に大型である。素材の打面と打溜を除去するように調整が施されている。13013+13015は玉髓の接合資料である。接合すると大きな綫長剥片となる。接合面は折断による剥離の可能性がある。

石器ブロック10(第96図・第99図・第100図)

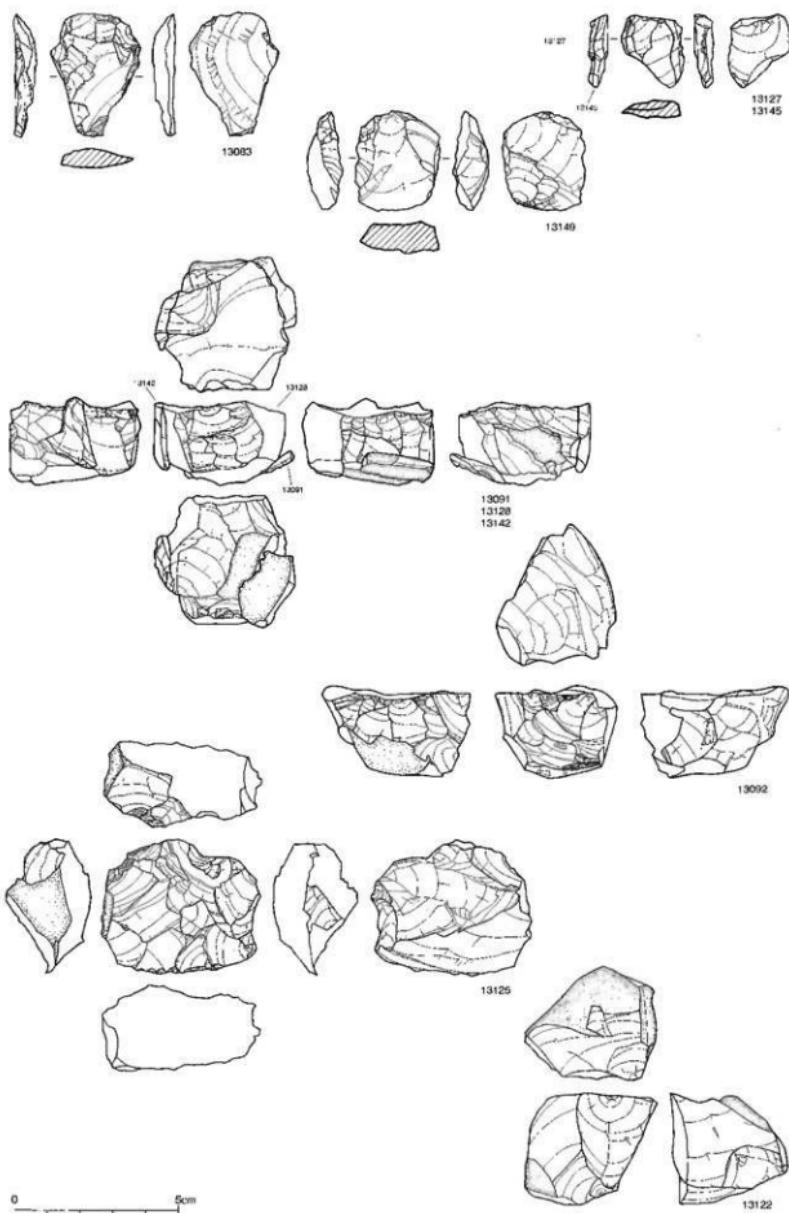
出土石器も54点と多く、分布密度も高い石器ブロックである。分布は東にかたよっている。石器組成はA類が24%(13点)で、B類が57%(26点)、C類が18%(10点)である。A類には台形様石器が2点含まれている。石材は77%(42点)が玉髓である。石器ブロック内で2個体の接合が確認された。

第99図と第100図は本石器ブロックで出土した石器である。第99図13083は玉髓製の台形様石器で

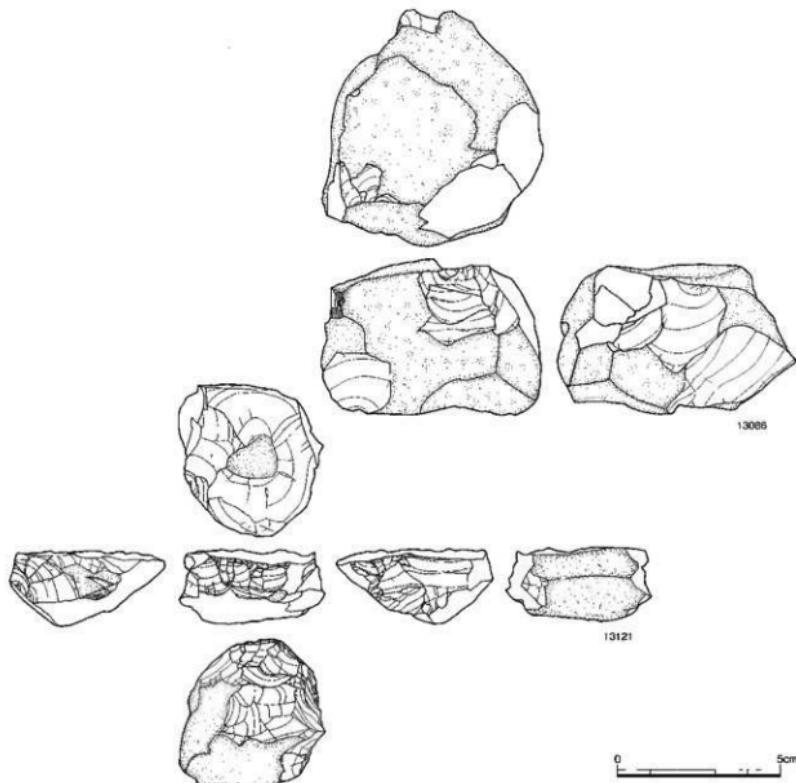
ある。横長剥片を素材としている。左側縁の下半部は折断によるもので、上半部に調整を施しているものと判断しているが、別器種と考えることも可能である。13149の石材は玉髓で、上下端部にそれぞれ剥離が見られる。上ドの剥離痕と、断面の形状から楔形石器と判断している。13127+13145は微細剥離のある剥片と剥片の接合である。先に13145は剥離されている。打面は固定されている。13091+13128+13142は右核に剥片が接合している。13091は凝灰岩の原石から自然面を除去するために剥離されたものである。打面は固定し剥離されている剥片が多い。13092と13125、13122は右核である。13092は打面を固定、13125は打面と作業面を固定せず、剥離作業を行っている。13122は大きく剥離を行っている右核である。第100図13086はあまり珪質化していない玉髓で



第96図 7層出土石器実測図(5) (S=2/3)



第99図 7層出土石器実測図(6) (S=2/3)



第100図 7層出土石器実測図(7) (S=2/3)

ある。剥片剥離は打点と作業面を固定せず行っているが、原石の形状を変えるほどの剥離は行われていない。13121も石核で、小さい剥片が剥離されているようである。打面の転位は行われている。石器ブロック11(第101図)

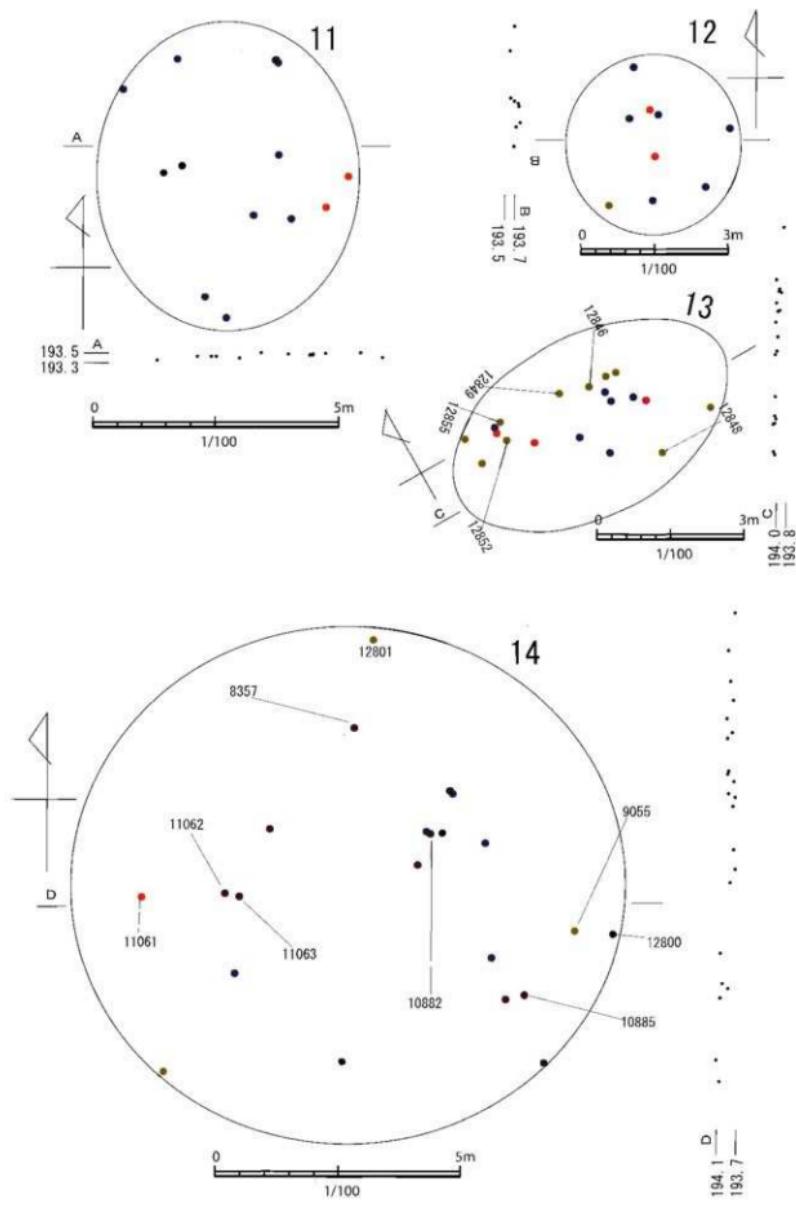
調査区の東の斜面が緩い傾斜になった地点で検出された石器ブロックである。出土石器18点中、11点が剥片、5点がチップであり、B類が88%である。石材は流紋岩質凝灰岩のみである。

#### 石器ブロック12(第101図)

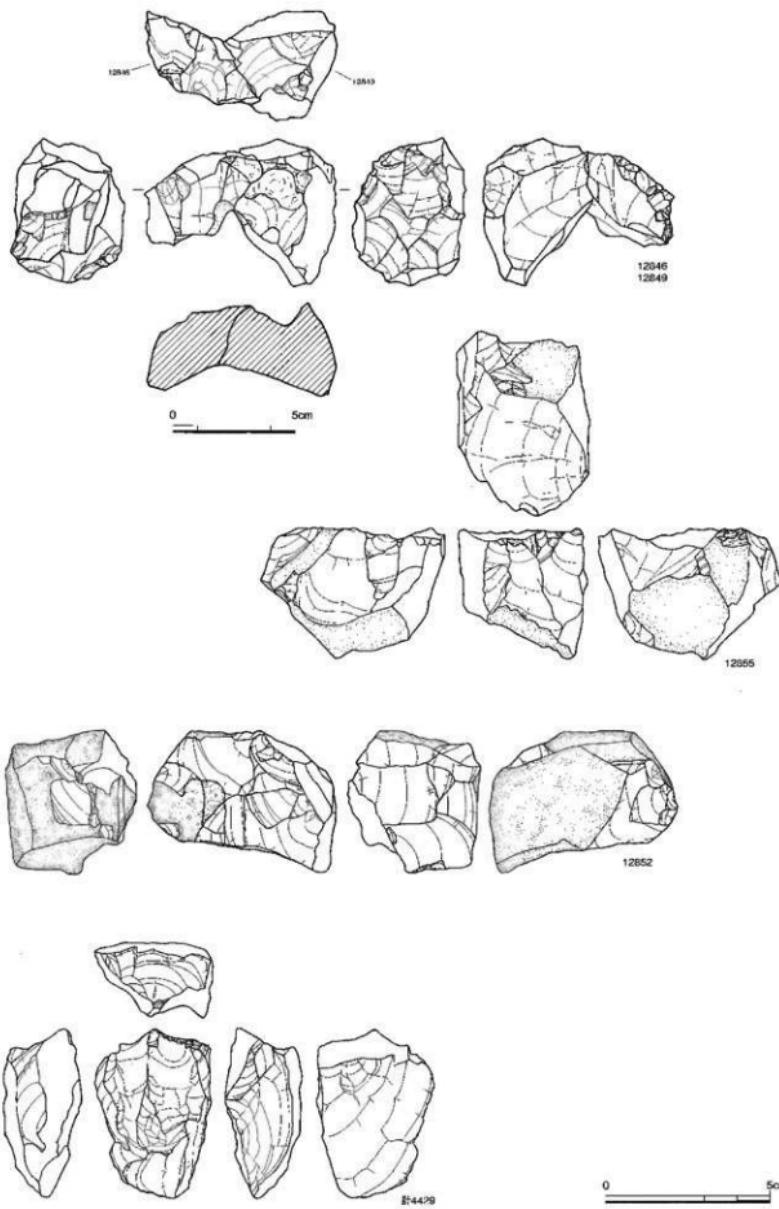
9点の石器で形成された石器ブロックである。8点がB類で、1点がC類である。剥片の比率が高くなっている。石材は黒曜石が5点で玉髓が4点である。

#### 石器ブロック13(第101図・第102図・第103図)

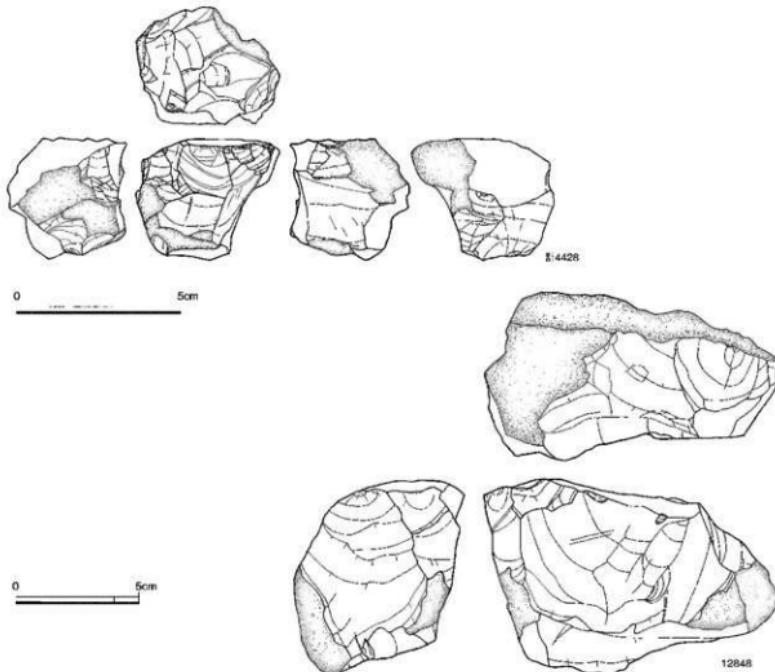
平坦な地形に東西に石器が分布する石器ブロックである。南西には環状ブロックが存在する。出土石器数は19点と少ないが、C類の石核が10点(52%)出土している。B類(31%)よりC類の方が多くなっている。石材組成も玉髓が17点(89%)出土しており、極端な組成となっている。剥片の出土



第101図 7層石器ブロック11～14出土石器平面・垂直分布図 (S=1/100)



第102図 7層出土石器実測図(8) (S=2/3)



第103図 7層出土石器実測図(9) (S=2/3)

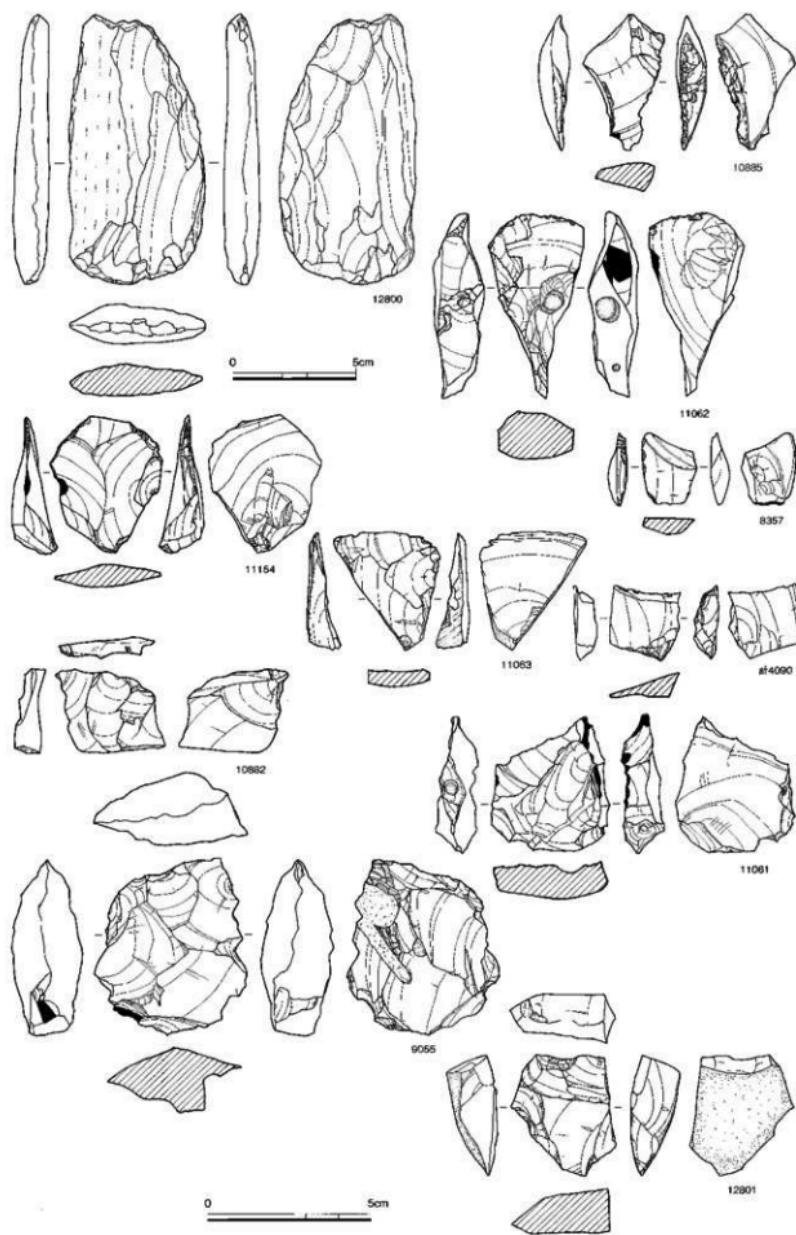
はブロックの中央に集中し、石核は周囲に分布している。ブロック内で1個体の母岩別資料が確認されている。

第102図と第103図は本石器ブロックで出土した石器である。12846+12849は一つの石核が分割されたものである。12855・12852・計1429・第103図計4428・12848は卡鶴製の石核である。12855は自然面を大きく剥離し、その面を打面として固定し、剥片を剥離している。平設打面である。第103図12848は自然面が残る大型の石核である。自然面を打面とし大型の剥片を剥離している。この石器ブロックの石核は自然面が残っているものが多いようである。

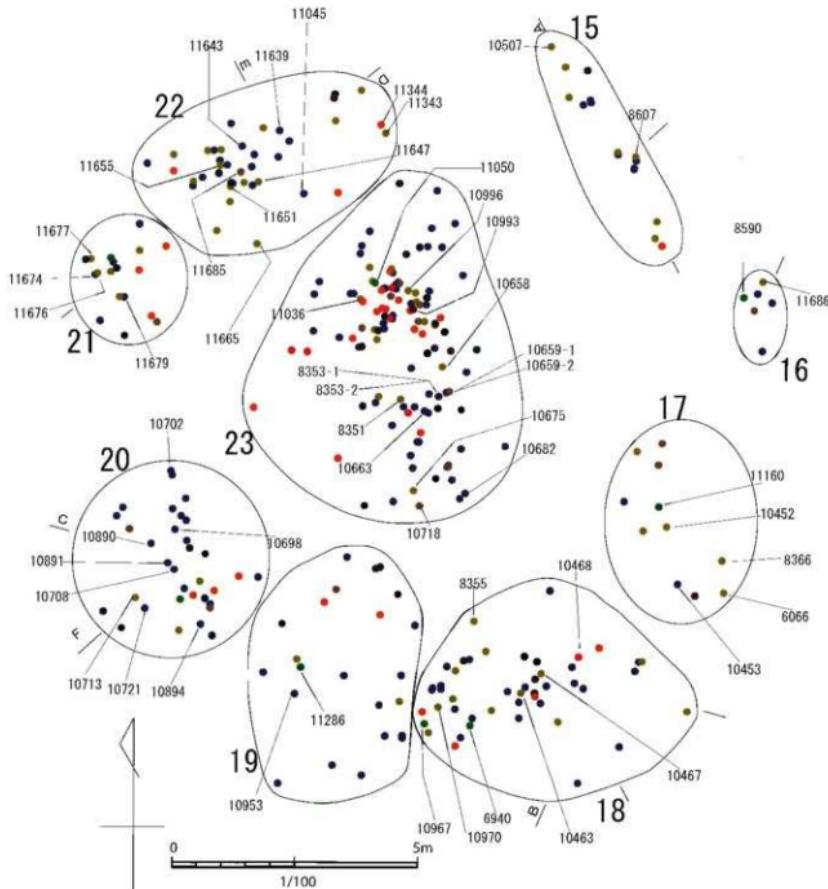
#### 石器ブロック14(第101図・第104図)

環状ブロックの南東に位置している石器ブロックである。出土石器数が22点であるが、直徑10mを超える石器ブロックで、石器の分布は非常に散漫である。A類が10点(45%)と多く、B類は8点(36%)、C類が3点(13%)である。D類として局部磨製石斧が1点出土している。確実に局部磨製石斧といえる資料は、原田遺跡では本ブロックのこの1点だけである。A類は8点が台形様石器で本ブロックの36%を占めている。石材は18点(81%)が黒曜石である。

第104図12800は局部磨製石斧である。原田遺跡唯一の資料である。自然面を有する片岩で、扁平な剥片を素材とし、右側縁と刃部となる末端部を剥離し、整形している。その後、刃部両面と、裏



第104図 7層出土石器実測図(10) (S=2/3)

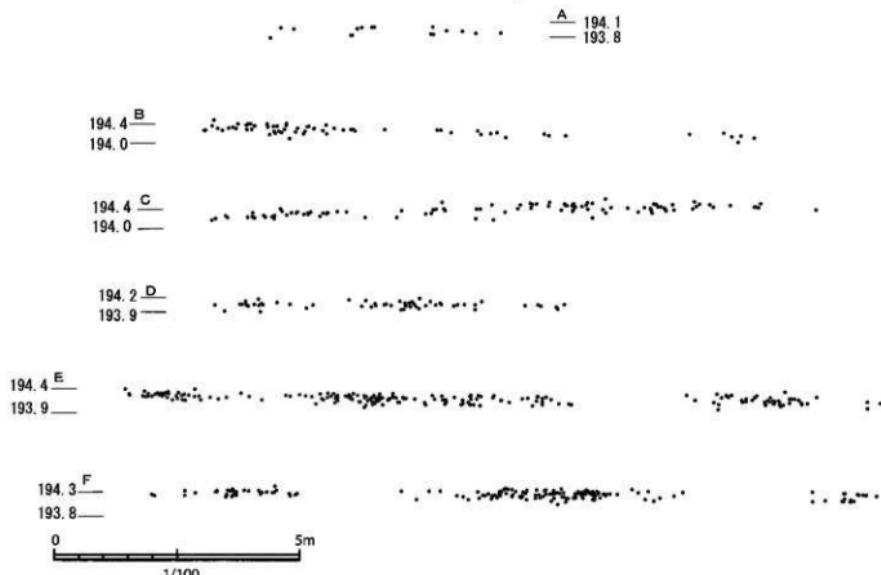


第105図 7層石器ブロック15~23出土石器平面分布図 (S=1/100)

面の下半に1ヶ所研磨痕が認められる。10885・11062・11154・8357・11063・計4090は台形様石器である。素材は全て剥片である。素材の打面を調整により除去しているもの(10885・計4090)、打面を残すもの(8357・11062)、打面を折断により除去するもの(11154・11063)が存在する。これらの形状は一定ではなく、調整技法も一様ではないため、器種の認定は非常に困難であった。しかし、折断と考えている側縁の剥離面と細かい調整を、全て調整と考えて今回は台形様石器として分類しているものが多い。10882と9055、12801は石核である。12801は作業面の転位は行っていない。

#### 石器ブロック15(第105図~第108図)

環状ブロックの環状部を構成する8つの石器ブロックの一つである。北西から南東に細長いブ



第106図 7層石器ブロック15~23出土石器垂直分布図(S=1/100)

ロックである。石器組成はA類が6%で、B類が50%、C類が43%である。A類はスクレイバー1点のみである。石材は68%が石英で流紋岩と黒曜石も出土している。接合資料は見られなかった。

第108図8607と10507は石英の石核である。8607は剥片を素材として用いており、右側縁で剥片を剥離している。10507は打面と作業面を転位している。

#### 石器ブロック16(第105図~第108図・第119図)

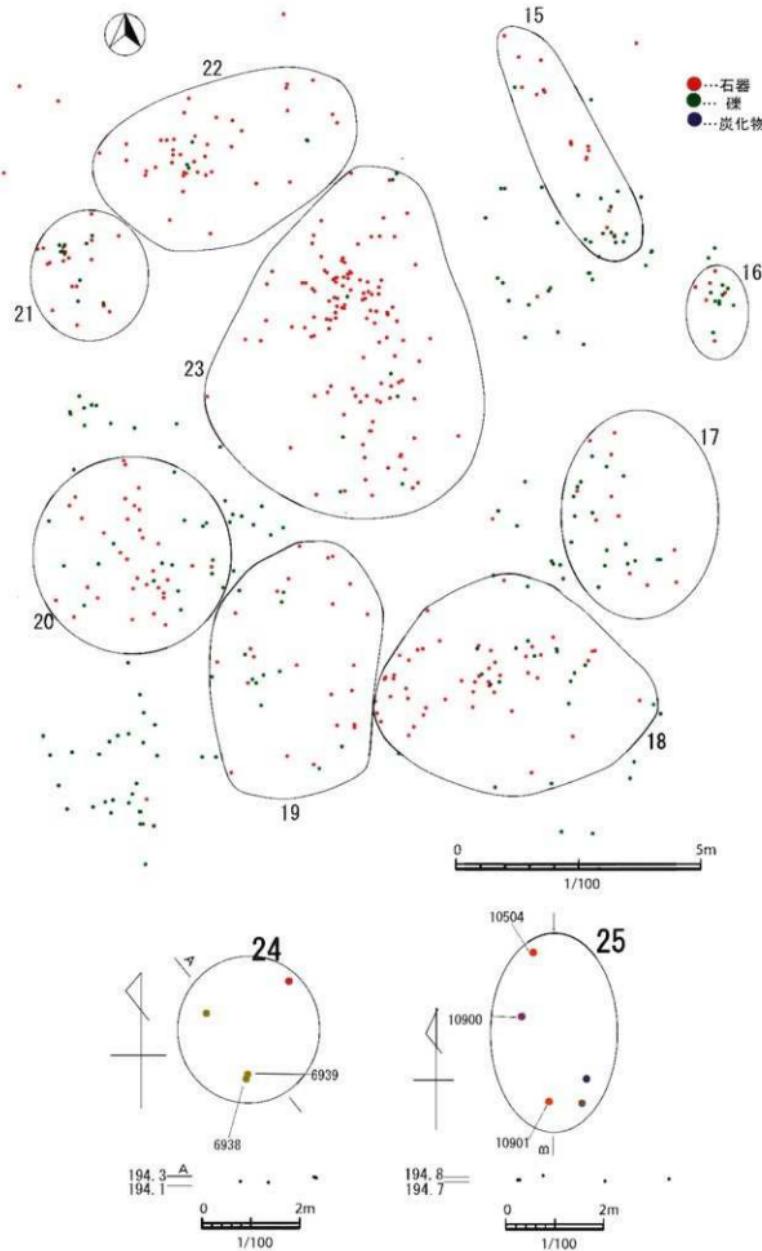
環状部の最も東に位置している石器ブロックである。環状ブロックで最も範囲の狭いのもこのブロックである。石器の点数は6点で、半分の3点が剥片で、1点が石核と原石、石斧である。石斧は環状ブロックの対角に位置している石器ブロック20の石斧と接合している。石材組成にかたよりは見られない。

第108図11686は石英製の石核である。剥離された剥片は小さなものが多い。

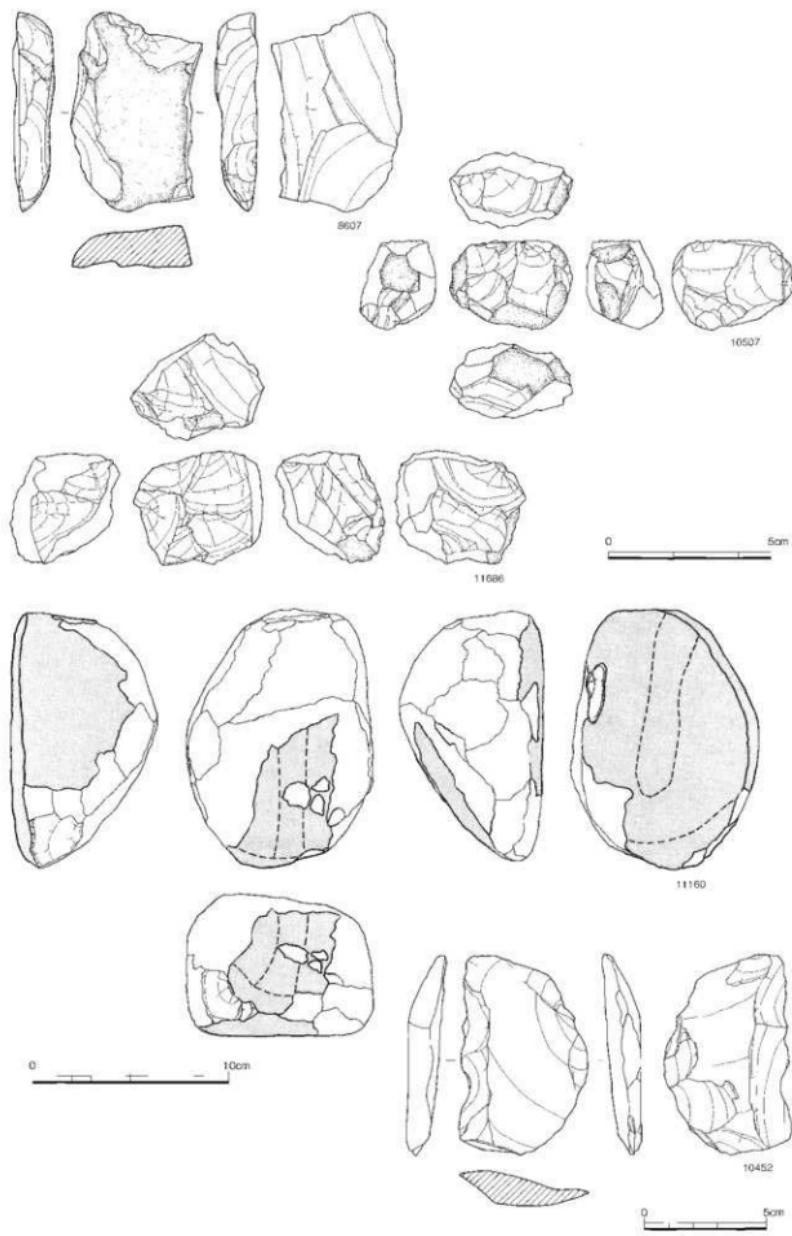
#### 石器ブロック17(第105図~第108図・第119図・第120図)

環状部の東にしている石器ブロックである。出土した石器11点の内、C類が5点(45%)と最も多く、A類は1点、B類は2点で少なかった。A類の1点は台形様石器である。その他に砥石が1点出土している。接合は、隣接する石器ブロック18との間に1個体、環状ブロックの中心を形成する石器ブロック23と2個体確認された。

第108図11160は砥石で、花崗岩製である。剥離と敲打により整形した後、裏面と側面、正面の一部を研磨している。研磨面は非常に使い込まれており磨滅が著しい。正面の研磨面の中心と裏面の研磨面の中心には帯状の凹面が単位で見られた。この面は研磨される物体の形状を反映しているのではないかと考えられる。側面にも研磨が及んでいるが、凸面であるため、正面と裏面の凹面の研



第107図 7層石器ブロック15~23出土遺物分布図、24・25出土石器平面・垂直分布図(S=1/100)



第108図 7層出土石器実測図(11) (S=2/3)

磨面とは砥石の使用方法が異なっていると考えられる。凹面がいわゆる「置き砥石」による磨滅で、側面などの凸面の磨滅は「持ち砥石」あるいは磨石として使用されていた可能性が考えられる。10453は凝灰岩製の石核である。左側縁に剥離面が見られる。

#### 石器ブロック18(第105図～第107図・第109図・第119図)

環状部の南東に検出された石器ブロックである。石器数は53点と環状ブロックでは石器ブロック23に次いで多い。B類が62% (27点) で、C類が24% (13点) で大部分を占めている。石斧が2点出土している。接合は本ブロック内で1個体と、石器ブロック17との間に1個体認められた。

第109図6949と10967は石斧である。6940は凝灰岩製で原石あるいは分割砾や、大型の剥片を素材としており、非常に分厚い。側縁からの大きな剥離の後に、両側縁から刃部にかけて調整を施している。左側縁は敲打痕も見られる。基部は直角に剥離しており、その後、正面に基部から調整を加えている。基部は石斧の長軸に対して直角で、破損によりこの形状に、あるいは、近い形状になつたものと考えられる。したがって、現在、刃部を上に実測されているが、出土しなかった欠損部分に刃部が存在していた可能性もある。研磨痕は認められなかった。10967は石斧の側縁と考えている。それは石材は片岩で石斧特有の石材であること、研磨痕らしき磨滅面が存在するからである。8355・10467・10463は石核である。10463が黒曜石でそれ以外は石英である。10467は亜角砾の石英の原石を用いた石核で、打面と作業面を固定せず、剥離作業を行っている。砾の自然面は河川の影響により摩耗しており、砾は川原で採取されたものと考えられる。10468は黒曜石製の微細剥離のある剥片である。調査中の欠損により形状が不明であったため、台形様石器としていないが、10463などの石核から剥離された剥片を素材とした台形様石器の可能性が高いと考えている。

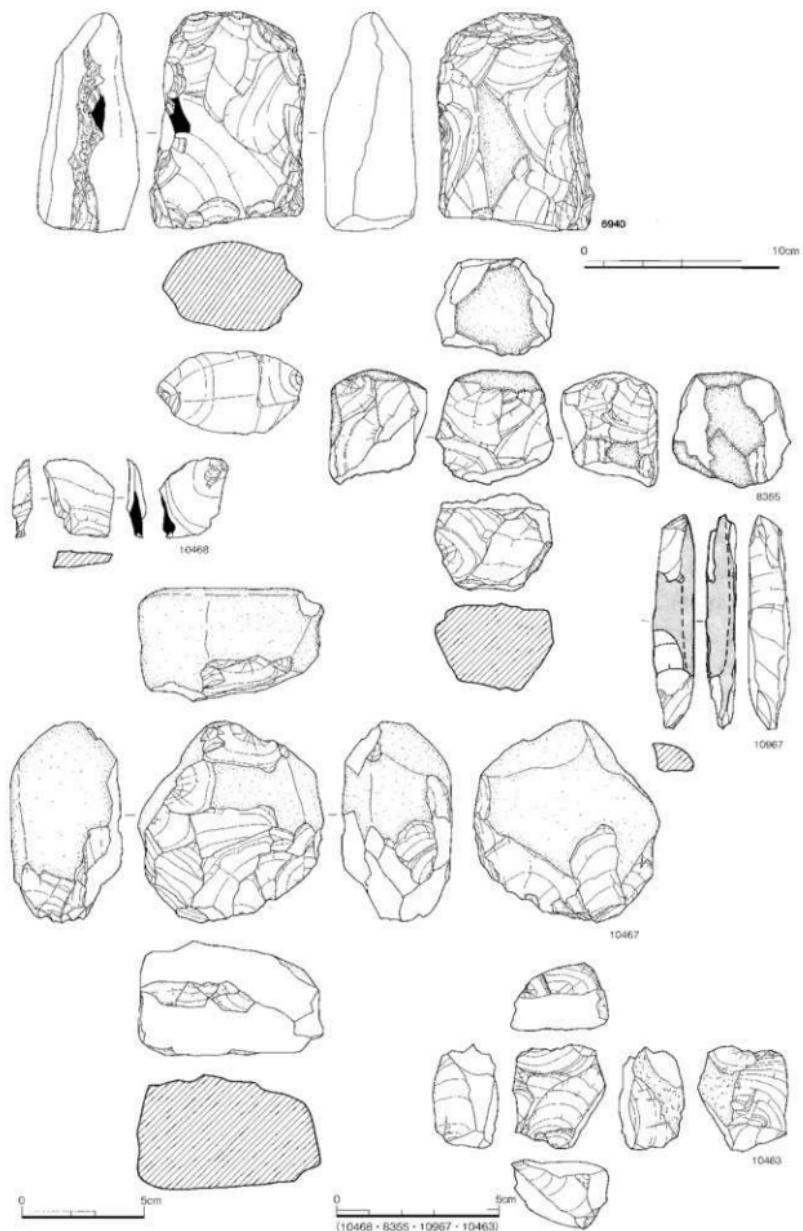
#### 石器ブロック19(第105図～第107図・第110図・第120図)

環状部の南部分に形成されている石器ブロックである。出土石器数は21点である。石器の器種組成はA類が2点 (9 %) で、B類が14点 (66 %)、C類が3点 (14 %) である。その他に砥石が1点出土している。石材組成は、14点が石英で、66 %を占めている。チャートが3点出土している。接合は石器ブロック20との間で1個体が確認されている。

第110図11286は砥石である。最大長が25cmもあり、凝灰岩の原石か分割砾を素材として用いていたと思われる。左側縁は割れ面で、右側縁に正面と裏面への交互の剥離が施されている。裏面も割れ面と見られる。研磨は正面の平坦部に施されている。研磨方向は縱であった。正面中央右寄りに右側縁からの大きな剥離面が存在するが、剥離面の末端の後線が研磨面の中に凸状の後線となつて残っている。研磨されているため、剥離面の稜線そのものが残っているわけではないが、稜線が研磨面の形状に影響を与えていたと考えられる。断面を見ると、その凸状の稜線から左側縁の割れ面までが凹面になり、研磨面の単位が存在している。稜線の右側にも研磨面の端部まで縱に幅の狭い研磨面の単位が存在している。石器ブロック17で出土した第108図11160の砥石とは大きさが全く異なり、11286はいわゆる「置き砥石」であったと考えられる。

#### 石器ブロック20(第105図～第107図・第111図・第119図・第120図)

環状部の南西に位置している石器ブロックで、東の石器ブロック19と近接している。出土石器数は33点で、石器の分布密度は高くないが、約4mの円内からまとめて出土している。器種組成はB類が全体の63% (18点) を占めている。A類は24% (8点) である。3点ずつスクリイバーと二次加工のある剥片が出土しており、楔形石器も2点出土している。石器の使用石材は石英が93%を占め、



第109図 7層出土石器実測図(12) (S=2/3)

本文化層中で石英の比率が最も高い石器ブロックである。接合資料はブロック内で1個体、石器ブロック16と19との間で1個体ずつ確認されている。

第111図10702+10890はブロック内で接合した母岩別資料である。腹面は上面の剥離が行われた後に剥離されている。

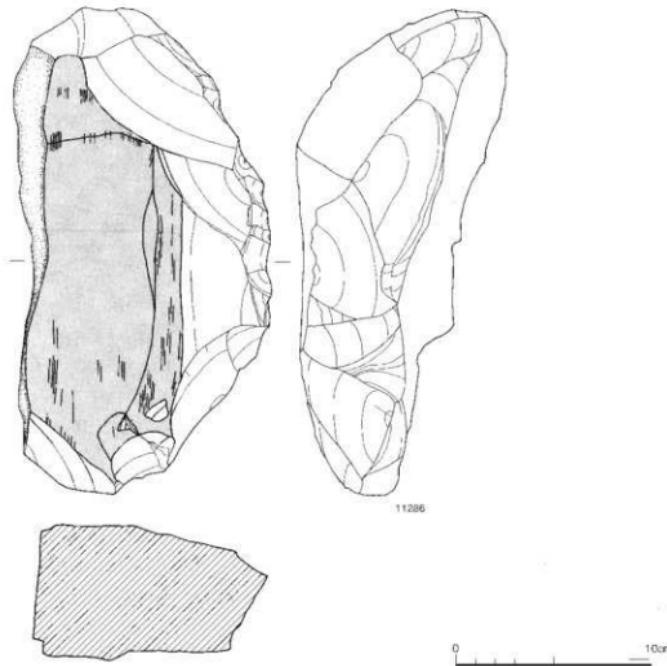
石器ブロック21(第105図～第107図・第111図・第119図・第120図)

環状部の北西で石器ブロック22と接続している石器ブロックである。18点の石器がおよそ2.5mの円形の範囲から出土している。石器組成はA類が14%で、B類が38%，C類が27%である。石材は77%が石英である。ブロック内で1個体接合し、また石器ブロック22と接合関係が存在する。

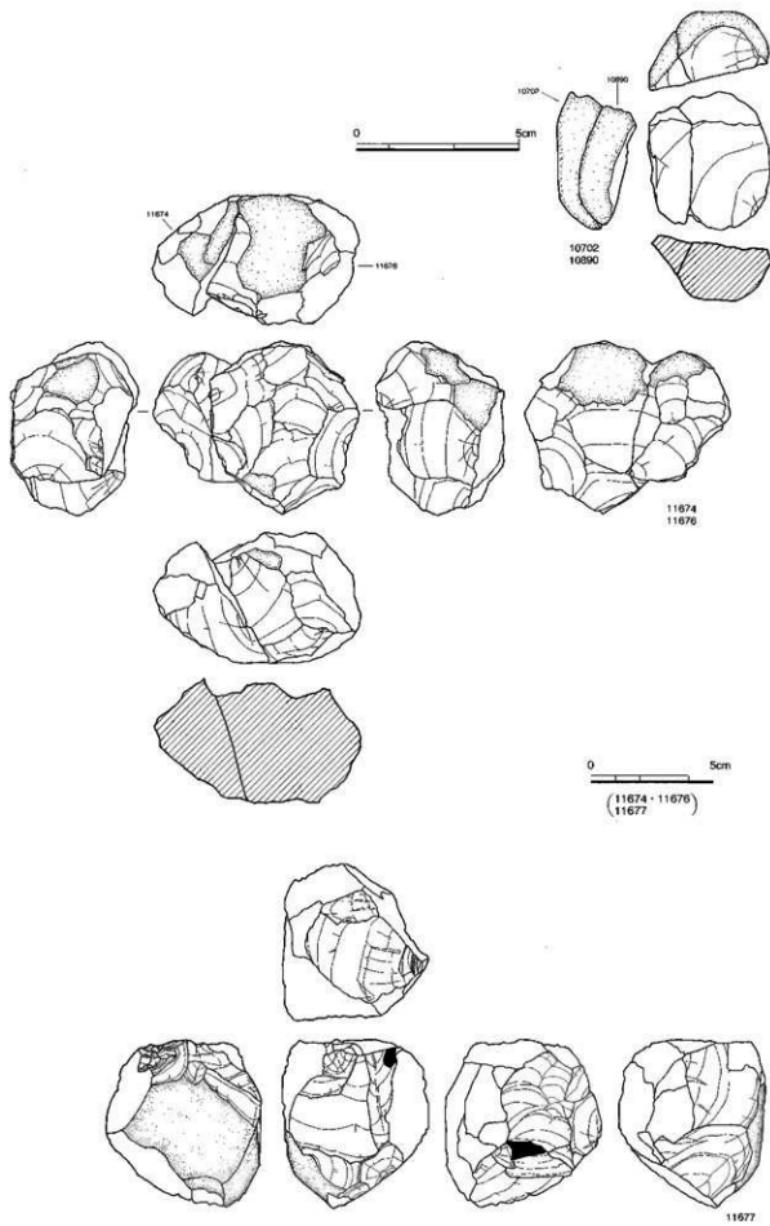
第111図11674+11676は11676の石核から11674が剥離された接合例である。11677は流紋岩製の石核である。角礫の原石を用い、四方を打面と作業面を転位しつつ、剥片剥離を行っている。

石器ブロック22(第105図～第107図・第112図・第113図・第120図)

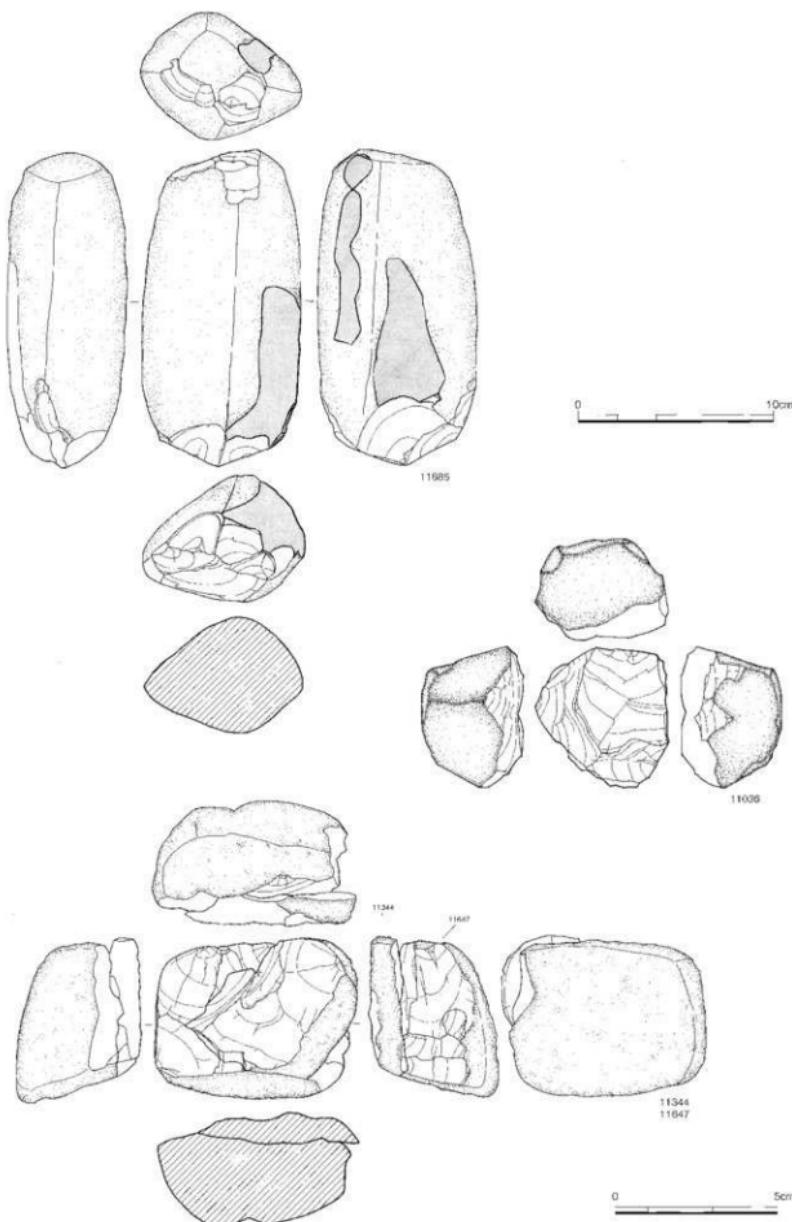
環状部の北で検出された石器ブロックである。北東から南西に範囲が広がっている。出土石器数が41点と環状ブロックでは3番目に多く出土している。石器の出土分布は中心よりやや西にまとまっている。A類は6点(14%)で、B類が18点(46%)、C類が15点(36%)で、C類は全て石核である。石核の出土数の多さが本ブロックの特徴である。石材は85%(35点)が石英である。黒曜石も4点出土している。接合はブロック内で2個体、石器ブロック21との間で1個体、ブロック外出土石器と



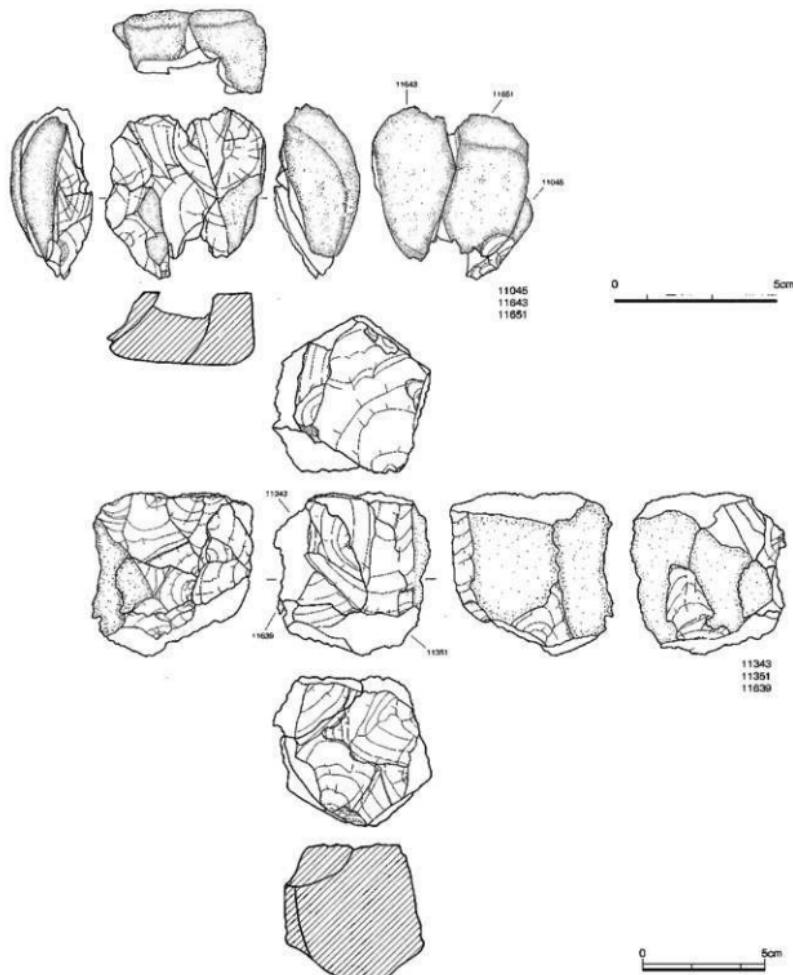
第110図 7層出土石器実測図(13) (S=2/3)



第111図 7層出土石器実測図(14) (S=2/3)



第112図 7層出土石器実測図(15) (S=2/3)



第113図 7層出土石器実測図(16) (S=2/3)

1個体接合している。

第112図11685は敲き石としている。花崗岩製で、縦長の亜円礫の上下端を剥離している。下端は敲き石としての作業により剥離した可能性もある。右側面には磨滅した面が存在し、研磨した痕跡ではないかと考えられる。この研磨面は磨石や砥石といった使用による痕跡の可能性もあると考えている。11036は石英の石核である。打面は自然面を利用し転位を繰り返している。作業面は固定され剥離が行われている。11344+11647は石核に剥片が接合した例である。亜円礫の石英の

原石を素材としている。幅広の剥片を打面転位しつつ剥離している。作業面は固定されている。第113図11045+11643+11651は素材となる並円疊の大きさが復元可能なまで接合できた使用である。正面と裏面に自然面が残っており、原石の厚みがわかる。11343+11351+11639はブロック内と石器プロック外で出土した石器の接合例である。①11343②11639の順で剥離されている。剥離は打面と作業面転位を繰り返している。

#### 石器プロック23(第105図～第107図・第114図・第115図・第119図・第120図)

環状プロックの中央部に位置している石器プロックである。本プロックで出土した石器数は117点で、環状プロックを構成する石器プロックで最も多く、また分布範囲の最大径が7m程で最も広くなっている。石器の分布密度が高い部分が広範囲にわたっている。

石器の器種組成は、A類が33点(28%)で、B類が52点(56%)、C類が16点(13%)、D類は石斧が1点である。A類の内訳は二次加工のある剥片が15点、楔形石器が6点、微細剥離のある剥片が5点、スクレイバーが4点、台形様石器が2点、ノッチ(抉入石器)が1点である。楔形石器は本文化層で出土した总数が10点であるので、その6割が本プロックで出土していることになる。

石材は88点(75%)が石英である。次に黒曜石の19点(16%)が多くなっている。それ以外は数種類が数点ずつ出土している。

第114図と第115図は本プロックで出土した石器である。第114図11050は石斧である。側縁からの数多くの剥離からは石核の可能性も否定できないが、变成岩類の石材である点、同類の剥片で石器の製作が行われていない点、厚さや長さなどが石斧になりうる大きさである点から石斧と考えた。研磨痕は存在していなかった。10993は黒曜石製の台形様石器である。両側縁に調整が施されている。10718は黒曜石製のノッチである。右側縁に小さな抉りが加えられている。10658+10682は石核に剥片が接合した例である。8351+10663も同様である。第115図10675と10996は石核である。10675は幅広の剥片を剥離している。10996は石核としているが、剥片の可能性もある。

#### 石器プロック24(第107図・第116図)

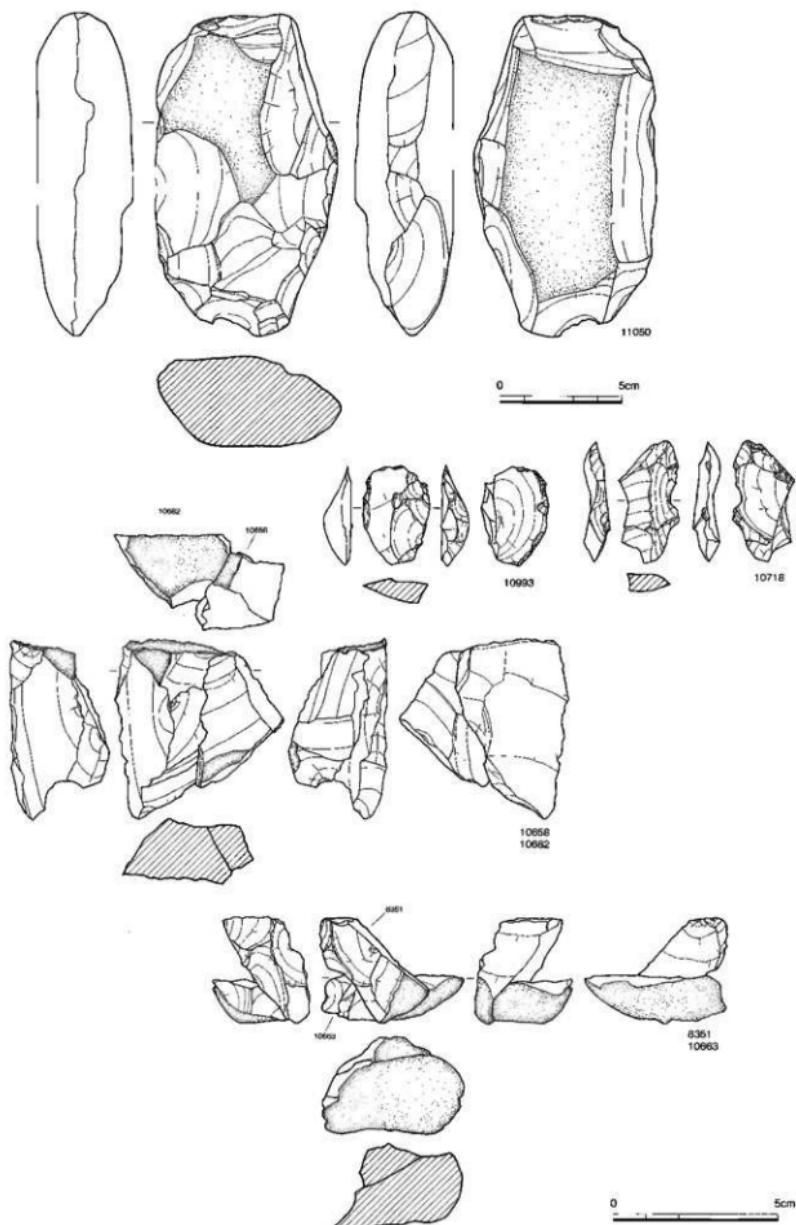
調査区の西に1ヶ所離れて形成された石器プロックである。調査区の際にあり、縄文時代の斐伊川の影響で削平された面が接近している。出土石器点数は本文化層で最も少なく4点である。その内3点が石核で、1点が微細剥離のある剥片である。石核の比率が75%と非常に高い石器プロックである。石材は玉髓と石英が2点ずつ出土している。

第116図6938は玉髓製の石核である。自然面に施された長い剥離面は、自然面を除去するための剥離であると考えられる。打面と作業面は固定されていない。幅広の剥片が剥離されている。石器プロック外で出土した剥片と接合したが、剥片が所在不明となっている。6939は石英製の石核である。自然面を有する並円疊の原石を用い、幅広の剥片を剥離している。

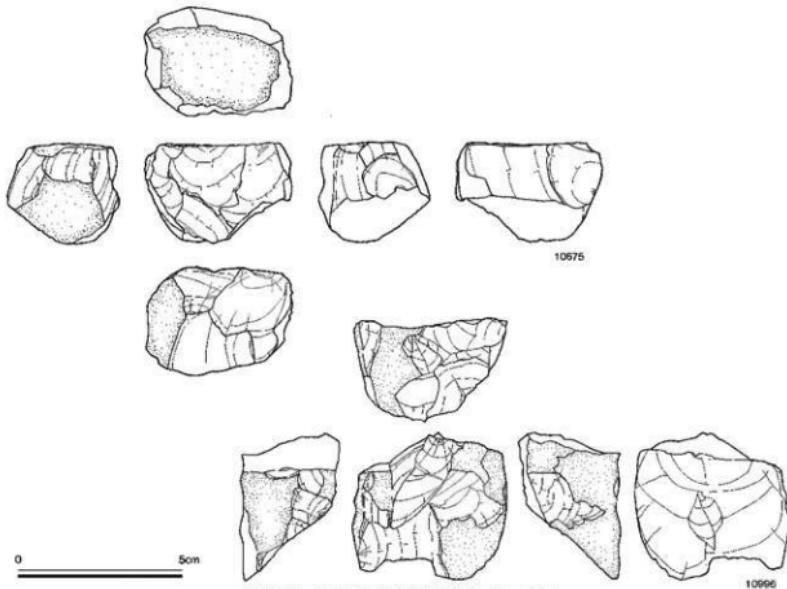
#### 石器プロック25(第107図・第116図)

本文化層で最も南に位置する石器プロックである。周辺から砾が出土しているが、人為的に持ち込まれたものではなく、自然に堆積していた砾と考えられる。出土石器数も5点と少なく、範囲も狭い。石器の器種組成は3点が台形様石器で、1点が剥片である。本プロックは台形様石器の石器プロックである。石材は3点が安山岩で、流紋岩と水晶が1点ずつ出土している。

第116図10504と10901、10900は安山岩製の台形様石器である。これら3点とも当初は二次加工のある剥片などにしていたが、折断による調整があるもの(10504・10901)、微細な調整剥離が加えら



第114図 7層出土石器実測図(17) (S=2/3)



第115図 7層出土石器実測図(18) (S=2/3)

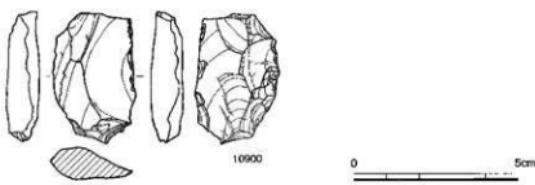
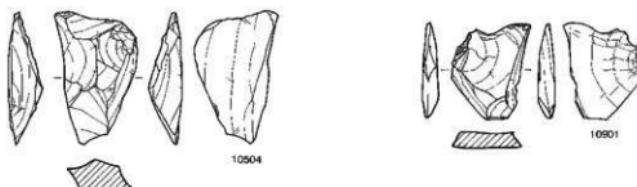
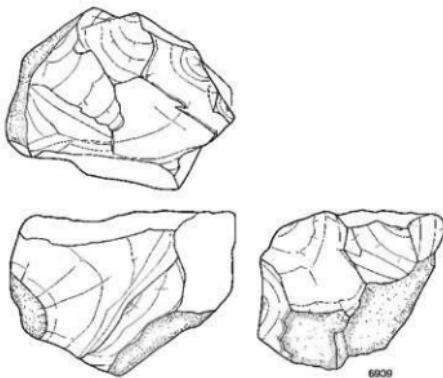
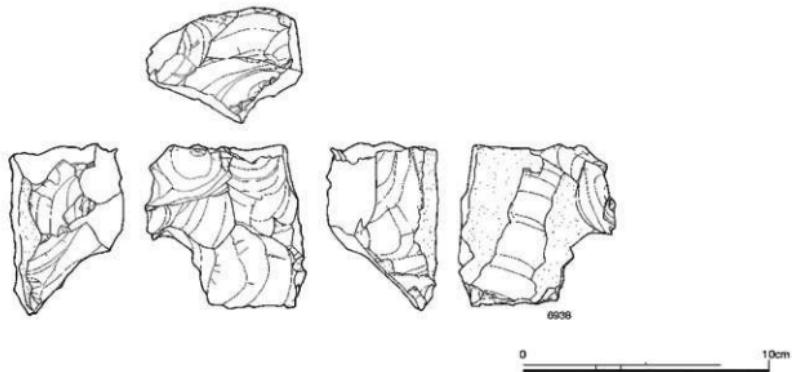
れているもの(10901・10900)として本報告では台形様石器として報告する。なお、10900の刃部は右側縁で、下端の剥離は調整と考えている。

#### (4) 石器の接合と母岩別資料(第117図～第120図)

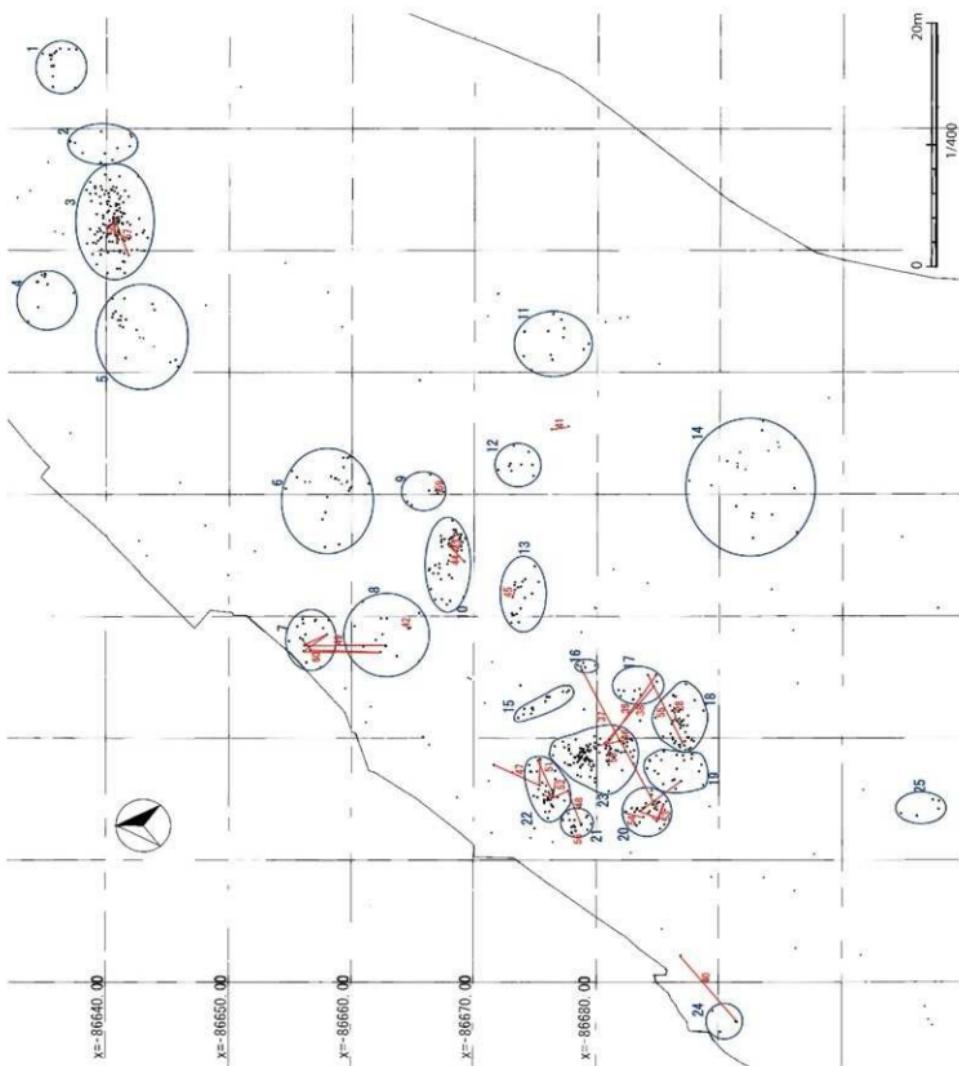
本文化層では25個体73点の接合が確認されている。14個体は石器ブロック内の接合で、それ以外は石器ブロック間あるいは石器ブロック外の接合である。

本文化層の接合資料は2点で一母岩となっているものも多いが、母岩別資料No.53や60のように6点もの石器が接合できた資料もある。本文化層の石器ブロックは北東のブロック群、環状ブロック、環状ブロック周辺のブロックの3つのグループに分けられる。これらの3つのグループ間では接合関係は認められなかった。各グループ毎の接合関係を見ていくと、北東のブロック群は各石器ブロック間での接合関係ではなく、石器ブロック3のみブロック内での接合が確認された。ブロック間での接合が確認できなかったのは、ブロックの石材組成がそれぞれ異なっていることによると考えられる。

環状ブロックでは石器ブロック内外で接合が多数確認されている。全く接合資料が出土しなかったのは石器ブロック15のみである。環状ブロックの各石器ブロックは石英が多くなる点で、石材組成が非常に似ている。石器ブロック17と18、17と23、19と20、21と22との間では隣り合う石器ブロック間の接合関係が認められた。また母岩別資料No.37は環状ブロック中央部の石器ブロック23を挟み、対向する位置に形成された石器ブロック16と20との間で接合している。



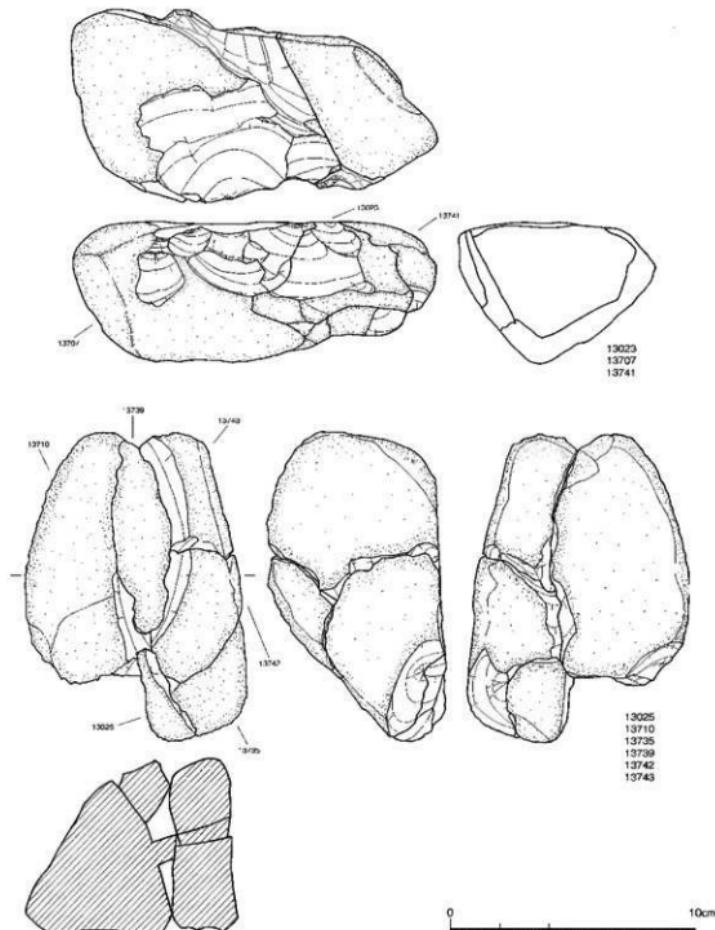
第116図 7層出土石器実測図(19) (S=2/3)



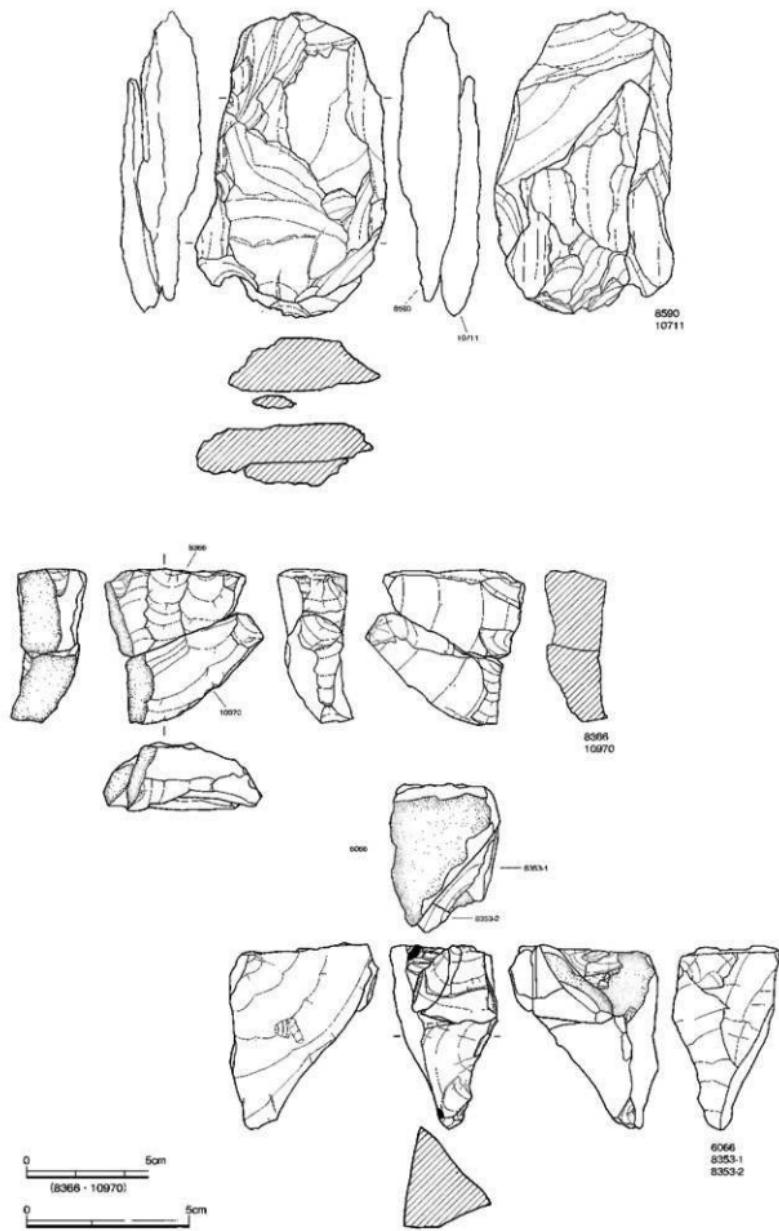
第117図 7層出土石器接合関係図 (S=1/400)

環状ブロック周辺の石器ブロックでは各ブロック内で接合する資料が存在するが、石器ブロックの石材組成が異なっているため、ブロック間接合は少なく、石器ブロック7と8との間で2母岩別資料が認められたのみである。石器ブロック内の接合資料は各ブロックで出土した石器の記述部分で記載したため、以下では、石器ブロック間接合の母岩別資料について述べる。

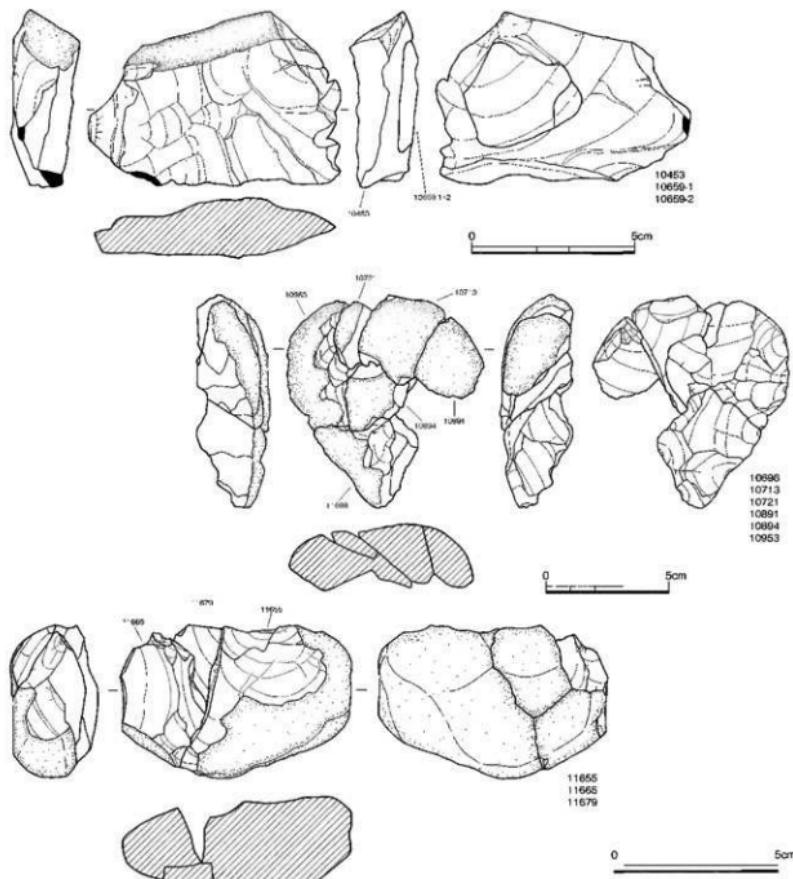
第118図13023+13707+13741は流紋岩の右核に剥片が接合した例である。石器ブロック7と8の接合資料である。13025+13710+13735+13739+13742+13743は6点の石器が接合した例で、接合するとほぼ原石に復元できる。原田遺跡で最多の接合数を持つ資料の一つである。原石を荒削したものである。第119図8590+10711は環状ブロックを形成する石器ブロック16と20で出土した石斧



第118図 7層出土石器実測図(20) (S=2/3)

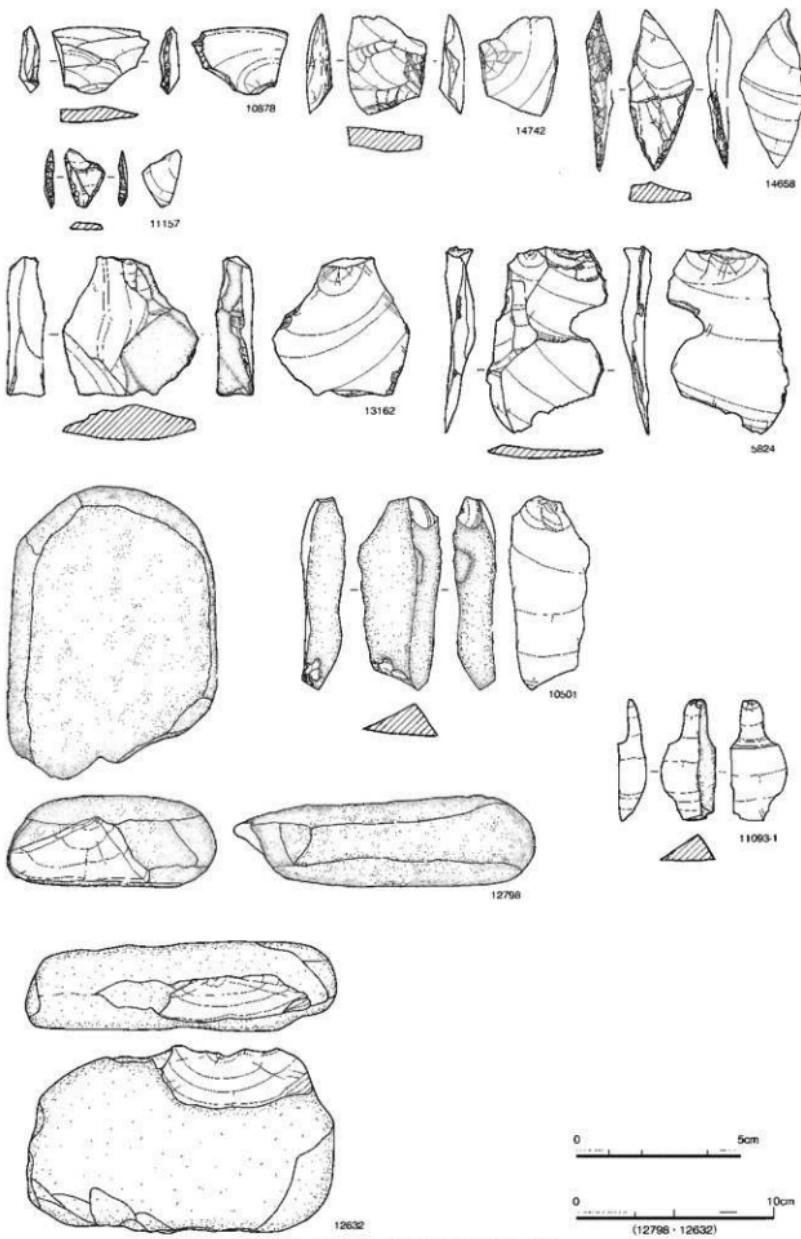


第119図 7層出土石器変測図(21) (S=2/3)

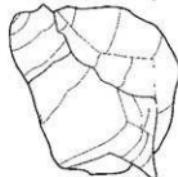
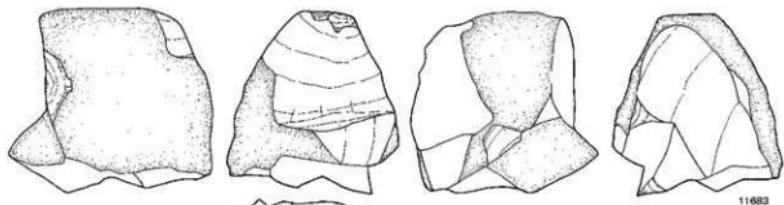


第120図 7層出土石器実測図(22) (S=2/3)

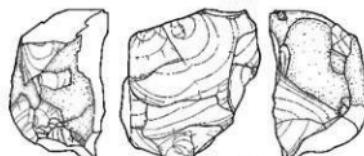
の接合資料である。環状ブロックの中央部を形成する石器ブロック23を飛び越えた接合関係である。石材は片岩としているが、変成岩の一種である。石斧は刃部からの衝撃で10711は剥離されている。10711が剥離後、8590の刃部は再調整され、石斧として再利用されていたものと考えられる。接合により石斧本米の長さと厚さがある程度推定可能である。8366+10970と第120図10698+10713+10721+10891+10953、11655+11665+11679は環状に配置される石器ブロックの内、隣接する石器ブロック間での接合資料である。全て右英である。8366+10970は剥片を分割後、石核としたものである。第120図10698+10713+10721+10891+10944+10953は本遺跡で最多の接合数を持つ資料の一つである。円礫の原石から同様の大きさの剥片を剥離している。第119図6066+8353-1+8353-2と第120図10453+10659-1+10659-2は環状ブロックの環状部を構成する石器ブロック



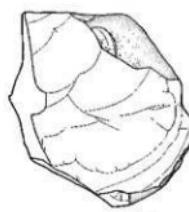
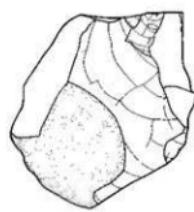
第121図 7層出土石器実測図(23) (S=2/3)



0  
— (11683 · 12899) — 5cm



12899



12932

0  
— 5cm —

第122図 7層出土石器実測図(24) (S=2/3)

ク23と環状部を構成する石器ブロック17の石器が接合する資料である。両者とも流紋岩製である。後者は剥片と大きなバルバースカ一片がブロック間で接合する非常に珍しい例である。バルバースカ一片は長さが3.3cmもある大きなものである。

#### (5) 石器ブロック外出上石器(第121図・第122図)

第121図10878・14742・11157は台形様石器である。それぞれの石材は安山岩、めのう、玉髓である。10878は折断と調整、14742は折断、11157は両側縁の連続した調整により整形されている。14658は安山岩製の二側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片の打面側が刃部となっている。石器ブロック4と5で出土しているナイフ形石器と同じ型式である。10501は玉髓製の二次加工のある剥片である。縱長剥片を素材とし、末端部に二次加工を施している。O8グリッドで単独出土しており、本文化層で最も南で出土した石器である。自然面を残しているが、精美な縱長剥片を素材としている点は、本文化層でも珍しい資料である。11093-1は碧玉の剥片である。打面を上部に固定した剥片である。12798と12632は石核である。剥片は1点あるいは数点しか剥離していないようである。第122図11683は石英の石核である。原石に衝撃が加わり、攝理面で破損したものかもしれない。12899は作業面を固定した玉髓の石核である。上側縁に剥離による打面形成を行い、その打面により剥片を剥離している。

## 第7章 まとめ

### 第1節 自然科学的分析の総括

原田遺跡の発掘調査では、旧石器時代を検討するために、いくつかの課題を設定しその解決のため多くの自然科学的分析を行った。設定した課題は、①年代の特定②遺構の性格③交流の広がり④景観の復元である。分析結果については紙面の都合上、第14章(第2分冊)に掲載することとなつたため、ここでは、旧石器時代に關係した自然科学的分析の簡単な総括を行う。

#### ①年代の特定

今回行った年代測定は、テフラ(火山灰など)の同定や、ルミネッセンス法による年代測定。 $^{14}\text{C}$ 年代測定、黒曜石の水和層による年代測定である。原田遺跡では火山灰や軽石のテフラの堆積状態が良好であり、石器が出土する各文化層の上下層がテフラであったため、文化層の年代を特定するためテフラの同定が重要と考えた。また、歴史・文化財関係のみならず学校教育現場など一般社会にも大きな影響を及ぼした「前期旧石器捏造事件」を踏まえ、遺物そのものの年代測定を探る必要があると考えられることから、テフラ同定以外の分析を行っている。年代測定は、測定結果の年代に多少の幅があるものが多く、複数の分析結果から相互に補完して検討する必要があると考えた。

7区と8区のテフラ分析では、第14章第4節の報告で、下位より「従来三瓶池田テフラと考えられているテフラ層」(8層下部)、成層したテフラ(8層中部)、AT(6層)、三瓶浮布テフラ(4層)が確認された。しかし、8層下部のテフラの屈折率は従来知られている三瓶池田テフラの屈折率より低い結果であり、水和の影響や他のテフラの可能性が指摘されている。

この分析結果により、8層が三瓶池田軽石か否かによっては7層の時期決定に大きな影響を与えることが想定されたため、火山灰考古学研究所の早田勉氏に8層のテフラについて検討を依頼し、第14章第2節に玉稿を賜った。記載内容は、原山遺跡の8層の詳細な層相(Hd-1・Hd-2)と、三瓶山南東方向の露頭(美郷町や飯南町等)において現地調査と分析を行った結果である。ここでは結論として、8層下部(Hd-1)が三瓶池田軽石である可能性が高いことが指摘されている。今回分析を行った三瓶池田テフラの火山ガラスの屈折率も前述で報告された原田遺跡のHd-1のテフラとは若干の違いが見られた。しかし、これまで知られていた三瓶池田テフラより若干低い屈折率をもつことも判明し、露頭において三瓶池田テフラ内に綱状軽石が確認できたため、火山ガラスの屈折率等に幅がありうる点も想定されている。

なお、この露頭調査には町田洋東京都立大学名誉教授にご同行いただき各露頭でご指導いただいている。

第14章第1節では、ルミネッセンス法による年代測定の結果を下岡順直・長友恵人・小畑直也各氏より玉稿を賜った。火山灰などのテフラの年代はこれまで知られている年代が存在するが、三瓶池田テフラは年代測定がなされておらず、原田遺跡では良好に堆積していると考えられたため、他のテフラも合わせて、ルミネッセンス法による年代測定を行った。この測定では、4層上部が $16 \pm 2$ (千年前)、5層が $17 \pm 1$ (千年前)、6層が $27 \pm 3$ (千年前)、7層が $28 \pm 1$ (千年前)、8層上部が

$35 \pm 1$  (千年前), 8層下部が $43 \pm 8$  (千年前)という数値が得られている。これらの年代は層位的にも、以前までのテフラの年代観とも矛盾しない数値である。

$^{14}\text{C}$ 年代測定は旧石器時代の炭化物で数多く実施している。その結果を総合すると、4層は $12960 \pm 60$ yrBP・ $13140 \pm 60$ yrBP・ $13130 \pm 60$ yrBP(包含層), 5層は $25180 \pm 120$ yrBP・ $21010 \pm 110$ yrBP・ $22220 \pm 100$ yrBP(包含層),  $21030 \pm 100$ yrBP(礫群24炭化物),  $19380 \pm 80$ yrBP(礫群48炭化物),  $24550 \pm 100$ yrBP(6層直上), 7層は $29800 \pm 170$ yrBP・ $25230 \pm 110$ yrBP(包含層)であった。以上から、4層の年代はまとまっており、5層と7層は年代にはらつきが存在することが判明した。

今回、黒曜石の水和層測定を実験的に1点行った。5層出土の剥片で、 $8795 \pm 182$ BPを得られている。しかし、この年代値は、他の測定年代と大きく隔たりがある。詳細については第9節の報告を確認していただきたいが、黒曜石の水和層測定はこれまでほとんど実施されておらず、また、個々の石器の埋没している環境による変化が大きいため、この1点のみで年代測定することは不可能である。しかし、石器が5層から出土していることから、他の年代測定の結果と合わせて、石器の大まかな年代を推測し、水和速度を逆算すると、今後、同じ条件で埋没していた黒曜石を分析する意義は高いと言える。今回実験的に行った水和層測定であったが、今後の年代測定に材料として活かしていただければと考えている。

#### ②遺構の性格

原山遺跡の5層では、SK57という土坑が検出されている。この土坑の性格を検討するため全リノ測定、CN分析、粒度分析、花粉分析を行った。詳細は報告を一読願うが、南北断面の土坑底部でリンの高密度分布が認められ、人間を含む動物の存在や土壤微生物「菌根菌」による作用の可能性が指摘されている。リン分析はこれまで数多く行われているが、遺構の内外で分析するものが多くなった。今回の分析は土坑内で立体的に行ったものであり、非常に興味深い分析手法であると考えている。

#### ③交流の広がり

自然科学的な分析より交流関係の検討を行うため、今回は黒曜石と安山岩、碧玉の原産地分析を行った。結果は、黒曜石が45点中、隠岐の島町久見産が22点、同町加茂・津井産が22点、未発見原産地1点であった。安山岩は108点分析したが、冠山飯山産44点、原田1遺物群31点、五色台白峰産12点、金山金山東産6点などで、冠山冠山東産も含まれている。特定できた産地を層毎に見ると、2~4層は飯山産が多く、金山東産、白峰産も含まれている。5層は飯山産と白峰産が多く、冠山東産も存在する。7層は飯山産のみである。産地が不明な試料が今回の分析で多数検出され、原田1遺物群等の名称となっているが、各層とも一定量使用されていることが判明した。この原田1遺物群は斐伊川流域が原産地の可能性も考えられている。また、原田2遺物群は飯山産と似ているため、冠山地域の未発見原産地の安山岩である可能性も推測されている。

分析試料の選択は、石質(色調や硬軟、斑晶の有無等)や風化面の様相(縞状の風化や白色の風化面等)を元に、各文化層で比較できるように、それぞれの様相を持つ石材を各層で選んでいる。したがって、この分析結果そのものが各文化層の黒曜石や安山岩の原産地を示しているわけではないが、黒曜石は久見産と加茂・津井産で各層とも一方への大きなかたよりはないと考えられる。また、

安山岩では各文化層とも飯山産が一定量出土しており、5層で白峰産が増加している。7層は産地が特定できたのは飯山産のみである。

#### ④景観の復元

各文化層で花粉分析や植物珪酸体分析を行った。花粉は検出量が少なく、分析できなかった。これは堆積速度が速かったことに起因するのではないかと考えられている。植物珪酸体分析では各層からミヤコザサ節型とチマキザサ節型が検出されている。9層(無遺物の占土壤層)と7層はミヤコザサが卓越しているが、上層になるに従い、ミヤコザサ節型以外にもチマキザサ節型が徐々に増加する傾向が見られた。ミヤコザサ節型は現在の太平洋側の気候を示唆している。反対にチマキザサ節型は日本海側の気候である。したがって、7層までは冬季は乾燥し、積雪量が少なく、5層とその上層では、冬季の積雪量が増加している傾向が見られた。当時の景観としては、どの文化層においても、旧石器時代の原田遺跡ではミヤコザサやチマキザサなどが繁茂する森林であることが判明した。

### 第2節 2～4層のまとめ

2～4層では、10基の礫群と20ヶ所の石器ブロックが検出された。石器は1,750点も出土しており、原田遺跡で最も多く石器が出土した文化層である。ここでは、本文化層の遺構と遺物について総括し、若干の考察を加える。

#### 石器ブロック

20ヶ所の石器ブロックが確認されているが、第4章でこれらを分布範囲から、大きく5つの分布域にまとめている。各分布域内での接合関係は、第3の石器ブロック58～65の内、59と64、63と65で確認されているが、隣接する石器ブロックでは接合は認められなかった。他の分布域では接合関係が存在しなかった。次に、分布域間での接合であるが、第2と第3で3個体が、第3と第5で1個体接合した。反対に第1や第4は他との接合関係が見られなかった。第1の石器ブロックの石材組成は安山岩が低く、第2から4は安山岩が極めて高い傾向にある。第5の石器ブロック52も安山岩の比率が非常に低いが、第3と接合関係が見られた。したがって、石材組成の違いは接合の可能性が低くはあるものの、接合しないわけではないので、第1とその他の分布域で接合があっても不思議ではない。第1は接合関係も認められず、石材組成も異なっている点から、石器ブロックの形成時期が異なっている可能性も考えられる。第4の石材組成は安山岩が多い点では他の分布域と同様であるが、接合関係は存在しなかった。しかし、石器の分布範囲や、器種組成、石材組成は第2や3と大きく違わない。したがって、同時にではないかもしれないが、ある程度近い時期に石器ブロックが形成されたものと考えられる。

本文化層の接合関係図を見ると、第3の分布域の石器ブロックで頻繁な接合が見られる点が特徴的である。その第3と接合関係にある第2とは同時代性が高いと考えて良いと思っている。

#### 石器ブロックと礫群の関係

本文化層で確認された礫群は、礫群37以外いすれかの石器ブロックの範囲内に形成されているこ

とが明らかとなった。第124図には石器の接合関係と縁群の接合関係を図示している。第3の分布域では縁群も接合関係が多く見られる。このことからも第3の分布域内での同時代性は高く、その分布域と石器ブロックが接合関係にある第2は同時期に形成されたものと考えても良いのではないだろうか。第4は縁群も接合関係が無く、石器と同様である。第4の独立性が縁群からも見られる。

### 石器の器種と石材

第123図の通り、本文化層で出土した石器の石材組成は83%が安山岩である。安山岩の卓越性は本文化層の特徴である。安山岩製石器の器種組成は、どの器種でも最も多くなっているが、スクレイパー出土数は141点と多く、本文化層で出土したスクレイパーの内、92%は安山岩製である。安山岩製のスクレイパー、特に右核転用スクレイパーの存在は本文化層の特筆すべき点と言える。安山岩の器種組成を見ると、剥片が最も多く、チップも多数出土している。右核の多くはスクレイパーに転用されているが、原田遺跡での安山岩製石器の作業工程は、豊富な出土数の剥片や右核の存在から遺跡内で剥片の剥離を行い、ナイフ形石器等を作製していたと考えられる。また、右核の多くはスクレイパーに加工している。安山岩の接合試料を見ると、原石の状態まで接合できたものが無く、右核に剥片が接合するものばかりである。したがって、本遺跡では原石から右核を作り出す工程はほとんどなく、板状の剥片あるいは右核となった状態で、安山岩を遺跡に持ち込み、剥片の剥離を行っていたと考えている。安山岩の原産地分析では、冠山の飯山産が多かった。この石材は硬質で、風化度が低く、色調が黒色に近いのが特徴である。他に、金山の金山東産や五色台の白峰産もあり、本文化層の集団はかなり広い範囲の石材を保有していたことになる。この点からも原石ではなく、剥片あるいは右核の状態で安山岩は持ち込まれたと考えて良いであろう。

他の石材では、黒曜石の剥片の少なさと、凝灰岩の剥片の多さが挙げられる。遠隔地石材である黒曜石は数自体も少なく、器種組成はA類(ナイフ形石器等の道具となる石器、狭義の石器)が多いため、製品そのものを持ち込んだか、剥片を調整する工程が多かったのではないかと考えられる。凝灰岩は剥片が多く、A類が少ない。自然面を持つ大型の右核も出土していることから、近距離にある原石を採取し、遺跡内で原石から剥離を行っていると考えられる。しかし、A類にまで到達するものは少なかったようである。原石の採取場所は自然面の形状が円錐に近いことを考えると、斐伊川と考えるのが自然である。

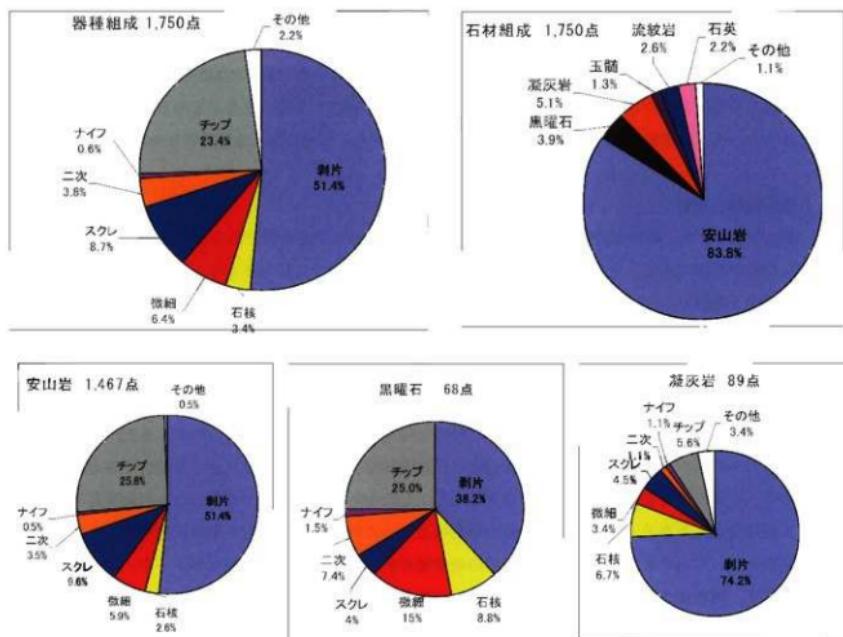
以上から、遠隔地石材である多量の安山岩と少量の黒曜石を持った集団が原田遺跡で石器ブロックや縁群を形成し、補完的に凝灰岩などの在地石材を採取しては剥離作業を行っていたと考えられる。しかし、全てが同時期に行われたものか判断することは不可能である。

### 石器の製作技術

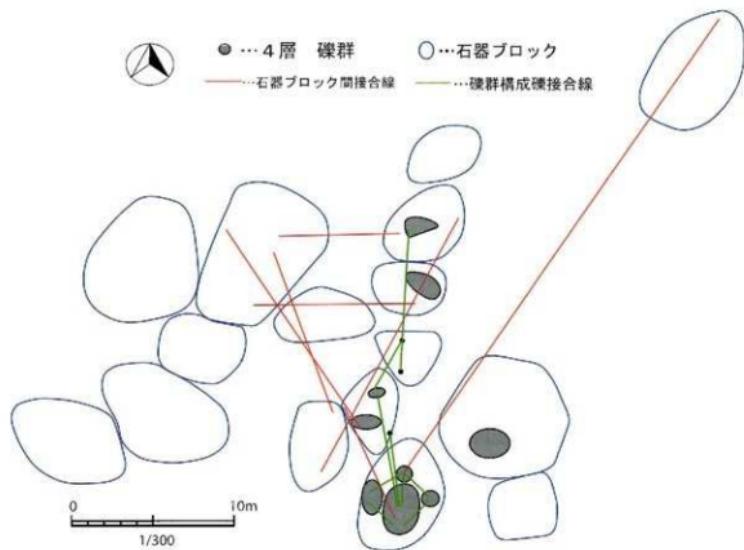
次に、石材毎に石器の製作技術を簡単に整理したい。

本文化層の石器はほとんどが安山岩である。安山岩の右核は板状の剥片が素材となっていることが多い。これは安山岩の石質から板状剥片が多くなっているとも考えられるが、飯山産の安山岩は二上山産や金山産のように必ずしも板状になりやすい石質のものばかりではないようである。したがって、素材となる剥片は意図的に板状に作り出されたものが多いと考えられる。

安山岩での剥片剥離は、打面と作業面を転位しつつ行われている。右核を見ると小さな横長剥片



第123図 2~4層器種組成図・石材組成図



第124図 2~4層接合関係図 (S=1/300)

を剥離している資料が多かった。しかし、石器ブロック67で出土した第38図730・7720・702・は縦長剥片を素材としており、安山岩でも縦長剥片を剥離している例も存在する。第42図10553・10212は安山岩製のナイフ形石器であるが、共に縦長剥片を素材としている。10553は本文化層では見られない長く精緻な二側縁加工のナイフ形石器で、厚みのある縦長剥片を素材としている点や石器ブロック外から出土している点からナイフ形石器となった状態で、搬入された石器であると考えられる。

第23図6976は砂岩あるいは凝灰岩の右核であるが、縦長剥片を剥離していると思われる。石器ブロック52では質の悪い玉髓の周囲部分でスクレイパー等が作られている。流紋岩や玉髓をしているものであるが、これらも縦長剥片を素材としている。打面転位は行われていないようである。碧玉では同図6979が打面と作業面を固定した縦長剥片である。黒曜石は第43図10395が打面と作業面を転位している右核で、第36図は縦長剥片を素材としている。作業面の剥離面は腹面と同じものが多い。作業面の末端と左側縁側の剥離は、剥片剥離を目的としたものではない可能性がある。第25図1411はナイフ形石器であるが、縦長剥片を素材としている。第23図10408は凝灰岩製のナイフ形石器であるが、これも縦長剥片が素材である。

以上のように、本文化層の石器の製作技術は石材によって、ある程度限定されている。

安山岩は打面と作業面を頻繁に転位し小振りな横長剥片を剥離している。黒曜石は縦長剥片が多いが、打面や作業面を転位し、寸詰まりな剥片を剥離している例も見られる。凝灰岩や碧玉、玉髓、流紋岩は縦長剥片が多く打面と作業面を固定しているが、打面と作業面の転位を行っているものも若干存在する。しかし、転位は頻繁に行われていないようである。

## 時 期

ここまで整理した内容から、本文化層の石器群や遺構の時期を考えると、小型の横長剥片素材を用いたナイフ形石器と、打面と作業面を頻繁に転位する剥片剥離作業は、瀬戸内技法による剥片剥離や国府型ナイフ形石器とは技術的に異なるもので、「宮田山型」や「井島I型」と呼ばれていた石器群に近い。これらの小型ナイフ形石器が出土する点と、国府型ナイフ形石器が出土しなかった点、細石刃石器群が存在しない点、浮布降下軽石層より上層である点から、本文化層の時期はナイフ形石器が消滅する直前としておきたい。

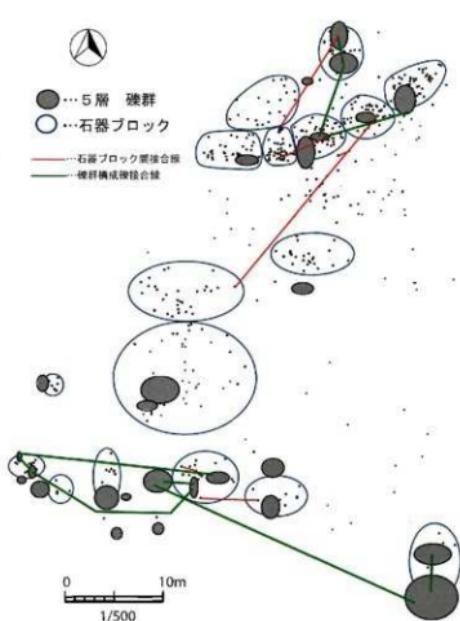
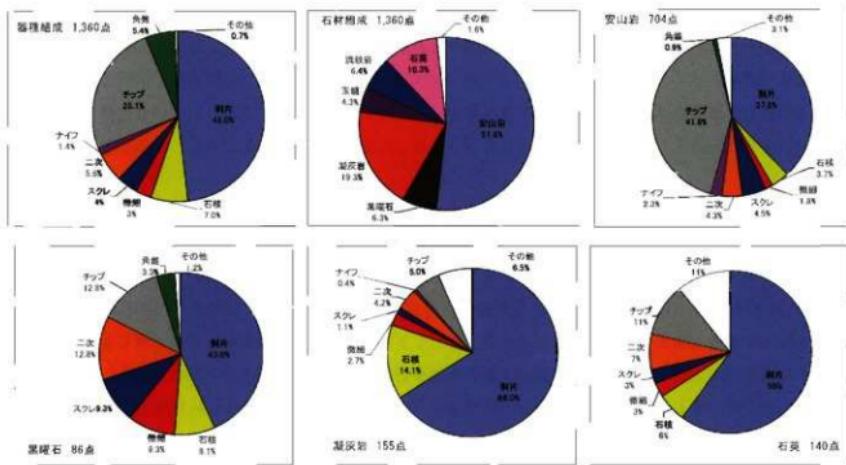
## 第3節 5層のまとめ

5層では、49基の砾群と23ヶ所の石器ブロック、1基の上坑、多数の炭化物ブロックが検出された。石器は1,360点出土している。

### 北ブロックと南ブロック

第5章では、多くの砾群と石器ブロックを「北ブロック」と「南ブロック」の2つの分布域にまとめていた。ここでは、2つのブロックの様相と関係について触れようと思う。

第126図には石器ブロックと砾群の範囲、それぞれの接合関係が示されている。ここからは2つのブロック間では、全く接合関係がないことがわかる。2つのブロック内では石器と砾の接合が多数認められるため、ある程度の同時性は存在すると考えられる。特に南ブロックは砾群の検出面と



石器の出上面は6層直上であることが多く、また礫群の分布が重なっているものがほとんど無い点や、石器が最も多く出土した石器ブロック48も礫群と重複していないことから、南ブロックについては、同時代性は高いと考えている。一方、北ブロック内でも石器や礫の接合が多数認められた。これも同時代性を考える上で重要なと考えている。しかし、北ブロックで検出された礫群の検出面は上下2面あり、また分布にも重なりが見られるため、礫群の形成は2時期以上あると思われる。石器の出土面は、6層直上で多くの石器が出土した南ブロックとは異なり、5層の中位から多くが出土している。

以上から、5層の礫群と石器ブロックの形成は2時期以上に渡って存在すると考えられる。

### 礫群

本文化層では、49基もの礫群が検出されている。前述の通り、本文化層の礫群の形成は最低でも2時期存在するため、ここでは便宜上、2時期に礫群を分けて記述する。

礫群の時期は表9に記載している。5(上)が12基で、5(下)は37基である。二つの構成礫数の平均は50点ほどで全く差はなかった。石材も凝灰岩が50%を、花崗岩が40%を超えていた点は全く同じである。二つに違いが見られるのは、構成礫の平均長が7.0cmと8.6cmである点、破損度が完形の「1」が10%と25%である点、大きく破損している「5」が5%と31%である点が上げられる。

以上から、5(上)の礫群は、大きく構成礫が破損しているものが多く、礫の大きさも小さくなっている。5(下)の礫群は、大きく破損している構成礫が少なく、全く破損していない構成礫が多かった。5(上)と5(下)は時期が異なっているが、礫群の様相も異なっているため、廃棄された当時の礫群の使用段階が違っていたのではないかと考えられる。それぞれの時期の礫群でも異なった廃棄状態の礫群が検出されているとも考えられるが、構成礫の破損度の違いは顕著である。仮に礫群の廃棄状況が礫群の使用時のままであったとするならば、完形礫の多い礫群は加熱した度合い(回数)が少なく礫の破損が進まなかつたとも考えられる。これらの礫群は使用前あるいはわずかな使用回数の礫群である可能性も存在する。反対に、破損度の多い礫群は使用回数が多い礫群であった可能性が高いことになる。しかし、礫の破損度は被熱度合いも関係するが、石材の性質に起因する可能性も考えられる。今回検出された礫群の内、礫の石材が凝灰岩であった場合、完形礫である比率はかなり低い印象を受けている。個々の礫群について詳細に分析できなかつたため、構成礫の破損度と石材の関係は今後の検討課題である。

北ブロックの礫群の内、5(上)の礫群には直径20cmを超える平坦面を持つ大型の礫が存在している。礫群41から45である。この大型の礫は熱効率が極めて悪いと思われ、破損もほとんど見られない。他の破損している小さな礫とは使用目的が異なっていたと思われる。平らな面があり、検出状況もその面を上に向いているものが多く、礫群に付属した石器、たとえば台石のような使用方法であった可能性を考えたい。しかし、使用痕は肉眼では見られなかつた。

礫群16は原田遺跡で唯一、礫が積み上げられた状態で検出された礫群である。土坑の存在も比定できないが、調査では明らかにできなかつた。礫群の性格や使用方法、廃棄状態を検討するうえで、良好の資料と思われる。これも今後の検討課題の一つである。

## SK57

本文化層では土坑が1基確認されている。SK57である。この土坑は4層と5a層に覆われていたため、確実に5層に属する遺構である。

土坑は、推定長径2mほどで、短軸が1.47m、深さは最大で0.73mである。土層の堆積状況は5b層と5c層、6層が交互に堆積している状況であった。堆積は水平方向が基本である。遺構の中からは、石器が11点出土している。石器は10点が黒曜石製で、使用痕のような網かい二次加工が施されている。全て遺構の東側から出土している。遺構の底面で石器が出土することはなかった。

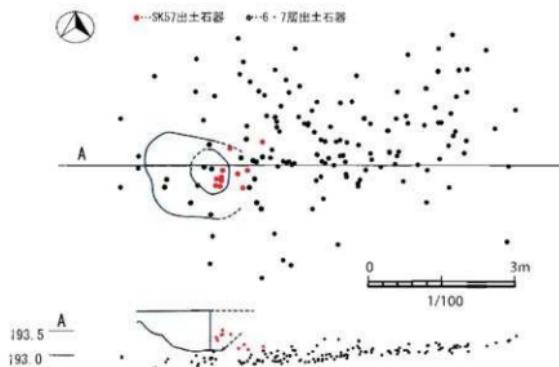
以上の調査結果から、指摘できる点は以下の通りである。

まず、出土した石器であるが、第127図にSK57と出土石器、7層の石器ブロック3出土石器の平面図及び垂直分布図を示している。SK57の発掘調査中は下層の7層から石器が出土すると考えていなかっただため、SK57で出土した石器は遺構に伴うものと考えていた。しかし、遺物整理中に石器の確認をすると、石材と素材の大きさ、二次加工の形状から7層の石器ブロック3の黒曜石製の台形様石器と非常に似ていると思われた。実際、遺構の底面は若干6層を掘り込んでおり、石器ブロック3の石器も6層に一部が浮き上がっていた。第127図の石器の垂直分布図を見ると、石器ブロック3の石器はかなり上方に浮き上がっていることが確認されている。遺構を掘り込んだ時に6層に浮き上がっていた7層の石器も掘り上げてしまい、遺構を埋め戻す時に、掘り上げた土砂と共に埋められたと考えられる。したがって、SK57出土石器はSK57に伴うものではないと考えている。

次に遺構の性格であるが、①墓 ②貯蔵穴 ③落とし穴 ④風倒木痕の4つを想定している。

これらは、旧石器時代の発掘調査で確認された事例のある遺構である。

①墓は、遺構の大きさと遺構を掘り上げた土をそのまま埋め戻していると思われる点から想定している。当初出土した石器が遺構に共伴していると思われたため、出土した石器は埋められた石器と考えていた。しかし、前述の通り、石器は遺構に伴う石器ではないことが明らかであり、①の検討材料とはしなかった。発掘調査の結果だけでは、遺構の性格の判断は難しいと感じられたため、本章第1節でまとめたように自然科学的分析を行っている。この結果によると、遺構の底面近くに



第127図 5層SK57出土石器及び7層出土石器位置図 (S=1/100)

人間を含む動物が存在した可能性もあるという結果が指摘されている。今回の分析結果で遺構の性格が決定できるとは考えておらず、今後、検討していく上で材料の一つとなれば良いと考えている。

②貯蔵穴は、旧石器時代の調査で検出される可能性がある遺構である。しかし、貯蔵されていた物質が遺構内から出土しない限り、貯蔵穴としての認定は困難であると考えられる。貯蔵の対象としては、食糧と生活物資が挙げられる。食糧は堅果類などの植物由来の品と動物の肉など動物由來の品があるが、遺構内に残存している可能性はよほど好条件でなければないであろう。生活物資としては、石器や原石、骨などが挙げられる。SK57からは石器以外出土しておらず、その石器も共伴していないことが判明したため、貯蔵穴の可能性は否定も肯定もできない状況である。

③の落とし穴は、日本列島の旧石器時代の調査で最も性格がわかりやすい遺構である。静岡県を中心に多くの検出数がある。落とし穴は当然、獣が穴に落ちるための設備であるので、ある程度の深さがないと効果がないと思われる。SK57は深さが0.7m程度しかなく、断面も皿状で上方が開いている。落とし穴として使用されたと積極的に考えることはできない。

④は風倒木痕である。風倒木はどの時代であっても検出される跡で、樹木が転倒あるいは傾斜した際にできる痕跡である。樹木が転倒するときに、根を張っている地面を持ち上げるため、穴や空間ができる、それが埋まった状態が土坑のような検出面となる。地山を持ち上げるため、覆土には垂直あるいは傾斜して地山と同じ覆土が観察される例が多い。また、穴の壁面には凹凸ができやすい。SK57の覆土は土坑周囲の堆積土であるが、水平方向への堆積を基本としている点、壁面の凹凸はほとんど確認されなかった点から風倒木痕の可能性は高くないと考えている。

以上4点からSK57の性格を考えると、③と④は可能性が低く、②は検討材料がほとんど無いことから、あえて①墓の可能性を考えたい。しかし、旧石器時代に属する土坑の調査事例は少なく、性格が明らかな事例はほとんど無いのが実態である。したがって、②から④である可能性を否定できる状況でもない。新たな土坑の調査事例の増加を待ちたい。

#### 石器の器種と石材

第125図に本文化層出土石器に関するデータをグラフ化している。本文化層で出土した石器の器種組成は剥片とチップで73%である。2~4層の器種組成ともほとんど変わりがなかった。石材組成は51%が安山岩である。2~4層の石材組成に比べ、安山岩の比率が大きく減少している。反対に他の石材の比率は2~4層より軽並み増加している。の中でも、凝灰岩の比率の変化は5%から19%と大きい。在地石材である凝灰岩が安山岩に統いて多く使われているのが本文化層の特徴である。安山岩の器種組成は剥片とチップが同様に出土しており、本文化層全体の器種組成とは異なっている。剥片の少なさとチップの多さからは、剥片を素材として二次加工を施しているためとも考えられるが、道具となるA類の出土割合も低い。A類は遺跡外へ持ち出されている可能性も考えるべきかもしれない。在地石材と考えられる凝灰岩と石英は剥片が多く出土しており、遺跡内で剥離されたと考えられる。遠隔地石材である黒曜石はA類の比率が高い。完成品として持ち込まれたか、チップも出土している点から遺跡内で作られた可能性がある。

安山岩の原産地分析では、冠山の飯山産が多かった。これは2~4層と同様である。他に五色台の白峰産もあり、本文化層の集団は広範囲に産出する石材を保有していたことになる。

遠隔地石材を含む安山岩は本文化層の中心となる石材であるが、他の石材では、同じく遠隔地右

材である黒曜石は出土数が少なく、A類の比率が高くなっている。在地石材と考えられる凝灰岩と石英の出土数が多いことから、2～4層と同様に、遠隔地石材である多量の安山岩と少量の黒曜石を持った集団が原田遺跡で石器ブロックや礫群を形成し、補完的に凝灰岩や石英などの在地石材を採取しては剥離作業を行っていたと考えられる。しかし、本文化層でも全ての石器が同時期のものか判断することは不可能である。

### 石器の製作技術

石器の製作技術について石材毎に記述する。

本文化層も出土した石器のほとんどは安山岩であった。安山岩の石核は第70図11601+11609+11702や第74図869+3424等のように板状の剥片を素材としているもの多かった。剥片は横長剥片である。しかし、安山岩製のナイフ形石器や角錐状石器の素材となるような厚みのある剥片はほとんど剥離されていない。厚さが薄い小型のナイフ形石器である第76図845や小型の第80図3298の素材は剥離可能であると考えられる。

安山岩では、打面と作業面を転位しつつ横長剥片の剥離が行われているが、2～4層ほどほとんどの資料が頻繁に行ってはいない。第67図14657や第69図11381のように縦長剥片となる物も存在している。ナイフ形石器の素材となる剥片は第72図11356や第74図3531、第76図3429、第80図3297のように、幅広の横長剥片であることが多かった。安山岩製の角錐状石器は、第72図8012や第74図3668、第84図4225のように厚みのある横長剥片を使用しているようである。第67図11795は流紋岩製であるが、縦長剥片である。凝灰岩製の石器は第78図の石器群や第82図11588+13208に代表されるように、縦長剥片が基本である。しかし、第83図のように横長剥片が剥離されている資料も見られる。黒曜石は第85図11365が縦長剥片であるが、同図11367と11374等は横長剥片の剥離が主体の石核である。黒曜石の剥離技術は安山岩に近いように感じられる。角錐状石器で黒曜石製の資料は第67図11631や第72図8009のように厚みのあり幅も広い横長剥片を使用している。

以上のように、本文化層の石器の製作技術は2～4層と同様に、石材によってある程度限定されている。安山岩と黒曜石は打面と作業面を転位し小振りな横長剥片を剥離している資料と、縦長剥片の両方が見られる。凝灰岩や流紋岩は縦長剥片が多い。これらは岡化した石器からの検討であるが、本文化層の石器製作技術を簡単にまとめると以上になる。

### 時期

本文化層は北ブロックと南ブロックに分けられ、北ブロック内で礫群の検出面の相違と南ブロックの礫群の検出面との関係から複数の時期が存在する可能性を指摘した。しかし、出土した石器は垂直分布による時期の区分が不可能であった。したがって、全ての石器が同時期の石器ではないと考えられるが、ここでは出土石器を一括して時期を検討してみたい。

本文化層で特徴的な石器はナイフ形石器と角錐状石器である。ナイフ形石器は北ブロックと南ブロックの両方で出土している。横長剥片を素材とした一側縁加工あるいは二側縁加工のナイフ形石器が多く、素材の剥片は幅広のものが多い。素材となる剥片は2～4層のナイフ形石器より大きくなっている。確実な瀬戸内技法による剥片剥離や国府型ナイフ形石器は確認されていない。しかし、第74図3531は破損しているが、近いものではないかと考えている。角錐状石器も北と南のブロック

で出土している。小型(第67図11631)や、中型(第84図8175)、大型(第72図8012)が存在する。石材は黒曜石と安山岩で、断面形状が台形になる点が特徴である。

角錐状石器と横長剥片素材のナイフ形石器から考えると、岡山県の恩原2遺跡S文化層より古く、ATよりも新しい時期となる。広島県の冠遺跡D地点の第Ⅱ文化層と並行する時期ではないかと考えられる。

## 第4節 7層のまとめ

7層では、1基の礫群と9ヶ所の石器ブロックからなる環状ブロック1ヶ所、16ヶ所の石器ブロック、多数の炭化物ブロックが検出されている。出土石器数は867点である。

### 環状ブロック

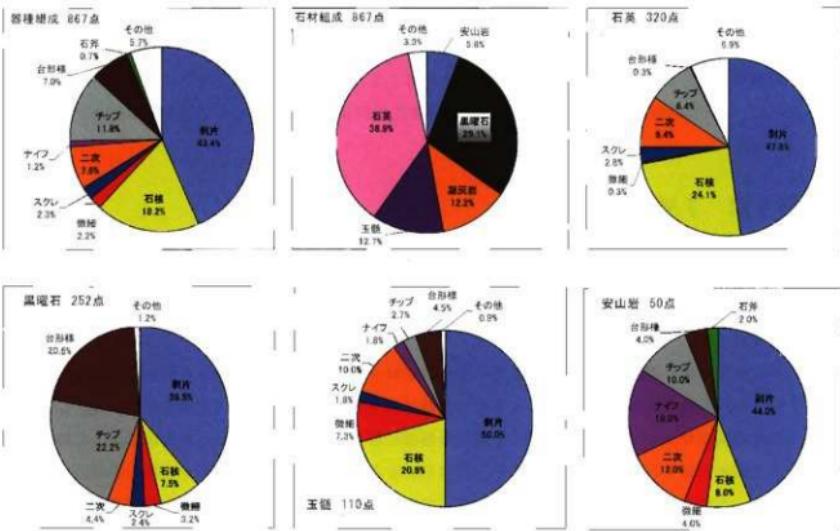
本文化層では、環状ブロックと考えられる石器ブロックの集中地点が確認されている。環状にめぐる8つの石器ブロック(環状部)と、中央の石器ブロック1ヶ所(中央部)で形成されている。この9つの石器ブロックで出土した主要な石器は台形様石器と石斧、砥石である。中央部である石器ブロック23から最も石器が出土している。石材は石英を主体としており、黒曜石や流紋岩が用いられている。どの石器ブロックでも同様の石材組成であった。石英は本文化層で出土した数の79%を占めている。接合関係は、環状部内に隣り合う石器ブロック間や環状部と中央部との接合、中央部を挟み対向する環状部の石器ブロックでの接合が確認されている。中央部を挟む接合は石斧である。環状部の最大径は約16mである。環状ブロックとしては小型である。石器の垂直分布図は出土高に幅があるが、上方で出土しているのは石英のチップや剥片などの小型品で、垂直分布図の下方は石核や砥石などの大型品であった。したがって、大型品の垂直分布は原位置に近いと考えられる。

石英という本文化層でも特殊な石材を主体とした石器ブロックが環状にめぐり、さらに中央に石器ブロックを形成している点、石斧を含む接合関係が内部で認められる点、主要石器が台形様石器や石斧、砥石である点から、この9つの石器ブロックは環状ブロックと考えられる。

### 石器ブロック

ここでは、石器ブロックで特徴的な様相を示しているものを選び、記述する。

石器ブロック3は黒曜石製の台形様石器を主体とするブロックである。小さな貝殻状の剥片を素材とし、縁辺に微細な調整を連続して施している。素材となる剥片を剥離した石核も出土しているため、ここで石核からの剥片剥離作業、剥片の台形様石器への調整も行っている。石器ブロック4と5は安山岩製のナイフ形石器が主体の石器ブロックである。縱長剥片を素材とし二次加工を二通りに施している。素材の打面は残っていない。ブロック内からは同質の安山岩の剥片は出土するが、石核やチップの出土数が少なく、全て搬入品であると考えられる。石器ブロック2と10、13は玉髓が主体の石器ブロックである。石器ブロック14は局部磨製石斧と黒曜石製の台形様石器を主体とする石器ブロックである。局部磨製石斧は1点出土しており、刃部を研磨している。台形様石器は石器ブロック3のものと同じ黒曜石製であるが、素材となる剥片が第104図10885や11062のようにより大きい資料が出土している。また若干小さな8357や計4090も含まれているが、石器ブロック3の小さな貝殻状の剥片を素材とした台形様石器とは同じ器種でも全く異なる形態である。石器ブロッ



第128図 7層器種組成図・石材組成図

ク25は安山岩製の台形様石器が主体の石器ブロックである。測片を折断して微細な調整をしている。

以上のように、本文化層の石器ブロックは器種と石材の組成にかたよりが見られるという特徴が存在している。この点は前述の2~4層や5層より顕著であると言える。

### 砥 石

本文化層で特徴的な石器の一つに砥石が挙げられる。今回の報告では研磨面を持つ石器のほとんどを砥石としている。したがって、磨石の可能性もある第98図13078も砥石としている。第108図11160は花崗岩製の砥石である。環状ブロック内の石器ブロック17から出土している。側面と底面は磨石としての使用痕の可能性がある。上面の研磨面中央部には凹面になる研磨面が存在する。第110図11286の砥石にも上面に凹面の研磨面が数条認められる。石器ブロック14で出土している。この凹面の研磨面は磨石としての使用では形成されにくくと考えられ、また、砥石の大きさが手で持つには大きすぎると思われることから、砥石を置いた状態で何かを研磨した時に磨滅した面であると考えられる。本文化層で出土した石器の中には局部磨製石斧が存在している。局部磨製石斧に研磨を施すための砥石であるとするのが自然である。また、石器ブロック14と環状ブロック内で出土した台形様石器は同じ黒曜石製であり、大きさも同程度である。環状ブロックのみ石斧が出土する点からも石器ブロック14と環状ブロックは同時代性が強く、何らかの関係が存在していたと考えられる。

## 石器の製作技術

石器の製作技術については石材毎に記述する。

本文化層も最も多く出土した石材は石英である。主に環状ブロックで出土している。自然面を大きく残す石核も出土しているため、原石から剥離が行われている。石核の剥離面からは、打面と作業面を転位し剥片を剥離している。剥離された剥片は石英という石材の性質により、意図した形状にならない可能性があるが、不定形の剥片が多くなっている。次に多い黒曜石は、寸詰まりな小さな貝殻状の剥片を剥離している。これも打面と作業面を転位している。一部の石核に、石核の素材となる剥片の腹面(内面)を、目的とする剥片の背面とするために剥離場所を設定されたと思われる剥離面が存在する。個々で剥離された剥片は腹面と背面が凸面となる。石器ブロック3ではこの剥片を素材とした台形様石器も出土している。

玉髓は打面を固定するものと打面と作業面を転位する物が存在する。剥離された剥片は寸詰まりあるいは縦長剥片となっている。安山岩は石器ブロック5と6が縦長剥片で、打面は固定されていない。石器ブロック25は打面を転位して縦長剥片を剥離している。

## 時期

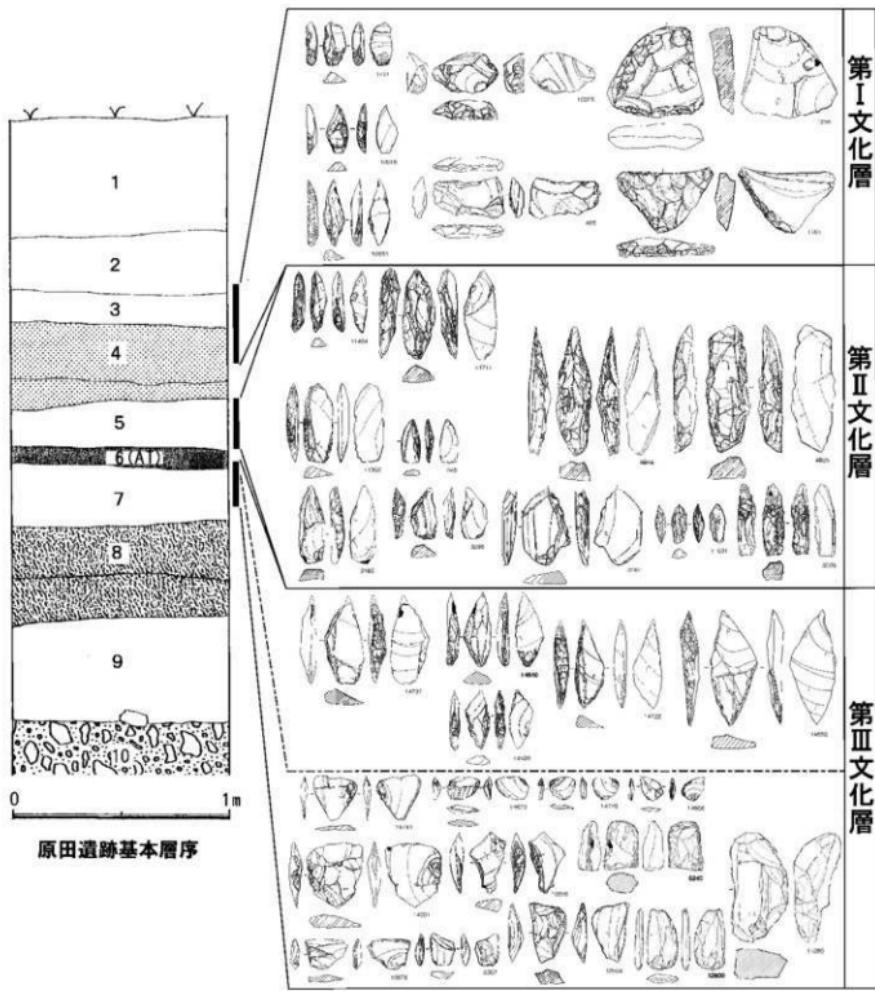
本文化層で特徴的な石器は台形様石器とナイフ形石器、局部磨製石斧、石斧、砥石である。このうち、ナイフ形石器は二側縁加工である。出上面は6層底部から7層上面で、本文化層出土石器の中で新しい時期となる。台形様石器は石器ブロック3と、環状ブロックとその周辺から出土する2つに分けられる。前者は黒曜石で、後者は黒曜石と安山岩である。後者は環状ブロックで砥石と石斧、石器ブロック14で局部磨製石斧と共に出土している。環状ブロックで出土した砥石や大型の砾の出土面は7層中位にあたり、本文化層でも古い時期である。

したがって、本文化層には安山岩製のナイフ形石器が主体で疊群を形成している時期(7層上)と、環状ブロックと台形様石器、局部磨製石斧、石斧、砥石で形成される時期(7層中)の2時期に分けられる。石器ブロック3の台形様石器は数点が6層に浮き上がっていたが、垂直分布図を見るとナイフ形石器より若干低い位置で出土している。今回の報告では環状ブロックや局部磨製石斧に伴う台形様石器と同時期として考えている。

安山岩製のナイフ形石器と技術的に類似している石器は、岡山県)宍谷遺跡や兵庫県板井寺ヶ谷遺跡から出土している。宍谷遺跡では縦長剥片素材で打面を除去したナイフ形石器が出土している。石材は凝灰岩である。板井寺ヶ谷遺跡では安山岩製の縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器が出土している。これらと同時期の石器群と考えられる。

台形様石器と局部磨製石斧、砥石の3種類が備って出土した遺跡は中四国地方では存在していない。しかし、砥石は出土していないが類似する台形様石器と局部磨製石斧が出土し、ナイフ形石器が主体とならない遺跡が存在している。広島県鶴の巣遺跡や愛媛県東峰遺跡第4地点、兵庫県七日市遺跡第II文化層である。七日市遺跡では小型の台形様石器も出土している。本文化層の環状ブロックと台形様石器、局部磨製石斧、砥石はこれらの遺跡と同時期にあたると考えている。

原山遺跡での旧石器時代を対象とした発掘調査は、本県において初めて行われた本格的な発掘調査であった。これまで島根県では原位置を保った旧石器が出土した遺跡の調査は数遺跡にとどま



第129図 原田遺跡出土石器編年表

り、多くは縄文時代以降の包含層などから旧石器が出土している状況であった。今回の発掘調査で島根県の旧石器時代の様相が、一地域ではあるが、明らかになったことは大変貴重であり、重要な調査であったといえる。特に複数確認された火山灰層や軽石層を各地の発掘調査担当者で共通認識としていくことは、旧石器時代を対象とした発掘調査事例の増加に重要である。

発掘調査と報告書作成を担当した調査員は、これほど大規模な旧石器時代の発掘調査を行った経験はなく、全てが初めてで試行錯誤の連続であった。調査方針の変更などはしばしばで、調査員や調査補助員、作業員の皆様には多大なご迷惑をおかけしたと思っている。共に調査を行った同僚の調査員には日頃から相談に乗っていただき、また不慣れな作業であるにもかかわらず、陰日向なく支えていただいた。ここにお礼申し上げる。

この度の発掘調査と報告書作成では、数多くの調査指導の先生方に遠方までお越しいただいた。的確で有意義な指導内容が全て反映できたとは言えず、調査員の知識や技量のなさを痛感している。ここにおわび申し上げる。

最後に、長期間にわたる調査にご協力いただいた地元の方々にお礼申し上げて結びとしたい。

#### 引用・参考文献

- 伊藤徳広2004「中・四国地方西部」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器談話会  
伊藤徳広2005「奥出雲町原田遺跡の発掘調査」『島根県における旧石器文化の様相』第22回中・四国旧石器談話会実行委員会  
伊藤徳広2005「島根県の旧石器文化の様相」『島根県における旧石器文化の様相』第22回中・四国旧石器談話会実行委員会  
伊藤徳広2003「島根県出土の旧石器時代の石器について」『古代文化研究』11 島根県古代文化センター  
福田孝司1986「岡山県恩原遺跡の旧石器時代石器群」『日本考古学協会第52回総会研究発表要旨』  
福田孝司1986「恩原遺跡」『岡山県史』18巻 考古資料  
福田孝司1986「中国地方旧石器文化の諸問題」『岡山大学文学部紀要』7  
福田孝司1988「恩原遺跡－旧石器人の生活跡をさぐる」恩原遺跡発掘調査団・上齋原村教育委員会  
福田孝司1989「岡山県恩原遺跡八T直下層の石組炉と砂礫堆」『日本考古学協会第55回総会研究発表要旨』  
福田孝司・恩原遺跡発掘調査会1989「岡山県恩原遺跡の旧石器時代炉跡」「考古学研究」第36巻第2号  
福田孝司1989「日本海沿岸地域の旧石器文化」『日本第四紀学会講演会要旨集』19  
福田孝司1990「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究』29巻3号  
福田孝司・上野琢磨1993「鳥取県岡山町野津第三遺跡の石器群」『岡山大学文学部紀要』19  
福田孝司2001「恩原の旧石器文化」『上齋原村史 通史編』  
福田孝司・井村行人・西田和浩2002「恩原1遺跡S文化層の諸問題」『中国山地東部の旧石器文化』第19回中・四国旧石器談話会実行委員会  
静岡市教育委員会1994「勾坂中遺跡群発掘調査報告書」  
静岡市教育委員会1996「勾坂中遺跡発掘調査報告書」II  
氏家敏之2002「瀬戸内系石器群をもつ遺跡と石材原产地」『中国山地東部の旧石器文化』第19回中・四国旧石器談話会実行委員会  
徳島県埋蔵文化財調査センター2002「埋蔵文化財発掘調査報告書」第98集 徳島県埋蔵文化財調査センター  
小野秀幸2004「瀬戸内沿岸」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器談話会  
鹿児島県立埋蔵文化財センター2008「[口山尾中A・B遺跡」  
鎌木義昌・小林博昭1986「戸谷遺跡」『岡山県史』18巻 考古資料  
鎌木義昌・小林博昭1986「牧野遺跡第5地点」日本考古学年報37  
鎌木義昌・小林博昭1987「岡山県北部の火山灰と石器群」『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』  
河瀬正利1987「西中国地方の旧石器時代遺跡と火山灰」「火山灰と考古学をめぐる諸問題」埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会  
柏川一徳2004「瀬戸内と近畿」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器談話会

- 久保弘幸・藤田淳・山口卓也1987『兵庫県における最近の旧石器時代遺跡調査の動向』『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』
- 小鶴善吾2004『中岡山地東部』『中・西岡地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・西岡旧石器談話会
- 小林博昭1987『森山原の火山灰と旧石器』『火山灰と考古学をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会
- 三枝健二1982『地宗寺遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会・御広島県埋蔵文化財調査センター
- 三枝健二1992『道後山採集の旧石器資料』『芸備』21集
- 佐藤宏之1988『台形様石器研究序論』『考古学雑誌』第73巻第3号 日本考古学会
- 佐野市教育委員会2004『上林遺跡』
- 下澤公明1996『中国横断道建設に伴う発掘調査』岡山県教育委員会
- 白石 純1988『岡山県真庭郡八束村笠置遺跡第2地点採集の旧石器』『岡山理科大学森山研究所研究報告』14
- 白石 純1990『岡山県真庭郡八束村笠置遺跡第3地点および東遺跡採集の旧石器(追加資料)』『岡山理科大学森山研究所研究報告』16
- 鈴木忠司2001『岩宿時代のムラ』『地質と調査』第3号
- 鈴木忠司・竹内直文・螺群調査実験グループ2002『石蒸し調査実験記録(2) 螺加熱の諸方法をめぐって』『京都文化博物館研究紀要 朱雀』14 京都文化博物館
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『下原遺跡II』
- 鳥取県教育委員会2001『出雲地方における玉髓・瑪瑙製石器の研究』
- 妹尾周三1989『冠遺跡群D地点の調査』助広島県埋蔵文化財調査センター
- 竹廣文明2003『サスカイトと先史社会』
- 竹廣文明2004『山陰・中國山地』『中・西岡地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・西岡旧石器談話会
- 竹廣文明・丹羽野裕1994『後期旧石器時代の中・西岡地方における地域性』『考古学ジャーナル』No.370
- 多川 仁2003『西南四国の大頭器』『紀要愛媛県埋蔵文化財調査センター』
- 梅庄遺跡群研究会1986『梅庄遺跡群の研究』芸北町教育委員会
- 津村宏臣2002『恩原1号遺跡M1文化層の様相』『中国山地東部の旧石器文化』第19回中・西岡旧石器談話会実行委員会
- 長野県埋蔵文化財センター2000『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』15 日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大半B遺跡
- 奈良県立橿原考古学研究所2006『馬見二ノ谷遺跡』
- 丹羽野 裕2004『山陰・中國山地』『中・西岡地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・西岡旧石器談話会
- 根鈴輝雄1998『山陰の大頭器』『考古学ジャーナル』435
- 根鈴輝雄2004『大頭器・有舌尖頭器の様相』『中・西岡地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・西岡旧石器談話会
- 岡山県教育委員会1979『野原遺跡群早風A地点』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』32
- 広島県教育委員会1980『下本谷遺跡発掘調査概報』
- 広島県教育委員会1981『下本谷遺跡第2次発掘調査概報』
- 広島県教育委員会1982『下本谷遺跡第3次発掘調査概報』
- 広島県教育委員会1983『下本谷遺跡第4次発掘調査概報』
- 広島県教育委員会・助広島県埋蔵文化財センター1982『地宗寺遺跡発掘調査報告 - 国道261号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』
- 助広島県埋蔵文化財センター1989『冠遺跡群D地点の調査』
- 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室2004『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』II
- 広島大学埋蔵文化財調査室2007『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』IV
- 兵庫県揖保郡御津町教育委員会1995『鏡岩南山遺跡』I
- 兵庫県教育委員会2004『七日市遺跡』III
- 平安博物館1985『静岡県豊田市広野北遺跡発掘調査報告書』
- 京都文化博物館・鈴木忠司1994『匂坂中遺跡群発掘調査報告書』
- 藤野次史1987『中国地方西部におけるナイフ形石器文化の様相』『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』
- 藤野次史1992『広島県冠遺跡D地点第2次調査の概要』『広島大学文学部内海文化研究紀要』第21号 広島大学文学部内海文化研究室
- 藤野次史1994『遠山安山岩原産地』『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』
- 藤野次史1997『中国地方西部における石器群の様相と年代』『冠遺跡群』Ⅷ 広島県教育委員会
- 藤野次史2000『中国地方西部における旧石器時代石器利用石材に関する一考察』『九州旧石器』4 九州旧石器文化

## 研究会

- 藤野次史2001「島根県横道遺跡の発掘調査」『石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究』
- 藤野次史2001「中国地方西部における黒曜石製石器」『石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究』
- 藤野次史2001「中・四国地方におけるナイフ形石器文化期の測定基材石核の様相」『旧石器考古学』61
- 藤野次史2004「後期旧石器時代前半期石器群と地域性の成立」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器談話会
- 藤野次史2006「中・四国地方、近畿地方の地域編年」「旧石器時代の地域編年の研究」同成社
- 藤好史郎・森下英治・小野秀幸2000「備讃瀬戸地方におけるナイフ形石器文化後半期研究の現状と課題」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』
- 保坂康夫1992「『縄部』は何を語るか」『考古学ジャーナル』No.351
- 保坂康夫1993「縄群構成要素の割れ(破断)に関する実験的研究」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集』潮見浩先生退官記念事業会編
- 保坂康夫2004「縄群平面分布の実験研究」『考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念事業会編
- 塙川 純1985「小林河原遺跡採集の台形様石器」岡山理科大学森山研究所研究報告 11
- 光石鴎12005「本州西半部における縄文時代草創期の様相」
- 光石鴎・岡田憲一・岡部剛士2005上「黒岩岩陰遺跡とその出土遺物についての覚書」『古代文化』57巻11号御古代学会
- 協会
- 湯村 功1992「鳥取県内の旧石器時代・縄文時代草創期資料について」『旧石器考古学』44
- 山口卓也1991「板井寺ヶ谷遺跡」兵庫県教育委員会
- 山下秀樹1988「日本先土器時代遺跡における受熱石器の分布」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』1 京都文化博物館
- 山下秀樹1990「ナイフ形石器文化後半期の遺跡の規模」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』3 京都文化博物館
- 山本 誠1996「中国山地のナイフ形石器文化と石器石材」恩原2遺跡 恩原遺跡発掘調査団
- 山本 誠2001「旧石器時代石の調査事例－春日町七日市遺跡の調査から－」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号
- 嵩科哲男2001「中国地方西部出土の黒曜石製旧石器の原材料分析」「石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究」

表14 旧石器観察表

番号	No.	層位	遺構	種類	計測値	計測値(単位:cm)			石材	備考
						長さ	幅さ	重さ(g)		
23	10408	54	4 ブロウ249	ナイフ	2875	3.6	1.7	0.9	3.70	麻尾皮製
23	10423	54	4 ブロウ251	ナイフ	2689	3.0	1.8	0.7	4.20	安山岩
23	6979	54	4 ブロウ251	刮片	3975	3.3	1.8	1.0	2.90	碧玉
23	10433	54	4 ブロウ251	スクレ	2699	3.6	4.0	1.4	23.80	湖尻岩
23	6976	54	4 ブロウ251	石核	3972	4.2	3.2	2.4	43.50	砂岩
23	6946	54	2 ブロウ252	無縫	1569	3.3	2.3	0.9	5.80	波紋岩
23	6945	54	3 ブロウ252	スクレ	1568	8.8	3.2	2.4	40.50	安山岩
23	10486 / 10490	54	3 ブロウ252	骨端+削片	2751 / 2755	7.5	2.7	1.0	10.60	玉髓
23	10487	54	3 ブロウ252	スクレ	2752	7.3	3.6	2.4	66.60	玉髓
25	1411	54	4 ブロウ253	ナイフ	917	3.1	1.6	0.8	3.50	海藻石
25	349	54	3 ブロウ253	ナイフ	11	4.1	2.3	1.0	8.10	安山岩
25	495	54	3 ブロウ253	スクレ	56	4.6	2.3	0.7	5.70	麻尾石
25	1252	54	4 ブロウ253	スクレ	748	3.3	3.1	0.8	10.70	安山岩
25	1255	54	4 ブロウ253	スクレ	753	6.1	6.4	1.8	7.30	麻尾石
25	597	54	3 ブロウ254	スクレ	222	3.7	2.5	0.8	9.60	安山岩
25	627 / 626	54	3 ブロウ254	刮片+削片	244 / 378	2.6	3.7	0.6	8.70	安山岩
25	695 / 7517	54	4 ブロウ254	骨端+削片	495 / 1996	2.9	3.9	1.3	15.70	安山岩
25	340	54	4 ブロウ258	スクレ	1	8.6	8.4	2.2	[91.78]	安山岩
26	436	55	4 ブロウ255	スクレ	69	4.3	3.1	1.4	14.60	安山岩
26	1203	55	4 ブロウ255	スクレ	701	2.2	3.9	1.0	9.30	安山岩
26	600	55	3 ブロウ255	スクレ	224	4.6	2.9	1.6	22.40	安山岩
26	553	55	3 ブロウ255	スクレ	174	5.5	2.6	0.7	7.30	安山岩
26	380	55	3 ブロウ255	スクレ	34	2.9	3.6	1.2	14.60	安山岩
26	7942	55	4 ブロウ255	石核	2090	4.1	3.0	1.4	10.97	麻尾石
26	1261	56	4 ブロウ255	スクレ	758	4.3	2.8	1.7	18.50	安山岩
27	446	56	3 ブロウ258	スクレ	77	4.7	3.0	0.7	12.10	安山岩
27	445	56	3 ブロウ258	スクレ	76	4.6	3.5	1.4	23.30	安山岩
27	352	56	3 ブロウ259	石核	14	3.5	2.7	0.5	5.20	安山岩
27	1283	56	4 ブロウ259	スクレ	779	6.6	4.4	1.6	44.30	安山岩
27	507	56	3 ブロウ259	スクレ	127	3.3	5.5	1.3	24.70	安山岩
27	369	56	4 ブロウ259	スクレ	28	4.0	5.5	1.4	22.60	安山岩
27	374	56	4 ブロウ259	スクレ	32	4.3	3.5	1.1	19.70	安山岩
28	1391	56	4 ブロウ256	スクレ	895	4.4	3.4	1.8	28.80	安山岩
28	439	56	3 ブロウ256	石核	71	3.5	2.7	2.0	25.50	麻尾石
28	485	56	3 ブロウ256	石核	106	2.9	4.9	1.0	12.60	安山岩
28	1389	56	4 ブロウ256	石核	893	2.3	4.1	3.0	29.42	安山岩
28	418	56	4 ブロウ257	石核	56	3.3	2.7	2.3	19.30	安山岩
28	394	56	3 ブロウ257	スクレ	45	4.3	4.0	0.8	15.20	安山岩
30	10148	57	4 ブロウ258	スクレ	2551	5.9	2.9	0.9	19.80	安山岩
30	10033	57	4 ブロウ259	スクレ	2429	5.4	2.5	1.1	10.00	安山岩
30	10025	57	4 ブロウ259	スクレ	2420	2.8	4.5	1.4	18.20	安山岩
30	10141	57	4 ブロウ259	ノッチ	2543	2.3	2.0	0.8	5.80	安山岩
30	10031-1 / 10116 / 10156	57	4 ブロウ259	剥片+骨端+剥片	2426 / 2517 / 2559	4.4	6.9	1.4	29.90	安山岩
31	10050	58	4 ブロウ260	スクレ	2446	4.4	2.5	0.8	8.10	安山岩
31	10495	58	4 ブロウ260	スクレ	2780	2.9	4.9	1.0	19.10	安山岩
31	10072	58	4 ブロウ260	スクレ	2469	5.3	3.5	1.4	28.30	安山岩
31	8134	58	4 ブロウ260	石核	2162	4.7	4.6	1.5	38.50	麻尾石
31	10100 / 10101	58	4 ブロウ260	剥片+削片	2500 / 2501	2.65	5.45	0.95	14.10	安山岩
32	10085 / 10086	59	4 ブロウ260	石核+剥片	2484 / 2485	6.1	6.8	2.1	88.60	安山岩
32	10096 / 10097	59	4 ブロウ260	骨端+剥片	2496 / 2497	4.2	4.6	2.0	35.80	安山岩
32	1004	59	4 ブロウ261	スクレ	514	4.1	3.2	0.6	8.53	安山岩
32	9374	59	4 ブロウ261	スクレ	2365	3.4	3.7	1.6	20.30	安山岩
34	1193	59	4 ブロウ261	スクレ	1065	3.0	3.2	1.2	13.90	麻尾石
34	8825	59	4 ブロウ261	石核	2159	6.9	5.5	1.0	72.40	麻尾石
35	1156	59	4 ブロウ264	スクレ	651	1.7	2.3	0.6	4.60	安山岩
35	1109	59	4 ブロウ264	スクレ	604	4.4	1.9	0.8	6.20	安山岩
35	1155	59	4 ブロウ264	スクレ	650	7.6	3.4	0.9	21.00	安山岩
35	7868	59	4 ブロウ264	スクレ	1990	5.2	4.1	1.0	20.60	安山岩
35	1300	59	4 ブロウ264	スクレ	788	5.7	4.2	1.2	24.12	安山岩
35	7285	59	4 ブロウ264	石核	1820	3.6	5.6	1.6	32.89	安山岩
35	1161	60	4 ブロウ264	スクレ	656	6.6	4.5	1.4	29.20	安山岩
35	7384	59	4 ブロウ264	石核	1819	3.2	5.4	1.4	25.70	安山岩
36	1101	60	4 ブロウ265	骨端	597	4.1	3.8	0.8	8.90	安山岩
36	7404	60	4 ブロウ265	骨端	1828	4.1	3.3	0.6	6.67	麻尾石
36	758	60	3 ブロウ266	スクレ	358	2.9	3.7	0.6	7.20	安山岩
36	7423	60	4 ブロウ266	スクレ	1850	2.4	1.9	1.2	4.10	麻尾石
36	955	60	4 ブロウ265	スクレ	480	5.7	6.4	1.5	64.60	安山岩
36	7863	60	4 ブロウ266	スクレ	2063	3.3	3.9	0.9	10.20	安山岩
36	7879	60	4 ブロウ266	スクレ	2054	5.7	3.0	0.8	12.50	安山岩
36	7323	60	4 ブロウ266	スクレ	1773	5.9	3.6	1.8	40.80	安山岩
38	7240	61	4 ブロウ266	石核	1707	7.0	4.8	3.5	109.00	砂岩
38	7341	62	4 ブロウ266	スクレ	1787	3.1	4.1	0.8	14.67	安山岩
38	750 / 925 / 926 / 7193 / 7195	61	3 / 4 ブロウ267	スクレ+剥片+骨端+剥片+石核	350 / 452 / 456 / 1657 / 1660	8.0	5.4	2.7	86.90	波紋岩+黄麻尾石
38	720	61	4 ブロウ267	スクレ	2039	2.8	1.7	0.8	2.30	安山岩
38	702	61	3 ブロウ267	スクレ	204	5.0	2.5	0.6	9.40	安山岩
38	1325	61	4 ブロウ267	スクレ	894	5.1	3.6	1.3	21.54	安山岩
38	709	61	3 ブロウ267	スクレ	310	4.9	4.0	0.7	12.00	安山岩
38	730	61	3 ブロウ267	スクレ	333	4.5	2.0	0.6	8.40	安山岩
40	7695 / 10482	62	4 ブロウ268	スクレ+剥片+骨端+剥片+石核	1968 / 2747	8.4	15.5	8.5	140.60	黒雲母+黄麻尾石
40	623 / 10390 / 10015	63	3 / 4 ブロウ268	剥片+スクレ+骨端	240 / 2659 / 2410	5.8	4.7	1.4	37.00	安山岩
40	997 / 10084	63	4 ブロウ264 / 265	剥片+骨端	507 / 2483	2.7	4.4	1.0	9.40	安山岩
41	1259 / 7387	63	4 ブロウ264 / 264	剥片+スクレ	756 / 821	3.3	6.6	1.5	28.80	安山岩
41	645 / 7101 / 10187	63	3 / 4 ブロウ264 / 265	剥片+骨端+スクレ	257 / 342 / 2570	6.3	4.9	1.6	46.00	安山岩
41	660 / 10693	63	3 / 4 ブロウ264 / 265	骨端+剥片+スクレ	266 / 2223	1.5	4.8	1.5	14.93	安山岩
42	10553	63 / 64	4 P15	ナイフ	2779	4.4	1.4	0.7	4.00	安山岩
42	10212	63 / 64	4 P15	ナイフ	2615	3.1	1.4	0.4	1.20	安山岩

番 号	品 名	規 格	所 在 地	道 橋	器 種	計 量 地	計測面(㎡)				石 材	備 考
							長 さ	幅 さ	厚 さ	重 さ(g)		
42	10007	63/94	4	P12	スクレ	2401	5.2	3.3	1.4	20.60	安山岩	
42	3252	63/94	4	S8	スクレ	1182	8.7	2.8	1.0	17.00	安山岩	
42	10016	63/94	4	P12	ナイフ	2411	2.1	1.0	0.3	0.70	メノウ	
42	10494	63/94	4	O12	スクレ	2759	2.9	4.5	0.7	12.50	安山岩	
42	10584	63/94	4	Q13	スクレ	590	7.1	5.1	1.6	44.90	安山岩	
42	1065	63/94	4	O11	スクレ	581	8.1	3.3	1.1	24.40	安山岩	
42	1066	63/94	4	O11	スクレ	582	4.2	3.8	0.7	10.90	安山岩	
42	880	63/94	4	P10	スクレ	411	2.6	3.6	1.2	7.90	真赤	
43	6942	64	3	7Dy/231	スクレ	1565	4.2	3.8	1.5	23.70	安山岩	
43	10444	64	4	O14	スクレ	2711	4.2	3.1	0.9	10.30	玉砂	
43	10210	64	4	N14	鉛錠	2613	2.6	2.6	0.9	5.20	碧玉	
43	10395	64	4	O15	石板	2662	2.8	2.5	1.3	8.80	黒曜石	
43	10176	64	4	Q13	スクレ	2579	5.5	3.1	1.5	20.90	安山岩	
43	898	64	4	P10	鉛錠	364	2.6	4.5	0.9	6.80	木箱	
43	1070	64	3	T10	石板	88	4.5	4.6	3.5	62.80	メノウ	
43	491	64	4	C10	鉛錠	58	2.4	4.1	0.9	8.10	安山岩	
43	10209	64	3	N14	鉛錠	3994	3.9	3.9	1.7	15.90	安山岩	
46	11149	75/76	5	SK57	石板	3070	1.7	2.7	1.5	5.00	黒曜石	
46	11141	75/76	5	SK57	二次	3071	1.6	1.5	0.3	0.50	黒曜石	
46	11142	75/76	5	SK57	鉛錠	3072	1.0	1.6	0.3	0.29	黒曜石	
46	11143	75/76	5	SK57	二次	3073	2.5	1.6	0.5	1.40	黒曜石	
46	11144	75/76	5	SK57	二次	3074	2.2	1.1	0.5	0.80	黒曜石	
46	11148	75/76	5	SK57	鉛錠	3075	1.4	1.6	0.6	1.00	黒曜石	
46	11149	75/76	5	SK57	石板	3076	1.1	2.4	0.9	1.20	黒曜石	
46	11150	75/76	5	SK57	二次	3077	0.9	1.5	0.4	0.20	黒曜石	
46	11151	75/76	5	SK57	チップ	3078	0.8	1.2	0.3	0.10	黒曜石	
46	11152	75/76	5	SK57	二次	3079	1.5	1.6	0.4	0.50	黒曜石	
46	11153	75/76	5	SK57	鉛錠	3080	4.1	2.2	1.0	6.70	安山岩	
66	13516	65	5	7Dy/226	石絆	3898	11.3	6.5	3.1	210.40	花崗岩	
66	11375	65	5	7Dy/226	鉛錠	3133	9.2	6.0	1.9	114.30	花崗岩	
66	13524	65	5	7Dy/226	二次	3889	9.25	3.20	1.5	38.30	花崗岩	
66	12839/12840	65	5	7Dy/226	棒状+棒状	3641/3642	21.5	4.4	3.4	509.00	麻武田	番組No.17
67	11784	66/68	5	7Dy/227	石板	3492	3.7	1.2	0.9	4.00	安山岩	
67	11795	66/68	5	7Dy/227	鉛錠	3493	7.9	3.4	1.3	34.00	麻武田	
67	11955	66/68	5	7Dy/227	石絆	3384	3.6	8.2	5.2	156.20	麻武田	
67	11956	66/68	5	7Dy/227	鉛錠	3384	2.1	1.1	0.7	0.50	麻武田	
67	11963	66/68	5	7Dy/226	石絆	3152	4.9	6.2	4	39.20	安山岩	
67	11961-1	66/68	5	7Dy/230	スクレ	3149	3.0	2.6	1.2	8.00	安山岩	
67	11447	65/66	5	7Dy/230	石板	3204	4.1	5.1	1.9	33.00	黒曜石	
67	11381	66/68	5	7Dy/231	鉛錠	3139	4.2	3.1	1.2	15.20	安山岩	
67	10952	66/68	5	7Dy/231	スクレ	2917	5.7	3.5	1.2	20.90	安山岩	
67	11536	66/68	5	7Dy/231	鉛錠	3302	6.6	4.4	1.5	22.50	黒曜石	
67	11468	66/68	5	7Dy/231	スクレ	3227	3.2	2.5	1.0	8.10	安山岩	
67	11421-1	66/68	5	7Dy/232	ナイフ	3182	3.1	1.1	0.6	1.60	安山岩	
67	11429	66/68	5	7Dy/232	石絆	3191	5.2	4.2	2.1	49.90	花崗岩	
67	12168/12166	66	5	7Dy/232	鉛錠	3538/3937	6.4	5.5	1.4	38.60	麻武田	
70	11504/12372	67	5	7Dy/233	鉛片+鉛片	3266/3558	9.4	3.3	2.3	29.00	麻武田	番組No.35
70	11507/12371	67	5	7Dy/233	鉛片+鉛片	3269/3567	4.4	4.7	1.3	23.00	麻武田	番組No.32
70	11601/11609/11702	67	5	7Dy/234	鉛片+石絆+鉛片	3367/3372/3467	5.1	6.5	2.3	49.20	安山岩	番組No.21
70	11583	67	5	7Dy/234	石絆	3564	8.9	12.9	4.0	507.50	麻武田	
70	11587	67	5	7Dy/234	スクレ	3349	3.3	1.4	1.4	11.30	安山岩	
72	11356	68	5	7Dy/235	ナイフ	3353	1.7	5.7	3.5	33.00	水晶	
72	852	68	5	7Dy/237	ノンチ	3114	5.4	2.0	0.8	8.30	安山岩	
72	8047/8164	68	5	7Dy/237	石絆	4003	5.6	2.5	0.7	8.20	安山岩	
72	8207/8211	68	5	7Dy/237	石板	2149/2169	2.6	3.9	4.4	52.90	石英	番組No.61
72	8009	68	5	7Dy/238	石板	2130	5.0	1.6	1.9	10.50	黒曜石	番組No.62
72	8012	68	5	7Dy/238	角錐	2133	6.9	2.1	1.5	20.20	黒曜石	
74	8644	68/69	5	7Dy/239	スクレ	2557	3.4	2.15	1.5	7.70	水晶	
74	7917	68/69	5	7Dy/239	スクレ	2068	8.6	4.3	2.0	53.50	石英	
74	3532	68/69	5	7Dy/240	石絆	1441	4.7	4.5	2.4	45.20	水晶	
74	3531	68/69	5	7Dy/240	ナイフ	1440	3.5	1.5	0.9	3.80	安山岩	
74	3668	68/69	5	7Dy/241	角錐	1477	4.0	1.9	1.0	6.40	安山岩	
74	834	68/69	5	7Dy/241	石絆	405	3.6	5.2	1.5	18.00	安山岩	
74	889/3424	69	5	7Dy/241	鉛片+石絆	419/1355	2.5	3.7	1.1	11.10	安山岩	番組No.20
74	3663	69	5	7Dy/241	石絆	1468	7.5	10.8	30.5	183.50	真岩	
76	3681/3682	70	5	7Dy/242	石板+塑錠	1466/1467	9.0	8.2	3.5	180.20	花崗岩	番組No.24
76	3430	70	5	7Dy/242	鉛錠	1360	6.3	5.8	2.4	69.10	花崗岩	
76	845	70	5	7Dy/243	ナイフ	397	3.1	1.2	0.5	1.40	安山岩	
76	3429	70	5	7Dy/244	ナイフ	1359	4.8	2.2	0.7	6.90	安山岩	
76	6941	70	5	7Dy/244	二次	1564	3.3	4.5	1.9	25.20	水晶	
76	3558	70	5	7Dy/244	石絆	1463	4.6	10.4	2.2	88.50	砂岩	
77	3657/3655	70/71	5	7Dy/245	鉛片+二次	1457/1460	1.85	2.75	0.45	2.50	真岩	番組No.16
77	3656	70/71	5	7Dy/245	二次	1461	2.3	3.3	1.1	8.20	水晶	
77	5084	70/71	5	7Dy/245	石絆	1547	7.5	12.0	12.5	107.80	花崗岩	
78	3117/3107/5078	70/71	5	7Dy/246	鉛錠	1130/1551	7.0	10.0	3.8	126.80	花崗岩	番組No.22
78	3639/3646/3651/5077	70/71	5	7Dy/246	鉛片+塑錠	1447/1448/1450/1456	8.4	11.2	3.6	161.00	花崗岩	番組No.23-1
78	3648	70/71	5	7Dy/246	鉛片	1425	8.6	4.1	1.3	33.70	花崗岩	
78	3514	70/71	5	7Dy/247	鉛錠	976	5.4	1.8	1.0	6.50	花崗岩	
78	2485	71	5	7Dy/248	ナイフ	1222	5.2	3.2	0.9	12.60	安山岩	
80	3286	71	5	7Dy/248	ナイフ	1223	3.5	1.7	0.7	4.20	安山岩	
80	3297	71	5	7Dy/248	二次	994	2.1	1.4	0.8	2.30	水晶	
80	2509	71	5	7Dy/248	二次	994	2.1	1.4	0.8	2.30	水晶	
80	3474	71	5	7Dy/248	ノンチ	1385	3.9	3.0	1.1	8.80	真岩	
80	2459/3515	71	5	7Dy/249	鉛片+石絆	950/1428	2.9	4.0	1.3	9.70	安山岩	番組No.18
80	2625/3228/3383	71	5	7Dy/249	石絆+鉛片+鉛片	1044/1160/1323	3.4	5.8	1.2	17.00	安山岩	番組No.18
80	2334/2335/—	72	5	7Dy/249	鉛錠+塑錠+鉛片	1075/1076/4106	14.4	17.8	7.9	177.70	花崗岩	番組No.31
81	11588/12308	72/73	5	7Dy/254	鉛片+鉛片	3354/3875	8.4	7.9	2.7	100.50	花崗岩	番組No.25
82	1124/12465	72/73	5	7Dy/255/35	鉛片+石絆	3054/3569	9.3	8.5	3.7	255.00	花崗岩	番組No.30

番 号	PH.	固 形 状	透 視	器 種	計 測 所	計測値 (cm <sup>-2</sup> )			石 材	場 所	
						長 さ	幅 幅	厚 さ			
82	8148 / 11539	78 / 73	5	アコヤガイ	スクリート二重	2186 / 3205	6.6	2.1	1.2	15.10	安山岩
83	3664 / 3689 / -	73 / 74	5	アコヤガイ	石核 + 斜片 + 剥片	1489 / 1478 / 4109	10.7	6.4	3.9	18.00	基盤岩
84	4225	73	5	R10	角型	1541	11.9	3.9	2.3	10.50	安山岩
84	8175	73	5	Q10	角型	2176	4.6	2.2	1.0	8.60	黒曜石
84	3240	73	5	T8	ナイフ	1187	4.4	1.8	1.1	6.00	玉髓
85	11484	74	5	P15	ナイフ	3223	4.2	1.2	0.6	3.20	青銅
85	12730	74	5	P15	スクリート	3633	5.7	4.3	1.7	34.80	安山岩
85	11462	74	5	P15	スクリート	3221	5.5	3.2	0.9	13.00	安山岩
85	11365	74	5	O13	脚輪	3123	3.8	2.2	0.9	6.30	黒曜石
85	11367	74	5	Q12	石核	3125	3.6	4.1	1.1	13.80	黒曜石
85	11374	74	5	P14	石核	3132	2.4	3.7	1.3	8.50	黒曜石
85	12584	74	5	O13	石核	3589	5.6	5.8	5.3	19.00	玉髓
86	12600	75	5	O12	石核	3601	4.1	5.2	2.0	42.50	海珉岩
86	11792	75	5	P15	脚輪	3489	8.1	3.0	1.6	35.00	安山岩
86	14711	75	5m	N15	角型	4233	8.2	2.3	1.4	15.60	安山岩
93	14737	76	7	アコヤ	ナイフ	2458	5.5	2.5	1.5	13.10	玉髓
93	14743	76	7	アコヤ	合形	4284	3.0	3.0	0.5	2.20	玉髓
93	14745	76	7	アコヤ	脚輪	4285	3.4	2.0	1.0	7.78	玉髓
94	14624	77	7	アコヤ	合形	4328	1.2	1.5	0.4	0.58	黒曜石
94	14847-2	77	7	アコヤ	合形	4256	1.4	1.6	0.4	0.87	黒曜石
94	14847-3	77	7	アコヤ	脚輪	4357	1.5	1.5	0.6	1.13	黒曜石
94	14793	77	7	アコヤ	合形	4283	1.4	1.3	0.4	0.47	黒曜石
94	14670	77	7	アコヤ	脚輪	4194	1.6	2.3	0.6	1.39	黒曜石
94	14818 / 14819	77	7	アコヤ	合形	4317 / 4318	2.5	3.2	0.5	2.34	黒曜石
94	14720	77	7	アコヤ	脚輪	4242	1.5	1.7	0.3	0.77	黒曜石
94	14781	77	7	アコヤ	合形	4282	1.1	1.1	0.4	0.35	黒曜石
94	14968	77	7	アコヤ	脚輪	4381	2.0	1.2	0.5	0.55	黒曜石
94	14856	77	7	アコヤ	脚輪	4379	1.9	1.3	0.4	0.56	黒曜石
94	14835	77	7	アコヤ	脚輪	4343	2.2	1.5	0.5	1.43	黒曜石
94	14836	77	7	アコヤ	合形	4344	2.0	1.4	0.3	0.76	黒曜石
94	14689	77	7	アコヤ	石核	4211	2.4	3.0	1.2	6.33	黒曜石
94	14846	77	7	アコヤ	石核	4354	1.9	2.2	1.5	5.50	黒曜石
94	14772	77	7	アコヤ	石核	4273	4.1	3.9	1.1	13.52	黒曜石
94	14706	77	7	アコヤ	石核	4227	3.5	4.1	1.1	15.08	黒曜石
94	14866	77	7	アコヤ	ノッチ	4411	5.8	2.5	1.2	13.24	黒曜石
94	14933	77	7	アコヤ	石核	4215	3.0	3.3	1.1	8.23	黒曜石
94	14719	77	7	アコヤ	スクリート	4241	3.5	3.2	1.0	12.27	黒曜石
94	14684 / 14873	77	7	アコヤ	脚輪 + スクリート	4282 / 4386	3.0	3.3	1.6	10.28	黒曜石
94	14861 / 14862	77	7	アコヤ	脚輪	4310 / 4311	4.3	3.5	1.6	11.40	黒曜石
95	14564	78	7	アコヤ	ナイフ	4188	4.2	1.6	1.0	6.00	安山岩
95	14660	78	7	アコヤ	ナイフ	4194	4.9	2.0	0.6	6.14	安山岩
95	14646	78	6	アコヤ	ナイフ	4177	5.0	1.8	0.9	6.43	安山岩
95	14709	78	7	アコヤ	ナイフ	4230	2.9	1.4	0.6	2.25	安山岩
95	14665	78	7	アコヤ	脚輪	4189	8.7	4.6	1.6	47.75	安山岩
95	14682	78	7	アコヤ	脚輪	4186	5.8	6.3	1.9	55.10	安山岩
95	14722	78	7	アコヤ	ナイフ	4244	5.8	2.1	1.0	7.78	安山岩
95	14413	78	6	アコヤ	ナイフ	4139	5.0	2.0	0.7	5.67	安山岩
95	14710-1	78	6	アコヤ	ナイフ	4231	3.8	1.7	0.6	2.68	黒曜石
95	14710-2	78	6	アコヤ	ナイフ	4232	1.0	1.0	0.3	0.15	安山岩
95	14509	79	7	アコヤ	ナイフ	4167	3.9	1.7	0.6	3.90	安山岩
95	14716	79	7	アコヤ	ナイフ	4238	4.2	1.5	0.7	3.52	安山岩
95	14415	79	7	アコヤ	ナイフ	4141	4.3	1.5	0.9	5.24	安山岩
95	14461	79	7	アコヤ	スクリート	4161	1.1	1.3	0.4	0.31	黒曜石
95	14412	79	6	アコヤ	脚輪	4138	1.7	2.7	0.8	2.73	水晶
97	14016	79/80	7	アコヤ	脚輪	4128	2.7	3.0	1.5	12.68	安山岩
97	14345	79/80	7	アコヤ	石核	4132	5.6	3.1	1.5	22.90	安山岩
97	14615	79/80	7	アコヤ	脚輪	4121	6.7	8.1	2.0	87.02	安山岩
97	14603	79/80	7	アコヤ	脚輪	4115	6.9	5.2	2.0	27.65	安山岩
97	14642	79/80	7	アコヤ	脚輪	4116	5.3	4.6	0.8	13.25	安山岩
98	13676	80	7	アコヤ	石核	3796	15.1	10.4	5.9	88.41	1.脚輪
98	13167	81	7	アコヤ	合形	3874	2.2	2.3	0.8	3.27	水晶
98	13078	81	7	アコヤ	砾石	4011	6.7	5.6	3.2	153.40	花崗岩
98	14001	81	7	アコヤ	合形	4113	4.5	3.8	0.9	11.93	黒曜石
98	13013 / 13015	81	7	アコヤ	脚輪	3777 / 3779	5.3	9.2	2.1	57.60	玉髓
98	13083	81/82	7	アコヤ	脚輪	3891	3.7	2.8	0.7	6.90	玉髓
98	13149	81/82	7	アコヤ	脚輪	3856	3.1	2.8	1.1	8.70	玉髓
99	13127 / 13145	81/84	7	アコヤ	二次・脚輪	3811 / 3823	2.25	1.8	0.6	2.20	玉髓
99	13091 / 13128 / 13142	81/85	7	アコヤ	脚輪 + 斜片 + 剥片	3809 / 3832 / 3849	2.6	4.2	4.0	51.10	玉髓
99	13092	81/86	7	アコヤ	石核	3810	2.7	3.8	4.2	45.70	玉髓
99	13125	81/87	7	アコヤ	石核	3829	4.1	4.6	2.6	40.50	玉髓
99	13122	81/88	7	アコヤ	石核	3828	3.5	4.0	3.6	49.00	碧玉
100	13086	82/85	7	アコヤ	石核	3804	4.7	7.1	4.2	254.30	玉髓
100	13121	82/85	7	アコヤ	石核	3825	2.3	4.4	4.7	53.60	玉髓
102	12846 / 12848	82/83	7	アコヤ	石核 + 石核	3648 / 3851	5.7	7.8	4.4	189.30	玉髓
102	12855	82/83	7	アコヤ	石核	3657	5.0	3.7	5.5	40.40	玉髓
102	12852	82/83	7	アコヤ	石核	3654	3.7	5.7	4.0	97.30	玉髓
102	-	82/83	7	アコヤ	石核	4429	5.1	3.6	2.3	44.90	玉髓
103	-	83	7	アコヤ	石核	4428	3.7	4.4	3.6	81.60	玉髓
103	12848	83	7	アコヤ	石核	3650	8.0	12.0	7.8	525.40	玉髓
104	12800	84	7	アコヤ	脚輪	3639	10.8	5.4	3.3	109.00	水晶
104	10851	84	7	アコヤ	脚輪	3628	2.2	4.1	0.9	1.13	黒曜石
104	11062	84	7	アコヤ	脚輪	3019	5.8	2.9	1.6	19.90	黒曜石
104	11154	84	7	アコヤ	脚輪	3061	4.2	3.5	1.3	11.50	黒曜石
104	11063	84	7	アコヤ	脚輪	3020	3.7	3.2	0.5	5.75	黒曜石
104	8357	84	7	アコヤ	脚輪	2208	2.2	1.6	0.5	2.00	黒曜石
104	-	84	7	アコヤ	脚輪	4090	2.3	2.2	0.7	3.20	黒曜石
104	11061	84	7	アコヤ	二次	3018	4.2	3.65	1.1	13.70	黒曜石
104	9055	84	7	アコヤ	石核	2277	5.5	4.7	2.2	39.30	黒曜石
104	10682	84	7	アコヤ	石核	2893	2.6	3.4	0.8	4.92	黒曜石
104	12601	84	7	アコヤ	石核	3640	3.7	3.0	1.5	13.50	黒曜石

番 号	PNo.	固 形	層 位	透 視	特 徴	計 測	計測値 (cm <sup>2</sup> ・g)			石 材	備 考
							長さ	幅	厚さ		
108	8607	84/85	7	2Dy215	石核	2252	8.2	4.0	1.3	35.90	石英
108	10507	84/85	7	2Dy215	石核	2770	2.8	3.7	2.3	28.40	石英
108	11686	84/85	7	2Dy216	石核	3449	3.5	3.9	3.3	48.80	石英
108	11160	85/86	7	2Dy217	石核	3085	13.4	9.5	7.3	1175.50	花崗岩
108	10452	84/85	7	2Dy217	石核	2719	8.2	5.3	1.8	49.80	花崗岩
109	8940	(86/87)	7	2Dy218	石斧	3960	11.3	7.7	4.6	557.40	花崗岩
109	10468	97	7	2Dy218	側面	2735	2.4	1.8	0.6	2.20	花崗岩
109	8355	87	7	2Dy218	石核	2206	3.6	3.6	3.0	46.30	石英
109	10967	87	7	2Dy218	石斧	2932	6.6	1.3	0.9	10.95	片岩
109	10467	87	7	2Dy218	石核	2734	8.2	7.6	4.7	383.95	石英
109	10463	87	7	2Dy218	石核	2730	3.2	2.9	2.0	16.50	花崗岩
110	1288	88	7	2Dy219	石核	3088	25.0	12.0	7.6	2840.00	花崗岩
111	10702/10890	94/95	7	2Dy220	剥片	2832/2900	4.3	3.2	2.4	47.10	石英
111	11677/11678	69	7	2Dy221	剥片+石核	3430/3437	2.1	2.1	1.4	32.80	花崗岩
111	11677	89	7	2Dy221	石核	3438	6.9	6.0	6.4	258.00	花崗岩
112	11685	89/90	7	2Dy222	石核	3448	16.2	8.2	6.1	1048.40	花崗岩
112	11036	90/91	7	2Dy222	石核	3004	4.3	4.1	3.1	68.40	石英
112	11344/11647	90/91	7	2Dy222	二次+石核	3104/3407	4.9	6.3	4.0	163.30	石英
113	11045/11643/11851	90/91	7	2Dy222	剥片+剥片+石核	3013/3404/3411	5.4	4.9	2.5	59.80	石英
113	11343/11351/11633	90/91	7	2Dy223	剥片+石核+剥片	3103/3112/3400	6.7	6.4	8.7	347.90	石英
114	11050	91/92	7	2Dy223	石斧	3015	13.3	7.5	4.0	571.10	片岩
114	10993	91/92	7	2Dy223	台形	2958	3.0	2.0	0.8	3.30	花崗岩
114	10718	91/92	7	2Dy223	ノッチ	2847	3.7	1.8	0.7	4.20	花崗岩
114	10658/10682	91/92	7	2Dy223	石核+剥片	2787/2812	5.5	5.0	3.0	62.60	花崗岩
114	8351/10663	91/92	7	2Dy223	石核+剥片	2201/2783	3.3	4.3	3.0	30.10	石英
115	10675	92	7	2Dy223	石核	2805	3.1	4.5	3.4	62.10	石英
115	10996	92	7	2Dy223	石核	2962	4.6	4.7	3.1	61.10	石英
116	6938	92	7	2Dy224	石核	1582	6.7	6.6	4.5	188.76	玉髓
116	6939	92	7	2Dy224	石核	1563	5.0	7.0	5.3	195.00	石英
116	10504	93	7	2Dy225	台形	2787	4.2	2.5	1.0	8.10	安山岩
116	10901	93	7	2Dy225	台形	2911	3.0	2.2	0.5	3.40	安山岩
116	10900	93	7	2Dy225	台形	2910	4.1	2.5	1.0	9.90	安山岩
118	13023/13707/13741	93/94	7	2Dy227/8	剥片+剥片+剥片	3787/3921/3932	5.7	14.6	8.0	742.10	花崗岩
118	13025/13710/3735/13739	94	7	2Dy27/17	剥片+石核+剥片 +剥片+剥片+剥片	3789/3924/3930 /3931/3933/3934	12.7	8.8	7.0	915.70	花崗岩
119	8590/10711	94/95	7	2Dy27/20	石核	2244/2840					片岩
119	8366/10670	95/96	7	2Dy27/20	石核+石核	2217/2835	8.4	6.0	3.0	117.00	石英
119	6068/6353-1/-2	95/96	7	2Dy27/20	石核+剥片+剥片	1561/2203/2204	5.7	3.9	4.6	60.40	花崗岩
120	10453/10659-1/-2	95/96	7	2Dy27/20	剥片+ハサミーストーナー +ハサミーストーナー	2720/2788/2789	5.2	7.7	1.9	70.10	花崗岩
120	10698/10713/10721/10891 /10894/10953	95/96	7	2Dy27/20	石核+石核+剥片 +剥片+剥片+剥片	2526/2842/2853 /2901/2904/2918	8.7	8.0	3.0	148.10	石英
120	11695/11685/11679	95/96	7	2Dy27/22	石核+石核+剥片	3418/3426/3440	4.7	7.1	2.6	115.20	石英
121	10878	96	7	S10	台形	2990	2.1	2.9	0.6	2.90	安山岩
121	11157	7	O10	台形	3084	1.8	1.1	0.7	0.42		
121	14742	7	M16	台形	4263	3.0	2.4	0.9	5.55		
121	14658	6	P15	ナゴイ	4182	5.0	1.9	0.6	4.80		
121	5824	96	7	Q10	二灰	1558	5.8	3.5	0.3	11.90	玉髓
121	13162	96	7	Q13	スクリ	3869	5.7	5.7	1.6	45.50	武豊岩
121	11063-1	96	7	Q10	剥片	3027	3.3	1.7	0.8	3.50	玉髓
121	12798	97	7	R12	石核	4010	15.1	10.7	4.7	1110.80	花崗岩
121	10501	96	7	P8	二灰	2765	6.0	2.5	1.3	15.90	玉髓
121	12632	97	7	R12	石核	3611	9.5	15.7	4.4	934.00	花崗岩
122	11863	97	7	R12	石核	3446	5.7	5.2	5.8	183.40	石英
122	12899	97	7	M13	石核	3673	4.4	3.8	2.8	60.40	玉髓
122	12932	97	7	N12	石核	3696	8.1	5.1	7.2	352.10	玉髓



# 写真図版





7層環状ブロック(北西から)

図版4



2~4層出土石器



5層出土石器



7層出土石器

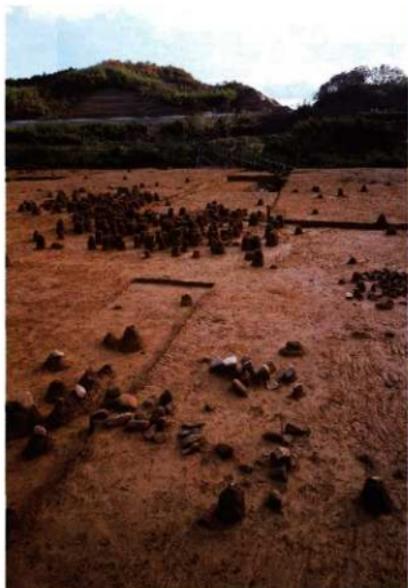


7区5層検出砾群・石器ブロック(北東から)

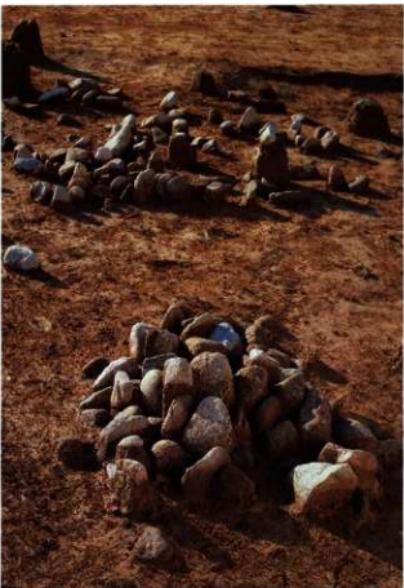
原田遺跡旧石器時代の基本土層



図版6



7区5層検出礫群・石器 ブロック(北西から)



5層礫群16・10(東から)



上空から見た原田遺跡



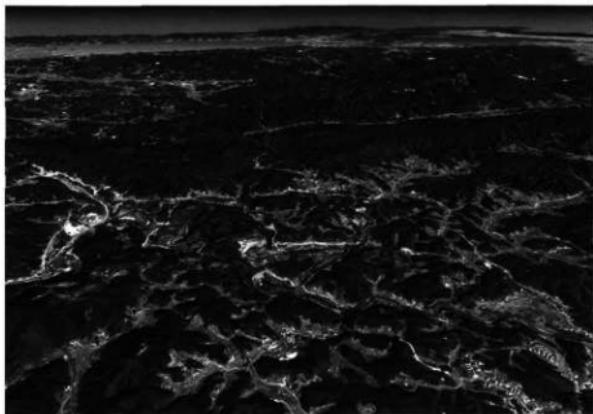
図版8



8区南壁土層断面(南から)



8区北壁土層断面(西から)



原田遺跡周辺衛星写真



8区2~4層遺物出土状況  
(南から)



8区2~4層遺物出土状況  
(西から)



8区2~4層遺物出土状況  
空撮

図版10



4層環群37



4層環群38



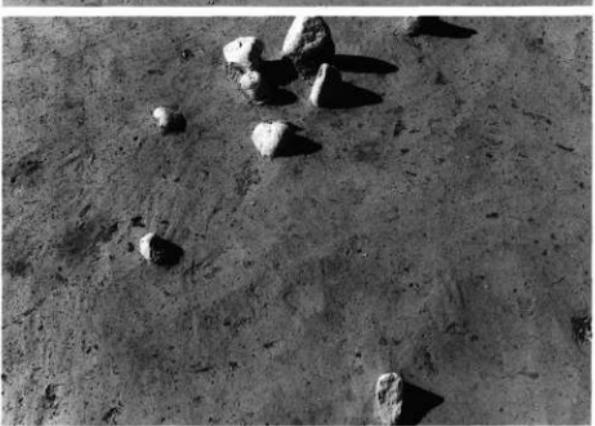
4層環群39



4層礫群53・54



4層礫群55・56



4層礫群59

図版12



2~4層石器ブロック49~53  
(西から)



2~4層石器ブロック54~59  
(北西から)



2~4層石器ブロック51  
(北から)



2~4層石器ブロック52  
(南東から)



2~4層石器ブロック52  
出土状況



2~4層石器ブロック54~57  
(北東から)

図版14



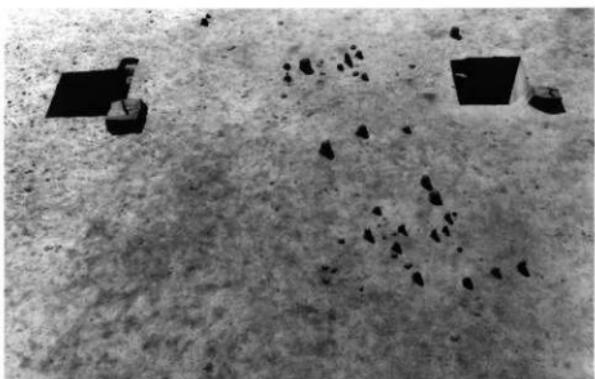
2~4層石器ブロック54  
(北西から)



2~4層石器ブロック58~59  
(北西から)



2~4層石器ブロック66~67  
(北から)



2~4層櫻出土状況  
(北から)



2~4層Q12付近櫻出土状況  
(東から)

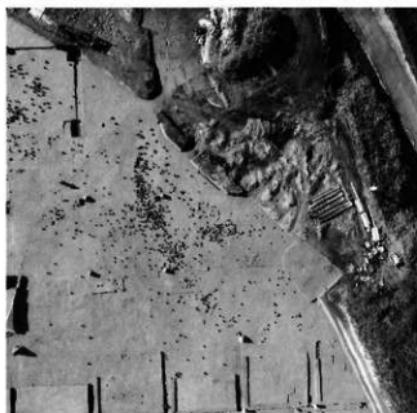


2~4層P12付近櫻出土状況  
(東から)

図版16



8区5層遺物出土状況  
(西から)



8区5層遺物出土状況  
(上空から)



7区5層遺物出土状況  
(東から)



図版18



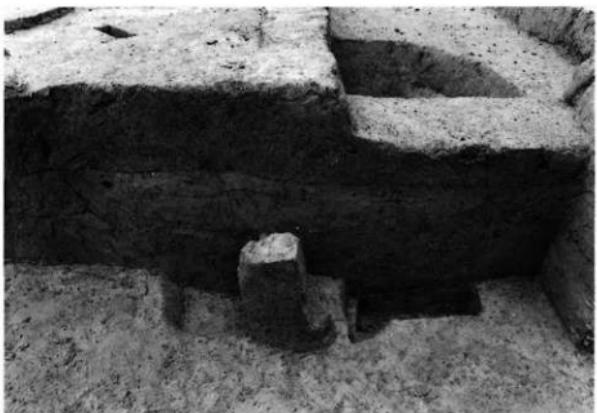
5層SK57検出(西から)



5層SK57検出(南西から)



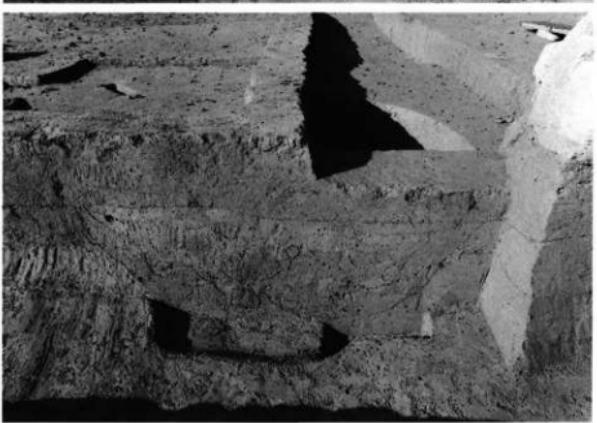
5層SK57遺物出土状況  
(東から)



5層SK57土層断面(東から)



5層SK57土層断面  
(南東から)

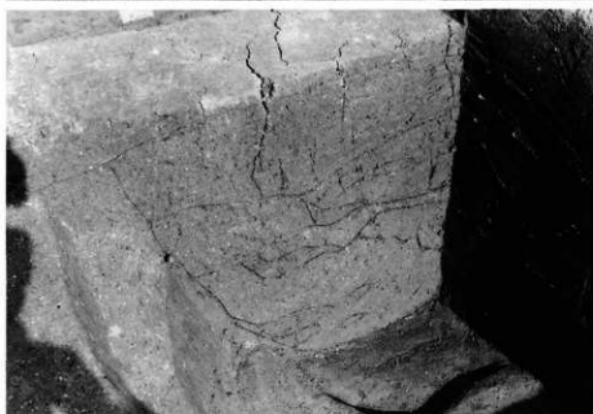


5層SK57土層断面(東から)

図版20



5層SK57(西から)



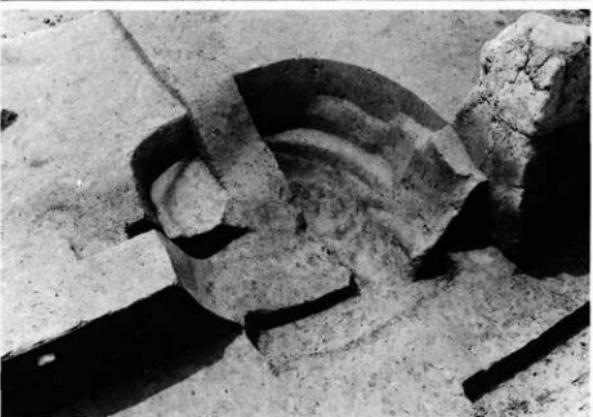
5層SK57完掘(北西から)



5層SK57完掘(北西から)



5層SK57調査状況  
(南東から)



5層SK57完掘(南東から)



5層SK57完掘(北西から)

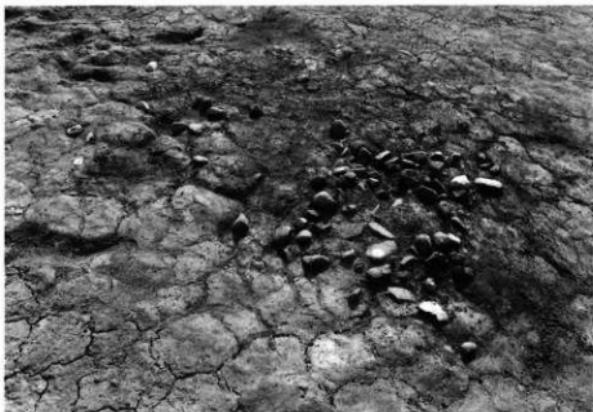
図版22



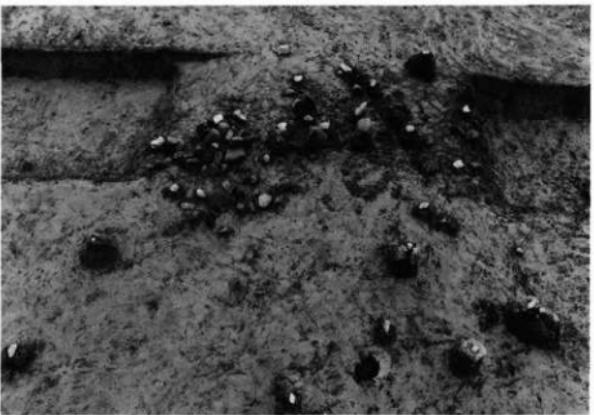
5層SK57完掘(東から)



5層礫群1(北東から)



5層礫群2(北東から)



図版24



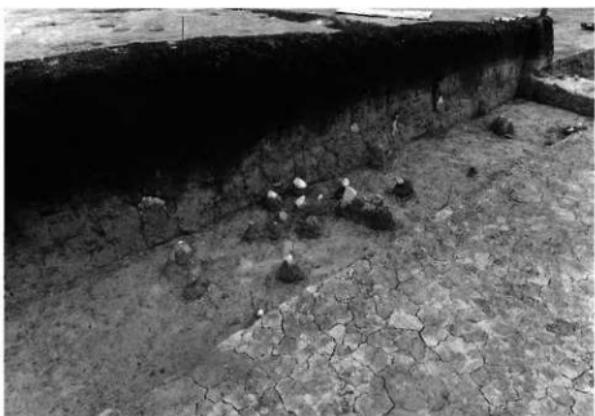
5層礫群4(南東から)



5層礫群5(南西から)



5層礫群6(西から)



5層礫群7(南東から)



5層礫群7(西から)



5層礫群8(北西から)